一本谷遺跡

佐賀県三養基郡上峰村大字坊所所在
弥生時代集落跡、円形周溝墓、古墳、
火葬墓等の発掘調査報告書

1983年3月

上峰村教育委員会

一本谷遺跡　　正誤表

頁	行	誤	正
59	12	手堤土器	手捏土器
100		Fig. 87 砲丁	Fig. 87 右包丁
107	3	銅碗	銅鋺
107	25	銅碗	銅鋺
110	25	銅碗	銅鋺
119	29	三日月町戌	三日月町戊
PL.8		2．3　天地逆	

序

昭和55年、佐賀県住宅供給公社により上峰村大字坊所に大規模な住宅団地建設の計画が立てられました。従来から上峰村は古代遺跡の宝庫として知られていますが、予定地も例外ではなく、埋蔵文化財の包蔵が予期されましたので、私たちは遺跡の保護について公社と再三にわたり協議を重ね、発掘調査を実施して遺跡の性格を明らかにして、その詳細を記録にとどめることになりました。

調査は現地調査を56年 7 月から同12月14日、引き続き整理作業や資料調査を57年度まで実施しました。その結果一本谷遺跡は弥生時代の大集落であることが判明するなど多大な調査成果をあげることができました。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また住民の共有財産としての文化財を大切に保存してゆくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたってはその費用を負担していただいた佐賀県住宅供給公社、調査を担当していただいた県教育委員会文化課の皆様はじめ、地元住民の方々献身的なご協力をいただきました。ここに心からお礼申し上げます。

昭和 58 年 3 月

上峰村教育委員会
教育長　重　松　守　男

例　　言

1．本書は佐賀県住宅供給公社による上峰団地建設に伴ない、上峰村教育委員会が発掘調査を実施した一本谷遺跡とくずれ塚古墳についての調査報告書である。

2．発掘調査は佐賀県住宅供給公社の委託事業として、上峰村教育委員会が主体となり、調査の実際は佐賀県教育委員会文化課がおこなった。

3．遺構の実測は調査員、調査補助員などがおこなった。

4．出土した遺物の整理や記録類の整理は佐賀県文化財資料室でおこなった。担当したものは下記のとおりである。

　実測‥‥藤原倫子、野口百合子、畑瀬直子、松崎恭子、武藤直子、馬場美奈子、青木瑞枝

　トレース‥‥藤原倫子、江副悦子、野口悦子、

　復元‥‥広滝敏子、村瀬邦子、高畠澄子、古川万鶴代

5．遺構の写真撮影は七田忠昭がおこない、遺物の写真撮影は原口定（文化課調査第１係）がおこなった。現像・焼付作業は原口定、古賀栄子がおこなった。

6．遺跡の航空写真は陸上自衛隊九州地区補給処の協力で撮影されたものであるが、撮影者は第四飛行隊の田中信行写真陸曹である。

7．本書の執筆・編集は七田忠昭がおこなったが、レイアウトについては、本文・挿図は藤原倫子、図版は友貞菜穂子（文化課調査第１係）、池部悦子（資料室）の協力を得た。

凡　　例

1．遺構番号は一連番号を付し、その前にＳＢ（住居跡）、ＳＫ（貯蔵穴・土壙）、ＳＴ（周溝墓・古墳）の分類記号を標記したが、本文中ではＳＴは用いず、それぞれ、円形周溝墓・くずれ塚古墳とした。

2．遺構の法量はｍ単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。

3．遺構配置図と個々の遺構実測図中の北方位はすべて磁北である。しかし既製の地形図を用いた図面は上方が座標北である。

4．遺物実測図中の個々の遺物は一連番号を付したが、図版の遺物写真の番号と一致する。県教育委員会文化課文化財資料室では個々の出土遺物に遺物登録番号を付し、整理をおこなっているが、巻末にこれの対照表を掲載した。

本 文 目 次

Ⅰ. 位 置 と 環 境 …… 1

Ⅱ. 調 査 の 経 過 …… 7
1. 調査に至る経過 …… 7
2. 確認調査 …… 8
3. 発掘調査 …… 10

Ⅲ. 一 本 谷 遺 跡 …… 13
1. 遺構
(1) 遺跡の概要 …… 13
(2) 竪穴住居跡 …… 15
(3) 貯蔵穴・土壙 …… 33
(4) 円形周溝墓 …… 54
(5) 火葬墓 …… 54
(6) その他の遺構 …… 56
2. 遺物 …… 58
(1) 弥生時代の遺物 …… 58
(2) 古墳時代の遺物 …… 102
(3) 平安時代の遺物 …… 102

Ⅳ. く ず れ 塚 古 墳 …… 104
1. 概要 …… 104
2. 遺構 …… 105
(1) 墳丘・周溝 …… 105
(2) 石室 …… 106
3. 遺物 …… 107
(1) 古墳時代の遺物 …… 107
(2) その他の遺物 …… 112

Ⅴ. お わ り に …… 117

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図 …… 3
2　上峰団地位置図 …… 7
3　確認調査トレンチ位置図 …… 9
4　一本谷遺跡及びくずれ塚古墳調査区位置図 …… 11
5　主要遺構配置図 …… 14
6　ＳＢ001住居跡実測図 …… 18
7　ＳＢ004住居跡実測図 …… 18
8　ＳＢ013住居跡実測図 …… 19
9　ＳＢ034住居跡実測図 …… 19
10　ＳＢ038住居跡実測図 …… 20
11　ＳＢ039住居跡実測図 …… 20
12　ＳＢ040住居跡実測図 …… 21
13　ＳＢ041住居跡実測図 …… 21
14　ＳＢ047住居跡実測図 …… 22
15　ＳＢ048住居跡実測図 …… 22
16　ＳＢ049住居跡実測図 …… 23
17　ＳＢ067住居跡実測図 …… 23
18　ＳＢ069住居跡実測図 …… 24
19　ＳＢ070住居跡実測図 …… 24
20　ＳＢ077住居跡実測図 …… 25
21　ＳＢ085住居跡実測図 …… 25
22　ＳＢ087住居跡実測図 …… 26
23　ＳＢ088住居跡実測図 …… 26
24　ＳＢ089住居跡実測図 …… 27
25　ＳＢ090住居跡実測図 …… 27
26　ＳＢ091住居跡実測図 …… 28
27　ＳＢ093住居跡実測図 …… 28
28　ＳＢ094住居跡実測図 …… 29
29　ＳＢ099住居跡実測図 …… 29
30　ＳＢ100住居跡実測図 …… 30
31　ＳＢ103住居跡実測図 …… 30

Fig.32　ＳＢ104住居跡実測図 ……31
33　ＳＢ113住居跡実測図 ……31
34　ＳＢ114住居跡実測図 ……32
35　ＳＢ134住居跡実測図 ……32
36　ＳＢ135住居跡実測図 ……33
37　貯蔵穴・土壙実測図(1) ……37
38　貯蔵穴・土壙実測図(2) ……38
39　貯蔵穴・土壙実測図(3) ……39
40　貯蔵穴・土壙実測図(4) ……40
41　貯蔵穴・土壙実測図(5) ……41
42　貯蔵穴・土壙実測図(6) ……42
43　貯蔵穴・土壙実測図(7) ……43
44　貯蔵穴・土壙実測図(8) ……44
45　貯蔵穴・土壙実測図(9) ……45
46　貯蔵穴・土壙実測図(10) ……46
47　貯蔵穴・土壙実測図(11) ……47
48　貯蔵穴・土壙実測図(12) ……48
49　貯蔵穴・土壙実測図(13) ……49
50　貯蔵穴・土壙実測図(14) ……50
51　貯蔵穴・土壙実測図(15) ……51
52　貯蔵穴・土壙実測図(16) ……52
53　貯蔵穴・土壙実測図(17) ……53
54　円形周溝墓実測図 ……55
55　円形周溝墓主体部実測図 ……56
56　火葬墓実測図及び復元図 ……57
57　住居跡出土土器・土製品実測図(1) ……67
58　住居跡出土土器・土製品実測図(2) ……68
59　住居跡出土土器・土製品実測図(3) ……69
60　住居跡出土土器・土製品実測図(4) ……70
61　住居跡出土土器・土製品実測図(5) ……71
62　住居跡出土土器・土製品実測図(6) ……72
63　住居跡出土土器・土製品実測図(7) ……73
64　住居跡出土土器・土製品実測図(8) ……74

Fig.65 住居跡出土土器・土製品実測図(9)……75
66 住居跡出土土器・土製品実測図(10)……76
67 住居跡出土土器・土製品実測図(11)……77
68 住居跡出土土器・土製品実測図(12)……78
69 住居跡出土土器・土製品実測図(13)……79
70 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(1)……80
71 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(2)……81
72 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(3)……82
73 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(4)……83
74 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(5)……84
75 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(6)……85
76 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(7)……86
77 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(8)……87
78 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(9)……88
79 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(10)……89
80 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(11)……90
81 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(12)……91
82 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(13)……92
83 貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(14)……93
84 勾玉・鉄器実測図……97
85 石鏃実測図……98
86 石斧実測図……99
87 石包丁・石製紡錘車実測図……100
88 打製石器（剝片・削器）実測図……100
89 砥石・石皿・叩き石・磨石実測図……101
90 円形周溝墓出土土師器実測図……103
91 火葬墓出土土師器・須恵器実測図……103
92 くずれ塚古墳墳丘実測図（表土除去後）……105
93 くずれ塚古墳墳丘・周溝断面土層図……106
94 くずれ塚古墳石室跡実測図……107
95 くずれ塚古墳出土須恵器実測図(1)……113
96 くずれ塚古墳出土須恵器実測図(2)……114
97 くずれ塚古墳出土土師器・埴輪・竈・陶磁器実測図……114

Fig.98　くずれ塚古墳出土銅鏡拓影……115
99　くずれ塚古墳出土耳環・小玉・銅碗実測図……115
100　くずれ塚古墳出土鉄器・鉄製品実測図……116

表　目　次

Tab. 1　一本谷遺跡出土竪穴住居跡一覧表……17
2　一本谷遺跡出土貯蔵穴・土壙一覧表……34
3　一本谷遺跡出土石鏃一覧表……94
4　一本谷遺跡出土砥石一覧表……96

図　版　目　次

PL. 1　一本谷遺跡全景航空写真
2　一本谷遺跡遠景・調査前航空写真
3　一本谷遺跡周辺・全景航空写真
4　一本谷遺跡南部中部・中部北部航空写真
5　一本谷遺跡全景・中部、南部、北西部
6　SB041・069・039住居跡
7　SB087・070・134住居跡
8　SB001・004・013・038・040・048・049住居跡
9　SB067・085・088・089・090・091住居跡
10　SB093・094・099・100・103・104住居跡
11　SB113・114・135・077・034・047住居跡
12　SK012・018・020・022・023・024・025・026・027貯蔵穴
13　SK028・035・036・042・045・050・052・053貯蔵穴
14　SK056・057・060・061・068・072・073・074・075貯蔵穴
15　SK076・082・084・151・096・098・102・103・106・110貯蔵穴
16　SK111・116・122・125・058・079・046・059・貯蔵穴
17　SK017・030・032・044・119土壙、SB088内・SB148内貯蔵穴、掘立柱建物跡
18　SK014・019・037・112・078・086土壙

PL.19　ＳＢ069・039住居跡・ＳＫ012・045・110貯蔵穴遺物出土状況
20　円形周溝墓全景、主体部、周溝内土器出土状況
21　火葬墓
22　くずれ塚古墳航空写真、墳丘、全景
23　くずれ塚古墳墳丘、墳丘・石室跡、墳丘土層、周溝
24　くずれ塚古墳石室跡、銅鏡出土状況
25　ＳＫ021・030・045・050・051・052・058・059、ＳＢ069・091出土土器
26　ＳＫ060・062・072・073・086出土土器
27　ＳＫ110・112、ＳＢ034・039出土土器
28　ＳＢ039出土土器
29　ＳＢ039・049・041・047出土土器
30　ＳＢ047・049・069、ＳＫ068・051出土土器
31　円形周溝墓、火葬墓出土土器
32　石器（石鏃・石包丁・紡錘車・石斧・石刃・スクレイパー）
33　勾玉、鉄鎌、たたき石、磨石、石皿、砥石
34　くずれ塚古墳出土土器
35　くずれ塚古墳出土土器
36　くずれ塚古墳出土土器
37　くずれ塚古墳出土銅鏡、小玉、耳環、青銅碗、鉄鏃、馬具
38　発掘調査風景

Ⅰ. 位　置　と　環　境

一本谷遺跡は佐賀県三養基郡上峰村大字坊所字一本谷に位置する。遺跡は段丘の平坦な尾根と緩やかに傾斜する東西斜面上に位置する。尾根の標高は20～26m、段丘の東西水田面との比高は7～14mである。くずれ塚古墳は西方谷水田を隔てた小段丘上の標高27m付近に位置するが、同じく大字坊所字一本谷内である。

佐賀平野の東部、すなわち鳥栖市から佐賀郡にかけての脊振山地南麓では多くの洪積世段丘が発達しており、段丘に挟まれた谷底平野や扇状地性低地、南部有明海沿岸の三角洲平野は現在全国でも有数な穀倉地帯として知られる。東部佐賀平野の段丘は高位・中位・低位の3つに分類され、分布状態、およびローム層の有無その他の特徴から、鳥栖市付近、朝日山周辺、神埼・三田川・中原地域、佐賀市北方地域の4つの地域的特性が指摘されている。上峰村はこれらのうち神埼・三田川・中原地域に含まれるが、この地域は高位・中位の段丘が山麓部から南へ舌状に長く延びる地域で、段丘の分布は複雑で特異な景観を醸し出している。

上峰村は面積12.83㎢で、脊振山地から南は筑後川旧河道付近までを占める南北に細長い村である。西は三田川に接するが、この町村境が神埼郡との郡境となっている。村域は村の西側を南へ横たわるように延びるいわゆる二塚山丘陵に沿っている。二塚山丘陵は北から連なる屋形原・堤・切通・下津毛・上坊所などの段丘の総称であるが、西は井柳川で横田（東脊振村）・三田川（三田川町）の丘陵と、東は寒水川で東寒水（中原町）の丘陵と分かれる。この二塚山丘陵の東麓には谷底平野及び扇状地性低地が入り込み、南方先端の寺家付近からは三角洲が広がり、現在も稲作に最適な平野となっている。ちなみに現在の耕地面積は村域の約50％に近い6.14㎢となっている。

一本谷遺跡はこの二塚山丘陵のうちの堤・切通の高位段丘下位面に位置し、周辺の平野に近く、温暖な気候と相俟って豊かな水稲生産に適した位置に存在していたと言うことができる。

佐賀平野東部は県内において遺跡の分布が密なところで、上記のような段丘上には多くの遺跡が存在するが、特に弥生時代の著名な遺跡が目立っている。鳥栖市安永田遺跡[1]、中原町姫方遺跡[2]、上峰村切通遺跡[3]、上峰村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡[4]、東脊振村横田遺跡[5]、同三津永田遺跡[6]、三田川町吉野ヶ里丘陵遺跡[7]などであるが、また有明海沿岸に近い三角洲の微高地には千代田町詫田貝塚[8]など多くの集落、貝塚が形成されている。これらの概要についてはそれぞれの報告に譲り、ここでは上峰村を中心として、東は寒水川流域から西は城原川流域までの地域の山麓部・段丘や段丘に挟まれた谷底平野・扇状地性低地の遺跡を中心に一本谷遺跡をとりまく歴史的環境について概観しておきたい。

旧石器時代の遺跡はこれまで本格的な調査がなされたものはなく、段丘上や斜面から断片的に石器が採集されているに過ぎない。礫器やナイフ形石器を出土した中原町姫方、ナイフ形石

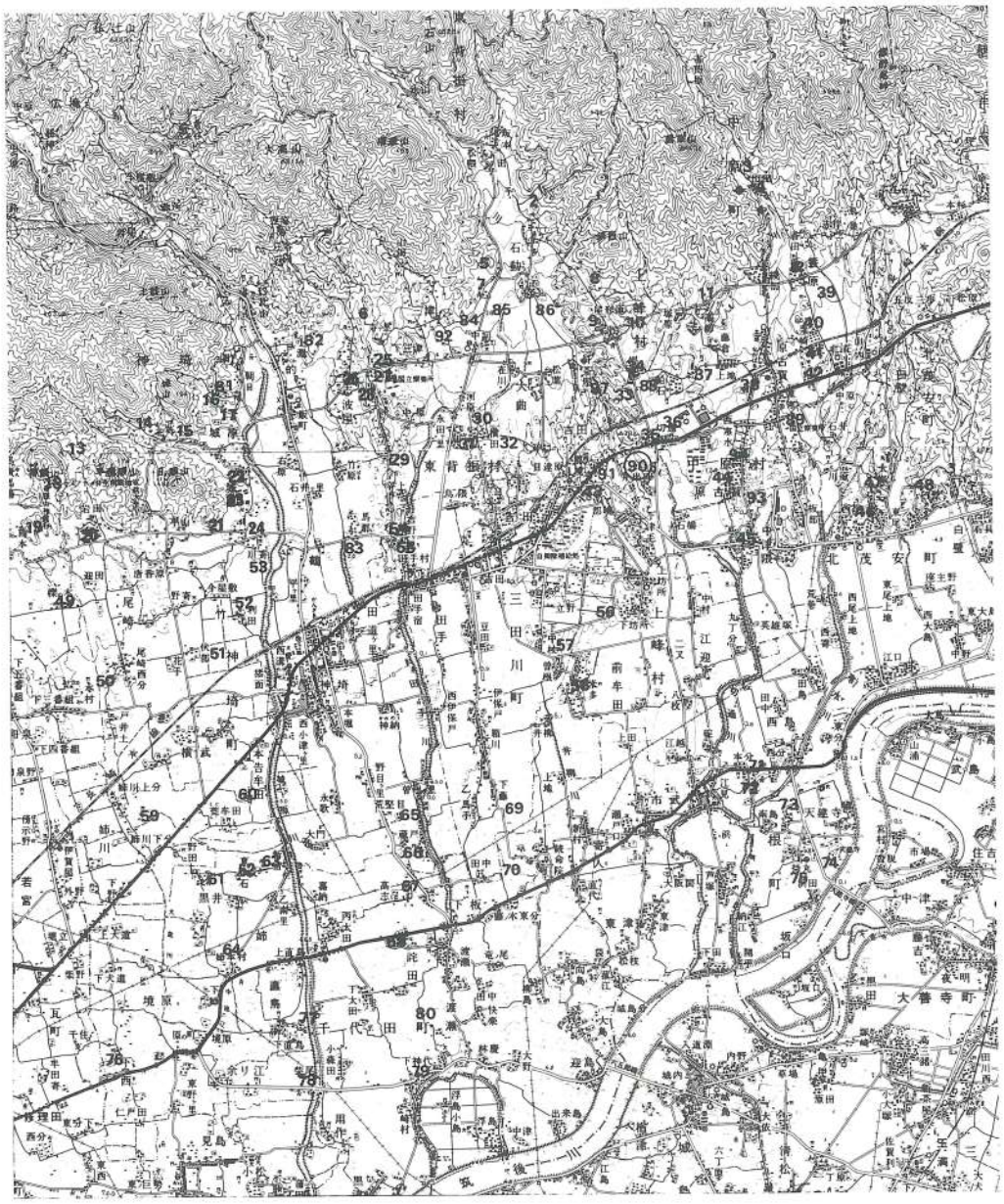
器を出土した中原町町南[9]や三田川町萩原[10]（東部工業団地内の旧小池付近）、ポイントを出土した神埼町日の隈[11]、有舌尖頭器を出土した神埼町竹原東山[12]などが知られるに過ぎない。

縄文時代になると山麓部に大きな遺跡が出現する。早期の押型文土器を出土する遺跡としては中原町香田遺跡[13]、東脊振村戦場ヶ谷遺跡[14]、神埼町野々内遺跡、同北外などが知られているが、数片の押型文土器を出土する遺跡は数多く知られる。さらに前期以降になると遺跡の数を増す。上峰村堤東方遺跡、東脊振村戦場ヶ谷遺跡（前期）、東脊振村寺ヶ里遺跡、神埼町城原、同狐隈遺跡（中期）、上峰村井手口、同切通西北方遺跡、東脊振村タケ里遺跡[15]、神埼町下朝日遺跡（後期）、中原町香田遺跡、上峰村四本谷遺跡、神埼町下朝日遺跡（晩期）などがある。これらの遺跡はほとんどが遺物の散布地として知られているものだが、最近の発掘調査で明確な遺構が検出された遺跡もいくつかある。香田遺跡では早期の集石遺構や晩期の支石墓、壺棺墓が、夕ヶ里遺跡では後期の竪穴住居跡らしい遺構が検出され、この地域の縄文時代研究に新しい資料を提出したと言える。

弥生時代になると遺跡の数、規模ともに増大し、この地区はかつてない繁栄をみる。前期では山麓部、段丘上にいくつかの遺跡が知られる。町南遺跡では巨大なＶ字溝や貯蔵穴群が調査され、前期末頃には大きな集落が存在していたことがうかがえる。また東脊振村三津永田遺跡や戦場ヶ谷遺跡、神埼町下朝日遺跡でも前期弥生土器の出土をみている。また少なくとも前期後半には、三角洲地帯に貝塚集落が出現していたことが千代田町上黒井貝塚などの出土土器でわかる。中期になるとこの地域のほとんどの地区に遺跡がひろがり、いくつかの遺跡群を形成する。

この地域の弥生時代の遺跡としては特に墳墓群が従来より注目されて来た。上峰村切通遺跡、同五本谷遺跡[16]、同村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡、東脊振村横田遺跡、同三津永田遺跡、三田川町吉野ヶ里遺跡などでは甕棺墓や土壙墓、箱式石棺墓から銅剣、銅鏡、鉄製武器・工具、ガラス製玉類、貝輪などの重要な遺物を多数出土しており、一つのまとまりを示す。しかし中原町姫方遺跡のように500基以上の甕棺墓を出土しながら副装品が極めて貧弱な遺跡も多数存在する。東脊振村西石動遺跡[17]、同西前田Ｂ遺跡[18]、神埼町志波屋六本松遺跡[19]などである。

これらの弥生時代墓地はほとんどが段丘上に存在しており、今のところ墓地を営んだ集落との関連を結びつけられるものは極めて少ない。従来ほとんど手がついていなかった弥生時代の集落跡の調査も近年の大型開発に伴って増加してきた。中原町姫方原遺跡[20]、北茂安町宝満谷遺跡[21]、東脊振村下石動遺跡[22]、同西石動遺跡、同西前田Ａ遺跡[23]、同夕ヶ里遺跡などが調査され、前記の墓地群との有機的な関連もふまえて、次第にこの地域の状況が明らかになりつつある。また東脊振村西石動・佐賀市櫟の木では中広形銅戈の鋳型[24]が三田川町桜馬場遺跡[25]からは中広形銅矛４本が発見されており、神埼町川寄遺跡周辺や千代田町詫田貝塚からは鐸型土製品[26]が発見され、青銅器鋳造や祭祀のあり方が問題となってきている。



1 霊仙寺廃寺跡
2 山田谷古墳群
3 山田蔵骨器出土地
4 山田古墳群
5 西石動古墳群
6 戦場ヶ谷遺跡
7 西石動銅戈鎔范出土地
8 鎮西山南麓古墳群
9 屋形原古墳群
10 谷渡古墳群
11 大塚古墳
12 八幡社遺跡
13 天神尾古墳群
14 猿嶽古墳群
15 城山石棺遺跡
16 朝日古墳
17 朝日遺跡
18 帯隈山神籠石
19 熊本山石棺出土地
20 岩田遺跡
21 熊谷遺跡
22 四本黒木遺跡
23 二子遺跡
24 八子遺跡
25 三津永田遺跡
26 伊勢塚前方後円墳
27 下三津前方後円墳
28 志波屋開拓団地古墳群
29 辛上廃寺跡
30 松原遺跡
31 大塚遺跡
32 横田遺跡
33 五本谷遺跡
34 堤土塁跡
35 切通遺跡
36 船石南遺跡
37 上地遺跡
38 ドンドン落遺跡
39 裳原古墳
40 姫方遺跡
41 姫方前方後円墳
42 姫方原遺跡
43 目達原古墳群
44 西寒水遺跡
45 宝満宮前方後円墳
46 東尾銅剣出土遺跡
47 大塚古墳
48 北尾遺跡
49 櫟の木銅戈鎔范出土地
50 尾崎西分遺跡
51 伏部大石遺跡
52 利田遺跡群
53 川寄遺跡群
54 吉野ケ里丘陵遺跡群
55 二本黒木遺跡
56 塔の塚廃寺跡
57 下中杖遺跡
58 米多貝塚
59 姉川城跡
60 本告城跡
61 上黒井貝塚
62 西大石貝塚
63 東大石貝塚
64 姉貝塚
65 荒堅目貝塚
66 香の木貝塚
67 高志神社貝塚
68 詫田西分貝塚
69 下藤貝塚
70 南里ケ里貝塚
71 本分貝塚
72 かけ塚貝塚
73 石井貝塚
74 持丸１号貝塚
75 持丸２号貝塚
76 貴別当神社遺跡
77 下直鳥貝塚
78 柴尾遺跡
79 下神代貝塚
80 上地貝塚
81 切畑遺跡
82 志波屋六本松遺跡
83 馬郡遺跡
84 西一本杉遺跡
85 西石動遺跡
86 下石動遺跡
87 二塚山遺跡
88 船石遺跡
89 町南遺跡
90 一本谷遺跡
91 くずれ塚古墳
92 夕ケ里遺跡
93 宝満谷遺跡
94 天神遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1 / 100,000）

古墳時代になると、東脊振村西一本杉遺跡[27]の初現的な古墳状の墳墓や、中原町姫方遺跡、上峰村五本谷遺跡などの方形周溝墓が出現し、神埼町下朝日古墳[28]では彷製鏡や碧玉製石釧を、また上峰村四本谷では石棺から銅鏃などを出土[29]するなど、本格的な古墳が築造されるようになる。さらに五世紀後半になると三田川町、上峰村、東脊振村にかけて前方後円墳７基、円墳５・６基以上からなる目達原古墳群[29]が出現し、この地域は政治的なまとまりを示すようになる。後期には山麓部、段丘を中心に中原町姫方、同上地、東脊振村下三津西、神埼町伊勢塚、同二子などの前方後円墳や、山麓部や高位段丘を中心に多くの群集墳が営まれる。中原町北部山麓地域の山田、白虎谷、一本桜・小弐山・鳥巣古墳群、上峰村北部山麓地域の谷渡、奥の院、鎮西山南麓、屋形原古墳群、東脊振村山麓部の運田山、上石動、西石動、三津山田、戦場、松葉、東山古墳群、神埼町北部山麓部の三谷、志波屋六本松、花浦、朝日、猿獄古墳群などで、特に猿獄古墳群は猿獄百塚とも呼ばれるように大規模な古墳群が形成されている。

古墳時代の集落で比較的まとまった調査が行なわれたものは少ない。三田川町下中杖遺跡[30]、東脊振村下石動遺跡、同夕ヶ里遺跡、同西前田Ａ遺跡、同浦田遺跡[31]、神埼町馬郡遺跡[32]などである。

奈良時代には下中杖、浦田遺跡などの集落跡も断片的に調査されているが、上峰村塔ノ塚廃寺跡[33]や東脊振村辛上廃寺跡[34]が従来より注目され肥前風土記にある神埼郡僧寺一所の比定で議論の的となってきたが、律令時代においてこの地域に、寺院を建立することができる勢力があったことを示すものとして注目される。また上峰村堤土塁跡[35]も水城様の土塁として注目される。

平安時代にはこの地域の西半分は神埼荘と呼ばれる院領荘園に組み入れられるが、三田川町下中杖遺跡では越州窯陶磁器、緑釉陶器、木製馬鞍、青銅箸などの貴重な遺物を多く出土し、対中国貿易の拠点としての神埼荘の一つの機関を示す遺跡と考えられる[36]。他に平安時代末の輸入陶磁器を出土する遺跡がいくつか存在している。また東背振村の霊仙寺跡[37]における僧侶の活動が平安時代の後期に始まったことも、その出土遺物から知られるところである。

中世になると綾部城と総称される中原町北部から上峰村北部の諸山城周辺が東部佐賀平野の一大中心地となったようである[38]。その一つ中原町臥牛城跡では確認調査[39]の結果、腰曲輪をめぐらせた平坦面に濠、掘立柱建物等が検出され、輸入陶磁器などが出土している。東背振村、神埼町にも多くの中世山城跡があり、平野部にも環濠の平城が多数存在している。また霊仙寺は最盛期を迎え、また平野部の集落跡からは多量の輸入陶磁を出土している。三田川町下中杖遺跡、神埼町尾崎利田遺跡[40]その他多くの遺跡で出土しており、輸入陶磁器がこの地域では広く一般にも普及していたことを想起させる。

中原町から神埼町にかけての特に山麓部、段丘部の遺跡を概観したが、一本谷遺跡を含む弥生時代の遺跡群は、特にこの地域とりわけ田手川、城原川流域周辺において一つの大きなまと

まりをみせている。そしてこの地域の墳墓群からは、多数の副葬品を出土し、魏志倭人伝にある国々と遺跡群との対比が可能な地域と言うことができよう。ちなみに新井白石が『古史通或問』(1716) において、倭人伝の弥奴国を肥前国三根郡に比定しているが、三根郡は現在の上峰村を中心とした地域であった。

参考文献

「上峰村史」上峰村史編纂委員会　1979

「東脊振村史」東脊振村史編纂委員会　1982

「神埼町史」神埼町史編纂委員会　1972

「続・佐賀の自然」佐賀県理科教育センター　1964

「佐賀県の遺跡」佐賀県教育委員会　1964

「佐賀県遺跡地図（三神地区)」佐賀県教育委員会　1979

註

(1) 藤瀬禎博・石橋新次「柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書」鳥栖市文化財報告書第７集 1980

(2) 木下巧・天本洋一「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集　1974

(3) 金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

(4) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979

(5) 木下元治「考古学〈弥生時代〉―神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20-１　1967

(6) 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」「日本農耕文化の生成」　1961
七田忠志「東脊振三津の石蓋甕棺と内行花文明光鏡」佐賀県文化財調査報告書第２輯　1953

(7) 七田忠志「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」人類学雑誌６―４　1934

(8) 松尾禎作「詫田貝塚の研究」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第３輯　1932

(9) 天本洋一・七田忠昭「町南遺跡（佐賀県文化財調査報告書第68集　1983

(10) 七田忠志「原始社会の開始」『上峰村史』1979

(11)(12)中園実「人類の出現」『神埼町史』1972

(13) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第57集　1981

(14) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」史前学雑誌６―２・４　1934

(15) 久保伸洋「夕ヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書Ⅰ」1983

(16) 木下巧・七田忠昭「五本谷遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979

(17) 堤安信「西石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第４集　1981

(18) 久保伸洋「西前田Ｂ遺跡」東脊振村文化財調査報告書第６集　1982

(19) 1982年佐賀県教育委員会調査、高所の甕棺墓地として注目される。

(20) 木下巧他「姫方原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第33集　1976
田平徳栄「姫方原遺跡Ｂ・Ｃ地区」中原教育委員会　1979

多々良友博「姫方原遺跡Ｅ地区」中原町教育委員会　1980
多々良友博「姫方原遺跡・Ｆ地区」中野建設・中野ハウジング　1981
七田忠昭「姫方原遺跡Ｇ地区」中原町教育委員会　1982
(21) 東中川忠美「宝満谷遺跡」北茂安町教育委員会　1980
(22) 高瀬哲郎「下石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第４集　1981
(23) 岩永政博・久保伸洋「西前田遺跡」東脊振村文化財調査報告書第５集　1981
(24) 『鏡・玉・剣―古代九州の遺宝―』佐賀県立博物館　1979
(25) 七田忠昭「文様ある銅矛について」九州考古学No52　1976
(26) 天本洋一他「川寄吉原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第61集　1981
天本洋一・多々良友博「佐賀県川寄利田遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会　1980
詫田西分貝塚からも２個出土している（1982年、千代田町教育委員会調査）
(27) 松尾吉高「西一本杉遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第３集　1981
(28) 七田忠志「古代」『神埼町史』1972
(29) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第９輯　1950
(30) 七田忠昭・高山久美子・西田和巳「下中杖遺跡」佐賀県文化財調査報告書第54集　1980
(31) 堤安信「浦田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第４集　1981
(32) 八尋実・緒方祐次郎「馬郡遺跡」神埼町文化財調査報告書第７集　1981
(33) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯　1970
(34) 七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一察」上代文化13　1935
松尾禎作「東脊振村辛上廃寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第５輯　1936
(35) 高島忠平・杠一義「堤土塁跡」上峰村教育委員会　1978
(36) 七田忠昭「神埼荘における対宋貿易」『東脊振村史』1982
(37) 田平徳栄他「霊仙寺跡」東脊振村文化財調査報告書第４集　1980
(38) 「日本城郭史大系」新人物往来社　1981
(39) 1982年、中原町教育委員会・佐賀県教育委員会調査
(40) 天本洋一・原田保則他「尾崎利田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第55集　1980

Ⅱ. 調 査 の 経 過

1．調査に至る経過

一本谷遺跡の発掘調査は佐賀県住宅供給公社による分譲住宅地（上峰団地）の造成工事に伴ない、上峰村教育委員会が実施した事業であるが、本格的な発掘調査を関始する迄には公社と県教育委員会文化課、村教育委員会の３者による協議が数回もたれた。

公社により造成計画が立案されたのは昭和55年９月であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地でもあり、昭和56年４月７日に公社と文化課との本格的な協議がもたれ、とりあえず早急に確認調査を実施して遺構存在の有無、範囲を把握してから再度協議を行なうことになった。

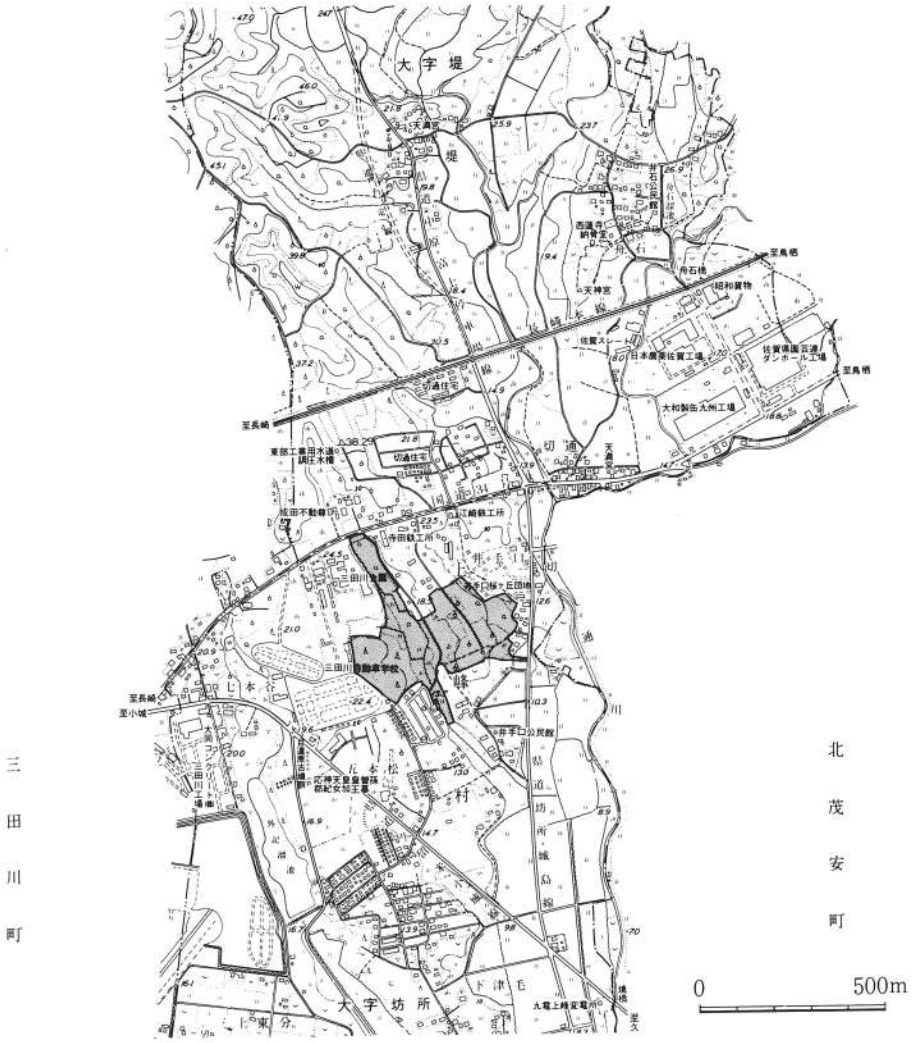


Fig. 2　上峰団地位置図

確認調査は公社が主体となり、文化課から職員を派遣して行なうことになり、4月11日の踏査を皮切りに、4月14日から同21日までの期間に造成予定地全域（約98000㎡）について実施した。その結果、東段丘の平坦な尾根と緩傾斜面約10,000㎡の範囲で弥生時代の竪穴住居跡や土壙などが検出され、また西段丘では従来から知られていたくずれ塚古墳が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。文化課は調査結果を添えて、村教育委員会に公社と協議するように依頼した。記録保存により遺跡を保護することですでに3者合意していたのであるが、確認調査の結果くずれ塚古墳が前方後円墳である可能性が出てきたので、6月18日から同23日に測量調査を実施したが、前方後円墳かどうかという確信はつかめなかった。くずれ塚古墳は筑紫米多国造家の墳墓と考えられている目達原古墳群のうちの一基であるということで、公社はその歴史的意義を考慮して、前方後円墳ならば、設計を変更し、住宅団地の一角に保存するということで合意した。しかし前方後円墳であるか否かということは本格調査を待たなければならなかった。

このような経過で東段丘の一本谷遺跡（約14,000㎡）と西段丘のくずれ塚古墳について発掘調査が計画されたのであるが、3者協議の結果、経費的には村教育委員会が公社からの受託事業とする形をとり、調査には文化課より調査員を派遣してこれにあたることになり、上峰村教育委員会の文化財保護事業として発掘調査を実施することになった。

2．確認調査

造成予定地全域（約98,000㎡）についての確認調査は昭和56年4月14日から4月21日の期間に実施され、補足調査として5月18日から5月23日の期間でくずれ塚古墳の測量調査が行なわれた。調査は住宅供給公社が主体となり、文化課より文化財調査第1係の文化財保護主事中牟田賢治を派遣して実施されたが、概要は以下のとおりである。

第1次確認調査

この調査は重機（バックフォア）と人力を用いて、東段丘に28本、谷水田部に2本、西段丘に11本の計41本の試掘抗（トレンチ）を設けて行なわれた。調査は東段丘より始められ、段丘の尾根、東斜面、西斜面、谷水田部、西段丘の順に進められたが、調査当初より住居跡、土壙などの遺構が検出され、比較的良好な状態で遺構が存在することが予想された。

調査の結果、東段丘では28本のトレンチのうち尾根平坦面を中心に11ヶ所で遺構が検出され、一本谷遺跡が広大な範囲を占める弥生時代の集落跡であることが判明した。なお、谷水田部では遺構は検出されず、西段丘でもくずれ塚古墳以外の遺構は何ら検出されなかった。なおこの調査で、くずれ塚古墳は小形の前方後円墳である可能性が示された。

くずれ塚古墳確認調査

くずれ塚古墳は従来より北西側墳丘は一部削り取られ、石室の石材を抜き取られているとい

うことであったが、遺存している墳丘の形態が前方後円墳に類似していたことから、この点を明らかにする目的で墳丘の測量を実施するとともに一部トレンチを設定して周溝等の確認を行なった。その結果、南西に前方部をもつ、長さ10数m前後の前方後円墳らしい形で墳丘が遺存していることが知れ、また東側墳丘裾で幅2.5m前後の周溝と考えられる溝が検出された。しかしこの調査で、くずれ塚古墳が前方後円墳であるという確証は得られなかった。

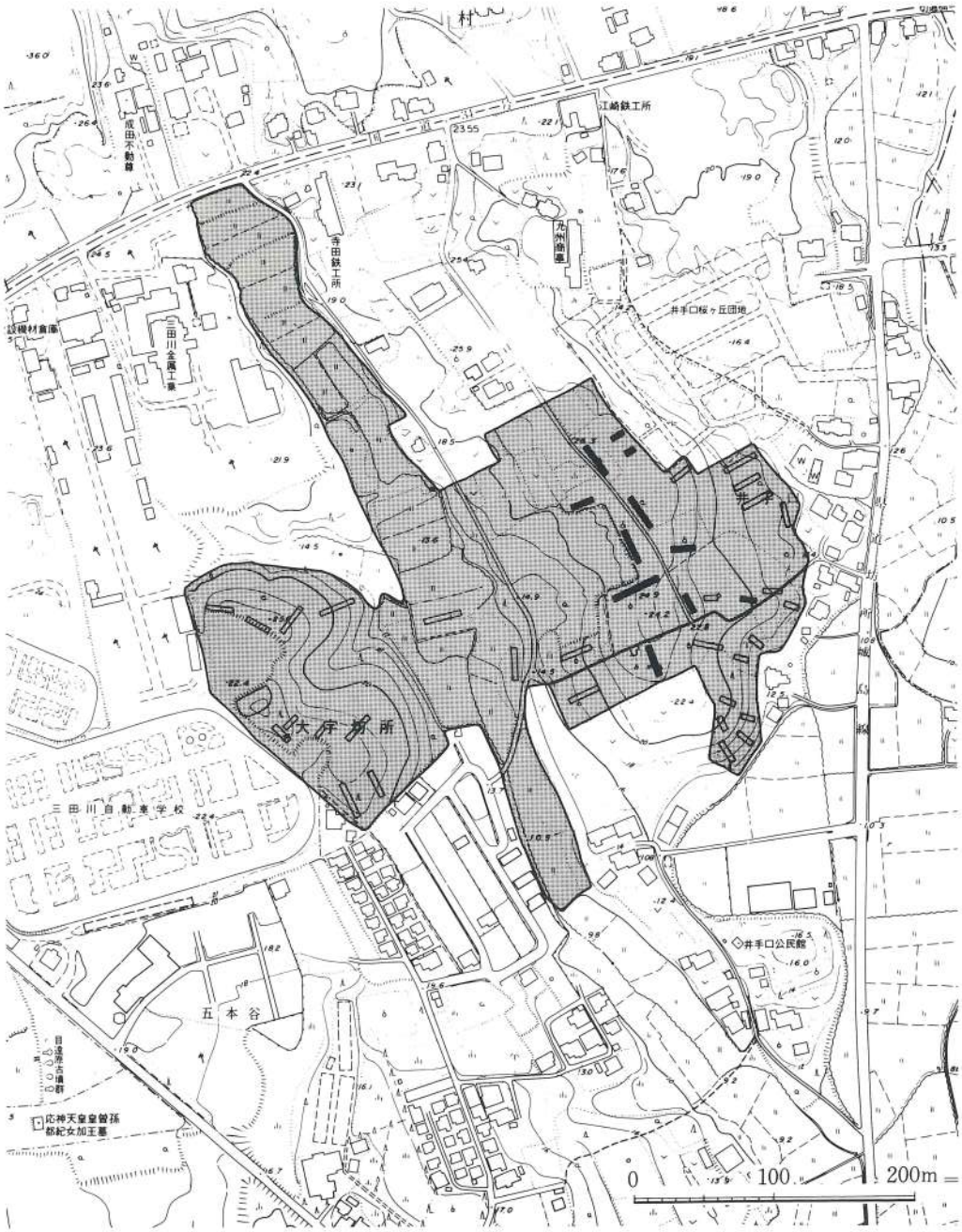


Fig. 3　確認調査　トレンチ位置図

3．発掘調査

発掘調査は事務局を上峰村教育委員会に設置して、昭和56年７月23日から同12月14日まで現場調査を実施した。

調査組織

（事務局）上峰村教育委員会

重　松　十四郎　　教育長（前任）

重　松　守　男　　教育長（後任）

納　富　正　人　　教育課長

吉　　田　　忠　　社会教育係長

（調査担当）佐賀県教育委員会文化課

藤　山　　厳　　課長

高　島　忠　平　　課長補佐

樋　渡　敏　暲　　文化財調査第１係長

中牟田　賢　治　　文化財保護主事

七　田　忠　昭　　文化財保護主事（担当）

（調査補助員）

筒井　伸也・深町　佐千子・武広　正純・田代　成澄

（作業員）

江頭ナミヨ・小川ミナ子・北島八重子・古賀　テル・七田もと子・白浜　清子

白浜富士子・千々岩スズヨ・堤　イシ・堤　千恵子・堤　　ユキ・鶴田　浩二

鶴田　終一・鶴田　トウ・鶴田　富雄・中島　絹子・中島　宏子・中野　隼太

日高チズ子・古川シゲミ・藤戸ハツエ・藤野　サミ・藤野　良江・矢動丸五十三

矢動丸敏子・山田登美子　他

昭和57年７月23日に住宅供給公社、文化課、村教育委員会、作業員一同、簡素な安全祈願を行ない、発掘調査を開始した。

これに先立って重機によりあらかたの表土剝ぎを終了していた西段丘のくずれ塚古墳から調査を開始した。遺構検出のためさらに表土を削ったところ、墳丘裾に沿ってほぼ円形に巡る周溝を検出し、径25ｍ前後の円墳である可能性が強まった。

調査はさらに墳丘を層序に従って取り除いたが石室の痕跡は認められず、北西部の墳丘が削平されている部分から石室の掘り方が現われた。内部は石室の腰石などの石材はほとんど抜き取られていたが、床面に敷石らしい塊石群と、閉塞石と考えられる塊石群を検出した。遺物としては石室を中心に銅鏡、銅碗、耳環、ガラス小玉、鉄鏃、馬具をはじめ、須恵器、土師器、

埴輪、竈片の他中世の陶磁器・土師器などを出土した。くずれ塚古墳の発掘作業は8月19日に終了、実測・写真などの記録も8月25日に終了した。

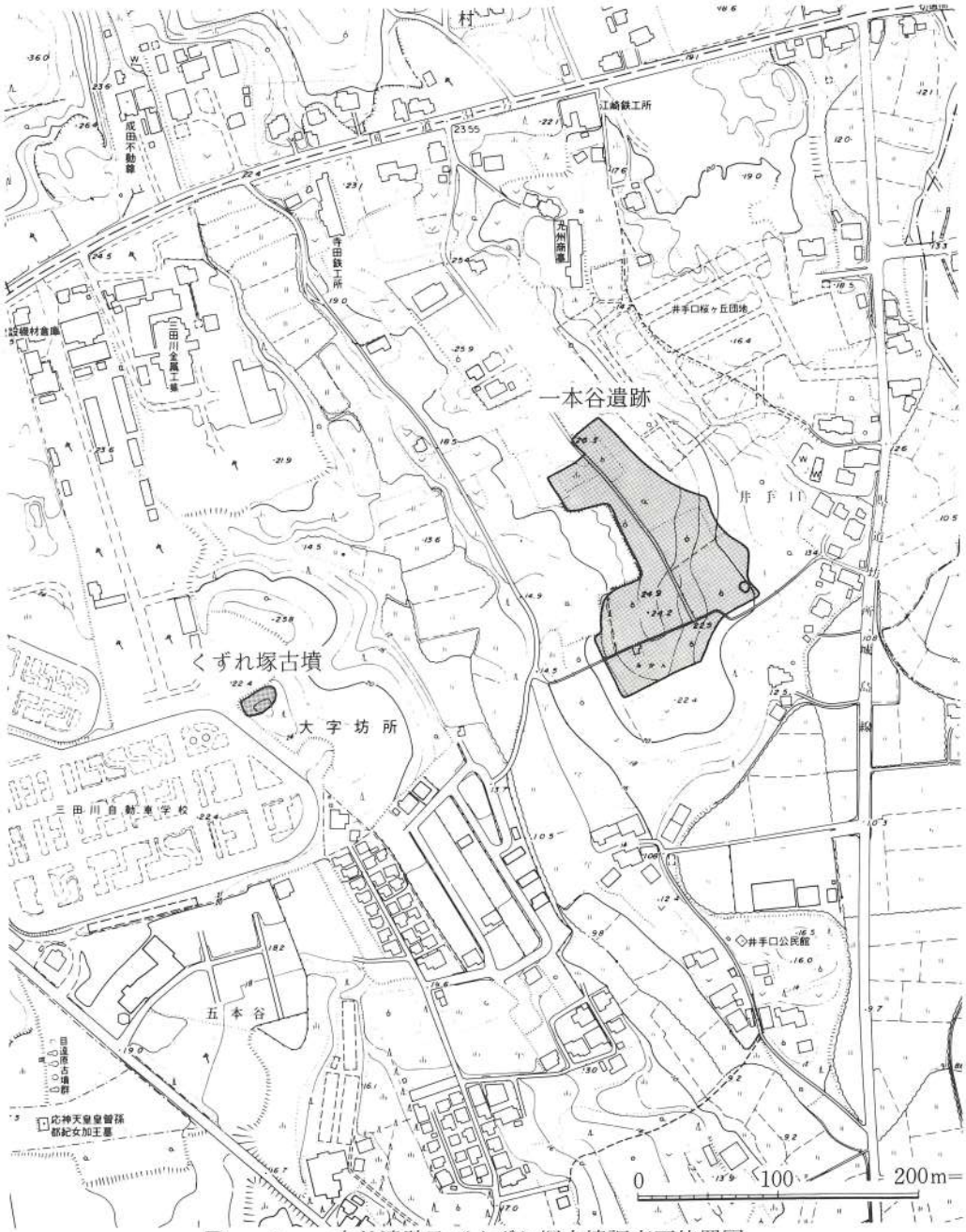


Fig. 4　一本谷遺跡及びくずれ塚古墳調査区位置図

東段丘上の調査は８月19日から開始したが、表土剝ぎを既に終了していた尾根より東半分を北から南へ調査を拡大していった。遺構として検出されるものは平面円形の竪穴住居跡と、平面長方形の貯蔵穴と考えられる土壙が主体で、大規模な弥生時代の集落跡であることが判明し、大きな期待がもたれた。また８月21日には円形周溝墓らしい遺構が東斜面で確認された。さらに調査区を拡大するにつれて、尾根上に平面円形住居跡群が多く存在し、その周辺を貯蔵穴が取り巻き、南部には平面長方形の竪穴住居跡も検出された。

調査の結果、平面円形の竪穴住居跡26軒・平面長方形の竪穴住居跡５軒・貯蔵穴と考えられる60基前後を含む土壙約110基、円形周溝墓１基、火葬墓１基などが検出され、多量の弥生土器片・石器・フレイクや玉類などが出土した。

調査終了間近で、全体の遺構がほぼ明らかになった11月28日㈯に周辺の住民を対象に現地説明会を開催し、また上峰村公民館報(註)でその概要を村内全戸に配布するなど文化財保護思想の啓蒙にあたった。

現地における発掘調査を12月14日終了すると、調査の記録類、出土遺物などは佐賀県文化財資料室へ搬入し、そこで報告書作成のための作業を行なった。

註

上峰村公民館報特集号「発掘された弥生時代のムラ―上峰村大字坊所、一本谷遺跡の調査―」

1981．11

Ⅲ. 一本谷遺跡

1. 遺　構

(1) 遺跡の概要

遺跡の存在する段丘上面には表土（黒褐色土）が20～40㎝の厚さで堆積しており、下層は暗黄褐色の粘土質の層となり、その上面から遺構が切り込んでいる。竪穴住居跡群や貯蔵穴を含む土壙群は段丘上面および緩傾斜面の標高26.8ｍから23ｍの範囲に存在する。この段丘は調査区外北付近で標高を下げくびれるが、この付近が遺跡の北限である。また南方は調査区外に接する畑地をおいて崖になっている。段丘の西斜面は中央部に大規模な土取跡があり、以前かなりの遺構が破壊されただろうことが知られる。

発掘調査は南部畑地を除いて、段丘上面および東西緩傾斜面約14,000㎡について実施した。その結果．竪穴住居跡31軒、貯蔵穴を含む土壙約110基、火葬墓１基その他の遺構を検出した。

竪穴住居跡は段丘の尾根を南北に帯状に分布するが調査区北部から中央部にかけて特に集中する傾向が窺える。貯蔵穴等の土壙は竪穴住居跡分布域内および東西に広がり、住居跡群を取り巻く状態で分布している。竪穴住居跡のうち平面長方形住居跡４基は調査区南部にそれぞれが近接しない位置に分布していた。

また東斜面に南東方へわずかに高まった小段丘上の標高約23ｍの位置に、円形周溝墓１基が存在するが、周辺に他の遺構は存在せず、孤立した状況である。

便宜的に調査区を北部（ＳＢ013・ＳＢ088以北）、中部（ＳＢ013以南ＳＢ042周辺以北）、南部（ＳＢ048・ＳＢ049以南）に分けて遺構の分布を概観すると、北部は尾根の平坦面にあたり17軒の平面円形竪穴住居跡と20基程度の貯蔵穴などが存在するが、住居跡は中央の空地を囲むように分布する傾向が認められ、またこの北部のみで住居跡が４ヶ所で切り合う。中部は尾根の平坦面および東傾斜面にあたるが、西斜面は土取りで遺構が破壊されている。この地区は平面円形竪穴住居跡７軒、平面長方形竪穴住居跡１軒、貯蔵穴約40基などが存在するが、住居跡は互いに距離を保って構築されている。この地区にはＳＢ041・ＳＢ069住居跡など巨大な竪穴住居跡がある。貯蔵穴等の分布は特に北部に集中しているが、全体的には尾根上の竪穴住居群を囲むように分布しており、東では等高線と平行して分布する傾向がみられる。南部は尾根上の平坦面および東西にわずかに傾斜した面にあたり、ある程度一定の方向性をもつ平面長方形竪穴住居跡が４軒、平面円形竪穴住居跡２軒、貯蔵穴３基などが分布する。

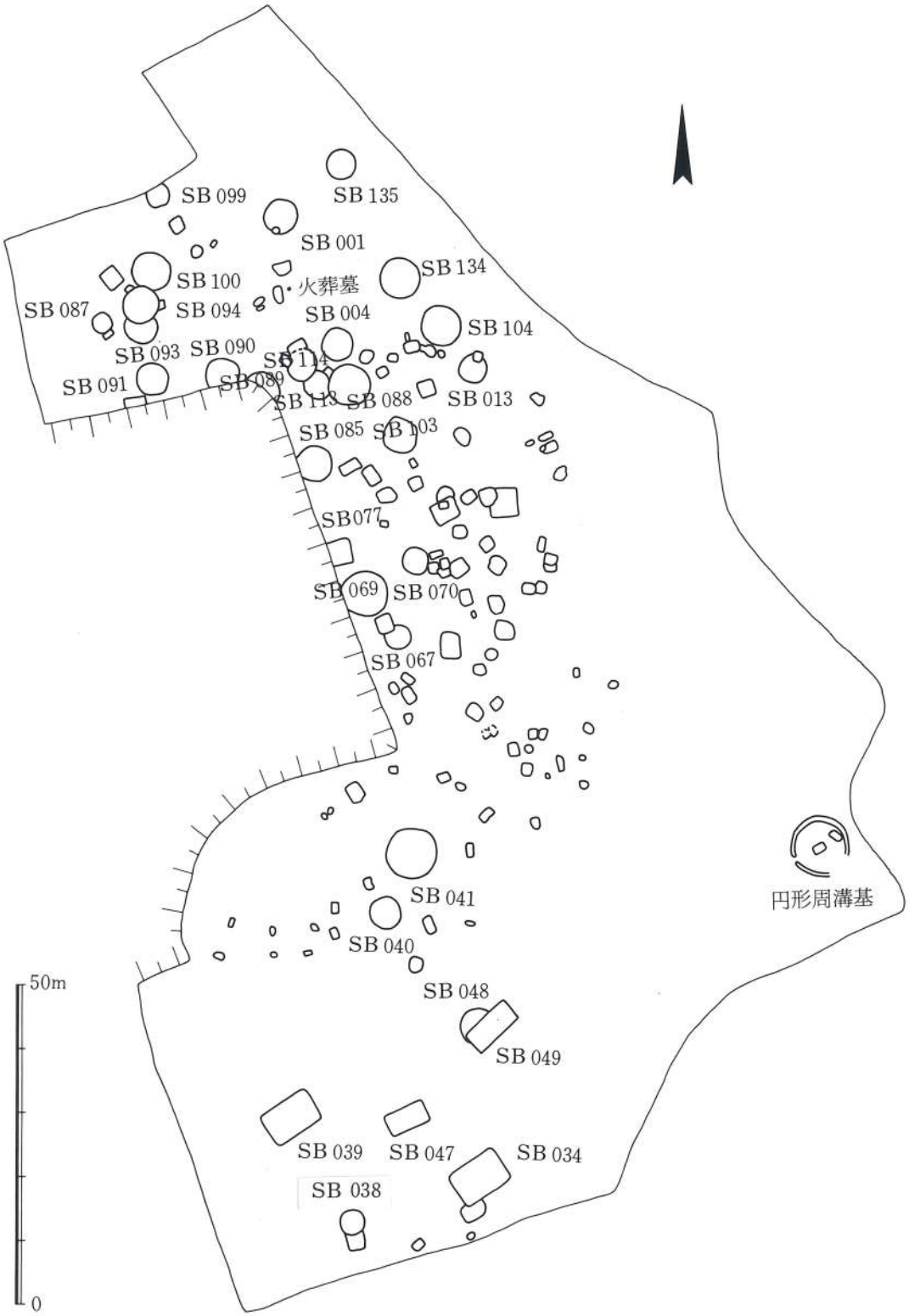


Fig. 5 主要遺跡構配置図

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は31軒検出された。平面形態で分類すると、円形のもの26軒、長方形のもの５軒である。またＳＫ019土壙やＳＫ112土壙のように、平面方形で、向い合う壁面近くの床に２個の柱穴をもつ竪穴住居跡らしい遺構も存在するが、床面までの深さが浅く、また踏みしまりもないことなどから、ここでは一応土壙として取り扱うことにした。

平面円形竪穴住居跡

平面円形竪穴住居跡26軒の規模についてはＳＢ087住居跡の径3.44～3.92ｍ（面積10.6㎡）からＳＢ041の径8.19～8.61ｍ（面積55.4㎡）まで、その差が大きい。統計的にみると面積は13㎡～28㎡と20㎡前後に集中し、37㎡以上のものは４基（うち２基はＳＢ041住居跡の拡張前と拡張後のものである）であった。

一本谷遺跡は遺構の保存が良好であったため床までの深さが0.5ｍ以上あったものが多数を占め、最も深いものとしてＳＢ094住居跡の1.01ｍがあげられる。このため床面に残る屋内施設や柱穴等の遺構も後世の攪乱を受けたものが少なく、竪穴住居そのものの復元には格好の資料となるものであるが、出入口等の痕跡は確認できなかった。

主柱穴は２個のもの４個のものその以上のものに大別できるが、最多のものはＳＢ069住居跡の８個であった。これら主体の本数は住居跡の規模と密接な関係があったことが窺える。すなわち最も小規模なＳＢ087住居跡（面積10.6㎡）で２本、13㎡以上17㎡未満の住居跡では４本、17㎡以上24㎡の住居跡では４本のものと５本のものが約半数づつを占め、25㎡以上の住居跡では５本、６本、７本、８本となる。このような住居規模と主柱穴との相関関係から、13㎡から17㎡未満の住居跡では主柱４本が基本となり、規模が大きくなれば主柱穴の本数が増加することを知ることができるが、17㎡以上24㎡、25㎡以上の２グループ内においては規模の大小で主柱本数の多少が一定の対応をなさず不規則な傾向を窺い知ることができる。

屋内には柱穴の他に中央部に炉状の土壙をもつものがほとんどであるが、焼土を残すものはＳＢ087・ＳＢ137住居跡のみであり、この土壙は一般的に炉と呼ばれる機能はもっていなかったとみるべきであろう。他にＳＢ088・ＳＢ135住居跡では屋内貯蔵穴がみられ。ＳＢ069住居跡ではもの入れと考えられる小横穴を設けており、ＳＢ041・ＳＢ048・ＳＢ069住居跡では壁際を巡る大きな溝が確認された。なおＳＢ041住居跡は規模の拡張がなされているが、拡張前の住居跡にも溝が巡る。

また平面円形の竪穴住居跡の床面はすべて壁際の10～30㎝幅周囲を除いた内側は強く踏みしまっている。この面は完全な平坦面をなさず表面には小さな凹凸があり、丁度近年迄の農家の土間の状況と相通ずるものがあった。

一本谷遺跡では火災に遇って焼亡したと考えられる住居跡が３軒存在した。ＳＢ041・ＳＢ048・ＳＢ069住居跡であるが、これらの住居跡は主柱穴の数が多く、また屋内に大きな溝を巡

らすなど構造上の共通点があり、ＳＢ041・ＳＢ069住居跡からは磨製石鏃や勾玉が出土するなど他の住居跡とは性格上区別されるべき要素が多い。

平面円形の竪穴住居跡からは各種の弥生土器や、支脚・紡錘車などの土製品・石鏃・石斧・石包丁・磨石・砥石・紡錘車などの石器・石製品その他勾玉などを出土したが、概して土器は10数片出土というのが多く、多数を出土したのはＳＢ069・091住居跡ぐらいであった。またこの円形住居跡からは必ずと言って良い程黒曜石やサヌカイトのフレイクを多数出土した。多いものでは100片以上の出土量であるが、製品（特に打製石鏃）を多く出土した住居跡もある。ＳＢ090住居跡で11個、ＳＢ135住居跡で14個であった。

平面長方形竪穴住居跡

平面長方形の竪穴住居跡は５軒検出したが、このうちＳＢ077住居跡は出土遺物からみて、南部に位置する４軒の住居跡とは時間的に区別される。この住居跡は短辺3.46ｍ、長辺3.44ｍ以上の規模で、深さは0.74㎝であった。床面は竪く踏みしまり、南壁際に１個の柱穴、東壁に沿って高さ0.25～0.30ｍのいわゆるベッド状遺構を削り出して付設している。床面からは弥生土器片と多数の黒曜石フレイクを出土している。

南部に存在する４軒は、互いにある程度の間隔を保ち、一定の方向性をもって存在している。すなわち間隔は約10ｍ以上、主軸方位はＮ43°Ｅ～Ｎ66°Ｅ内に納まっている。これら住居跡の規模は前記の平面円形竪穴住居跡に較べると概して大規模になっており、ＳＢ047住居跡の22.1㎡からＳＢ039住居跡では46.6㎡に達する。

ＳＢ049住居跡内では明確な遺構を確認することができなかったが、他の３軒については構造上共通する点が多い。主柱穴は２個で大方長辺中軸上に存在すること、ベッド状遺構をもつこと、南東壁際のほぼ中央部に土壙をもつことなどが挙げられる。ベッド状遺構はＳＢ034住居跡で３ヶ所、ＳＢ039住居跡で２ヶ所、ＳＢ047住居跡で４ヶ所設けられている。壁際の土壙は深さ20～30㎝で小規模なものである。またＳＢ034・ＳＢ047住居跡では中央付近に浅い炉を設けており、ＳＢ047住居跡では焼土が残存していた。壁沿いに巡る小溝はＳＢ034・ＳＢ039住居跡で認められた。

平面長方形のうちＳＢ077住居跡を除く４軒からは各種の弥生土器、砥石などが出土したが、土器の量は多く、当時の土器の組成などを考える際の重要な資料となる。またＳＢ034住居跡からは鉄器片が１片出土した。

Tab.1　一本谷遺跡竪穴住居跡一覧表

（Ⅰ期…中期初頭を中心とする時期，Ⅱ期…後期）

住居跡番号	平面形態	規模（m．m²）				棟方向	屋内施設				出土遺物（上段、土器・土製品 下段、石器・石製品 その他）	時期	備考
		長さ（長径）	幅（短径）	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土・壙	その他			
SB001	円形	5.50	5.30	0.40	22.9	—	4	—	—	中央付近にくぼみ	甕 石鏃	Ⅰ	SK002
004	円形	4.54	4.42	0.41	15.8	—	4	—	炉状土壙	—	甕・紡錘車 石鏃・石包丁・スクレイパー	Ⅰ	
013	円形	4.63	4.37	0.56	15.9	—	4	—	炉状土壙	—	甕・壺 石鏃	Ⅰ	SK012から切られる
034	長方形	7.97	5.46	0.51	43.5	N57.5E	2	有	炉	ベッド状遺構（3ヶ所） 土壙	甕・壺・鉢・高杯・器台・ 手捏土器・砥石	Ⅱ	SK035を切る
038	円形	4.14	4.02	0.63	13.1	—	4	—	炉状土壙	—	甕・壺・支脚・紡錘車 石鏃・石包丁	Ⅰ	SK037と切り合う
039	長方形	7.92	5.88	0.94	46.6	N60°－E	2	有	—	ベッド状遺構（2ヶ所） （土壙）	甕・壺・鉢・高杯・器台 手捏土器支脚	Ⅱ	
040	円形	5.54	5.01	0.50	21.8	—	5	—	炉状土壙	—		Ⅰ	
041	円形	8.61 拡張前 (6.90)	8.19 —	0.39 —	55.4 (37.4)	— —	6 (8)	有 有	炉状土壙	— —	壺・紡錘車・土弾 磨製石鏃・砥石	Ⅰ	拡張家屋、拡張後焼亡
047	長方形	6.27	3.52	0.40	22.1	N66°E	2	—	炉・焼土	ベッド状遺構（4ヶ所） 土壙	甕・壺・鉢・高杯 器台・鉄器片	Ⅱ	
048	円形	4.76	—	0.56	(17.8)	—	5or6	有	炉状土壙	—	甕 石斧・砥石・石鏃	Ⅰ	SB049から切られる。焼亡家屋
049	長方形	7.85	4.28	0.60	33.6	N43°E	?	—	—	土壙	甕・壺・鉢・高杯・ 器台・手捏土器・支脚	Ⅱ	SB048を切る
067	円形	4.20	3.98	0.74	13.1	—	4	—	炉状土壙	—	甕	Ⅰ	SK068から切られる
069	円形	7.82	7.54	0.48	46.3	—	8	有	炉状土壙	東壁に横穴	甕・壺・支脚・磨製石鏃、石鏃・石斧・石包丁・砥石・叩き石・磨石・石刃・勾玉	Ⅰ	焼亡家屋、西側土取りで破壊
070	円形	4.40	4.20	0.83	14.5	—	4	—	炉状土壙	—	壺・鉢 石皿	Ⅰ	
077	長方形	3.44以上	3.46	0.88	—	N64°E	—	—	—	ベッド状遺構（1ヶ所）	甕 石鏃	Ⅱ	西部土取りで破壊
085	円形	6.01	5.59	0.37	26.4	—	8？	—	炉状土壙	—	甕 石鏃・石斧・砥石・石刃	Ⅰ	西部土取りで破壊
087	円形	3.92	3.44	0.32	10.6	—	2	—	炉状土壙 焼土	—	甕 石鏃	Ⅰ	SK124と切り合う
088	円形	7.20	7.08	0.48	40.0	—	5	—	炉状土壙 貯蔵穴	—	甕・壺 石鏃・石斧・砥石・紡錘車	Ⅰ	SB113　SK120
089	円形	(5.94)	—	0.54	(27.7)	—	5以上	—	—	—	甕 石鏃・磨石・紡錘車	Ⅰ	南西部土取りで破壊
090	円形	5.52	—	0.58	(23.9)	—	5？	—	炉状土壙	—	甕 石鏃・石刃・スクレイパー	Ⅰ	南部土取りで破壊
091	円形	5.16	4.74	0.79	19.2	—	5	—	炉状土壙	—	甕・壺 石包丁・紡錘車	Ⅰ	
093	円形	5.49	5.20	0.91	22.4	—	5	—	炉状土壙	土壙	甕 石鏃・勾玉	Ⅰ	SB094から切られる
094	円形	5.99	5.58	1.01	26.3	—	7？	—	炉状土壙	—	甕・壺	Ⅰ	SB093を切る、SB100・SK122・123と切り合う
099	円形	4.26	4.00	0.52	13.4	—	4	—	炉状土壙	—	甕・壺 石鏃・石包丁	Ⅰ	北西部土取りで破壊
100	円形	5.26	5.14	0.85	21.2	—	4	—	炉状土壙	—	甕・壺 石鏃	Ⅰ	SB094と切り合う
103	円形	4.86	4.72	0.39	18.0	—	4	—	炉状土壙	—	甕・鉢 石鏃・石斧	Ⅰ	
104	円形	5.30	4.78	0.34	19.9	—	5	—	炉状土壙	—	甕・壺	Ⅰ	
113	円形	4.78	4.50	0.45	16.9	—	4	—	炉状土壙	—	甕 石鏃・石斧・スクレイパー	Ⅰ	SB088・144、SK120と切り合う
114	円形	(5.20)	(4.60)	0.38	(18.8)	—	5	—	—	—	甕	Ⅰ	SK121から切られる、SK115・116と切り合う
134	円形	6.00	5.32	0.48	25.1	—	7	—	炉状土壙	—	甕	Ⅰ	
135	円形	5.38	4.84	0.64	20.5	—	4	—	炉状土壙	貯蔵穴	甕 石鏃	Ⅰ	

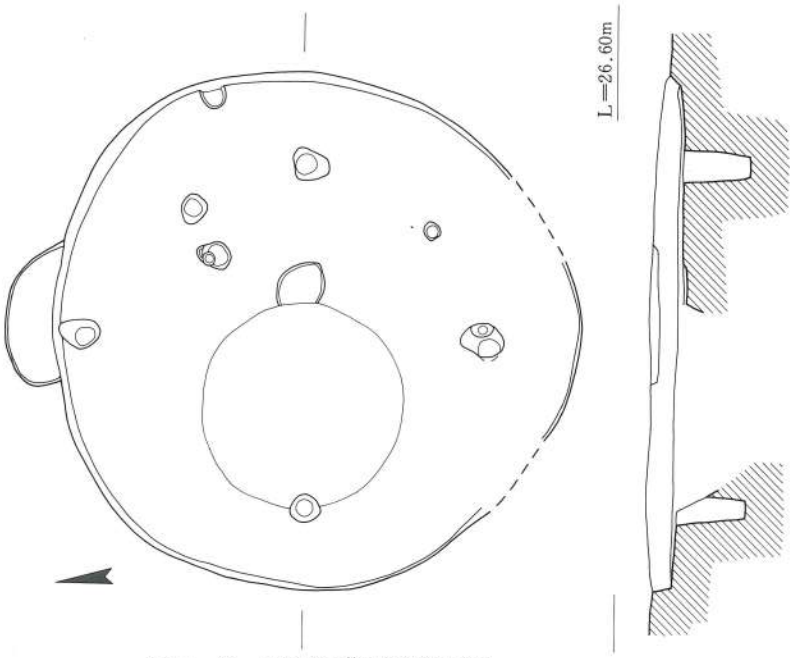


Fig. 6　SB 001住居跡実測図

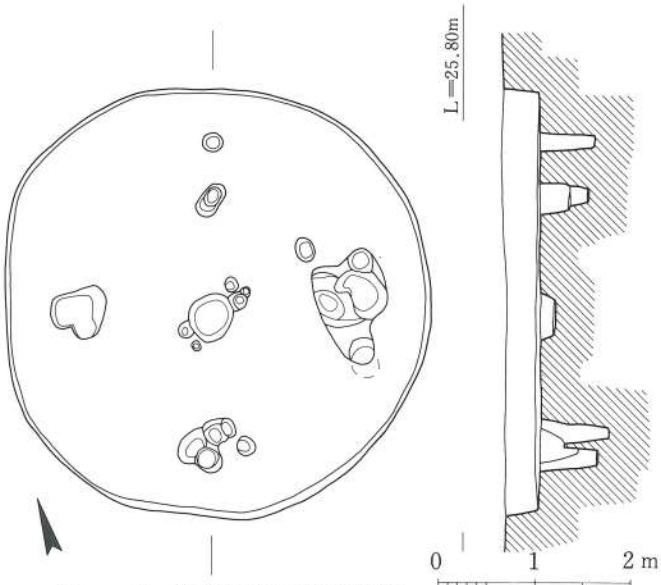


Fig. 7　SB 004住居跡実測図

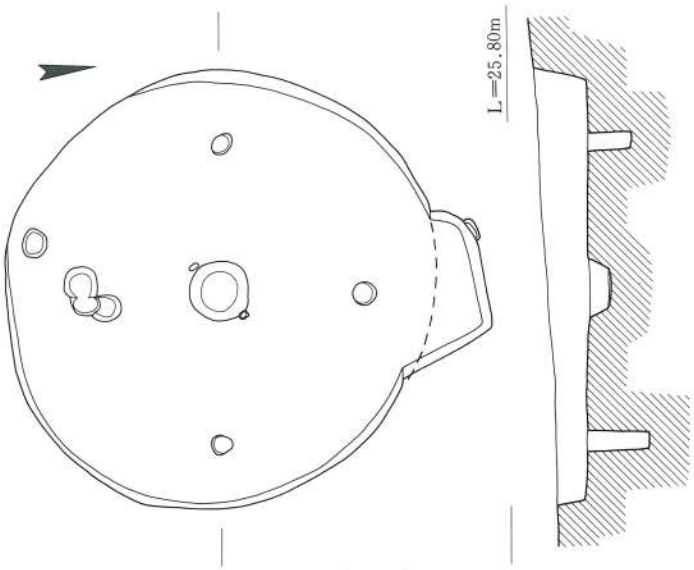


Fig. 8　SB 013住居跡実測図

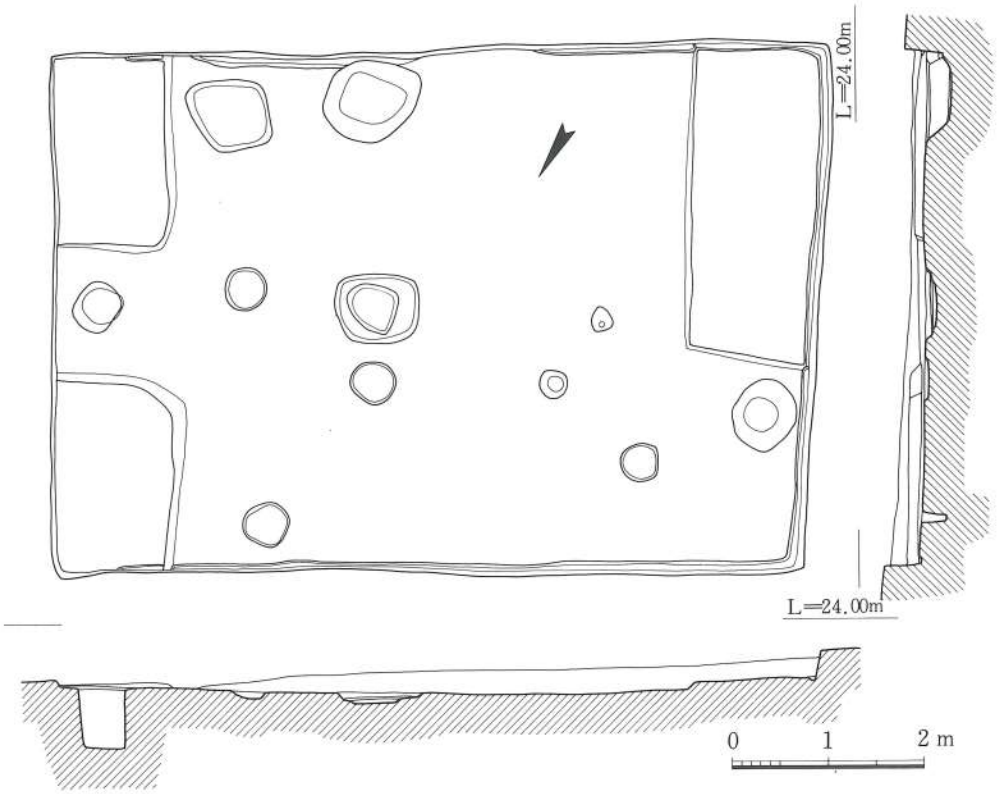


Fig. 9　SB 034住居跡実測図

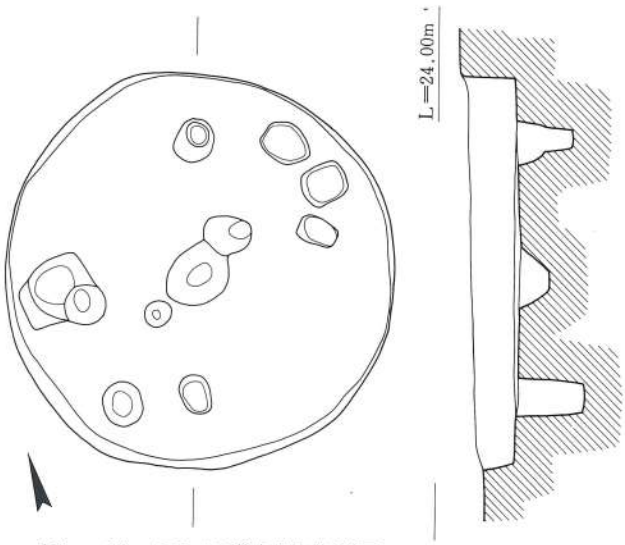


Fig. 10　SB 038住居跡実測図

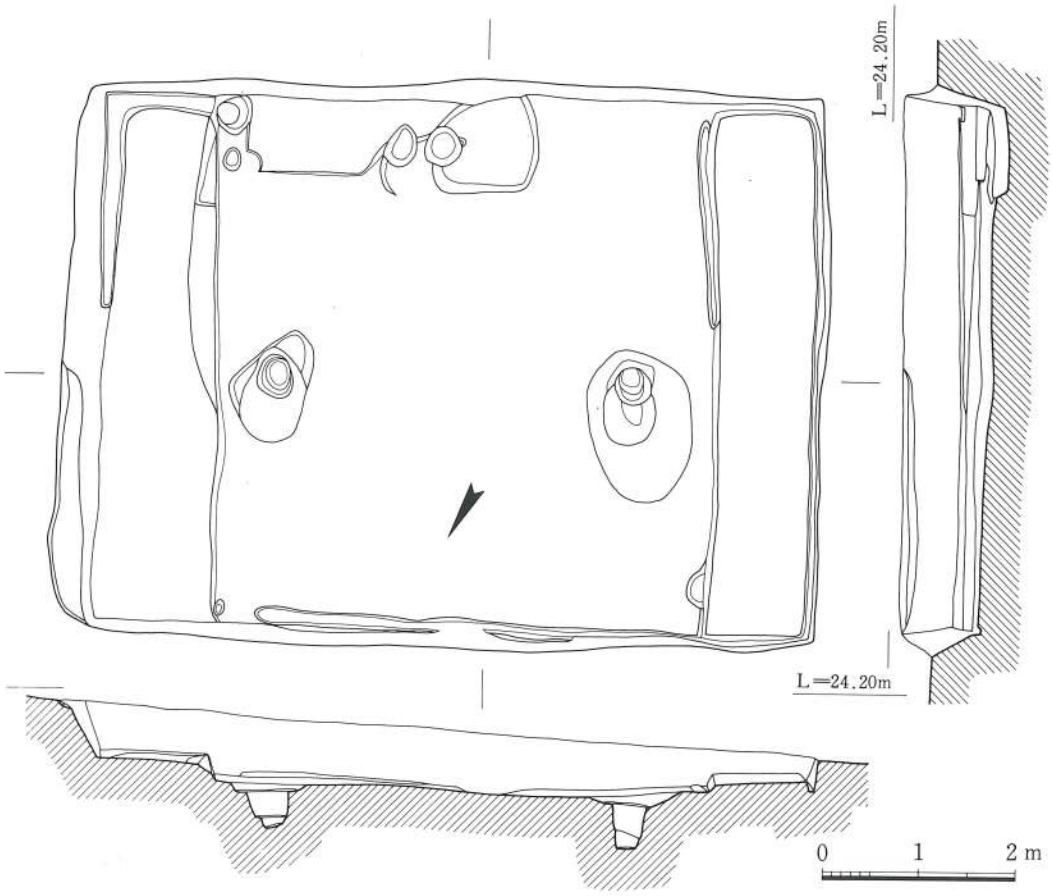


Fig. 11　SB 039住居跡実測図

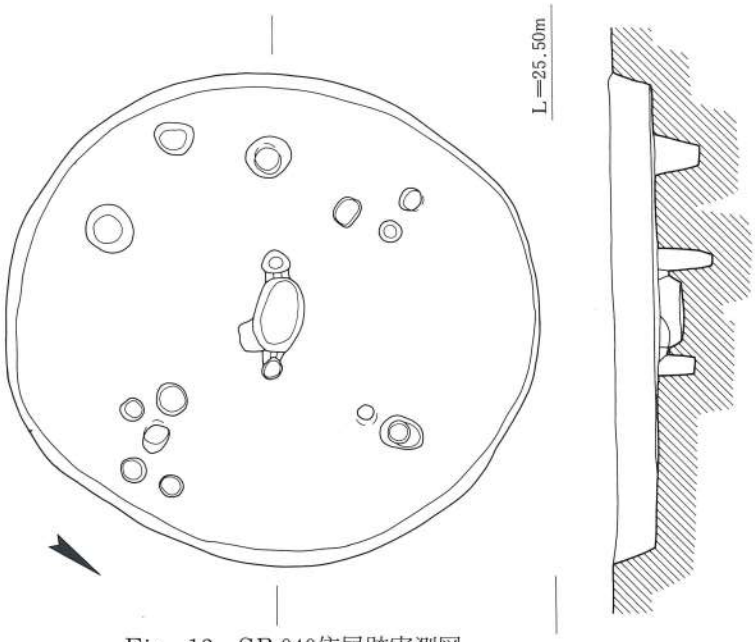


Fig. 12　SB 040住居跡実測図

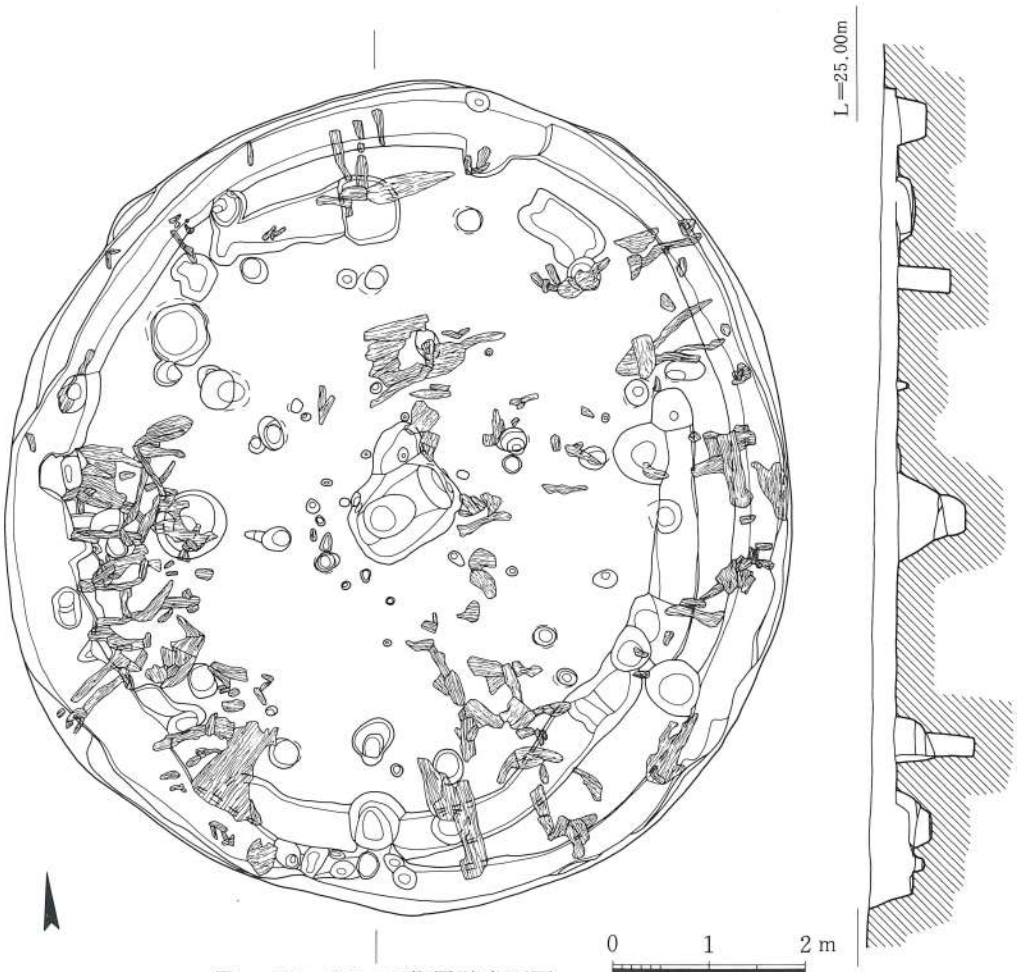


Fig. 13　SB 041住居跡実測図

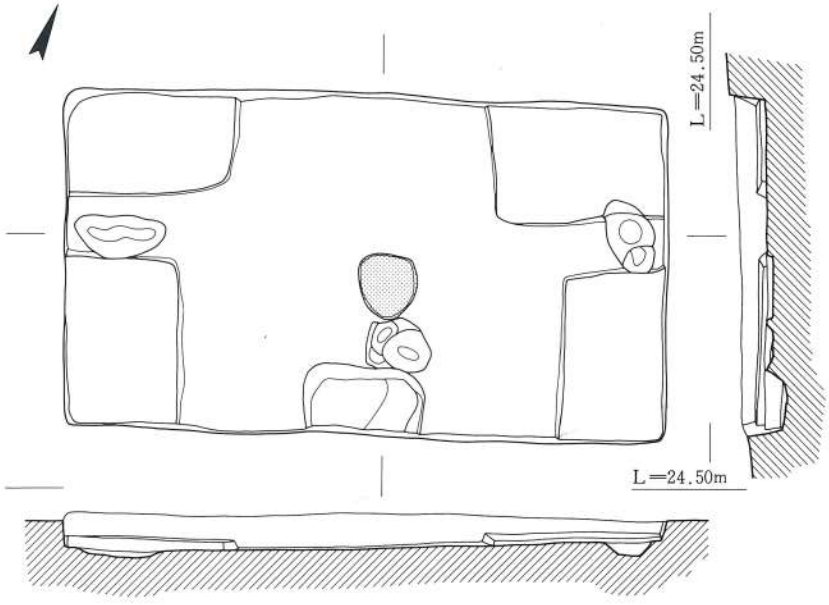


Fig. 14　SB 047住居跡実測図

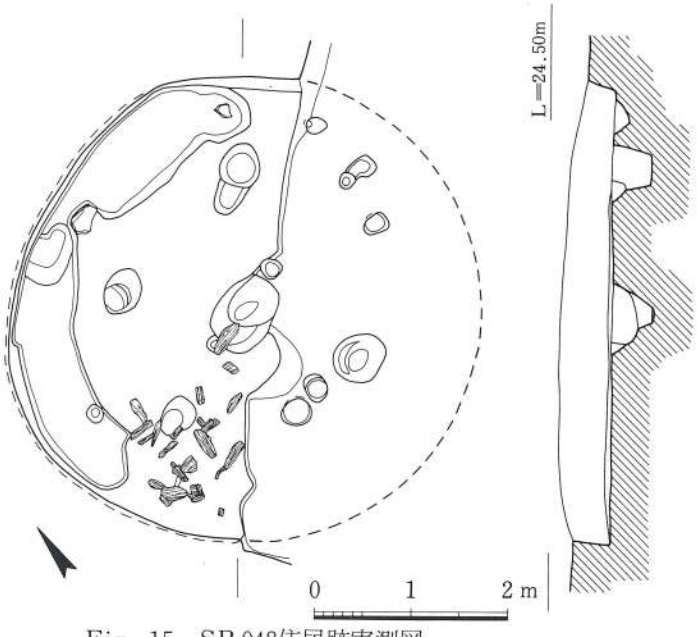


Fig. 15　SB 048住居跡実測図

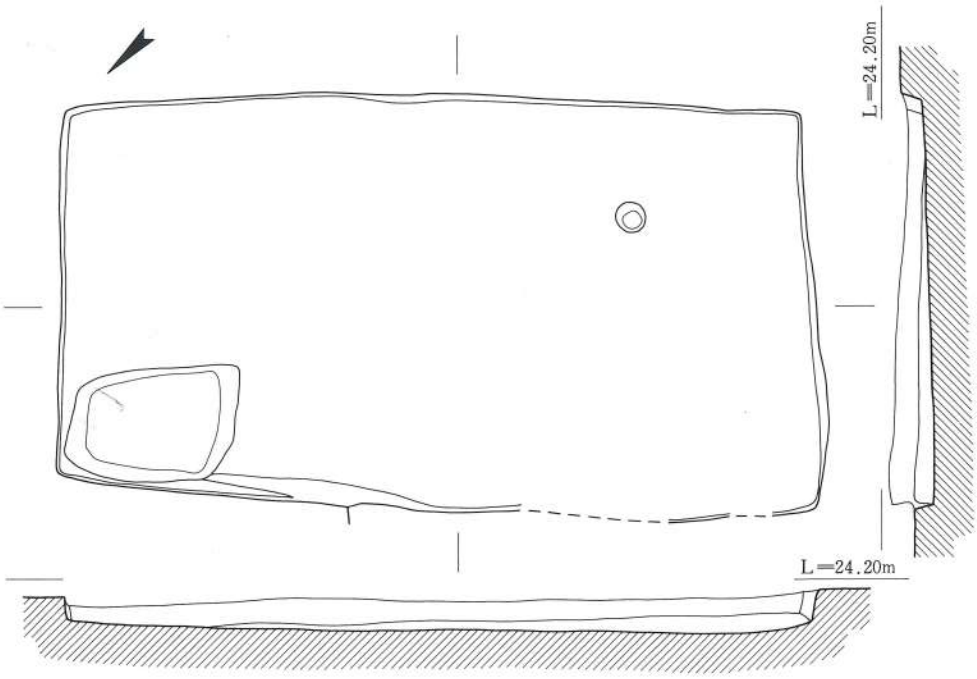


Fig. 16　SB 049住居跡実測図

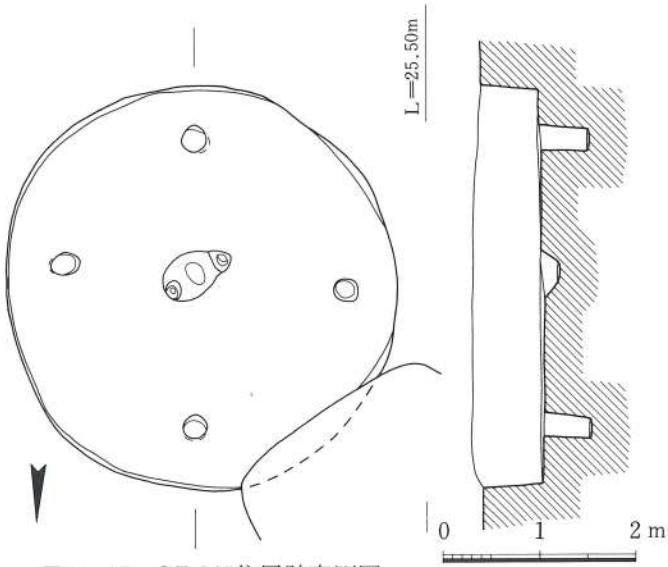


Fig. 17　SB 067住居跡実測図

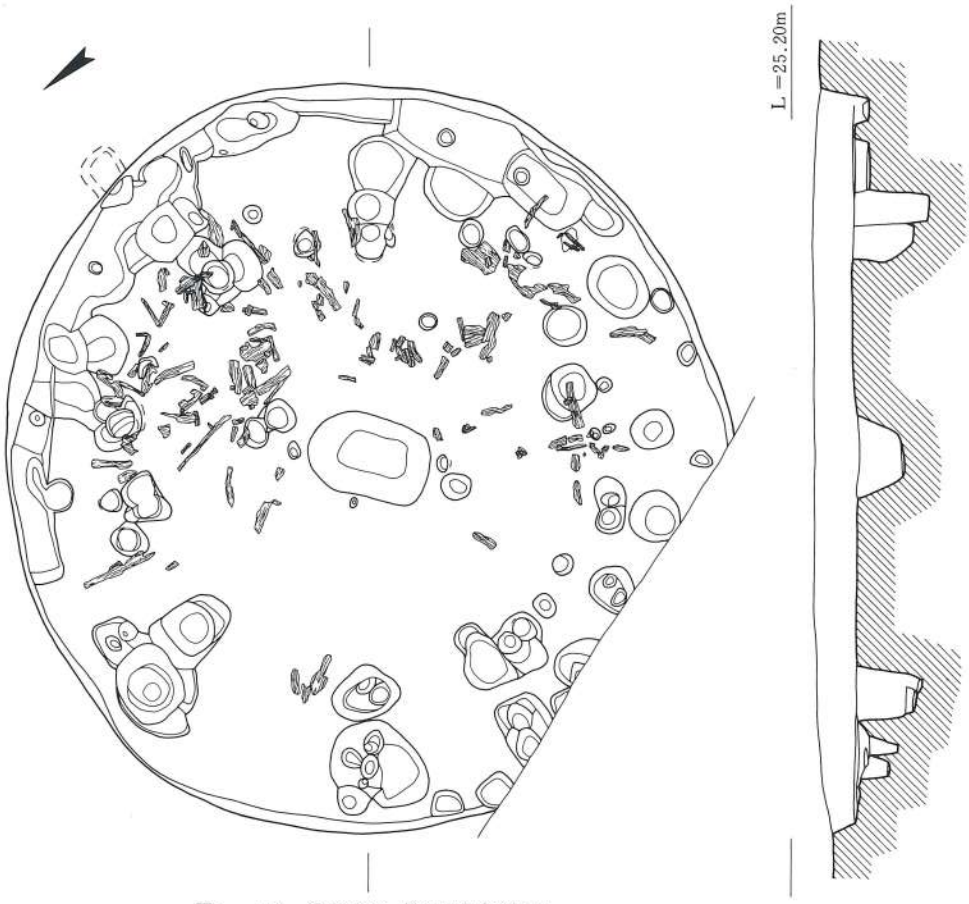


Fig. 18　SB 069 住居跡実測図

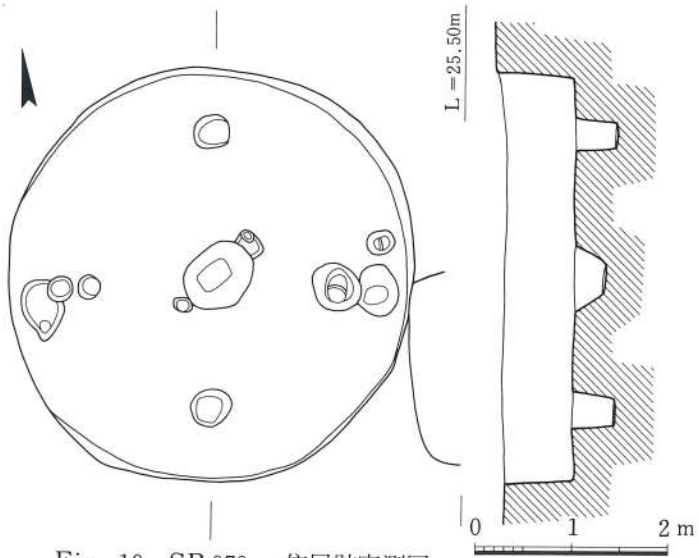


Fig. 19　SB 070　住居跡実測図

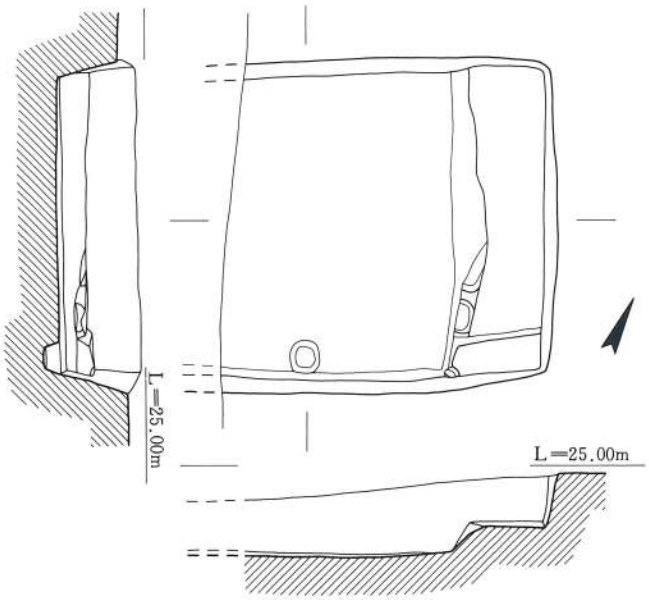


Fig. 20　SB 077住居跡実測図

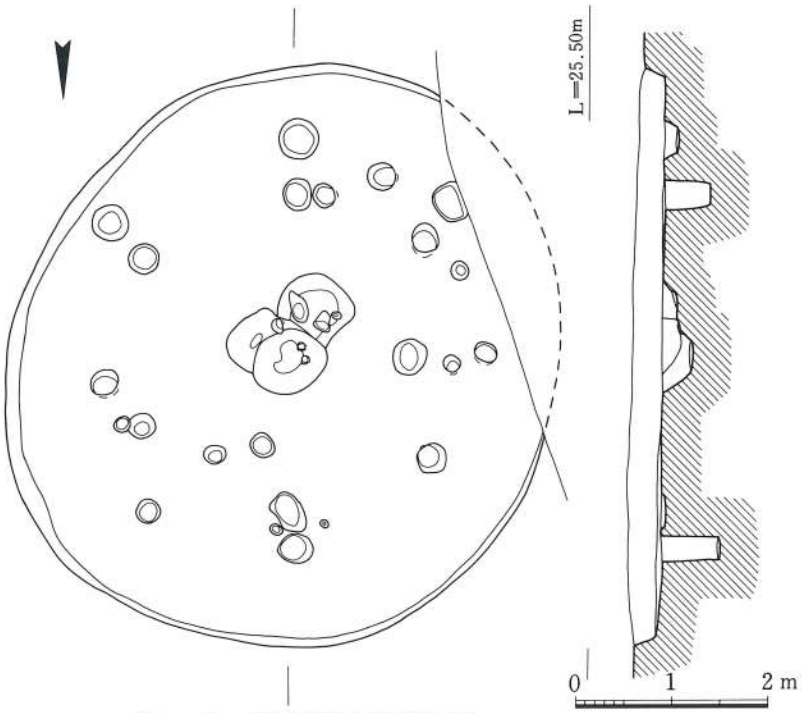


Fig. 21　SB 085住居跡実測図

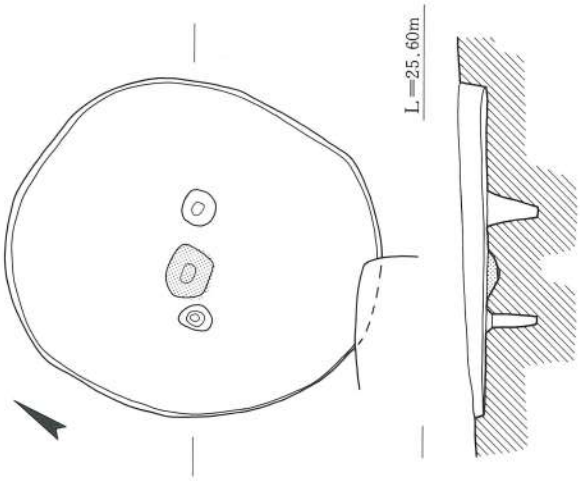


Fig. 22　SB 087住居跡実測図

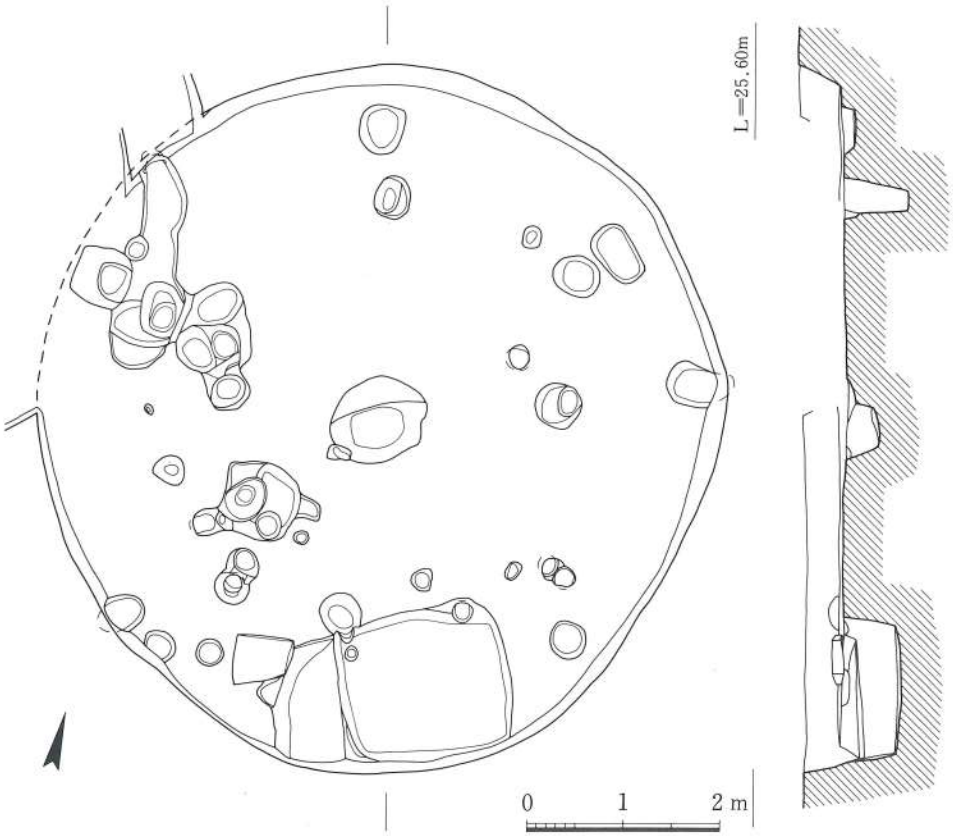


Fig. 23　SB 088住居跡実測図

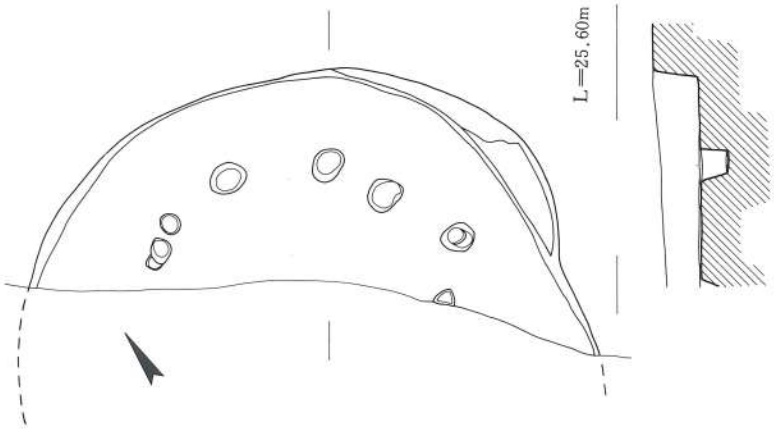


Fig. 24　SB 089住居跡実測図

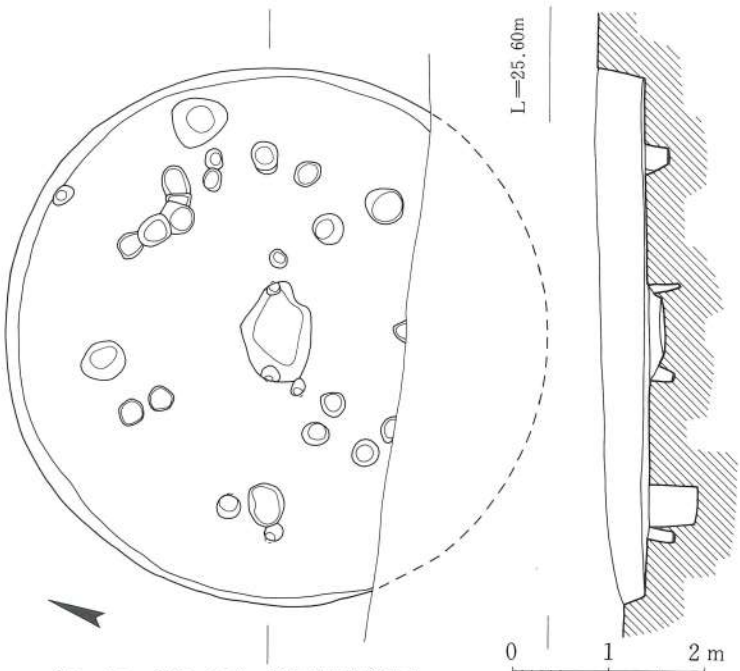


Fig 25　SB　090　住居跡実測図

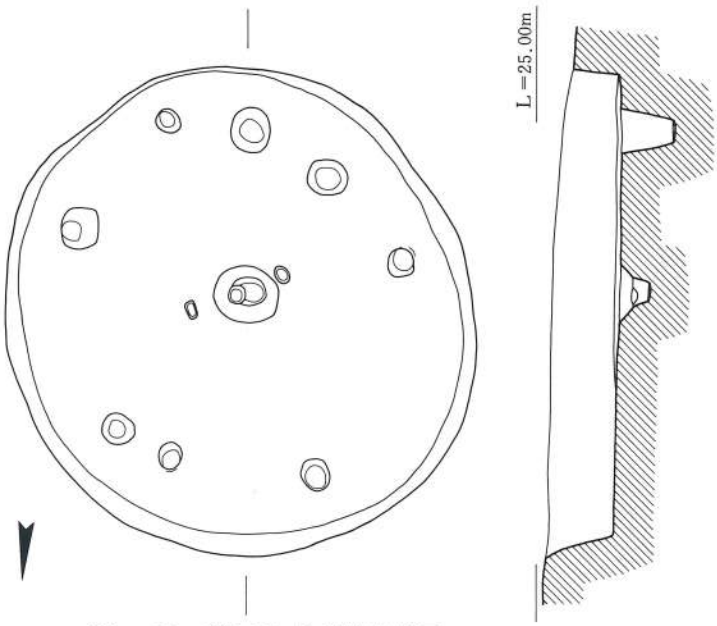


Fig. 26　SB 091 住居跡実測図

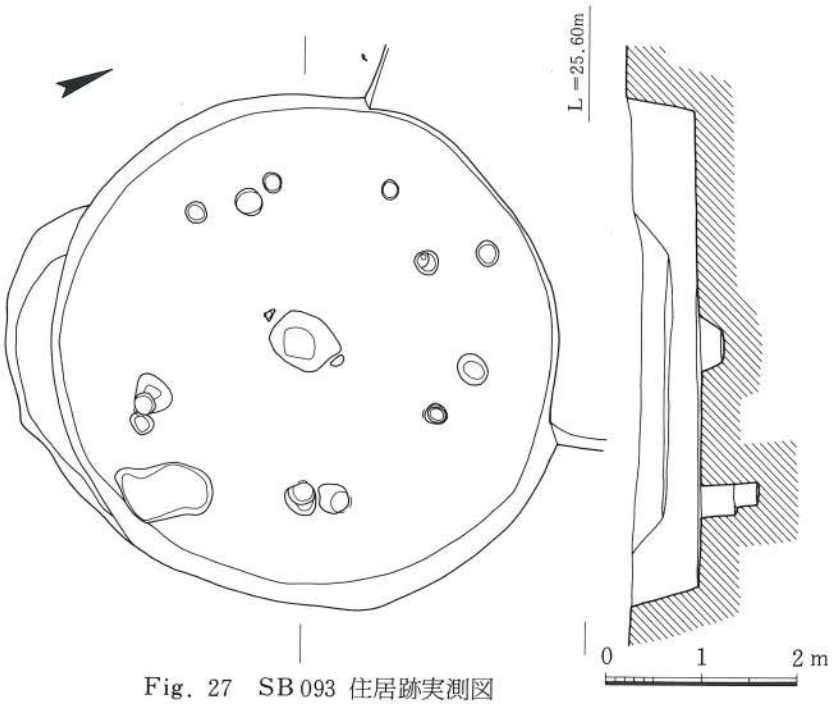


Fig. 27　SB 093 住居跡実測図

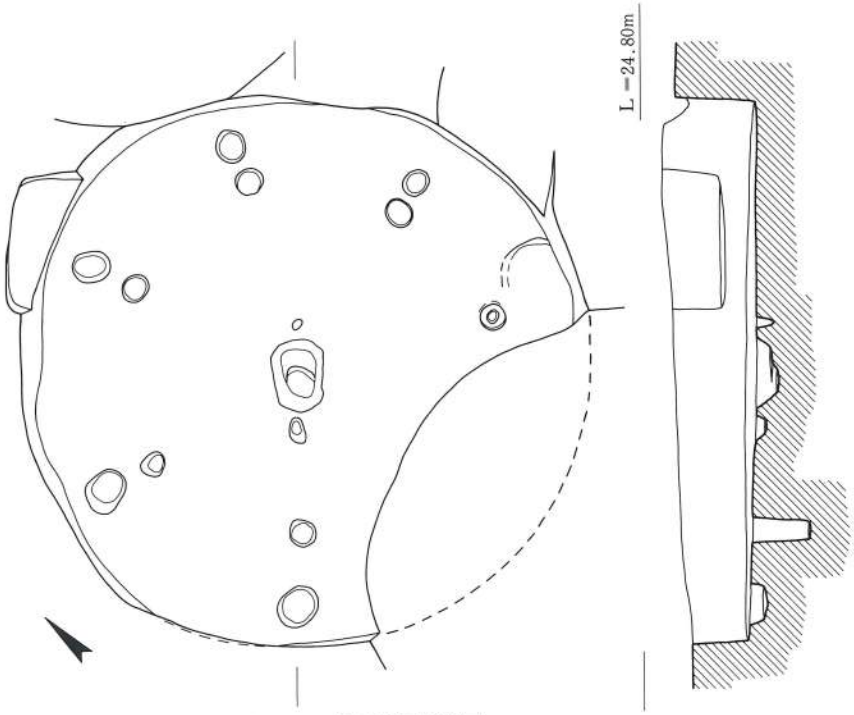


Fig. 28　SB 094 住居跡実測図

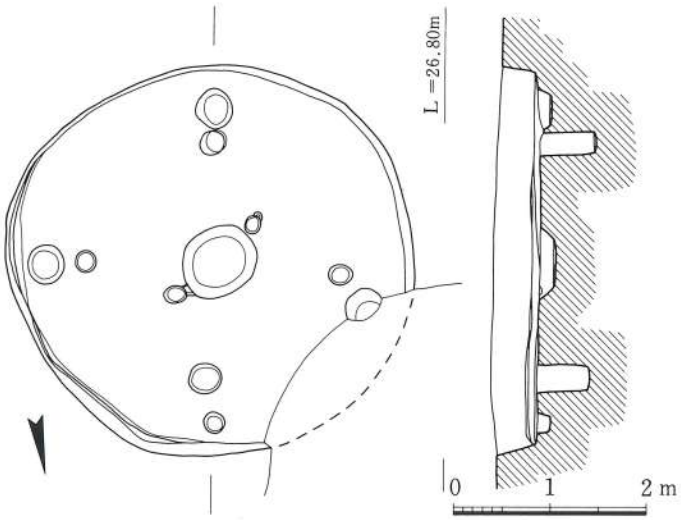


Fig. 29　SB 099 住居跡実測図

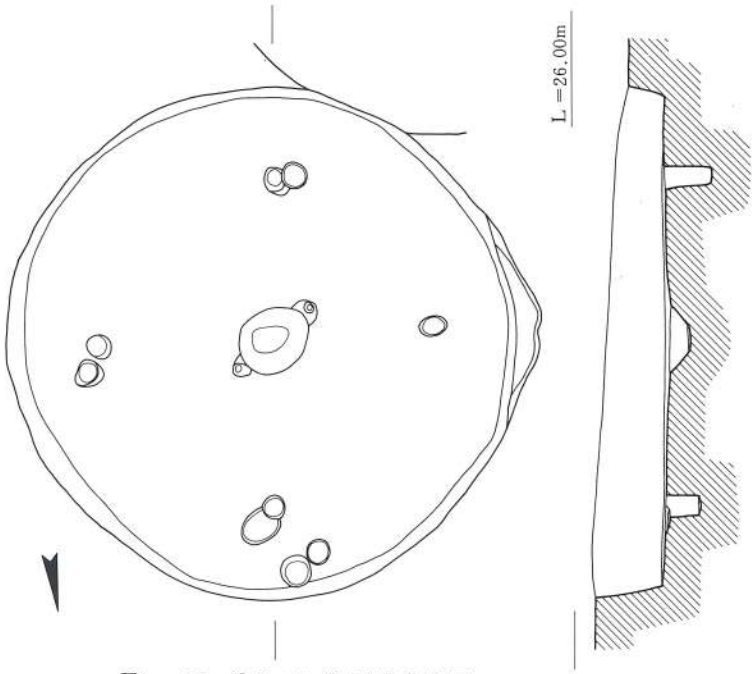


Fig. 30　SB 100 住居跡実測図

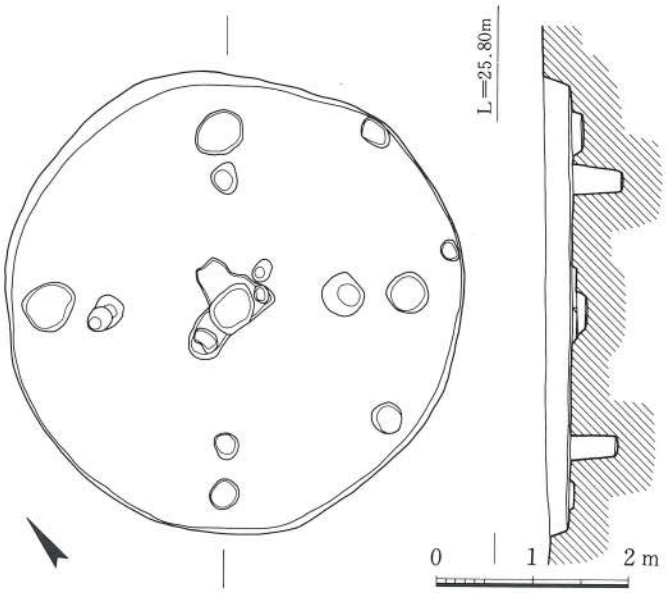


Fig. 31　SB 103住居跡実測図

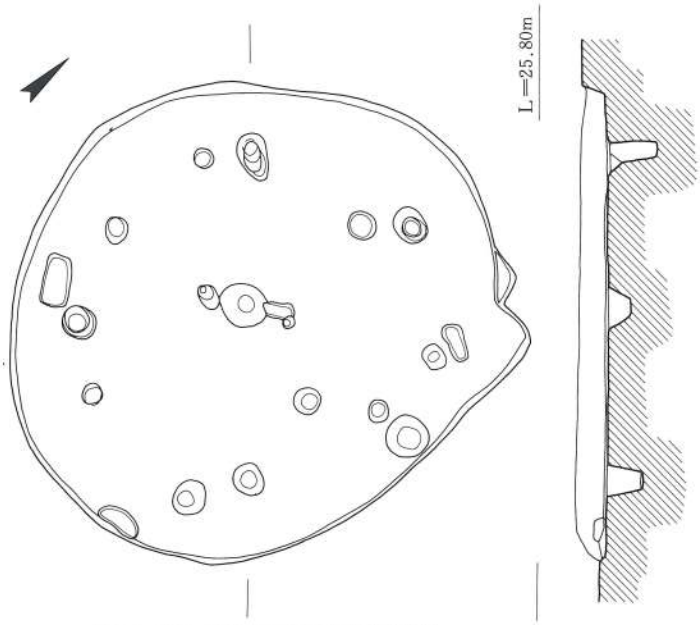


Fig. 32　SB 114住居跡実測図

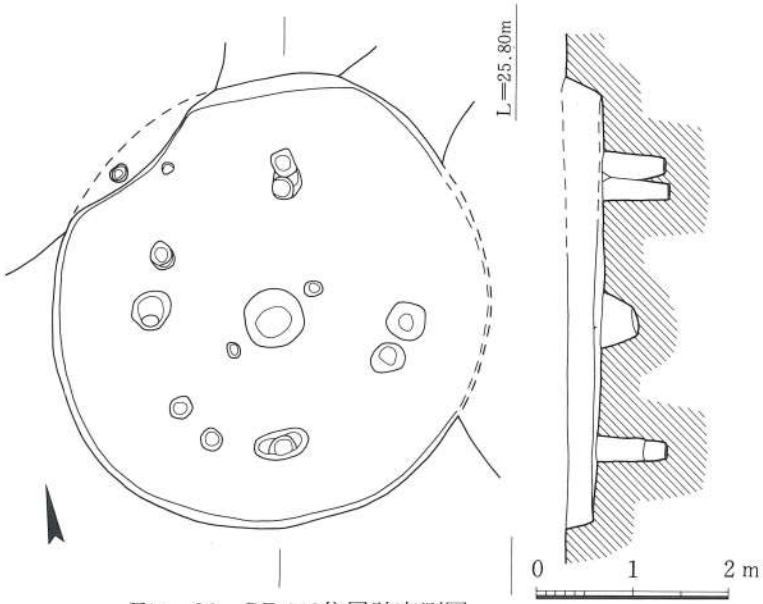


Fig. 33　SB 113住居跡実測図

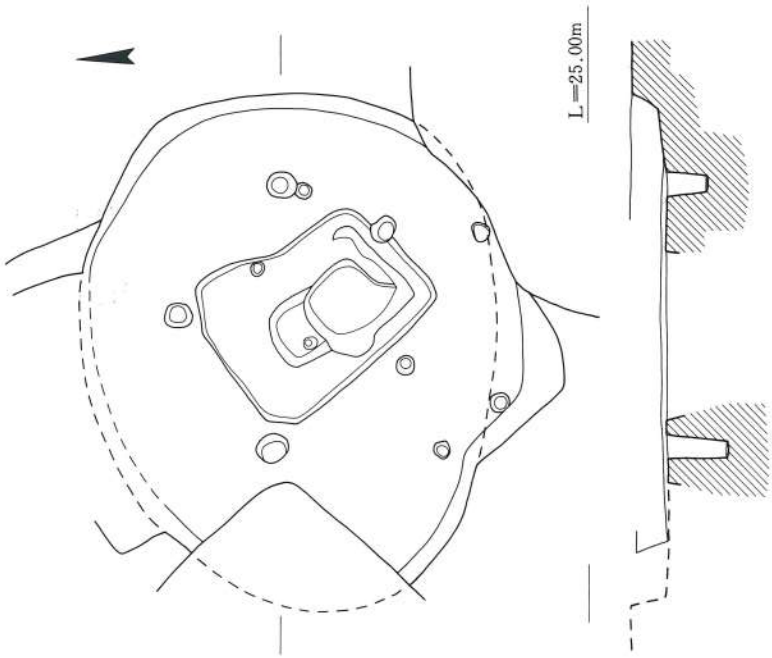


Fig. 34　SB 114住居跡実測図

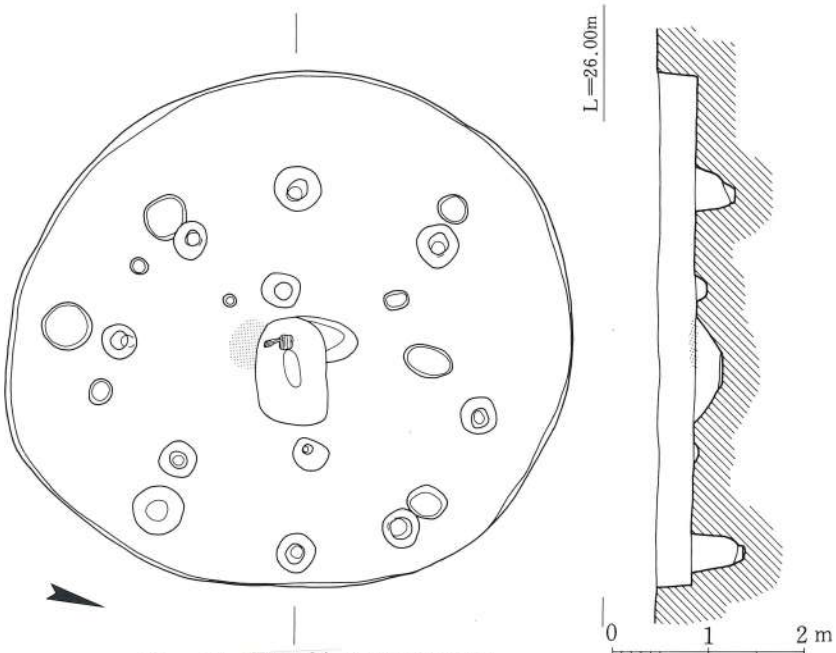


Fig. 35　SB 134 住居跡実測図

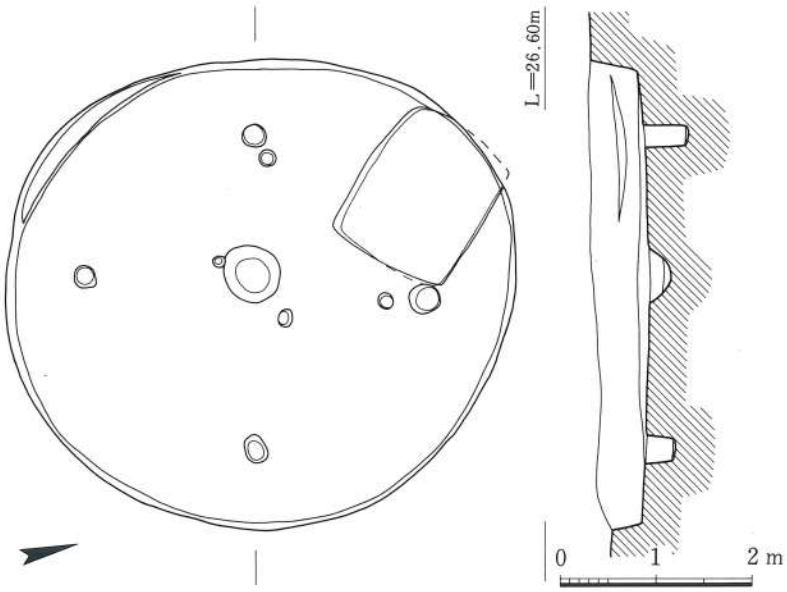


Fig. 36　SB135住居跡実測図

(3) 貯蔵穴・土壙

貯蔵穴等を含んで土壙は全体で101基検出された。形態の相違により、内訳は貯蔵穴53基、貯蔵穴の可能性があるもの３基、住居跡状のもの５基、その他のいわゆる土壙40基となる。

貯蔵穴は平面形態が方形基調のもの51基、円形のもの２基に分類され、土壙は方形基調のもの、円形基調のもの、不整形のものに分類できる。土壙としたもののうち平面正方形または正方形と考えられるもの５基は柱穴をもつものもあり、あるいは住居跡のような居住のための施設であったかも知れない。

貯蔵穴

貯蔵穴と考えられる竪穴遺構のうち平面方形のもののうち遺構が完全に遺存しているものや、一部破壊されてはいるが容易に全体を復元しうるもの44基についてみると、規模的には床面積ではＳＫ124貯蔵穴の0.5㎡からＳＫ076貯蔵穴の7.0㎡まで幅が大きいが、統計的には1.5㎡から3.0㎡前後に集中する。平面方形基調の貯蔵穴はそれぞれ長方形と正方形を平面基調とするものに２分される。平面長方形のもの28基、平面正方形のもの16基で、約２：１の割合になっている。

平面長方形基調の貯蔵穴は断面がいわゆる梯形のものが多いが、中には壁が崩れたものも多く、本来壁は垂直に立っていたものが多いと思われる。またＳＫ050・ＳＫ148土壙などやや袋状になっているものも存在した。規模的には前期の1.5㎡から3.0㎡内に特に集中するか、平面正方形基調のものはこの範囲にやや集まる傾向が認められるが、概してバラツキが大きい。残存する深さは１ｍ前後のものが多いが最も深いものはＳＫ076貯蔵穴の1.23ｍであった。

内部に柱穴らしい小穴が存在するものは少ないが、ＳＫ139貯蔵穴では平面長方形の床面の

短辺側の壁際にそれぞれ１個の柱穴が存在し、また巨大なＳＫ076貯蔵穴では周囲の壁上部に柱穴状の小穴が多数巡るなど、上部構造を推測させるものも存在した。

なお、これら平面方形基調の貯蔵穴は、その主軸方位が地形の傾斜と直角あるいは平行に掘られたものがほとんどであるが、等高線と平行の方位のものが大多数を占める。

平面円形の貯蔵穴は確実なものとして、ＳＫ046・ＳＫ059貯蔵穴の２基が検出された。両者ともその断面がフラスコ状となるいわゆる袋状竪穴ある。ＳＫ046貯蔵穴は1.56ｍ×1.14ｍの平面正方形に近い長方形の壙の底部から口経約0.9ｍ、底径約1.5ｍ、深さ1.29ｍの竪穴を振り込んでいる。後者は口径約1.0ｍ、底径約1.7ｍ、深さ1.47ｍの竪穴である。底面積はそれぞれ2.5㎡、2.3㎡となる。

貯蔵穴からの出土品は平面円形竪穴住居跡とほぼ同様で、弥生土器や支脚などの土製品・石鏃・石斧などの石器等がある。

土壙

土壙は平面方形基調のものがほとんどであり、前記の貯蔵穴の範疇に入るものもいくつか存在するかも知れないが、概してその性格が不明なものが多い。

土壙のうちＳＫ086土壙は3.16ｍ×2.10ｍ、深さ0.41ｍのやや規模が大きい土壙であるが、内部からは中期中頃の甕、大甕、壺・器台など多数の弥生土器を出土し、他の土壙や貯蔵穴とは時期的に孤立した存在である。

また土壙としたもののうちで、平面正方形の竪穴住居跡状の遺構が５基存在したが、これらのうちＳＫ019・ＳＫ112土壙は中軸線上の壁際の床にそれぞれ１個の柱穴を配するが、この柱穴は規模が小さく、また床面に踏みしまりもみられないことなどから住居跡の範疇から除外した。おそらく簡単な上屋構造をもつ倉庫的な機能をもつ竪穴であったと思われる。床面積はＳＫ019土壙は約14㎡、ＳＫ112土壙は12.2㎡であった。

土壙よりの出土品の構成は貯蔵穴と同様である。

Tab. 2　一本谷遺跡貯蔵穴・土壙一覧表

貯蔵穴及び貯蔵穴の可能性のあるもの、住居跡状の土壙には、床面積を記した。

土壙番号	平面形態	上面規模（ｍ）		底面規模（ｍ）		深さ（ｍ）	床面積（㎡）	柱穴状の穴	出土遺物	備考
		長さ（長径）	幅（短径）	長さ（長径）	幅（短径）					
ＳＫ002	円形に近い楕円形	1.12	0.96	1.04	0.82	0.17		—	甕・支脚	
003	円形	0.92	0.83	0.51	0.49	0.66		—	甕	
005	楕円形	2.06	1.53	1.35	0.63	0.80		—	甕	
006	楕円形に近い	1.97	1.33	1.60	1.13	0.33		1	甕	
007	隅丸台形	2.32	1.64	2.20	1.55	0.31		1	支脚	
011	楕円形に近い	1.54	1.29	0.77	0.61	0.39		—	甕	
012	(長方形)	—	(1.60)	—	(1.35)	0.41		—	甕・壺	貯蔵穴
014	方形	2.62	2.60	2.47	2.43	0.19	6.0	2	甕	住居跡様

土壙番号	平面形態	上面規模(m)		底面規模(m)		深さ(m)	床面積(㎡)	柱穴状の穴	出土遺物	備考
		長さ(長径)	幅(短径)	長さ(長径)	幅(短径)					
SK015	不整形 長方形に近い	1.76	1.17	1.47	0.93	0.59		—		
016	楕円形	1.80	1.53	1.75	1.29	0.83	0.9	—	甕・壺 石鏃・石斧・石包丁・砥石	貯蔵穴様
017									甕・壺	
018	正方形に 近い台形	2.22	2.04	2.11	1.83	0.90	1.6	—	甕	貯蔵穴
019	正方形	(4.04)	3.62	(3.95)	3.53	0.29	(13.9)	2	甕 石斧	住居跡様
020	正方形	1.56	1.47	1.47	1.29	0.76	1.0	—	甕・壺	貯蔵穴
021	正方形	1.71	1.70	1.67	1.64	1.08	2.7	—	甕・壺	貯蔵穴、床面に8ヶ所の小穴
022	正方形	1.96	1.76	1.80	1.67	1.02	3.0	—	甕	貯蔵穴
023	正方形	2.25	2.10	1.76	1.66	1.04	2.9	—	甕 砥石	貯蔵穴
024	長方形	2.17	1.10	1.84	0.86	0.91	1.6	—	甕	貯蔵穴
025	長方形に 近い台形	1.65	(1.26)	1.48	(1.08)	0.90	(1.6)	—	甕・壺 磨石	貯蔵穴
026	正方形	1.57	1.51	1.42	1.37	1.05	1.9	—	甕	貯蔵穴
027	正方形に近い 隅丸長方形	2.38	2.22	2.17	1.65	1.03	3.6	—	甕	貯蔵穴
028	隅丸長方形	1.93	1.50	1.58	1.21	0.87	1.9	—	甕・壺・土弾 石鏃	貯蔵穴
029	長方形に 近い台形	1.41	0.92	1.26	0.63	0.47		—	甕	
030	長方形に 近い不整形	1.34	1.02	0.76	0.69	0.43		—	甕・壺	
031	長方形に 近い楕円形	1.34	1.01	1.00	0.71	0.30		—	甕	
032	隅丸台形	1.98	1.18	1.30	0.62	0.82		1		
035	隅丸長方形	3.16	1.64	2.94	1.49	0.69	4.4	—	甕 石斧	貯蔵穴
036	隅丸長方形	1.84	1.37	1.77	1.28	0.63	2.3	—	甕・壺	貯蔵穴
037	長方形	3.50以上	2.39	—	2.32	0.25		—		
042	隅丸長方形	2.30	1.72	2.19	1.59	0.90	3.5	—	壺・器台	貯蔵穴
043	隅丸長方形	2.61	1.42	2.54	1.28	0.39	3.3	—	甕・手捏土器 石包丁	貯蔵穴か
044	長方形	2.04	1.00	1.90	0.88	0.41		—	甕・壺・支脚	
045	隅丸長方形	1.58	1.16	1.57	1.20	1.04	1.9	—	甕・壺 石斧	貯蔵穴
046	円　形	0.95	0.79	1.83	1.75	1.29	2.5	—		袋状貯蔵穴、上部の1.56×1.14mの土壙より掘り込む
050	隅丸長方形	1.87	1.42	1.99	1.38	1.02	2.7	—	甕・壺・蓋 磨石	貯蔵穴、やや袋状
051	楕円形	1.28	0.68	1.18	0.63	0.35		—	甕・支脚 石斧	
052	長方形	2.13	1.61	1.96	1.53	0.35	3.0	—	甕	貯蔵穴、床にくぼみ
053	隅丸長方形	1.72	1.42	1.42	1.20	0.47	1.7	—		貯蔵穴、床に小くぼみ
054	楕円形	1.43	1.06	1.15	0.84	0.57		—	甕・壺・器台・手捏土器	床に2穴
055	円形に 近い不整形	1.20	(1.03)	0.89	0.60	0.28		—	甕	
056	隅丸長方形	2.76	2.03	2.56	1.91	0.68	4.9	—	甕	貯蔵穴
057	正方形に近い 隅丸長方形	1.87	1.53	1.75	1.40	0.43	2.4	—	甕	貯蔵穴、床に長楕円形の壙
058	長方形に 近い楕円形	2.13	1.77	1.80	(1.40)	0.62	(2.0)	—	甕 石斧	貯蔵穴、床に2ヶ所の壙
059	円　形	1.09	0.99	1.79	1.64	1.47	2.3	—	甕・手捏土器 石斧	袋状貯蔵穴
060	長方形	1.74	1.31	1.67	1.25	0.30	2.1	—	甕・壺・支脚 磨製石鏃	貯蔵穴
061	隅丸長方形	2.02	1.43	1.84	1.36	0.76	2.5	2	甕・壺	貯蔵穴、床に段差
062	円　形	1.66	1.63	1.12	1.09	0.30		—	甕・鉢 石斧	
063	隅丸長方形	(3.18)	2.35	(3.07)	2.25	0.19		—	甕・支脚	
064	隅丸長方形	1.71	1.03	1.63	0.93	0.20	1.5	—		貯蔵穴
065	楕円形	1.73	1.21	1.56	1.17	0.20		4		床に柱穴2、外部に柱穴2
066	隅丸長方形	2.14	1.57	1.99	1.50	0.82		—	甕・壺 石斧	
068	正方形に近い 隅丸長方形	2.56	2.32	2.39	2.18	0.70	5.2	—	甕・支脚	貯蔵穴
071	長方形	2.40	1.10	2.17	0.85	0.33		2	甕・壺	
072	長方形	2.98	1.85	2.82	1.40	0.89	3.9	2	甕・壺・土弾	貯蔵穴、SK073に切られる
073	長方形	2.04	1.64	1.95	1.52	1.20	3.0	—		貯蔵穴SK072を切る
074	隅丸正方形	2.77	2.59	2.22	1.98	1.21	4.4	—	甕	貯蔵穴、床に段差、SK073
075	隅丸長方形	1.68	1.47	1.62	1.24	0.79	2.0	—	甕	貯蔵穴、壁に横穴

土壙番号	平面形態	上面規模（m）		底面規模（m）		深さ（m）	床面積（m²）	柱穴状の穴	出土遺物	備考
		長さ（長径）	幅（短径）	長さ（長径）	幅（短径）					
SK076	正方形に近い隅丸長方形	3.14	2.86	2.78	2.53	1.23	7.0	1	甕	貯蔵穴、周囲壁上部に柱穴状の小穴多数
078	長方形	3.51	2.37	3.31	2.21	0.32	7.3	1	甕	床にくぼみ3
079	楕円形	2.57	1.91	2.22	1.64	0.82	2.9	—	甕	貯蔵穴
080	正方形	2.07	1.91	1.91	1.77	0.22	3.4	—	甕・壺	貯蔵穴
081	長方形	1.40	0.57	0.88	0.36	0.53		2	甕 石鏃	
082	正方形に近い長方形	2.11	1.83	1.79	1.72	0.73	3.1	—		貯蔵穴
083	長方形	2.35	1.79	2.22	1.71	0.19	3.8	—	甕	貯蔵穴
084	隅丸長方形	1.87	1.34	1.71	1.20	0.26 (0.74)	2.1	—	甕・壺 石鏃・石包丁	貯蔵穴
086	長方形	3.16	2.10	2.98	1.82	0.41	5.4	—	甕・壺・器台　Ⅰ新期 石鏃・石刃	床に穴1
092	(正方形)	3.95	1.60以上	3.89	—	0.27	—	3	甕・壺	住居跡様、床に穴1
095	正方形	2.76	2.72	2.74	2.67	0.18	7.3	1	甕 石鏃・石包丁・スクレイパー	住居跡状、床に小穴7
096	長方形	1.60	1.19	1.51	1.03	0.39	1.6	—	甕・壺	貯蔵穴
097	円形	2.53	2.47	2.46	2.43	0.19			甕	小穴1
098	正方形	1.91	1.90	1.83	1.79	0.29	0.8	—	甕	貯蔵穴
101	台形に近い長方形	1.15	0.86	1.07	0.75			1		
102	(隅丸長方形)	1.53以上	0.80以上	1.21以上	—	0.44	—	—		貯蔵穴
103	(長方形)	1.43	—	1.32	—	0.21	—	—		貯蔵穴
105									甕 石斧	
106	長方形	1.44	1.22	1.40	1.12	0.56	1.6	—	器台	貯蔵穴
110	隅丸長方形	1.80	1.43	1.68	1.30	0.77	2.2	1	甕・壺	貯蔵穴
111	正方形に近い長方形	1.75	1.48	1.66	1.24	0.84	2.1	—	甕・壺 石包丁	貯蔵穴
112	正方形	3.65	3.65	3.52	3.46	0.64	12.2	2	鉢	住居跡様、床に小穴1
115	(長方形)	2.89	1.40以上	2.47	—	0.46	—	—		貯蔵穴、床に小穴1、SB114
116	長方形	2.26	1.69	1.98	1.41	0.67	2.8	—	甕	貯蔵穴
117	隅丸長方形	2.76	1.55	2.60	1.38	0.35	—	—	甕 石鏃	床に小穴6
118	不整形	3.73	2.63	3.68	2.53	0.29	—	5	甕 石斧	床に小穴1
119	不整形	2.21	1.62	2.09	1.17	0.72	—	—	甕	床に小穴2
120	(長方形)	1.03以上	1.00以上	—	—	0.31	—	—		貯蔵穴
121	長方形	2.19	1.58	2.08	1.49	0.23	—	—		床に壙、小穴2
122	長方形	1.43以上	1.25	—	—	0.78	—	—		貯蔵穴
123	(長方形)	—	(1.53)	—	—	0.66	—	—	甕 石鏃	貯蔵穴
124	長方形	1.67	0.91	1.63	0.84	0.30	0.5	—		貯蔵穴
125	長方形	2.45	1.54	2.20	1.28	0.56	2.8	—	甕	貯蔵穴
126	正方形に近い	1.86	1.67	1.35	1.25	0.49	1.7	—		貯蔵穴か
127	楕円形に近い	4.05	2.89	(3.30 2.94	0.75 0.62	0.64 0.83)	—	2		2つの土壙を並列
129	長方形	1.34	1.02	1.20	0.97	0.43	1.2	—		貯蔵穴
130	楕円形	1.30	0.72	1.18	0.62	0.19	—	—		
131	長方形	1.63	0.80	1.56	0.73	0.17	—	—		
132	長方形に近い	2.11	1.35	1.39	0.51	0.72	—	—		
133	円形	1.38	1.13	1.31	1.07	0.29	—	—		床に3穴
137	長方形	1.55	0.73	1.35	0.59	0.40	—	—		
140	楕円形	1.32	0.90	0.90	0.63	0.55	—	—		
141	長方形に近い	1.41	0.96	1.12	0.64	0.73	—	—		
143	不整形	1.63	1.50	1.54	1.42	0.58	—	1		
144	不整形	2.40	1.98	2.25	1.90	0.42	—	—		床に小穴1
145	長方形	2.50	1.17	2.23	0.90	0.72	2.0	1		貯蔵穴か、壁に小横穴
146	長方形に近い	1.88	0.82	1.17	0.66	0.61	—	—		
147	不整形	2.25	1.86	2.10	1.35	0.44	—	—		床は段差あり、小穴1
148	正方形に近い長方形	1.60	1.35	1.66	1.26	0.75	2.1	—	甕・壺	貯蔵穴、やや袋状

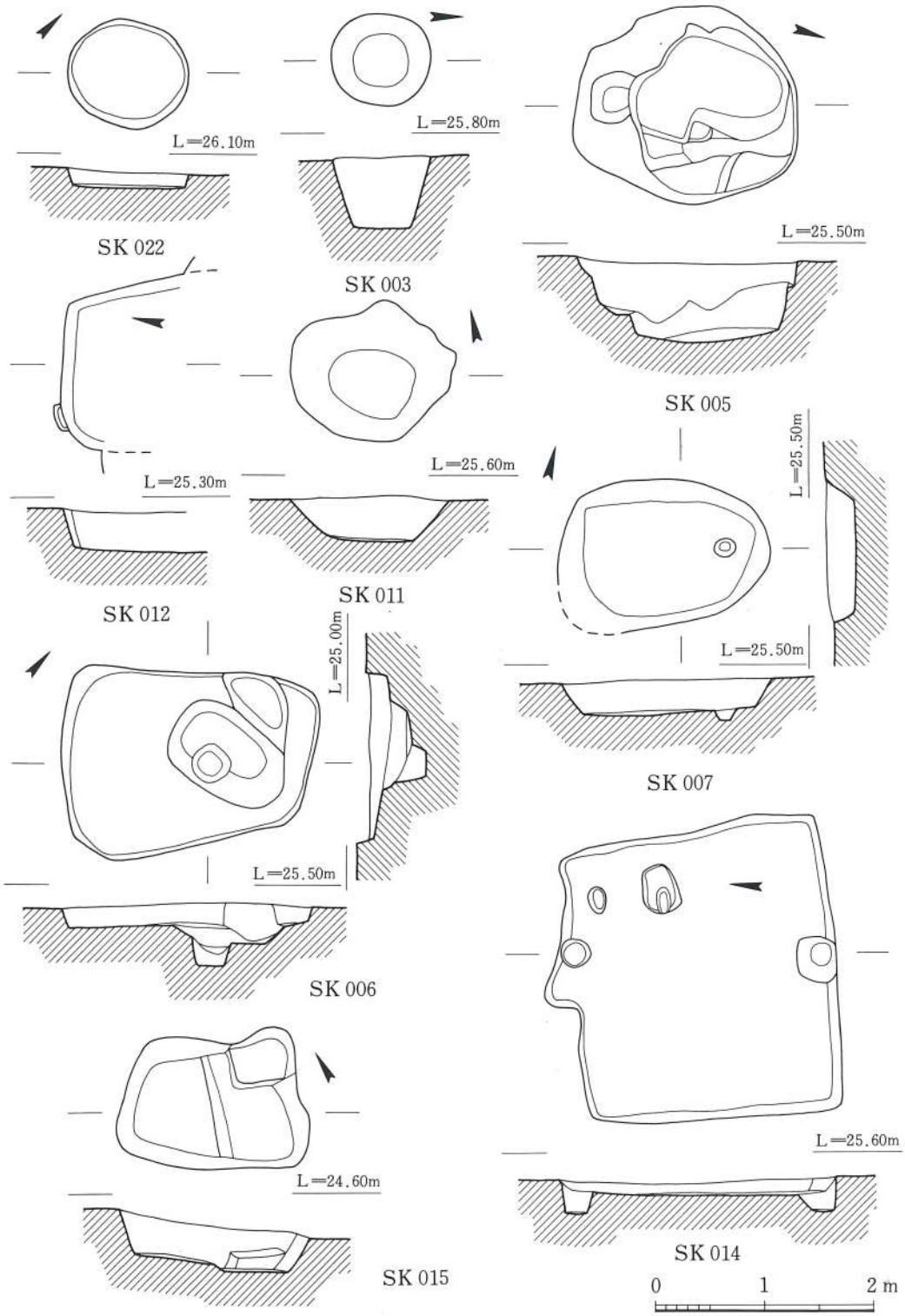


Fig. 37 貯蔵穴・実測図（1）

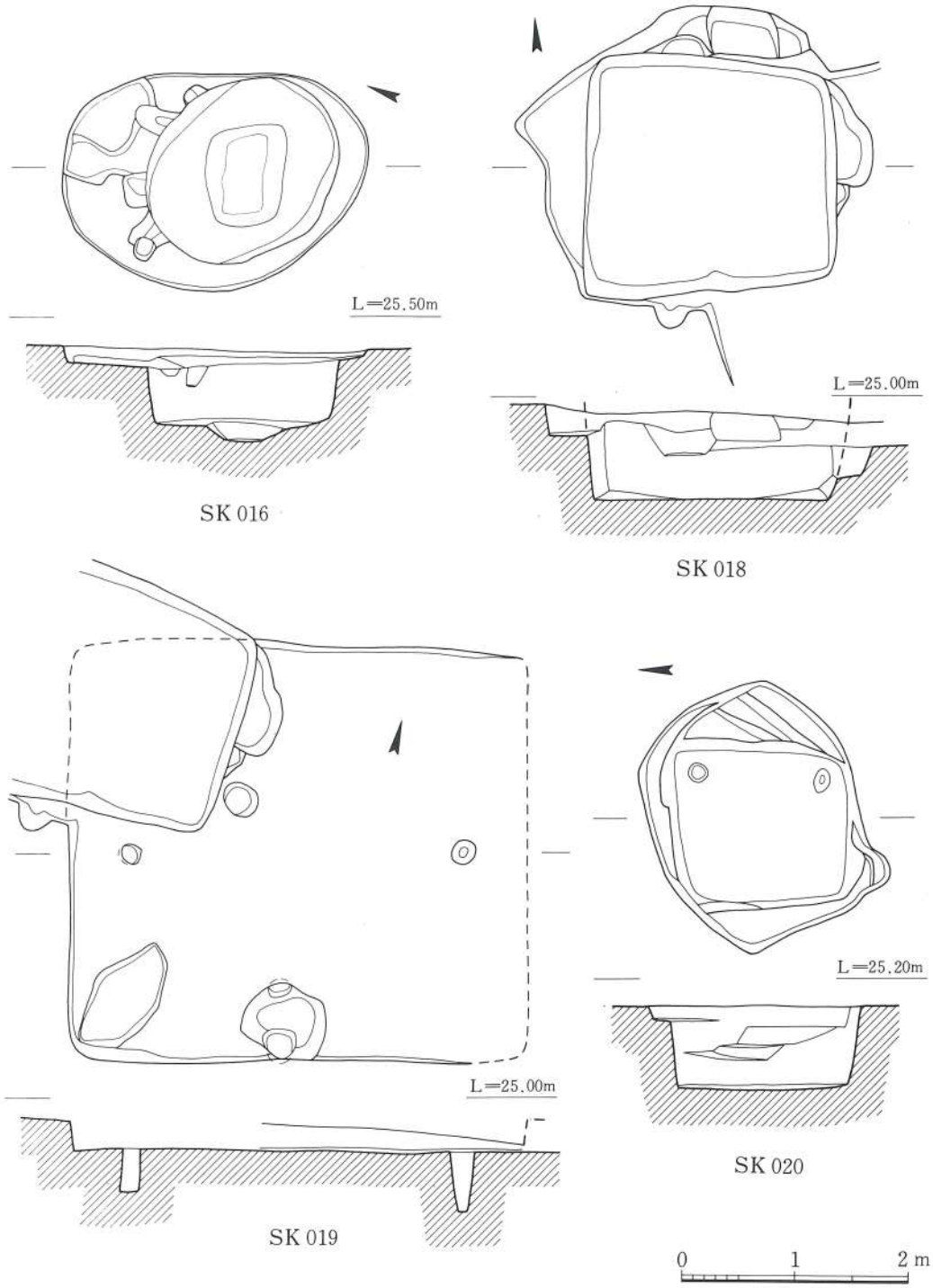


Fig. 38 貯蔵穴・土壙実測図（2）

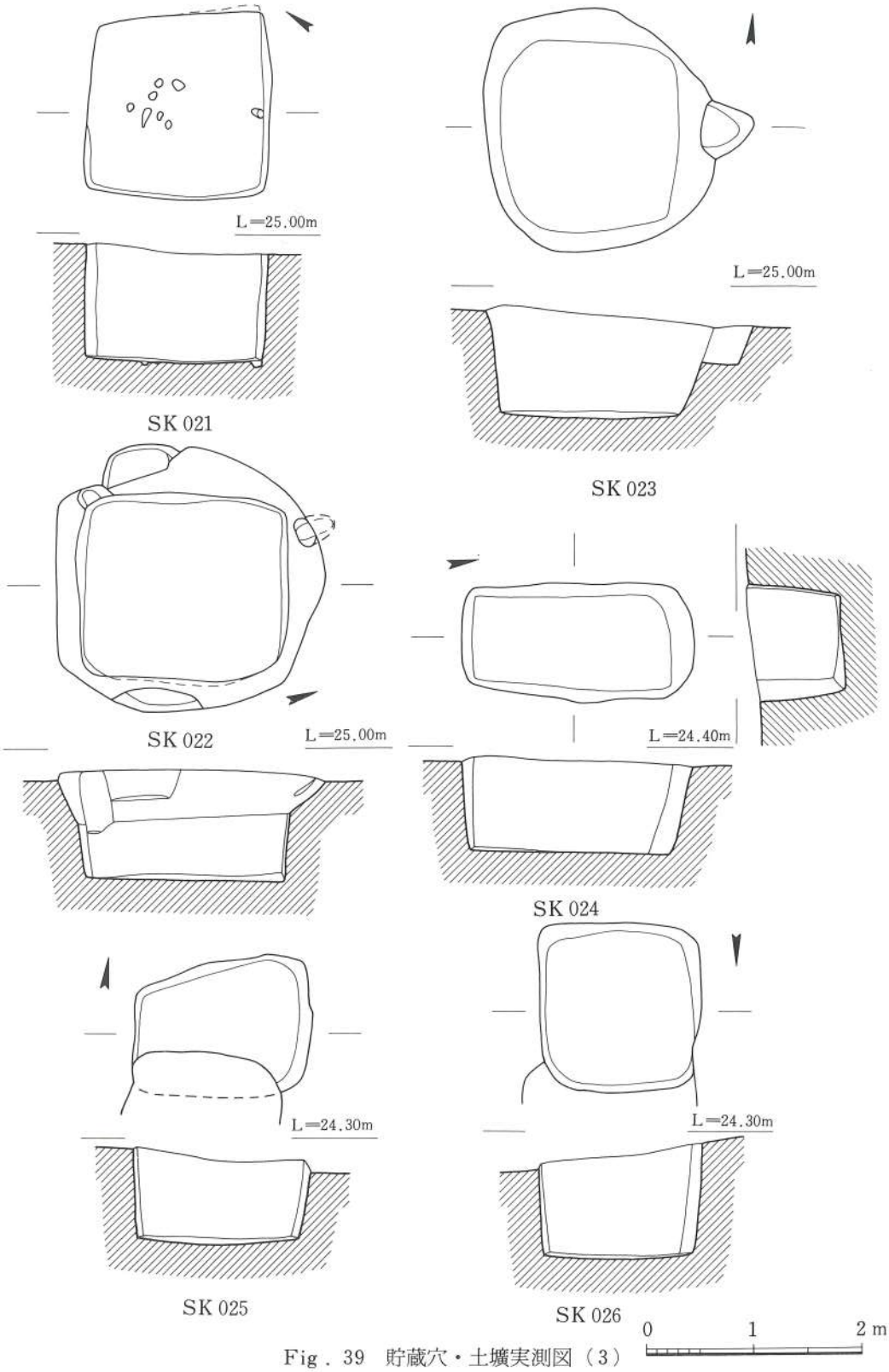


Fig. 39 貯蔵穴・土壙実測図（3）

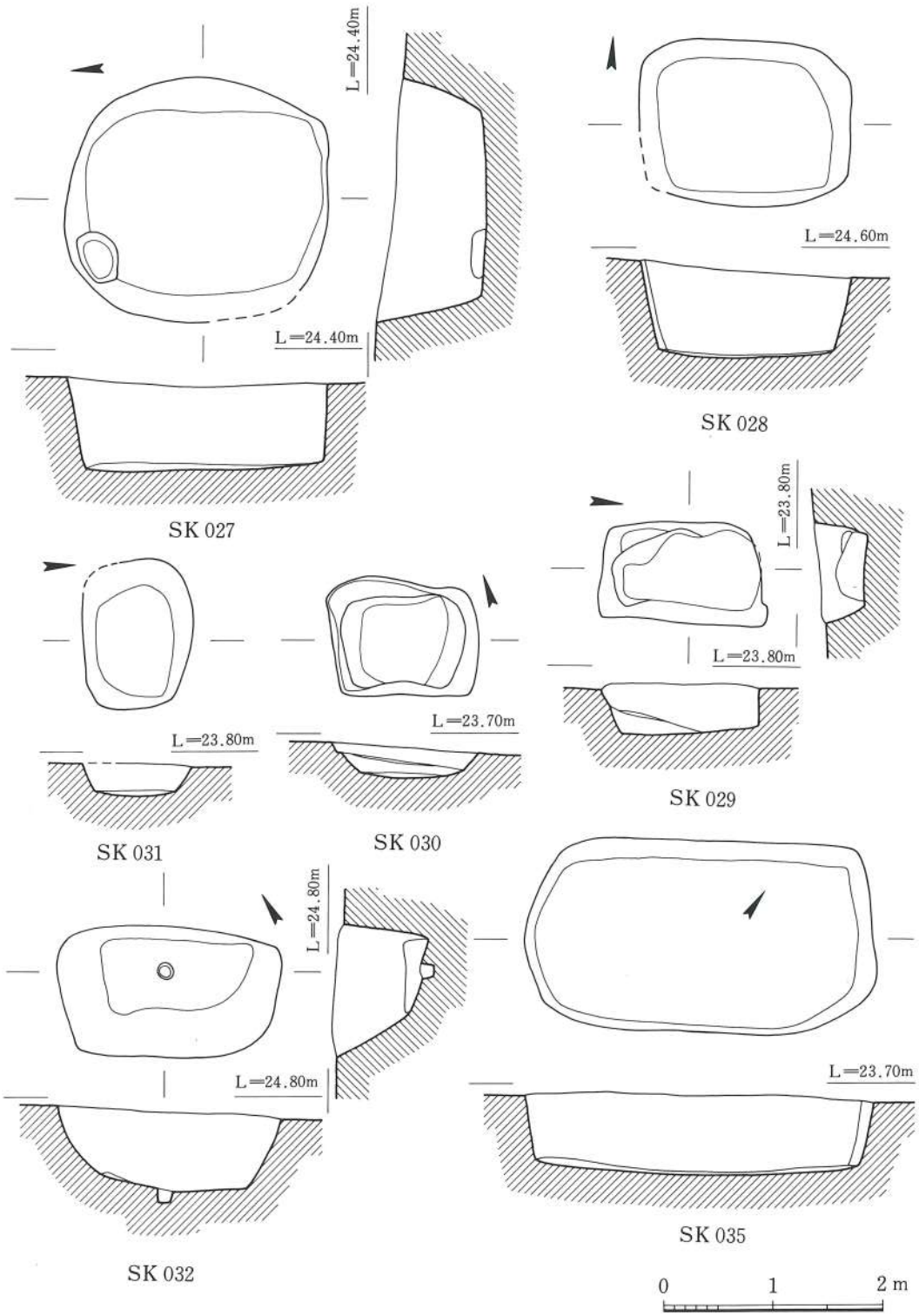


Fig. 40　貯蔵穴・土壙図（14）

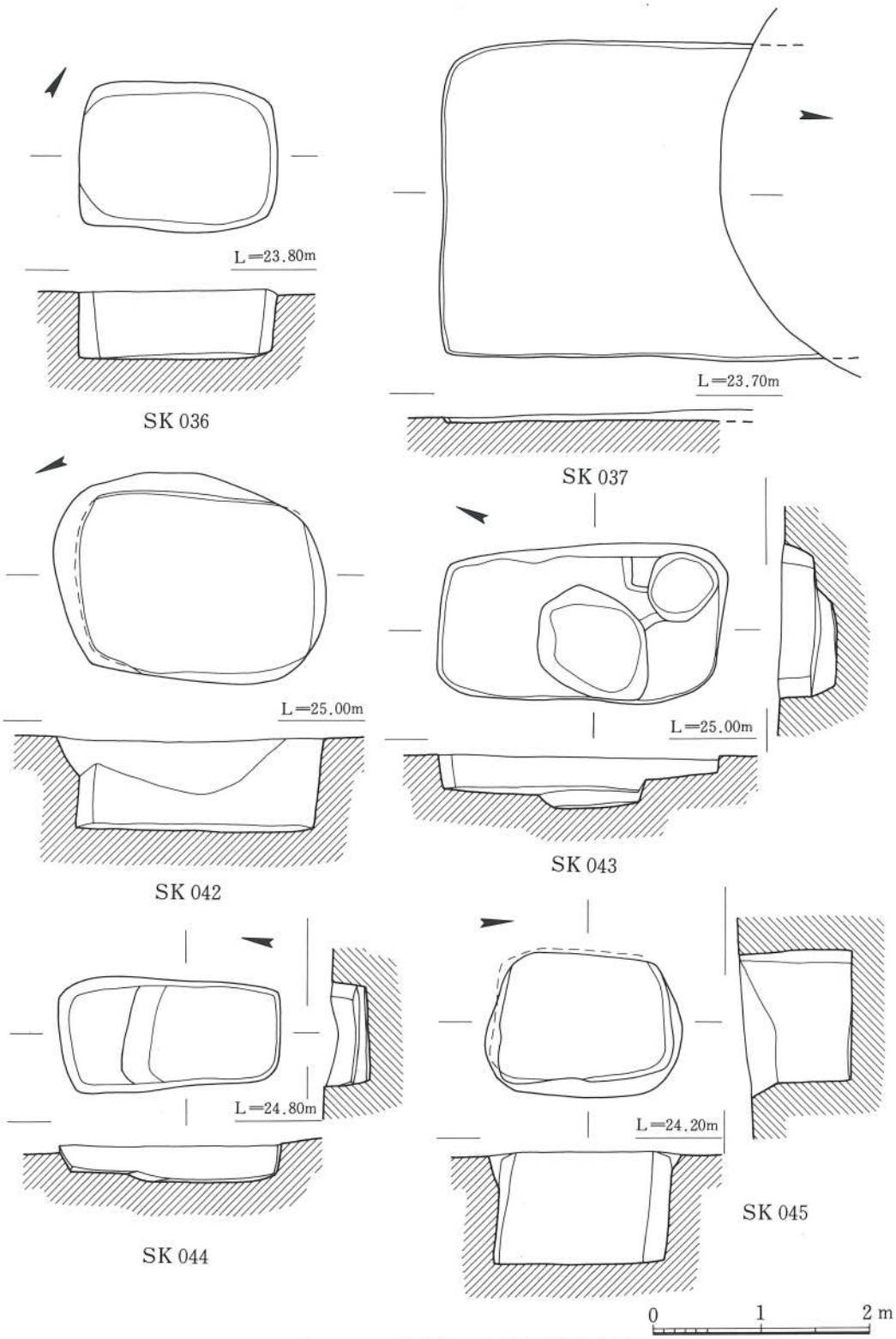


Fig. 41　貯蔵穴・土壙実測図（5）

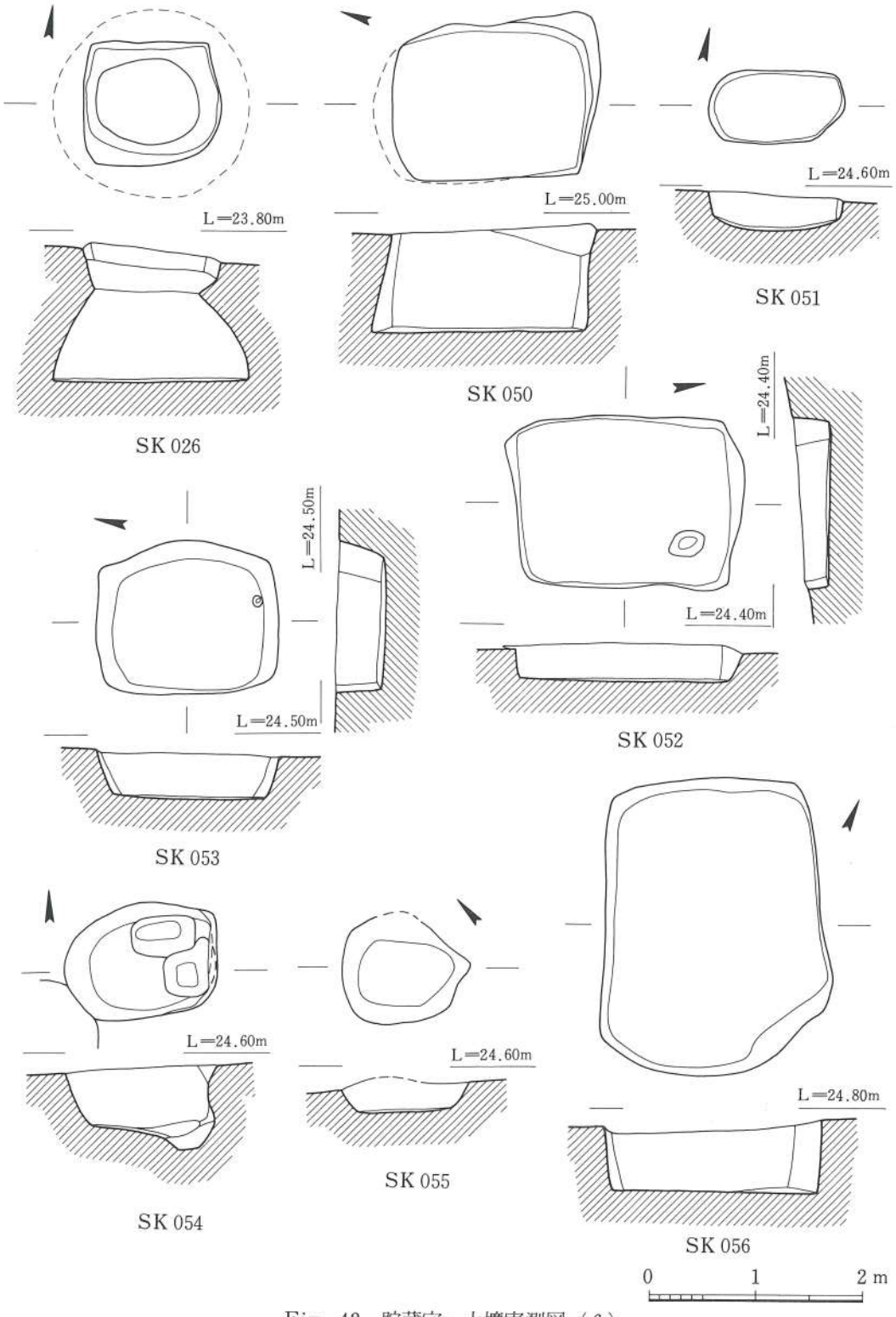


Fig. 42　貯蔵穴・土壙実測図（6）

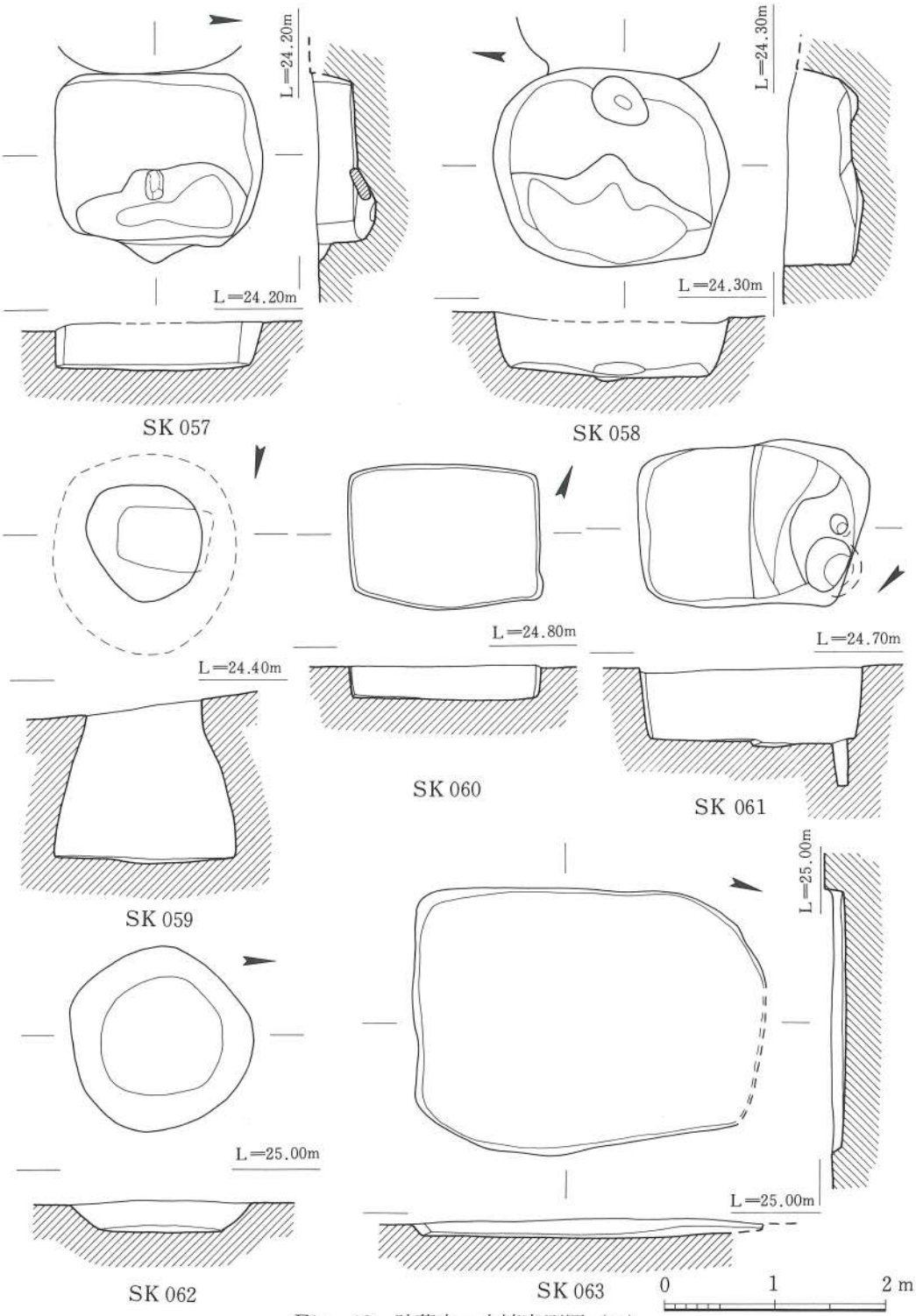


Fig. 43　貯蔵穴・土壙実測図（7）

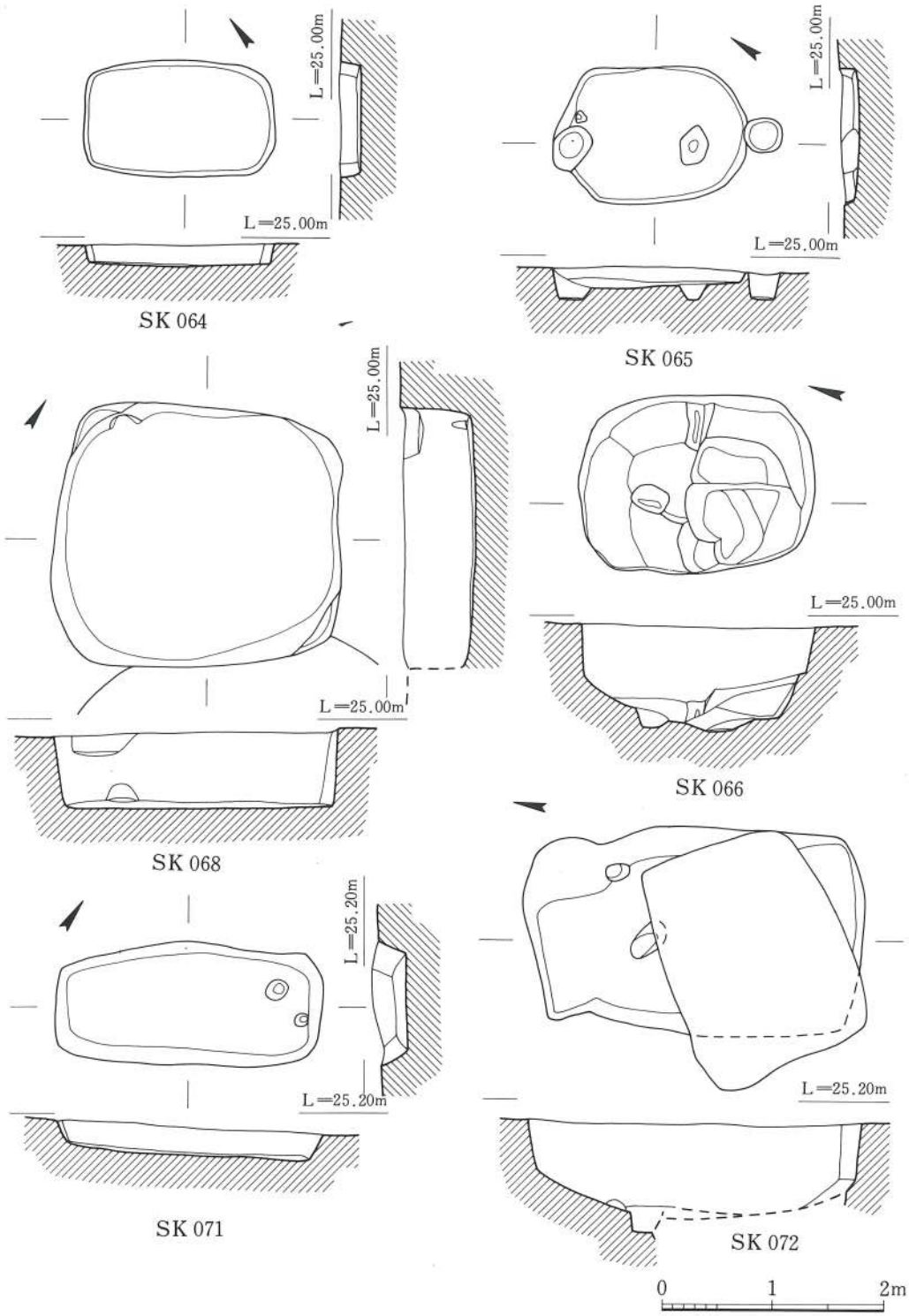


Fig 44　貯蔵穴・土壙実測図（8）

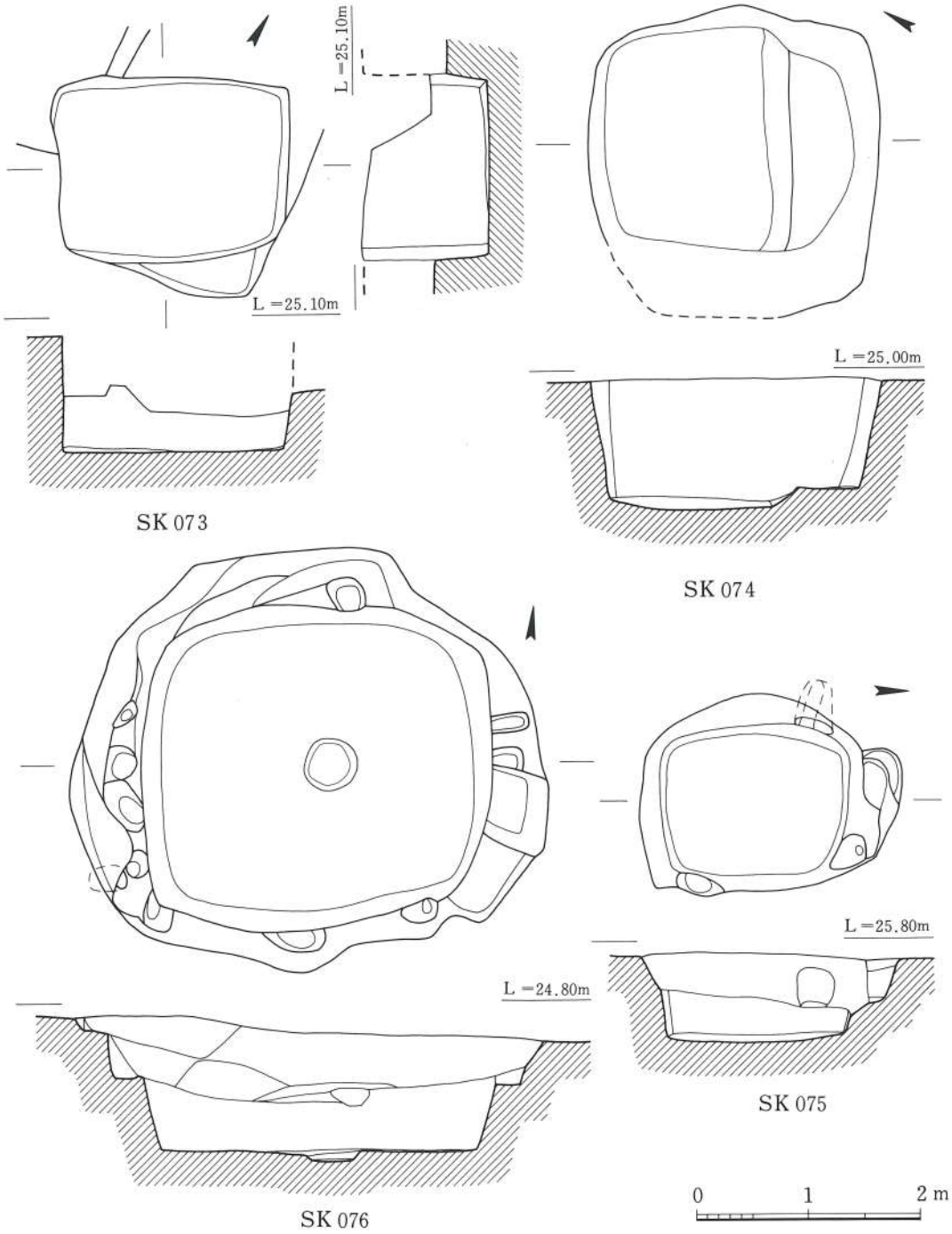


Fig. 45　貯蔵穴・土壙実測図（9）

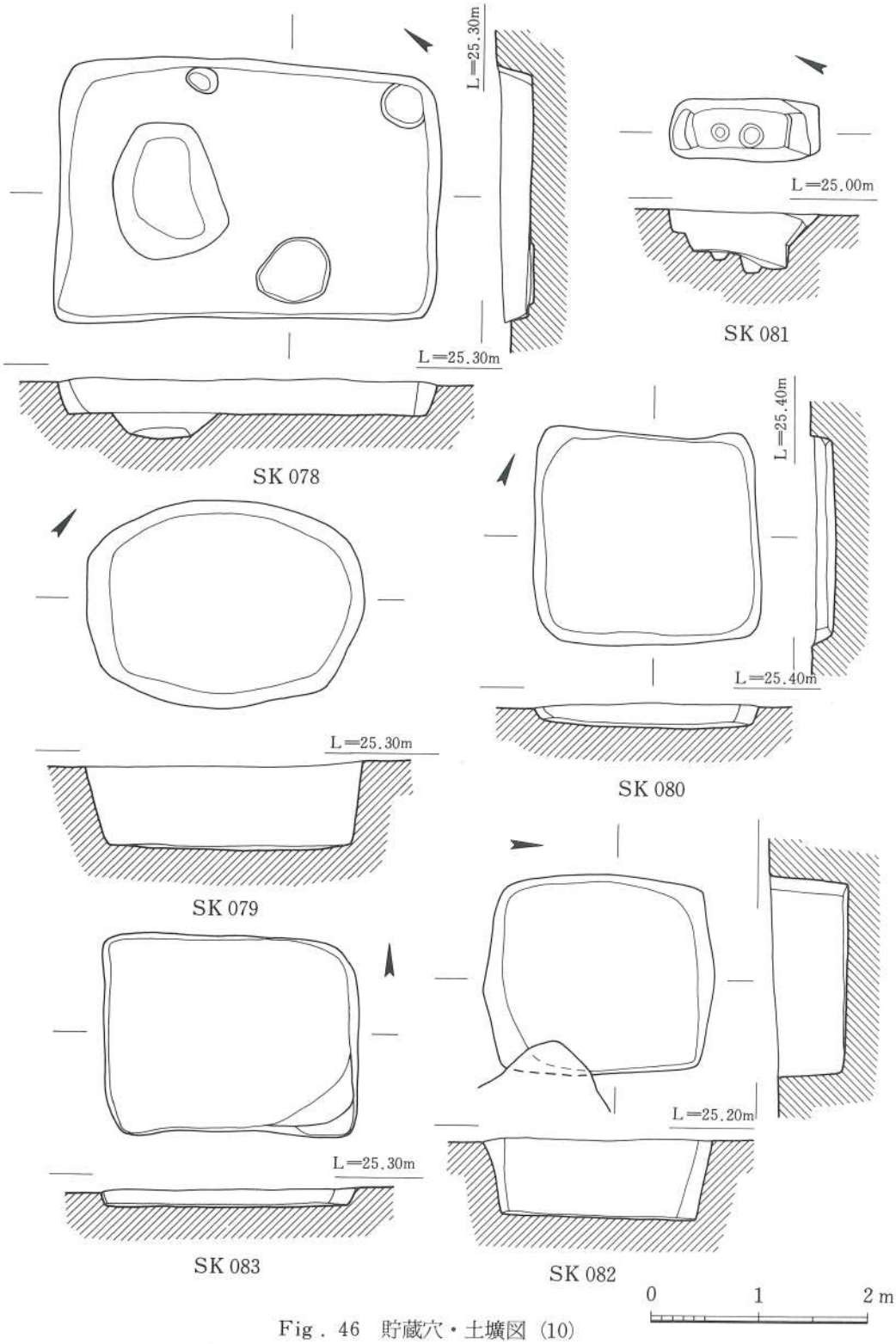


Fig. 46 貯蔵穴・土壙図 (10)

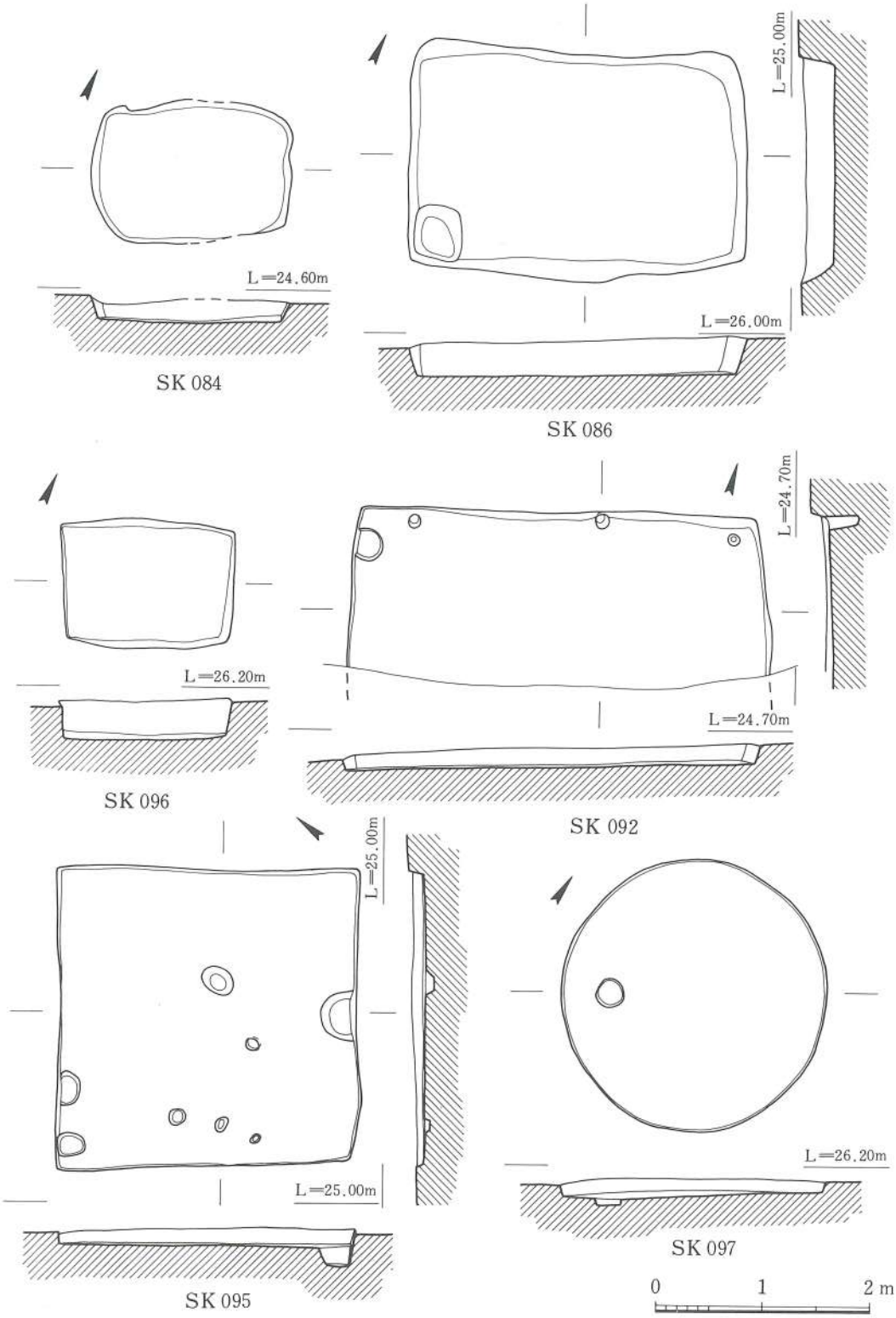


Fig. 47　貯蔵穴・土壙図（1）

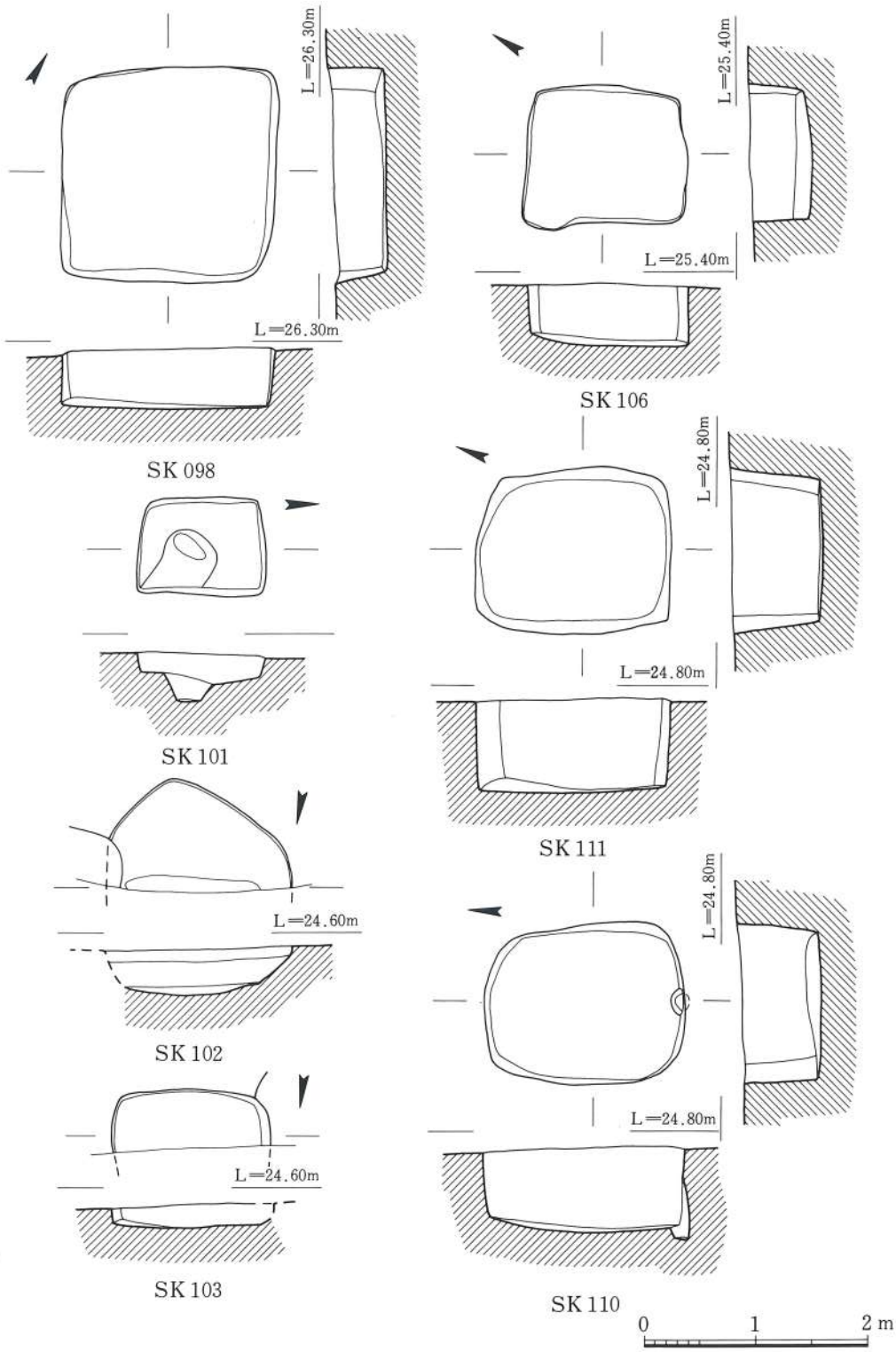


Fig. 48 貯蔵穴・土壙図 (12)

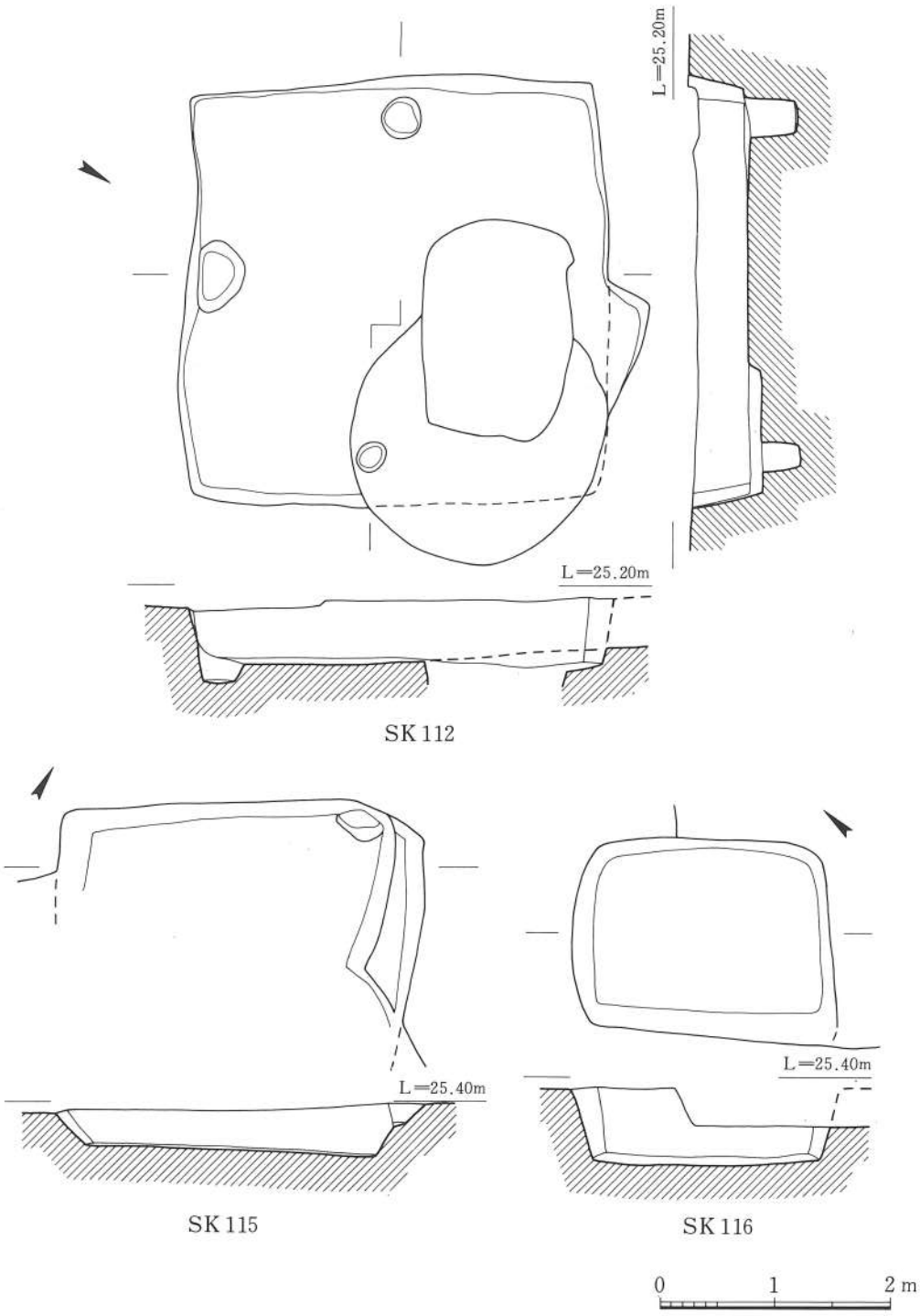


Fig. 49　貯蔵穴・土壙実測図 (13)

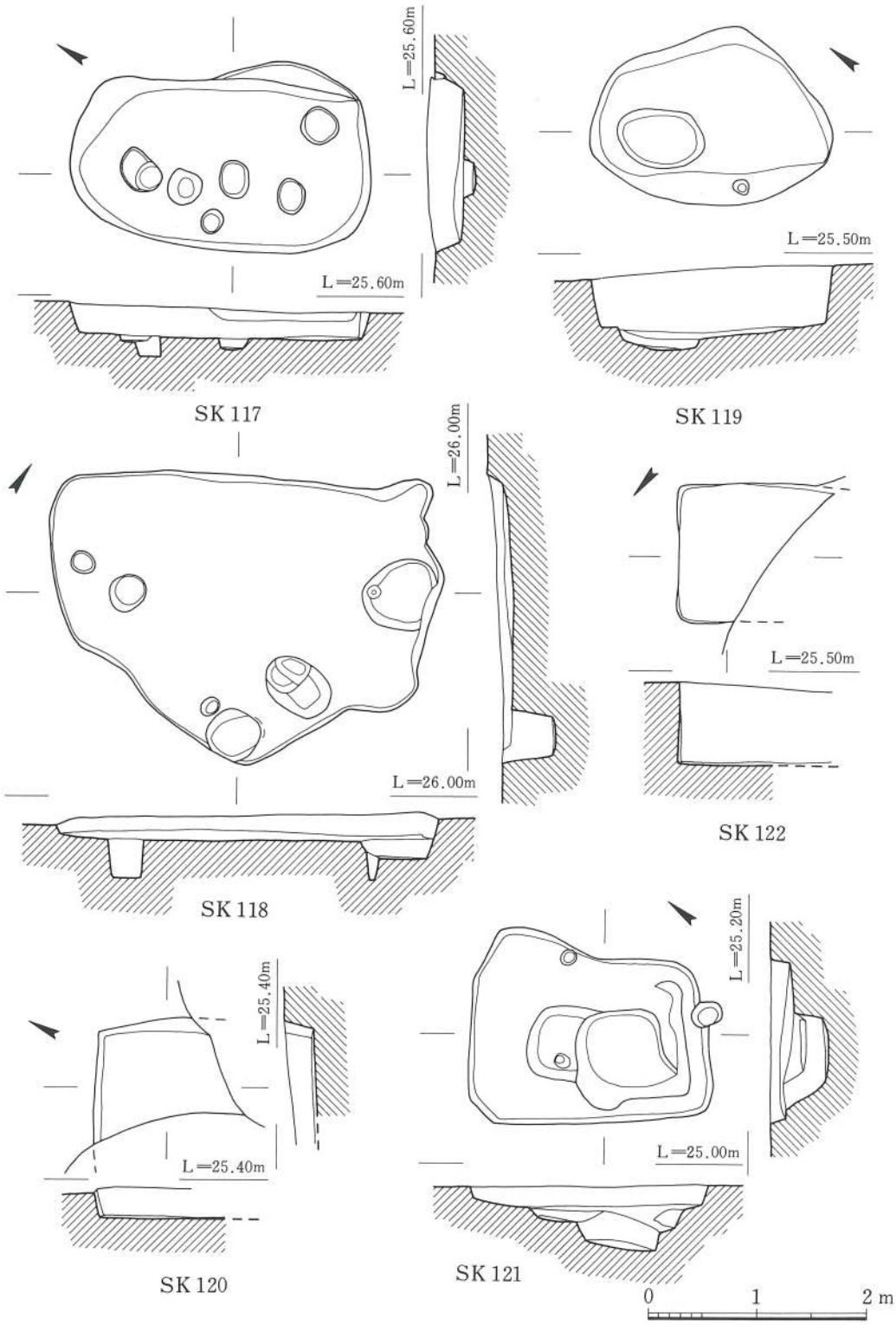


Fig 50　貯蔵穴・土壙実測図（14）

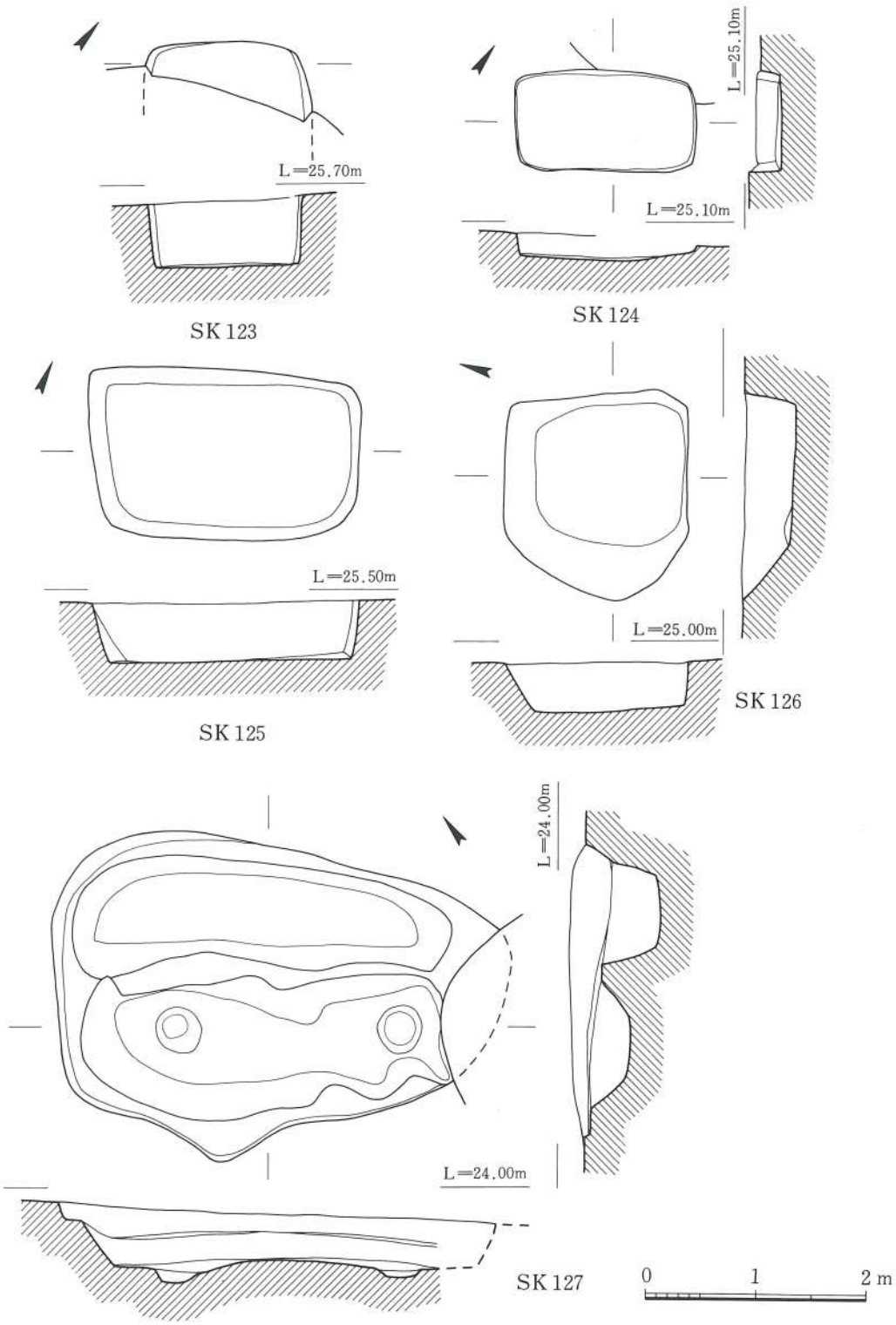


Fig. 51　貯蔵穴・土壙実測図

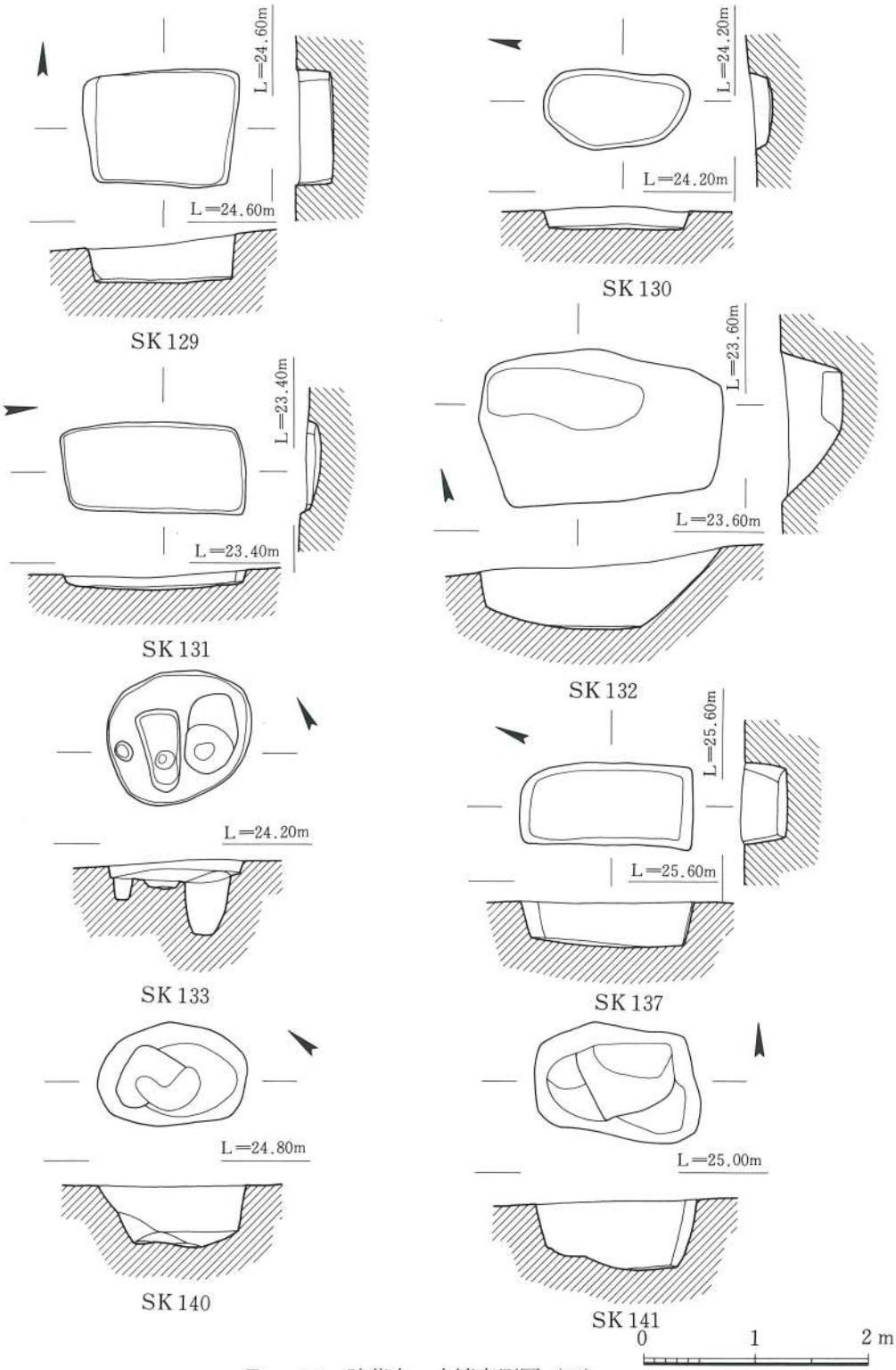


Fig. 52　貯蔵穴・土壙実測図（16）

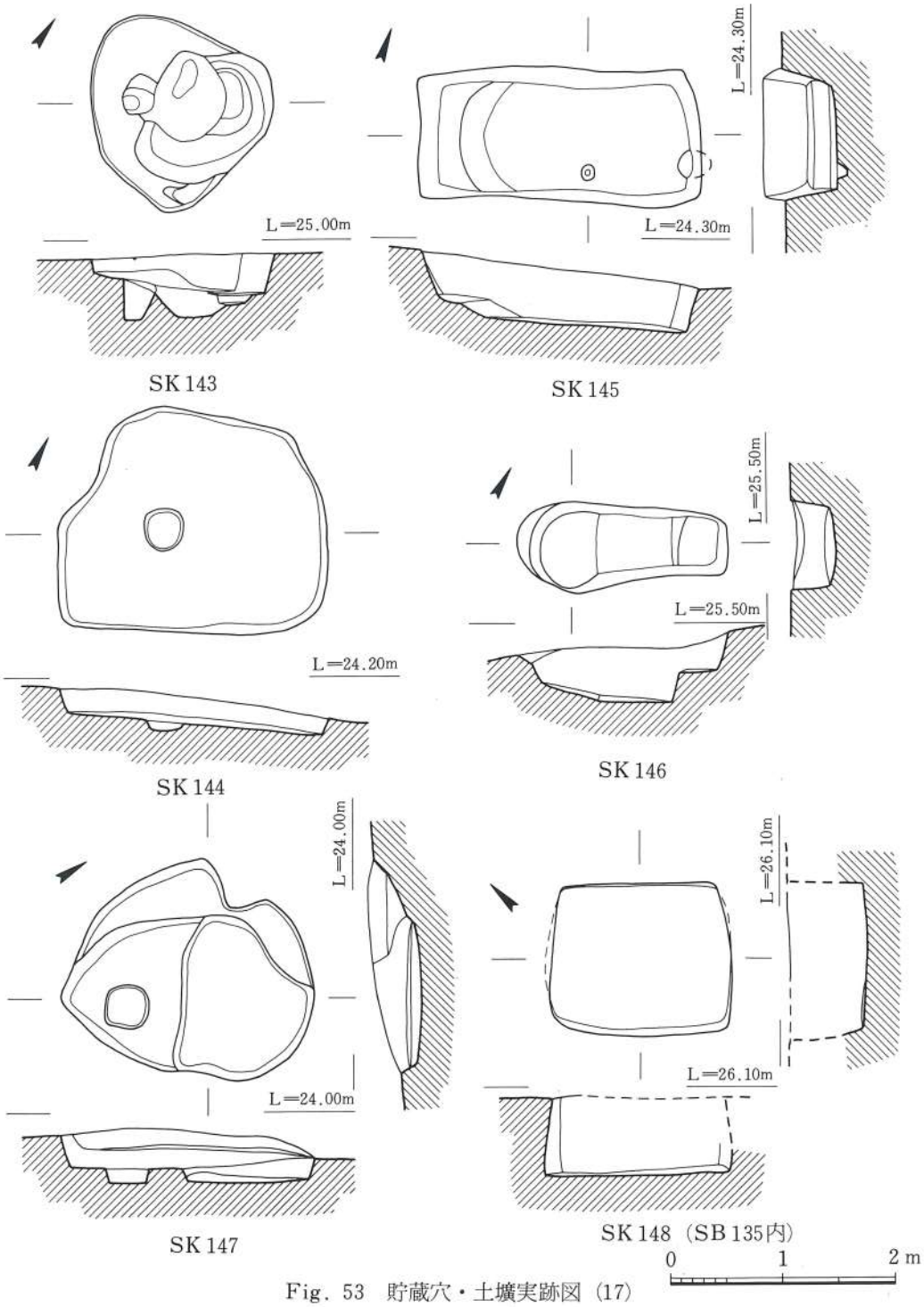


Fig. 53　貯蔵穴・土壙実跡図（17）

(4) 円形周溝墓

調査区南東部に孤立して存在する。内部主体として木棺をもつ外径約9.5mの円形周溝墓であるが、南東部周溝は削平されていた。

周溝は外周の径9.20～9.48mで、ほぼ正円に巡るが、南西部は0.72mの間掘削されず陸橋となっている。溝の断面は底面が平坦となるいわゆる梯形をなし、幅0.38～0.72mの規模である。深さは最も深いところで0.59mまで残存しており、溝底には数ヶ所深さ10cm程の穴状となっている部分もある。また陸橋部は主体部の主軸上に存在するが、主体部を挟んで反対側の周溝北東部には幅約1.2mの範囲で底面が約10cm高まっており、中央に径0.12m、深さ約10cmの小穴が存在する。また主体部主軸とほぼ直角北西部周溝も約1mの範囲で底面が10cm弱高まっているが、南東部は削平のため不明である。周溝内の土層は不明確であったが、ほぼレンズ状に3種類ぐらいの土が堆積していたことが窺われた。

主体部として長辺2.04m～1.94m、短辺1.14m～1.06mで、深さ22～24cm残存する壙が検出され、その主軸に沿って長さ1.80m、北西部での幅0.43m、南東部での幅0.36m、深さ1～2cmの棺の痕跡が認められた。おそらく木棺を納めたものであろう。また棺の中央下部には長径0.77m、短径0.24m、深さ10～12cmの長楕円形の穴が存在したが、主体部に伴うものかどうかは不明である。主体部の方位はN60°Eである。

遺物としては土師器の小壺と甕がそれぞれ1個分陸橋部すぐ北の周溝内から40cmの間隔をもって出土しただけであった。

主体部の構造から棺幅の大きい南西側を被葬者の頭位と考えると、頭位方向に陸橋を設け、すぐわきに土器を供献したことになる。また足元方向の周溝内の高まりや小穴も、主体部主軸線上にあり、この周溝墓の構造上の何らの痕跡であるかも知れない。

(5) 火葬墓

北部のＳＢ001住居跡の南方約8.5m、ＳＫ117土壙東そばで検出された。

蔵骨器を納めるための壙は長径0.44m、短径0.36mの円形に近い平面形をなし、深さは7cm残存していた。またこの壙の底面中央には径8.0cm、深さ2cmの円形の小穴を設けていた。

蔵骨器としては、この壙内小穴直上に土師器の皿を上向きに置き、蔵骨器本体となる口頸部を打ち欠いた須恵器壺を口が皿と合うように埋納され、壺の肩部から胴部にかけての周囲は3個の土師器杯で立てかけるように囲んでいた。

出土品としてはこれら蔵骨器に用いられた土師器皿1個、土師器杯1個、須恵器壺1個以外皆無で、壺内部からは木炭・焼土・灰に混った小人骨片が出土しただけであった。

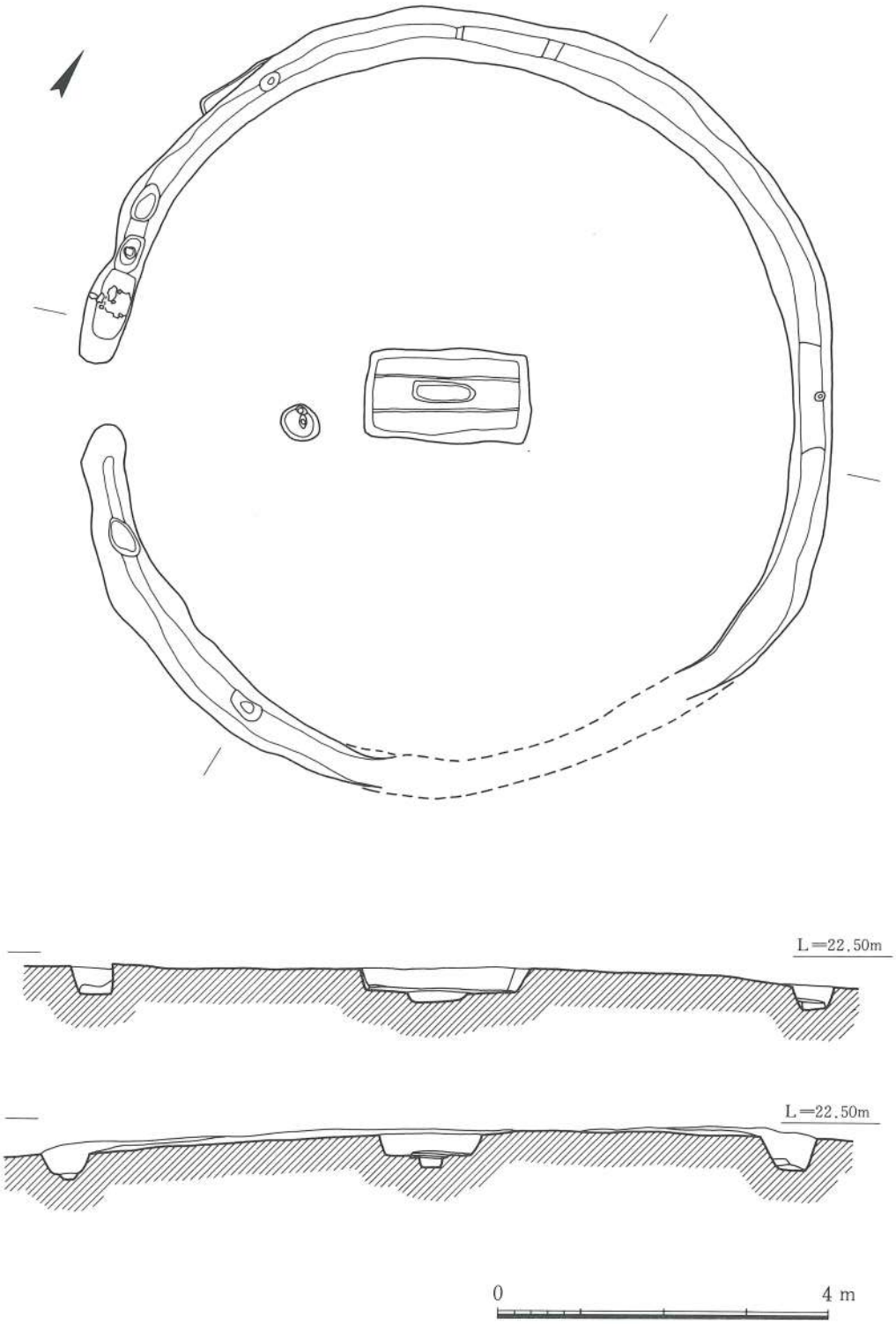


Fig. 54　円形周溝墓実測図

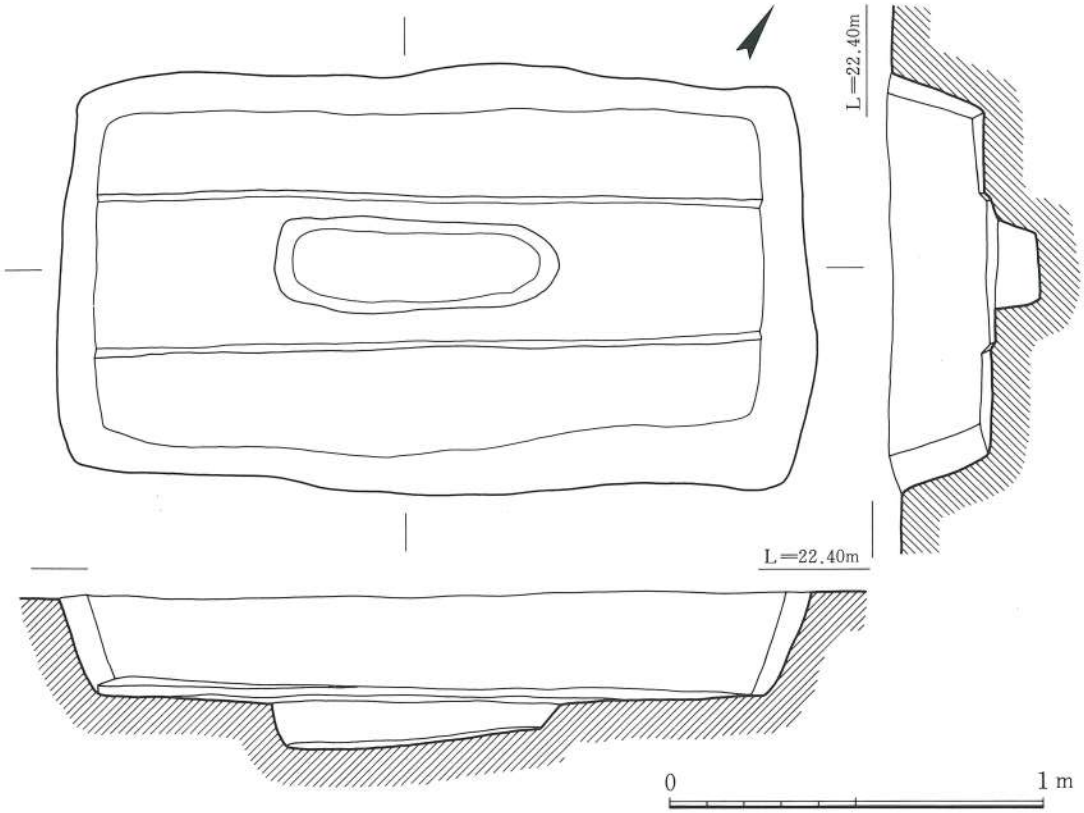


Fig. 55　円形周溝墓主体部実測図

(6)　その他の遺構

以上述べた竪穴住居跡、土壙、円形周溝墓、火葬墓以外の遺構として、柱穴らしい小穴群や戦時中の壕跡が存在した。

柱穴群は北部のＳＢ001住居跡とＳＢ013・ＳＢ103住居跡に囲まれた地域一帯、中部のＳＫ063土壙周辺および南部の平面長方形住居跡に囲まれた地域一帯に特に集中する。これらの中には柵状になるものも一部存在するが、建物跡と考えられるものは南部のＳＢ044住居跡とＳＢ047住居跡の間に存在する１間×２（または３）間の掘立柱建物らしい遺構だけである。柱穴状の小穴内からは弥生土器片のうち平面円形住居跡と同時期のもの以外は出土しない。

戦時中の壕と考えられるものは３ヶ所検出した。ＳＫ136・ＳＫ150・ＳＫ151土壙である。このうちＳＫ136・ＳＫ150土壙は形態が同じで、径約1.0ｍ、深さ約1.0ｍの壙で、内部は床面から上へ約35㎝半円部分を掘り残し、丁度座席状にしている。ＳＫ150土壙からは機銃の鉄製弾倉や真鍮製薬莢が多数出土し、この壕を機銃座として利用したことが窺えた。またＳＫ151土壙は径約2.2ｍ、深さ0.60ｍの平面円形の壙で、中央部径1.30ｍを床面から上位約10㎝掘り

残しているもので、壙周囲は円形に巡る幅約40cmの溝状になっている。この溝の底部にはルーフィング材が一部敷きつめられ、鉄製のネジ、ガラス製一升瓶片等が出土した。

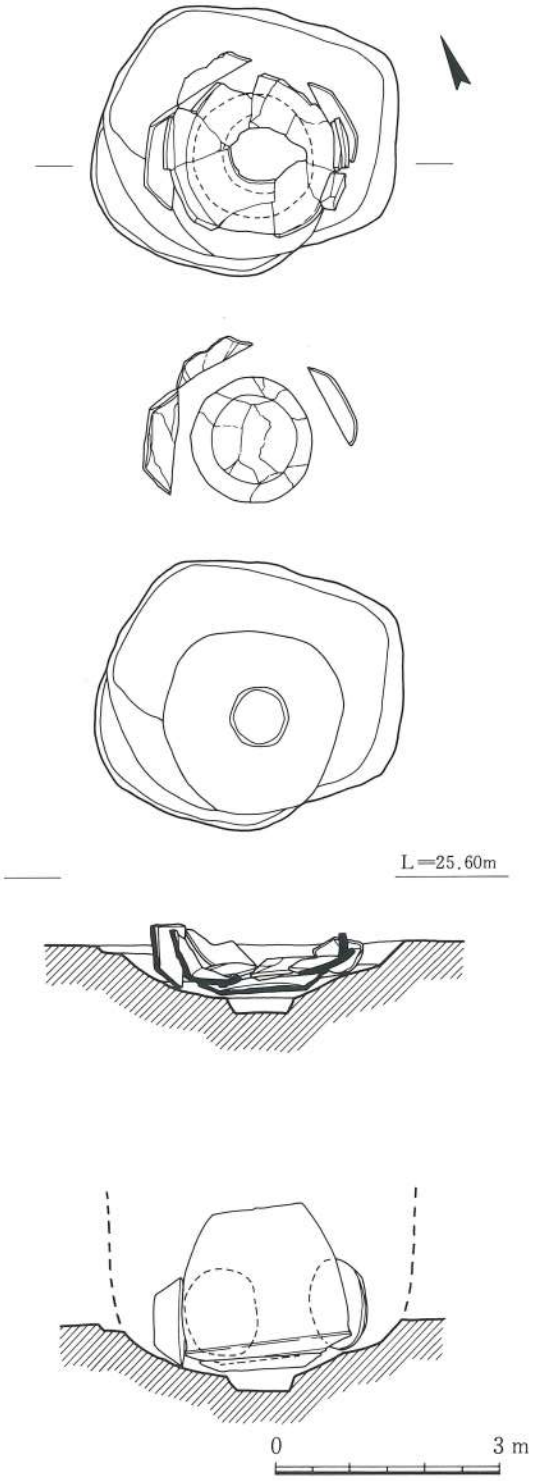


Fig. 56　火葬墓実測図及び復元図（下）

2．遺　物

一本谷遺跡から出土した遺物には土器、土製品、石器、石製品、鉄器などがある。これらの遺物は時期的には弥生時代、古墳時代前期、平安時代前期の3群に大きく分れる。以下3時期に分けて概観したい。

(1) 弥生時代の遺物

一本谷遺跡出土の遺物の中で最も量が多い。ほとんどが竪穴住居跡や貯蔵穴、土壙から出土したものである。平面円形の竪穴住居跡ではＳＢ069・ＳＢ091住居跡、平面長方形の竪穴住居跡ではＳＢ034・ＳＢ039・ＳＢ047・ＳＢ049住居跡などからまとまりのある一括遺物を出土したが、特にＳＢ039住居跡の一括遺物はすべてが床面で3群に分れて検出された。他の住居跡では土器の小破片を数個から十数個出土する程度であった。貯蔵穴や土壙から出土した遺物は小破片の土器が多いが、ＳＫ012・ＳＫ030・ＳＫ072貯蔵穴やＳＫ086土壙からは土器を一括して出土した。

土器以外の弥生時代の遺物としては、石器・石製品（勾玉も含む)。土製品・鉄器がある。これらも竪穴住居跡から主に出土したものだが、特に石鏃の出土数が多く、ＳＢ090・ＳＢ135住居跡では10個以上を出土している。

土器・土製品

土器には甕・壺・鉢・高杯・蓋・器台があり・土製品としては支脚・土弾・紡錘車がある。土器は形態の相違により大きく次のように分類される。

甕……Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐ
壺……Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐ・Ｑ
鉢……Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ
高杯……Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
蓋……Ａ
器台…Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ

これらは細部の形態上の特徴や法量の相違によりさらにいくつかに細分されるものが多い。

甕Ａ　いちじく形の器体にゆるやかに外反するいわゆる如意形口縁がつく口径16.5～25㎝の甕である。出土量は少ないが、これらは口縁部に刻目がつかない甕Ａａ（109・172・

387)、刻目がつく甕Ａｂ（124・494)、口縁下に沈線を１条線を１条めぐらせ甕Ａｃ（131・510）に細分される。

甕Ｂ　甕Ａと同形態の器形に如意形口縁の下位に断面三角形突帯を１条めぐらすもので、出土量が少ない。口縁部と突帯に刻目がつかない甕Ｂａ（439・449・472）と刻目がつく甕Ｂｂ（173）に細分される。Ｂａ類は口径が25cm前後の甕ＢａⅡ（449・472）と40cmを越える甕ＢａⅠ（439）がある。甕Ｂｂは27cm前後で、器高は推定で32cm前後である。

甕Ｃ　いちじく形の器形に断面逆Ｌ字形の短かい口縁がつく甕で、口径18cm前後と小形である。出土数が極めて少ない。

甕Ｄ　いちじく形の器体の上端に断面三角形の突帯をめぐらすもので、口径18～24cmの甕である。口縁外周に刻目がつかない甕ＤａⅠ（432）と刻目がつく甕Ｄｂ（124・154）に細分される甕Ｄｂには口外経24.0cm器高27.0cmのものがある。出土量は少ない。甕Ｄａには口径11.8cm、器高12.5cmの小形の手堤土器（甕ＤａⅡ、414）もある。

甕Ｅ　出土した甕の大半を占めるもので、甕Ｄと同器形で、口縁部下位に断面三角形突帯を１条めぐらすものであり、口縁、突帯外周に刻目がつかない甕Ｅａ（393・409・515)、双方に刻目がつく甕Ｅｂ（177・474)、突帯のみに刻目がつく甕Ｅｃ（176・343）に細分できる。量的には甕Ｅａが甕Ｅｂよりやや多く甕Ｅｃは確実なもので１個体のみであった。法量的には口径18～25cm前後の甕ＥａⅢ（177・388)、30cm前後の甕Ｅａ（337）・甕ＥｂⅡ（474）に２分され、さらに甕Ｅａには口外径40.2cm、器高43.1cmの大形品（甕ＥａⅠ、515）もあった。甕Ｅｃは口径26cm内外であった。

甕Ｆ（419）おそらくいちじく形の器体の上端が直立するもので、特別な口縁部を造らないものである。口径14.8cm、推定高15cm前後の小形品で、極めて稀なものである。

甕Ｇ　いちじく形の器体に断面Ｔ字形の平坦口縁がつくもので、口径25～30cm前後の甕である。口縁部下位に断面三角形突帯を１条めぐらす甕Ｇｂ（478）と突帯をもたない甕Ｇａ（476・477）に細分されるが、いずれも出土量が極めて少ない。

甕Ｈ　壺形土器からの発展形態と考えられる口縁部が大きく外反する大形の甕で、口径は50cm前後と大きい。口縁部の内側に補強用の隆帯をもつ甕Ｈｂ（423・471）ともたない甕Ｈａ（252）に分れる。両者とも出土数は少ない。

甕Ｉ（482）　１個体出土した。丸くふくらむいわゆる截頭卵形の器体に、内側への張り出しの強い断面Ｔ字形口縁部をもち胴部には断面Ｍ字形の突帯を１条をめぐらす大甕である。

これらの甕は破片が多く、全体を復元しうるものは極めて少なく、口縁部から底部まで復元できるものはわずか５個体しかない。底部の形態は、底部がすぼまるものと裾広がりのものに大別できるが、前者は完全な平底のものとわずかに上げ底のものに

分けられ、後者も平底のものと上げ底のものに分けられる。完全に復元できる5個体についてみると、甕DaⅡには裾広がりの上げ底の底部がつき、甕Dbには裾広がりの平底の底部がつくものが各1個体あった。甕Eaは3個体あり、甕EaⅠには裾が広がらない平底の底部がつくものが1個体あり、甕EaⅢには裾広がりの上底の底部と裾が広がらない平底の底部がつくものがそれぞれ1個体あった。

甕Aから甕Ⅰのほとんどが外面ハケメ調整、内面ナデやナデツケ、口縁部・突帯周辺ヨコナデ調整であり、外面に煤が付着するものも存在する。

甕J（38）　砲弾形の器体に丸味をもって外に開く短かい断面くの字形口縁部がつくものである。底部は平底で内外面ともハケ目調整で、口径13.6cm、器高12.4cmである。

甕K（57）　截頭卵形の器体に稜がつかない断面くの字の形口縁がつく。外面ハケメ、内面は上位がハケ目、下位がナデ調整。口径12.8cm。

甕L　截頭卵形の器体の断面くの字形口縁がつくもので、口縁部が短く体部と口縁部の屈曲部内外に稜がつき口縁部が丸く口縁端部を面取りする甕La（39）、口縁端部が丸く口縁端部も丸い甕Lb（61）に細分される。甕Laは体部外面ハケメ、内面ナデ、口縁部内面ハケメ調整である。口径13.4cm。

甕M　体部上位に胴部最大径をもつ長胴の截頭卵形の器体に端部を面取りした断面くの字形口縁がつくもので、体部と口縁部の屈曲部は内面に稜がつくが外面は丸味をもつ。底部は丸底気味の不安定な平底である。外面ハケメ、内面ナデ調整であるが、体部内面上端にはハケメが残る。口径24.9cm、器高44.9cmと大形の甕MⅠ（63）と口径17.0cmの小形の甕MⅡ（40）とに分れる。

甕N　器高に対して口径が大きく、底径も大きい類のもので屈曲の小さく端部が丸い断面くの字形口縁がつく。内外面ハケメ調整。平底の甕Na（59）と高台状の脚がつく甕Nb（60）に分れる。59は口径19.4cm、器高18.9cm、60は口径20.1cm、脚部を除く器高は17.9cmである。

甕O（88）　端部が面取りされた断面くの字形口縁をもつもので、屈曲部内面は断面三角形に突出し稜をつくり、外面は口縁部直下に断面三角形突帯を1条めぐらす。口縁外面下位にハケメが残るが、器体は内外面ハケメ調整と推定される。口径35.2cmと大形の甕で、埋葬用に用いられたものにこの類の大甕がある。

他に手捏により成形された甕形のミニチュアがある（**甕P**…37）。底部は丸底気味の平底で、内面ナデ、外面はヘラ状のものでタテ方向に削っている。残存高6.5cm。

壺A（130・375）　いわゆるたまねぎ形に近いわずかに肩の張った丸い体部に断面逆L字形の口縁部がつく壺で、口縁部、頸部が比較的明瞭に区別できるものである。完全に復

元できるものが1個体あり（375）、口外径18.5cm、器高31.1cmで、底部は厚い平底がつく。外面はハケ目を施し、赤色顔料を塗布した可能性がある。

壺B　丸い体部に大きく外反する口縁部がつくもので、素文の壺Ba（20・31・441）、肩部と頸部の境付近に2本の沈線をめぐらす壺Bb（267・468）、小さな断面の三角形突帯をめぐらす壺Bc（272・516・416）、三角形突帯とその下位に羽状文のつく壺Bd（156）に細分できる。これら壺Bは法量により大きく2分される。すなわち口径25cm前後～30cmに近く、器高が30cm以上のⅠ類と口径10cm前後、器高20cm未満のⅡ類であり、Ba・Bb・Bc類ともにⅠ・Ⅱ類に分類でき、Bd類は破片であるが全体が小さくⅡ類に入るものと思われる。B類は外面にミガキを施したものが多い。

壺C（129）1個体ある。長胴の壺で体部上半は壺Bbと同じく、口縁部を欠損するがおそらく大きく外反する口縁がつくと考えられ、その下位に2条の沈線がめぐる。しかし体部下位はすぼまらず、丸味をもちながら平底の底部に至る壺である。頸部径13.4cm、復元器高約26cmで、外面は摩耗のためナデかミガキが調整痕が不明瞭である。

壺D（26・218）　小破片が出土したにすぎない。おそらく丸味をもつ体部に直立あるいは内傾する短かい口縁部がつくいわゆる短頸壺の一種である。口径は12.2と16.0cm。この破片とともに、低い断面三角形突帯を2条めぐらす胴部片が出土しており、あるいは同一個体かも知れない。

壺E（470）　1個体出土した。最大径を上位にもつ丸味のある体部の内傾する上端外側に断面三角形突帯をつけた短頸壺で、口縁部には紐通しのための穿孔が4ヶ所ある。口外径13.0cm、復元器高20.4cm、外面はナデ調整を施す。

壺F（483）　1個体出土した。上位に最大径をもつ器体に大きく外反する口頸部がつく、いわゆる広口壺である。口径25.2cm、復元器高は26.7cmで、器面は荒れて調整不明瞭であるが、おそらく丁寧に外面をナデたつくりの良い壺かと思われる。

壺G（128）　ミニチュア土器である。口縁部を欠くが、器体上位が内傾して口縁部がつくもので、壺の類に入るだろう。ミニチュアにもかかわらず、外面は細かいハケ目調整を施す。胴径6.6cm、復元器高約7.5cmである。

壺H（41）　球形に近い体部に丸味をもって屈曲するくの字形の比較的短かい口縁がつくもので、端部は丸い。内面ナデ（外面は不明）調整である。口径9.6cm。

壺I（42）　球形に近い体部に稜をもって屈曲する断面逆L字形の極めて短かい口縁がつくもので、端部は面取りされる。外面ハケメ、内面ナデ調整。口径10.6cm。

壺J（52）　口縁部を欠く。算盤玉形に近い低い体部に内傾する頸部がつく小形の壺である。底部は尖り気味の丸味である。内面はナデ調整であるが部分的ハケメが残り、外面は赤色顔料を塗り磨研している。胴径13.2cm。

壺K（53・54・56）　球形の器体にあまり開かない直立気味の口縁部がつくもので、底部は丸底である。大形の壺KI（56）と小形の壺KⅡ（53・54）に分れる。壺KIは外面ヘラミガキ、内面ハケメのあと部分的にヘラをあてている。胴径19.1cm、器高は推定20cm弱と考えられる。壺KⅡは口縁部内面ヨコ方向ハケメ、体部内面上位はナデ、下位はヘラケズリ調整で、外面は赤色顔料を塗り磨研している。完形のもので口径9.4cm、器高13.0cm。

壺L（55）　体部上位があまり内傾しない広口の壺で、直立気味に開く口縁部がつく。底部は丸底気味の平底である。外面は上半がハケメ、下位はヘラケズリ、内両は上半がヨコ方向のハケメ、下位はナデ調整である。口径14.6cm、器高13.6cm。

壺M　胴径の大きい壺で、口頸部を欠くが、おそらくいわゆる袋状口縁がつくものと思われる。肩部に2条の断面三角形突帯を2条めぐらす壺Ma（43）と胴部に断面コの字突帯を1条めぐらす壺Mb（44）がある。前者は外面ハケメの後ナデ、内面ハケメ調整で、最大径32.3cm、後者は外面ハケメ、内面ナデ調整で最大径（突帯部径）32.4cmである。

壺N　上位に最大径をもつ球形に近い器体に大きく開く頸部といわゆる袋状口縁がつくもので、法量により大形の壺NIと小形の壺NⅡに分れ、さらに突帯の有無や形状により壺NIは壺NaⅠ、壺NbⅠ、壺NcⅠに細分される。壺NaⅠ（50）は肩部に櫛描状の平行線帯がつくもので、底部は丸底気味の平底である。体部は内外面とも下半部が（ハケメ後？）ナデ、上半部・頸部はナデ調整である。口外径23.0cm、器高39.8cm。壺NbⅠ（51）は肩部と頸部との境と体部下位に刻目がつく断面三角形突帯がそれぞれ1条めぐるもので、底部は丸底気味の平底である。内外面ともハケメ調整であるが胴部突帯下の外面は（ハケメ後）ナデている。口外径26.0cm、器高40.2cm。壺NcⅠ（105）は肩部と頸部の境に断面三角形突帯が2条めぐるもので、体部下半を欠く。外面ハケメ、内面は頸部がハケメ、体部はナデ調整。口外径24.0cm。壺NⅡ（86）は袋状口縁がつく頸部の短い小形の壺であるが、頸部の破片のみである。頸部は外面ハケメ、内面ナデ調整。口外径14.1cm。壺N類の袋状口縁部と頸部の形態は壺NaⅠ・NbⅠは頸部が長く口縁部の内側への屈曲も外部に稜をつくって内傾するが、壺NcⅠ・NⅡは頸が短かく、口縁部の屈曲も鈍い。

壺O（356）　肩部から口縁部にかけての破片で、内傾する肩部に、外に開く口縁部がつくものである。内面はハケメの後ナデ、外面ハケメ調整。残存胴径31.7cm。

壺P（84）　口頸部の破片で、わずかに外反しながら内傾する頸部である。直立する口縁部の端部は面をもつ外面ハケメ内面ナデ調整。口径11.0cm。

壺Q（48）　手捏により成形された壺形のミニチュアで、球形に近い体部にわずかに内傾しながら開く口縁部がつく。内外面ナデツケで成形している。口径4.6cm、器高7.0cm。

他にやや小形のもの（49）もある。

鉢A（174）　はいわゆる如意形口縁をもつもので、口径32.8cm。

鉢B（334）　断面三角形に近い突帯を器体上端につけたもので、口径27.1cm。

鉢C　断面三角形の口縁部とその下位に、同じく断面三角形突帯を１条めぐらすもので、口縁部・突帯ともに刻目がつく鉢Ｃａ（121・429、口径39.4cm）と、突帯のみに刻目がつく鉢Ｃｂ（123・口径48.4cm）に細分される。

鉢D（517）　大きく開いた体部上端をそのまま口縁としたもので、口径23.3cm、器高12.0cmである。これらは形態・技法の上から甕と対応させると、鉢Ａは甕Ａ・鉢Ｂは甕Ｄ、鉢Ｃａは甕Ｅｂ、鉢Ｃｂは甕Ｅｃとの共通点が多い。

これら５種の鉢は確実なものでそれぞれ１個体づつしか出土していない。調整は各類に相違をみる。鉢Ａは外面ハケ目、口縁部内面ハケ目、鉢Ｂは体部外面ミガキである。他の鉢Ｃ・Ｄは外面が摩耗して調整痕が不明瞭であるが、おそらくナデ調整と思われる。

鉢E　平底の底部から体部がわずかに内湾しながら直線的に開き、その端部をそのまま口縁部とした器高が低い鉢で、体部が直線的な鉢Ｅａ（33）、体部がやや内湾する鉢Ｅｂ（32・78・79）、体部がやや内湾するが体部が大きく開く鉢Ｅｃ（34）に細分できる。これら鉢Ｅは内面ナデで外面はハケメまたはハケメ後ナデているものがある。口径15.6cm～17.8cm、器高6.7cm～8.1cm。鉢Ｅｃは口径18.4cm、器高6.3cmと口径が大きくなっている。

鉢F（66）　内湾しながら開く体部の上位が上へ立ち上るもので、底部を欠く、内外面ハケメ調整だが器面が荒れている。口径17.6cm。

鉢G（68）　内湾しながら開く体部の上位が直立するもので器高が口径に較べ大きくなっている。器面が荒れており調整痕が不明瞭であるが、内面上位にはヨコ方向ハケメがかすかに残る。口径11.6cm、器高8.7cm。

鉢H（67）　小形の鉢で、やや内傾する体部上位を強いヨコナデによって受け部状の立ち上り口縁をつくっている。体部は外面ヘラミガキ、内面ケズリ後ナデ調整。口径8.6cm。

鉢Ｉ　平底に近い丸底の底部からわずかに内湾しながら外に開く体部がつくもので、脚部がつかない鉢Ｉａ（65）と脚付きの鉢Ｉｂ（64）に分れる。両者とも体部内外面ハケメ調整。鉢Ｉａは口径14.6cm、器高7.8cm。鉢Ｉｂは口径13.5cm、残存器高8.4cm。

鉢Ｊ　半球形に近い器体に断面くの字形口縁がつくもので、小形で深みのある鉢ＪⅡ（94）とやや大形で浅い鉢ＪⅠ（95・96）に分れる。鉢ＪⅡは内面ナデ、外面不明で、口外径21.4cm、器高12.9cm。鉢ＪⅠは外面ハケメ調整であるが内面はハケメのものとナデ

調整のものがある。口径26.6cm～30.2cm。

鉢K（69）　浅い鉢で、丸底の底部から大きく外に開く体部は上位で直立し、外反する幅広の口縁部がつく。内外面ともハケメ調整で、口縁端部は面取りする。口外径24.8cm、器高8.8cm。

鉢L（80）　平底に近い丸底の底部に外に開く体部がつく大形の鉢で、やや肥厚した体部上端を面取りしそのまま口縁とし、体部上位に断面台形の突帯を1条めぐらすものである。内面ナデ、外面ハケメ調整。口外径30.2cm、器高14.9cm。

鉢M　手捏により成形された鉢形のミニチュア土器である。丸底の底部から体部が直線的に開く鉢Ma（81）と体部が内湾する鉢Mb（396）に分れる。双方ともナデツケで調整されており、外面には特に指頭圧痕が残る。鉢Maは口径7.6cm、器高3.5cm、鉢Mbは口径7.7cm、器高3.9cm。

高杯A（385）　杯底部と脚上部の小破片である。体部は内湾気味にひらく。内外面ナデ調整。

高杯B（35）杯部の破片のみである。大きく開いた杯底部から口縁部が垂直に立ち上り、先端を面取りしてそのまま口縁としたものである。口縁部はヨコナデ、他は不明瞭ながらナデ調整らしい。口径30.3cm。

高杯C（72）　杯底部がわずかに内湾しながら大きく開き、鉢Kのように大きく外反する口縁部がつくと推定されるもので、杯体部と口縁部との境は内外ともに稜がつく。脚部は長くラッパ状に開き、円形の孔を4または8ヶ所穿っている。杯体部内外ナデ、脚部外面ハケメ、内面ナデ調整が主である。推定口径26cm前後、推定器高21cm前後、脚裾部径15.8cm～17.0cm。

高杯D（71）　脚部のみ存在する。ラッパ状の脚部が下位で内湾するもので4ヶ所に円形小孔を穿つ。脚部上位は外面ハケメ後タテ方向にヘラ状のものでミガキ、内面にはシボリ痕が残る。中位から裾部上の外面はハケメであるが、内面は裾部上がハケメ、中位がヘラケズリとなっている。裾部径19.7cm。高杯Cに較べ脚部がやや長めである。

高杯E（74）　底部外縁から大きく外反する口縁部がつく杯部と、これとほぼ同形態の裾部の上にエンタシス状の中ぶくらみのある支柱がつくもので、杯部・脚裾部先端を欠く。杯の底部と口縁部との境および脚裾部の外反屈曲部は突帯状に隆起し、刻目を施す。脚裾部上位には5ヶ所に円形小孔を穿つ。ナデツケ調整の脚部支柱内面を除き、内外面ともハケメを施すが、杯部内面と脚部外面はヘラミガキでハケメを消している。杯口縁部現存径18.5cm、脚裾部現存径16.3cm、現存器高18.6cm。

蓋A（386）　器体が大きく開き笠形となる。底部は裾広がりの上げ底で、上部でくびれるためつまみ状になっている。口外径23.8cm、器高9.5cm。底部付近の外面にハケ目が残るが、他はナデ調整である。

また壺E（紐通し孔付きの短頸壺）と組み合う蓋も存在したと考えられるが、出土をみなかった。

器台A（479・480）　口径が裾部径よりわずかに小さく、全体的に鼓形をなす。口縁部・裾部内面にヨコ方向のハケ目、外面はタテ方向のハケ目を施す。器高は14.6cmと14.8cmである。

器台B（47）　口縁部がゆるやかに外反し、端部に面をもつもので下半部を欠いている。受部内外ヨコナデ、体部外面ハケメ調整、内面は表面剥離のため不明。受部径16.0cmと中期の器台Aに較べ大形である。

器台C（76）　直線的に開く長い脚部に外反して開く受部がつく。受部端部ともに面をもつ。外面はタタキ、内面は受部がハケメ後ナデ、受部と脚部の境はナデ、脚部は細かなハケメ調整。受部径15.3cm、裾部径19.0cm、器高22.9cm。

器台D（75）　器台Cと全体的には似ているが、受部と脚部のくびれが器台Cに較べ下位にある。大きく開く受部の端部は内側へ屈曲させて袋状にしている。両端部とも丸い。内外面ともハケメ調整、内面の受部と脚部の境はナデ上げている。受部外径18.0cm、裾部径17.2cm、器高24.2cm。受部径が裾部径を凌ぐ。

器台E（93）　いわゆる沓形器台と呼ばれるもので、上端を欠く。内面ナデ調整、外面は磨耗のため調整不明。裾部径14.2cm、器高13.9cm。

土製品としては支脚、土弾、紡錘車がある。

支脚は横断面の形態により大きく3種類に分類できる。断面が円形で、内部が中空で器台に似た形態のもの（A・D）、断面が円形のもの（B）、断面が楕円形のもの（E）断面が四角形のもの（C・F）である。

支脚A（138・509）は高さは12～13cm、裾部径6.5～8cmで、**支脚B**は高さ8～12cm、裾部径5～7cmで上部が小さくなるが、上面が平面になる支脚Ba（141）、上面が丸くなる支脚Bb（256）に分かれ、さらに中位がくびれ上面に1条の溝がつく支脚Bc（448）、中位がくびれ上下面がへこむ支脚Bd（140）に分かれる。**支脚C**は高さ10cm～13cm前後で断面形がほぼ正方形に近い四角形をなす。縦断面は、長方形になる支脚

Ｃａ（391）、上位が小さく台形になる支脚Ｃｂ（366・367）に分れるが、支脚Ｃｂの中には上面に１条の溝がつくもの（142）もある。

整形は概して、ナデ調整が多いが、中には指頭圧痕が明瞭に残るものもある。

支脚Ｄは横断面の形態が円形で内部が中空で器台に似た形態のものである。２個体あるが双方とも破片である。脚部が開く支脚Ｄａ（77）と、上位が内傾し径2.8㎝の穴があく支脚Ｄｂ（98）に分れる。双方とも内外面ともナデツケで形成している。77は裾部径10.4㎝、98は上位屈曲部外径7.5㎝。**支脚Ｅ**（108）は横断面が楕円形で下面は平坦で、上面には短径方向にくぼみがつく。ナデツケとヘラ状の削りで形成されている。高さ10.0㎝、長径7.3㎝、短径5.8㎝。**支脚Ｆ**（107）は横断面が正方形に近く、上面に１条のくぼみがつく。全面ナデにより成形。上面径4.6㎝、現存高5.9㎝。

土弾（220・221・324・325）　出土数が少ない。すべてナデて整形されている。小さいもので長さ3.0㎝、径1.9㎝大きいもので長さ5.0㎝、径2.8㎝である。

土製紡錘車（９・28・30）　出土数が少ない。径3.6～4.5㎝、厚さ0.8～1.1㎝である。

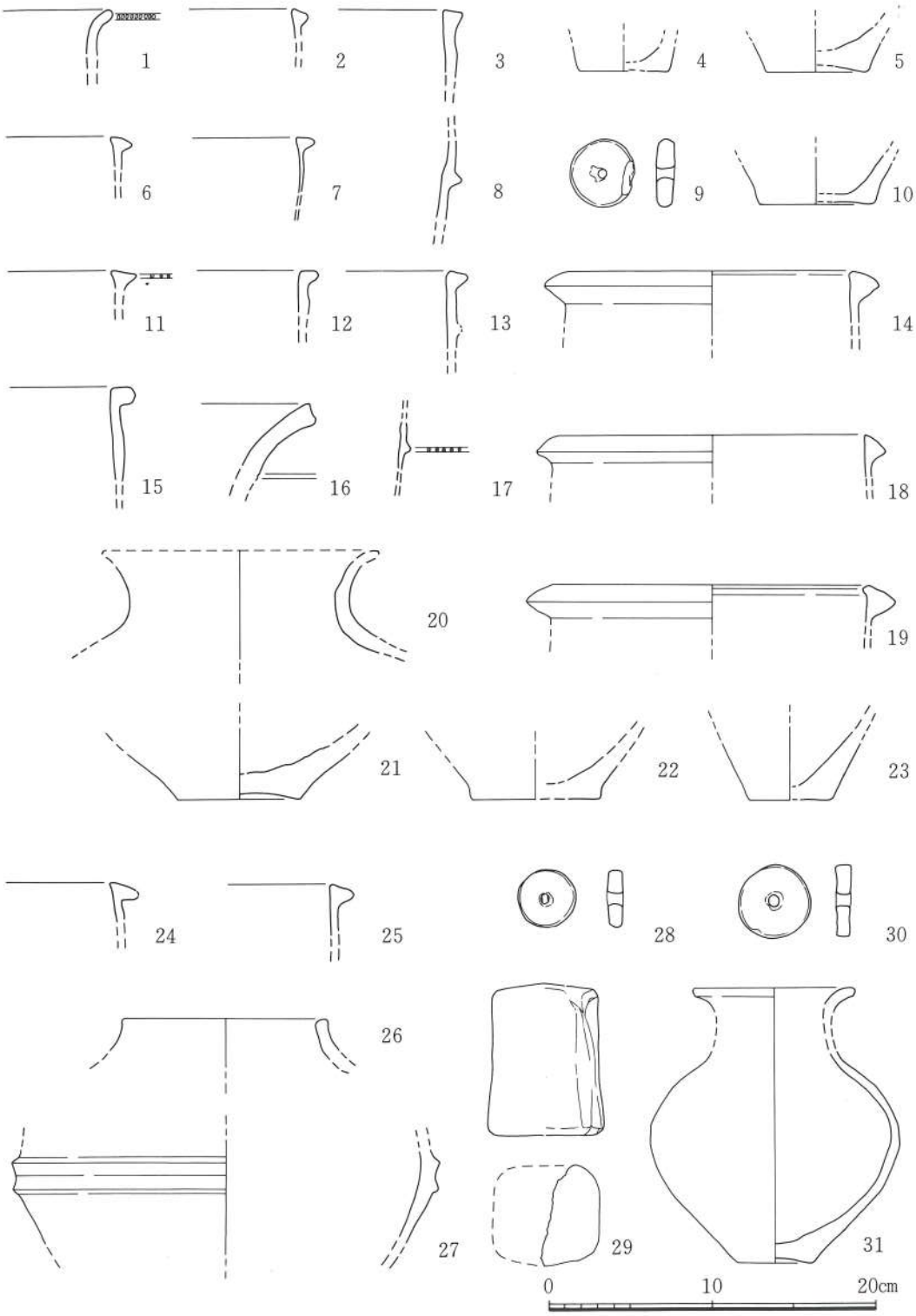


Fig. 57　住居跡出土土器・土製品実測図（1）
（1～5 SB001, 6～10 SB004, 11～23 SB013, 24～29 SB038, 30・31 SB041）

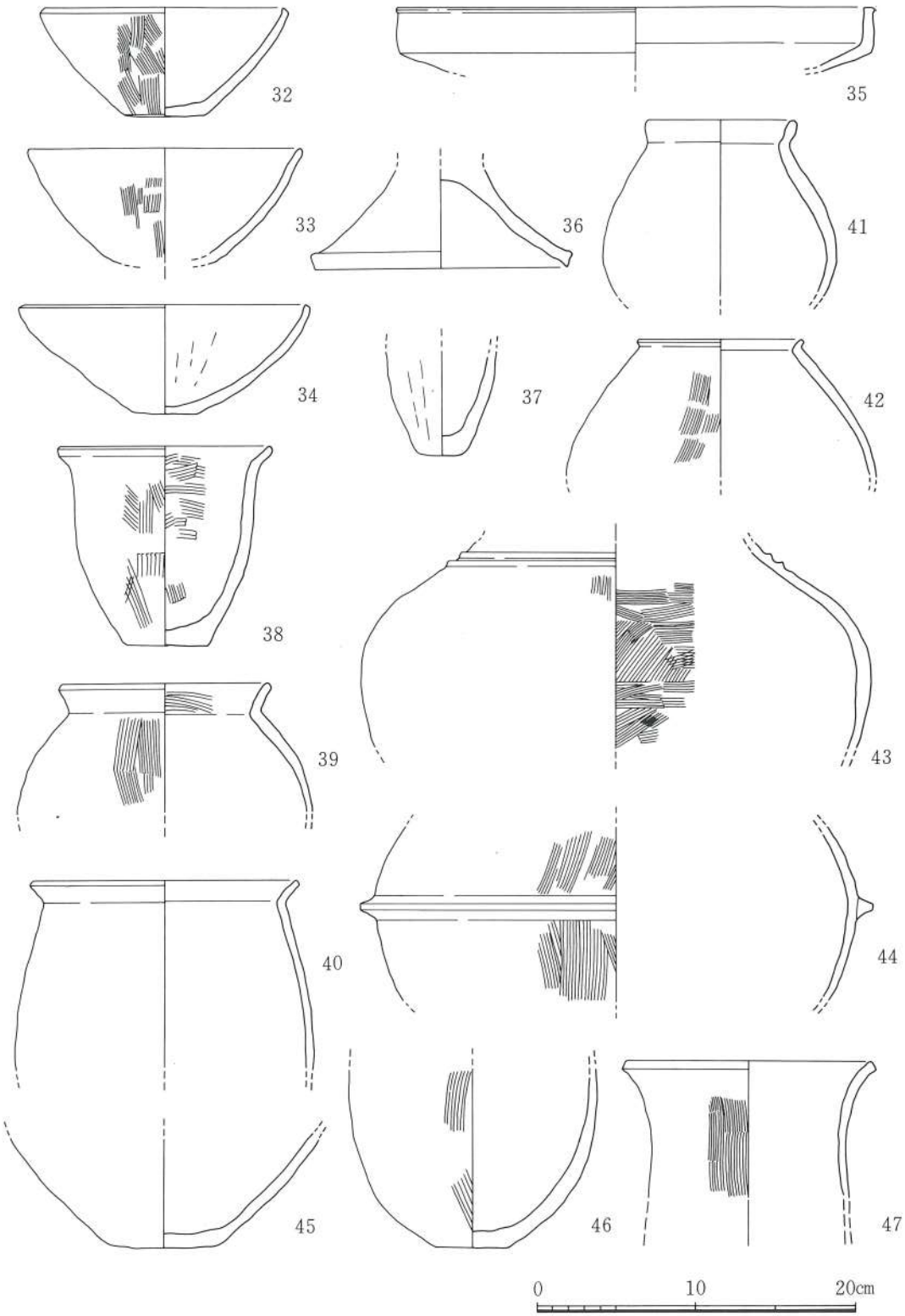


Fig. 58　住居跡出土土器・土製品実測図（2）
(32～47 SB 034)

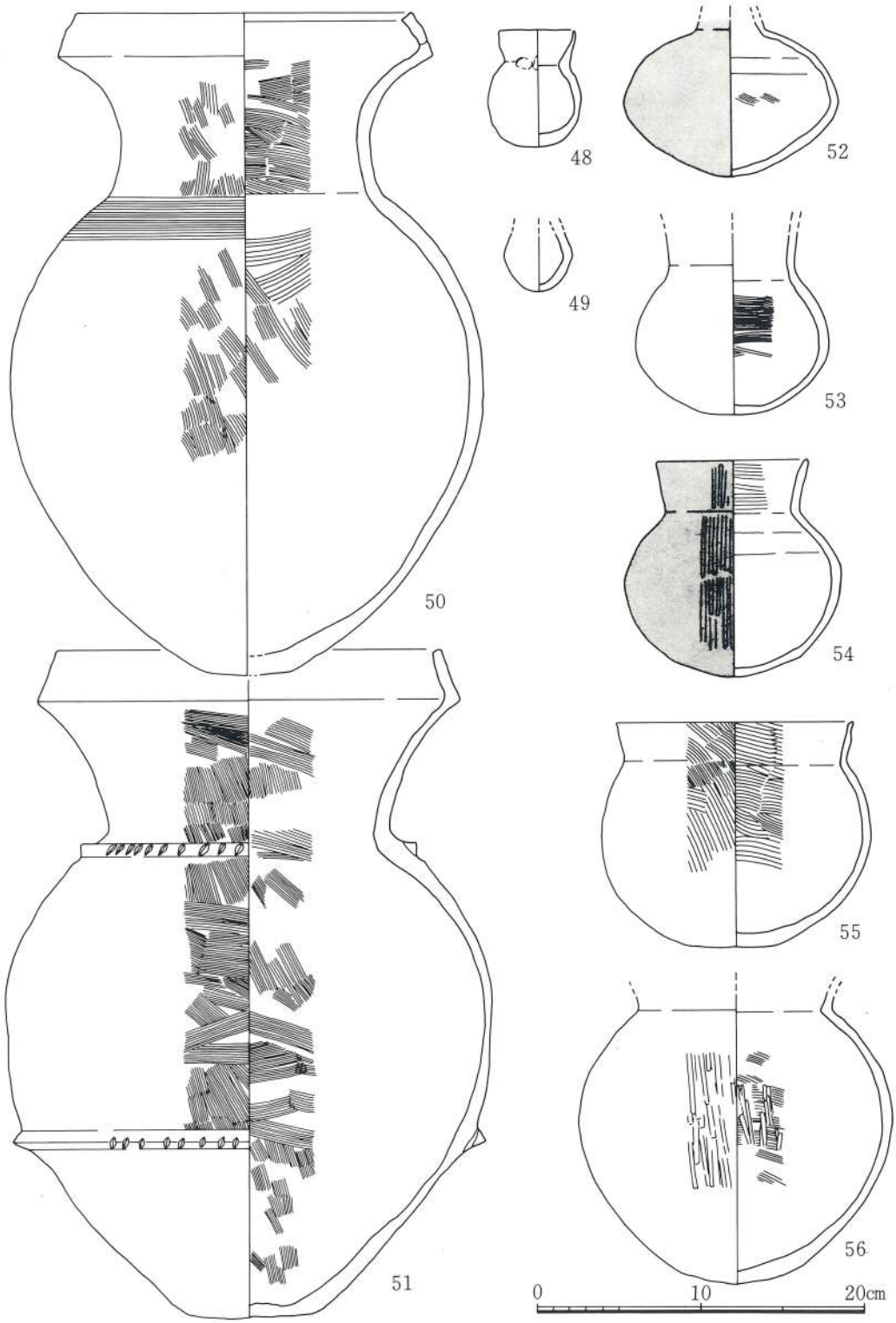


Fig. 59　住居跡出土土器・土製品実測図（3）
(48～56 SB 039)

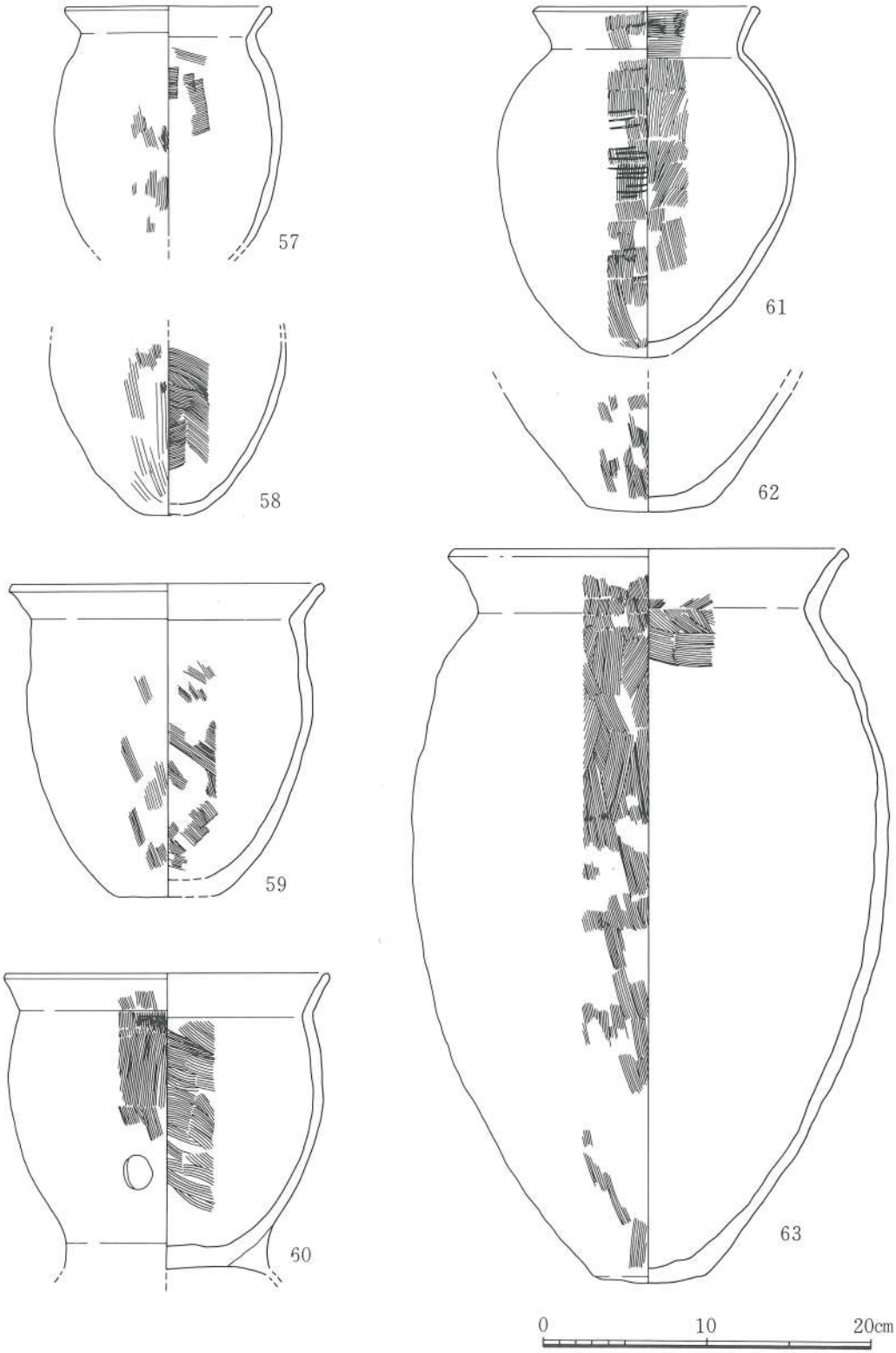
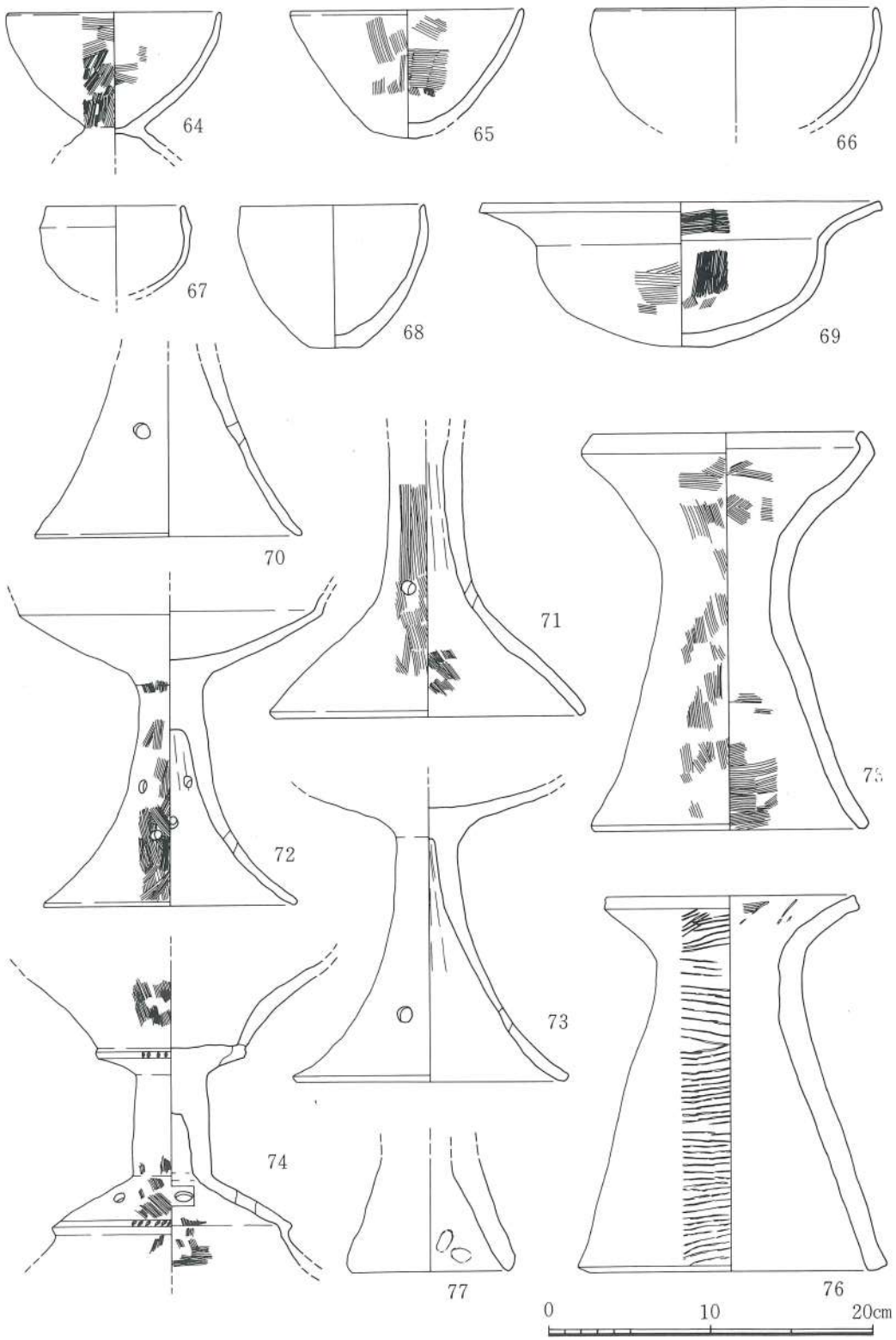


Fig. 60 住居跡出土土器・土製品実測図（4）
(57～63 SB 039)



Fig．61　住居跡出土土器・土製品実測図（5）
(64～77 SB 039)

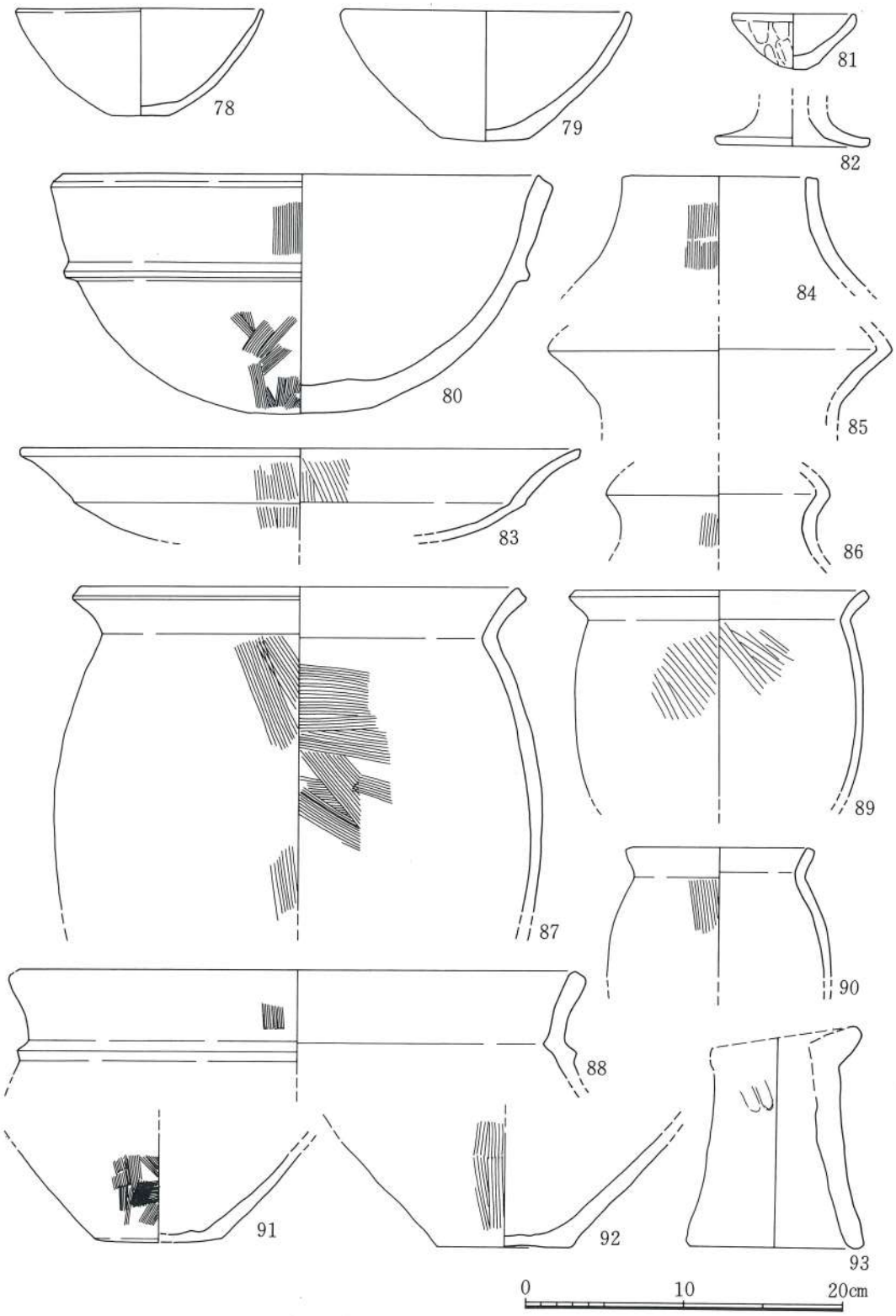


Fig. 62　住居跡出土土器・土製品実測図（6）

(78～93 SB 047)

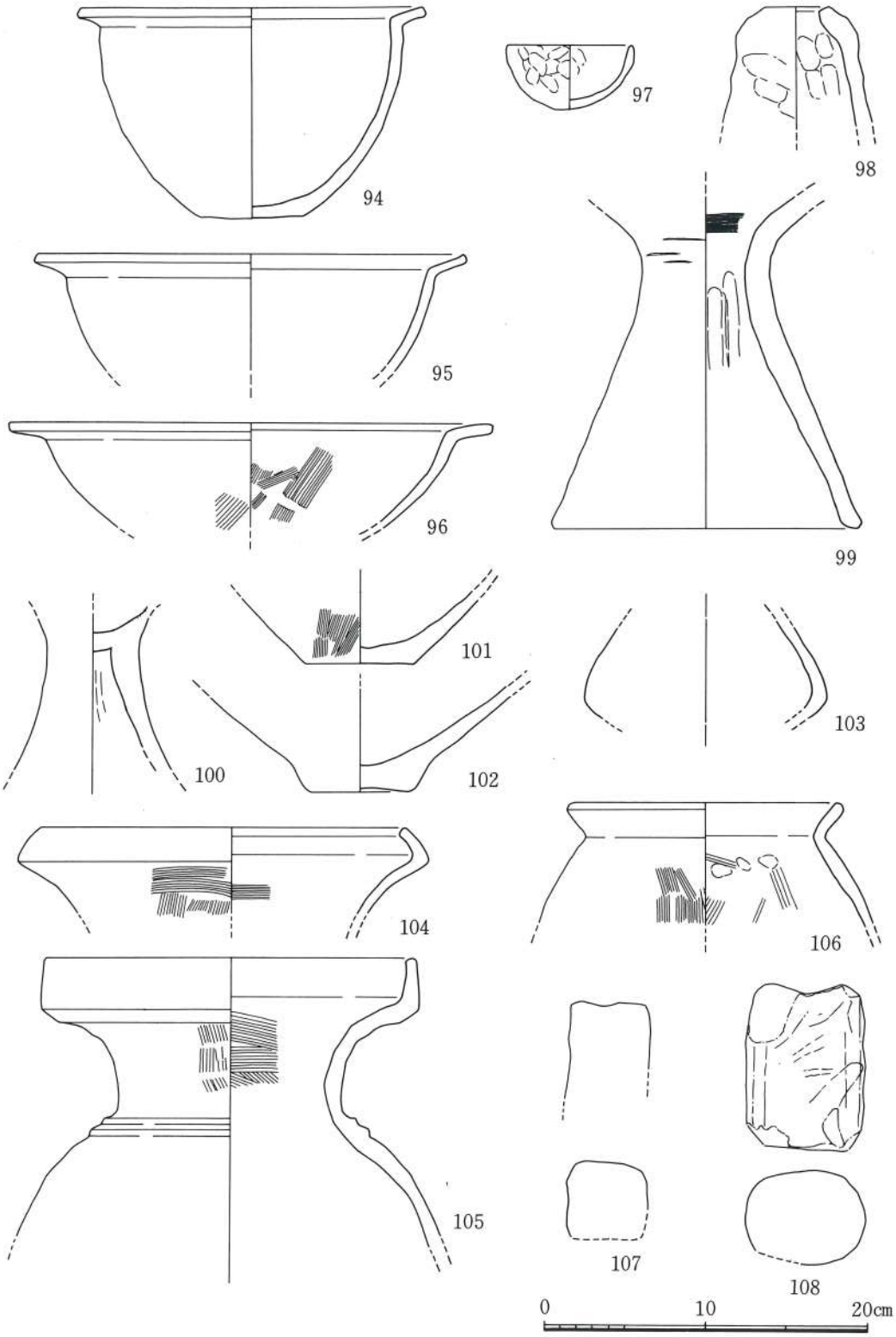


Fig. 63　住居跡出土土器・土製品実測図（7）
(94～108 SB 049)

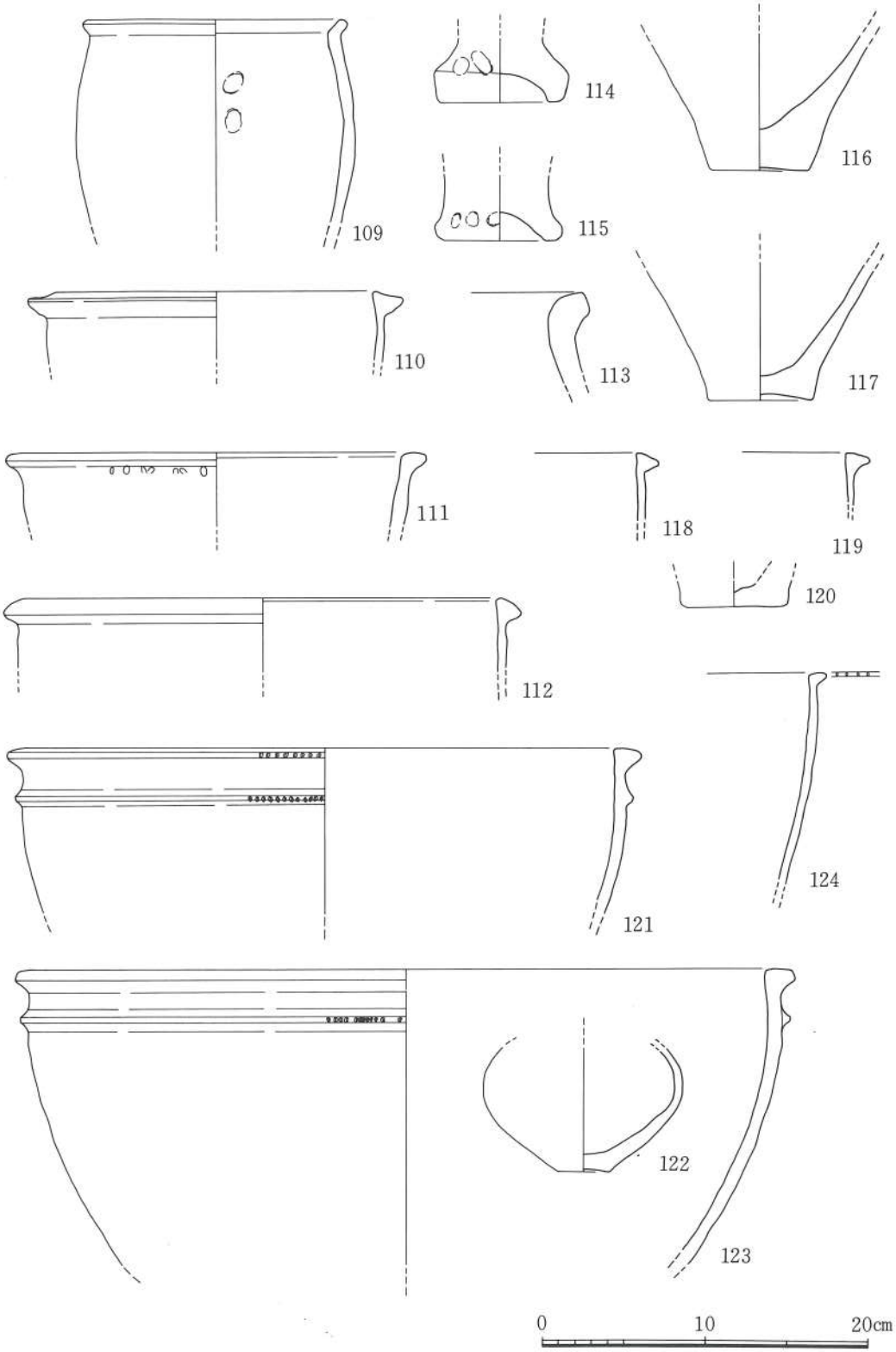


Fig. 64　住居跡出土土器・土製品実測図（8）
(109～117 SB 048, 118～120 SB 067, 121～123 SB 070, 124 SB 077)

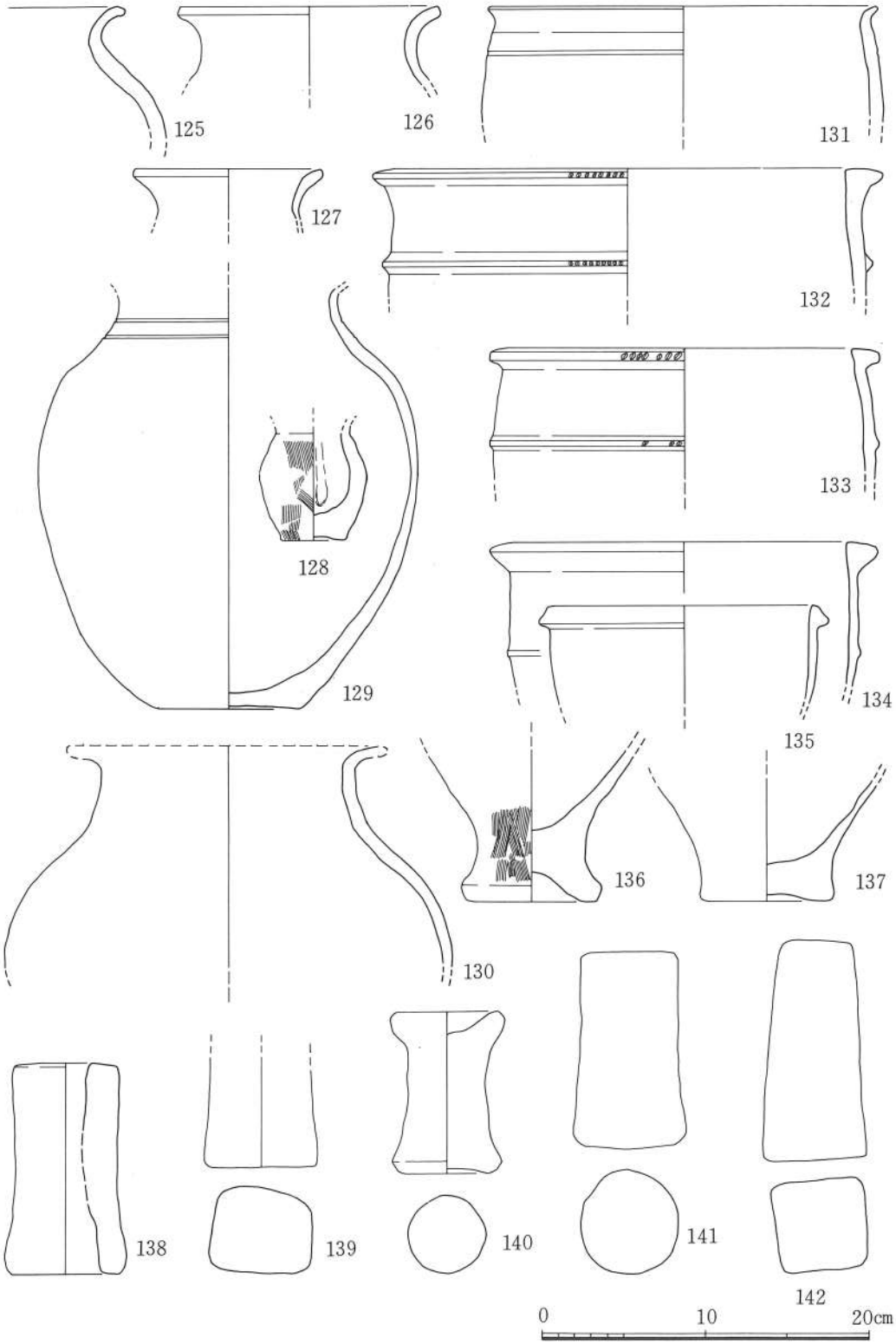


Fig. 65　住居跡出土土器・土製品実測図（9）
(125～142 SB 069)

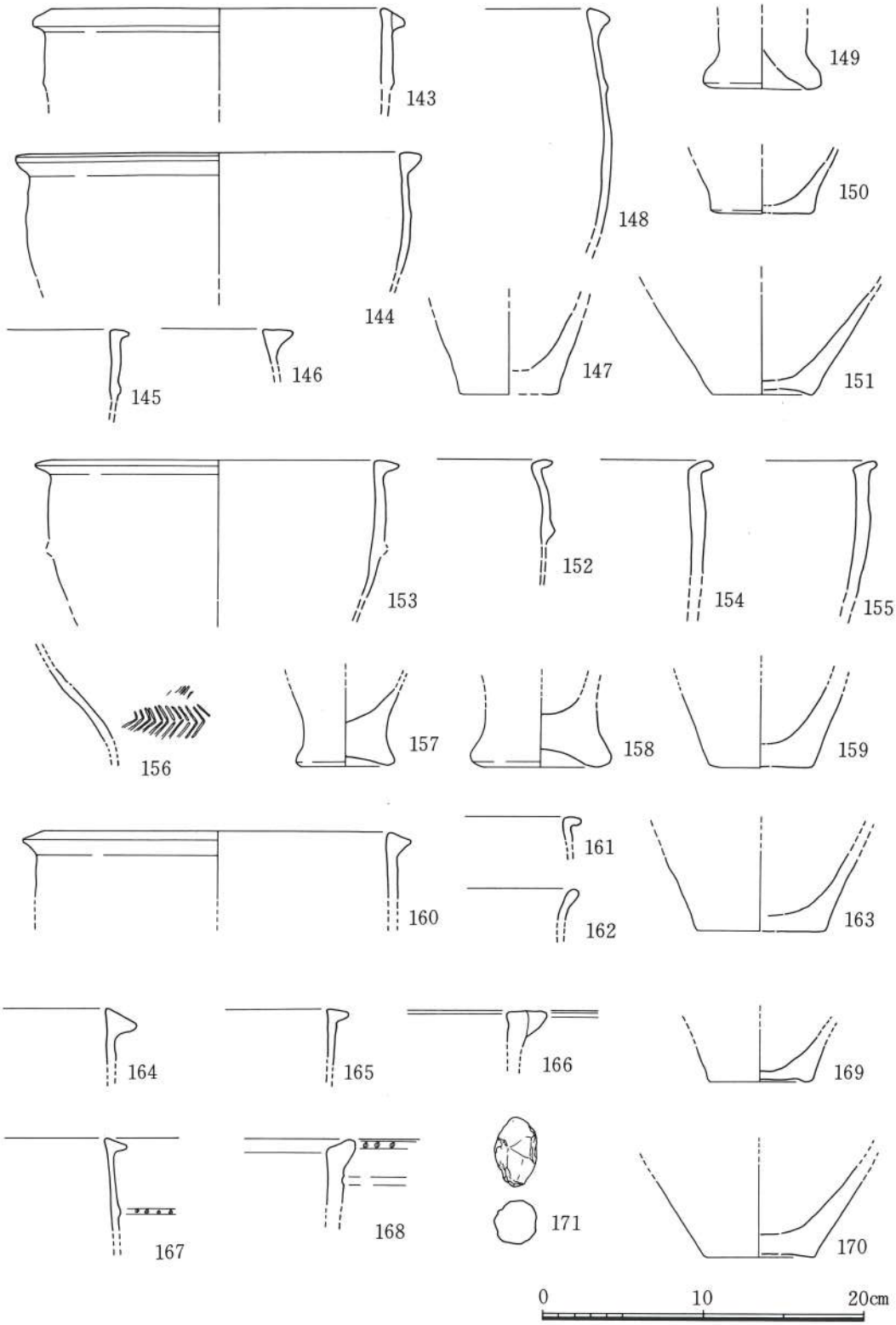


Fig. 66　住居跡出土土器・土製品実測図（10）

(143～147 SB 085, 148～152 SB 087, 153～159 SB 088, 160～163 SB 089, 164～171 SB 090)

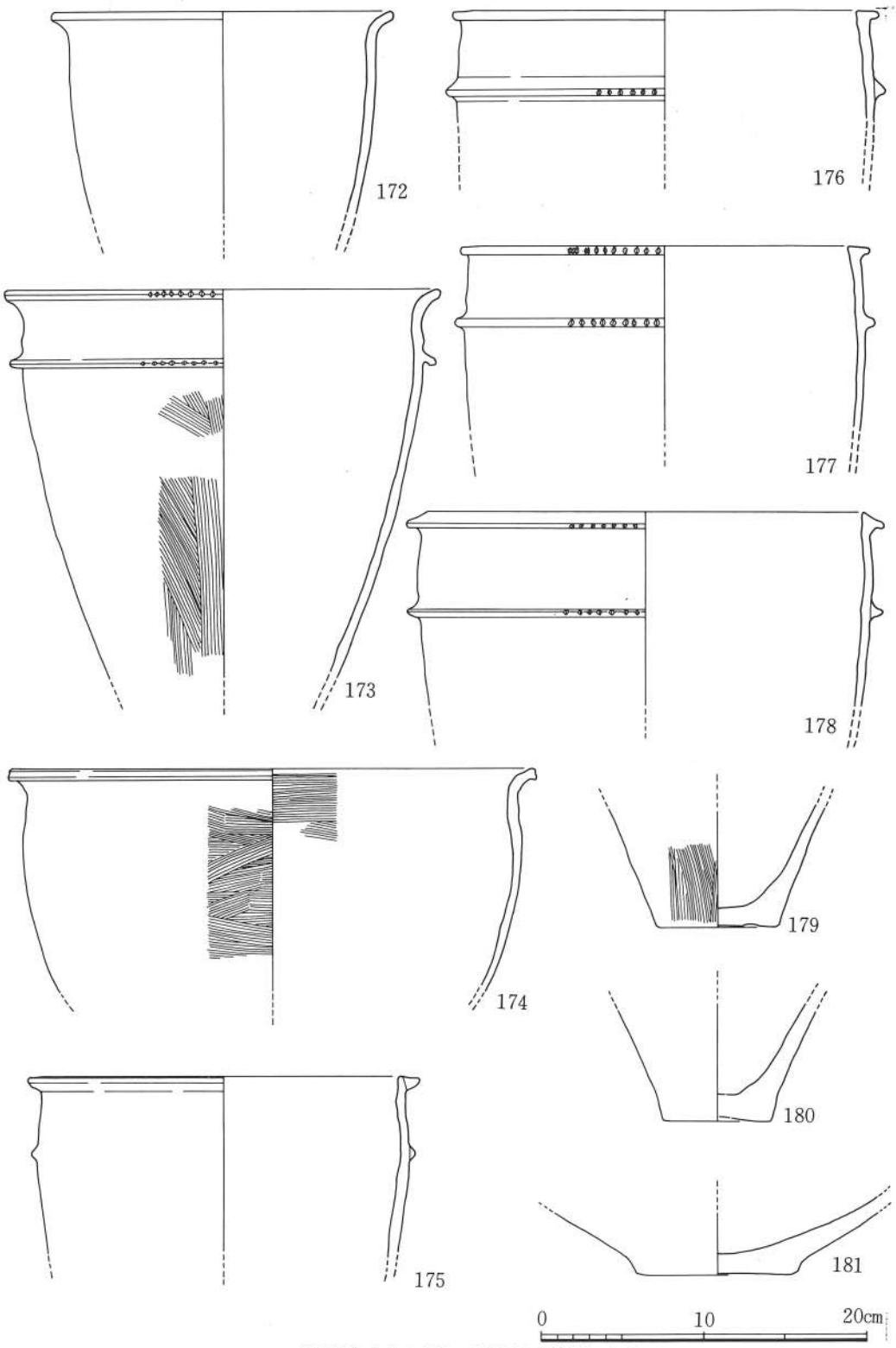


Fig 67　住居跡出土土器・土製品実測図（11）
（172～181 SB 091）

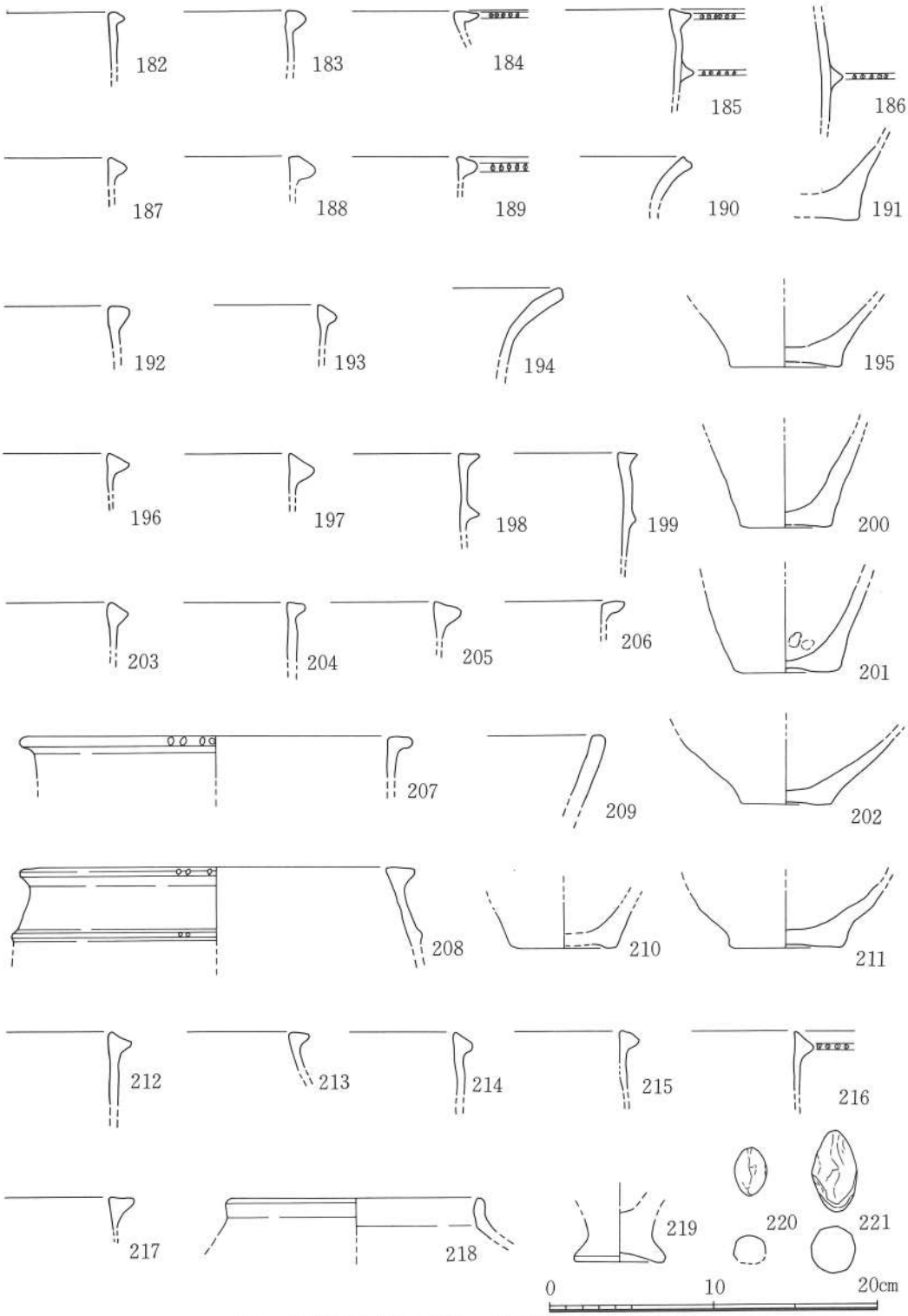


Fig 68 住居跡出土土器・土製品実測図 (12)

(182～186 SB 093, 187～191 SB 094, 192～195 SB 099, 196～202 SB 100, 203～211 SB 103, 212～221 SB 104)

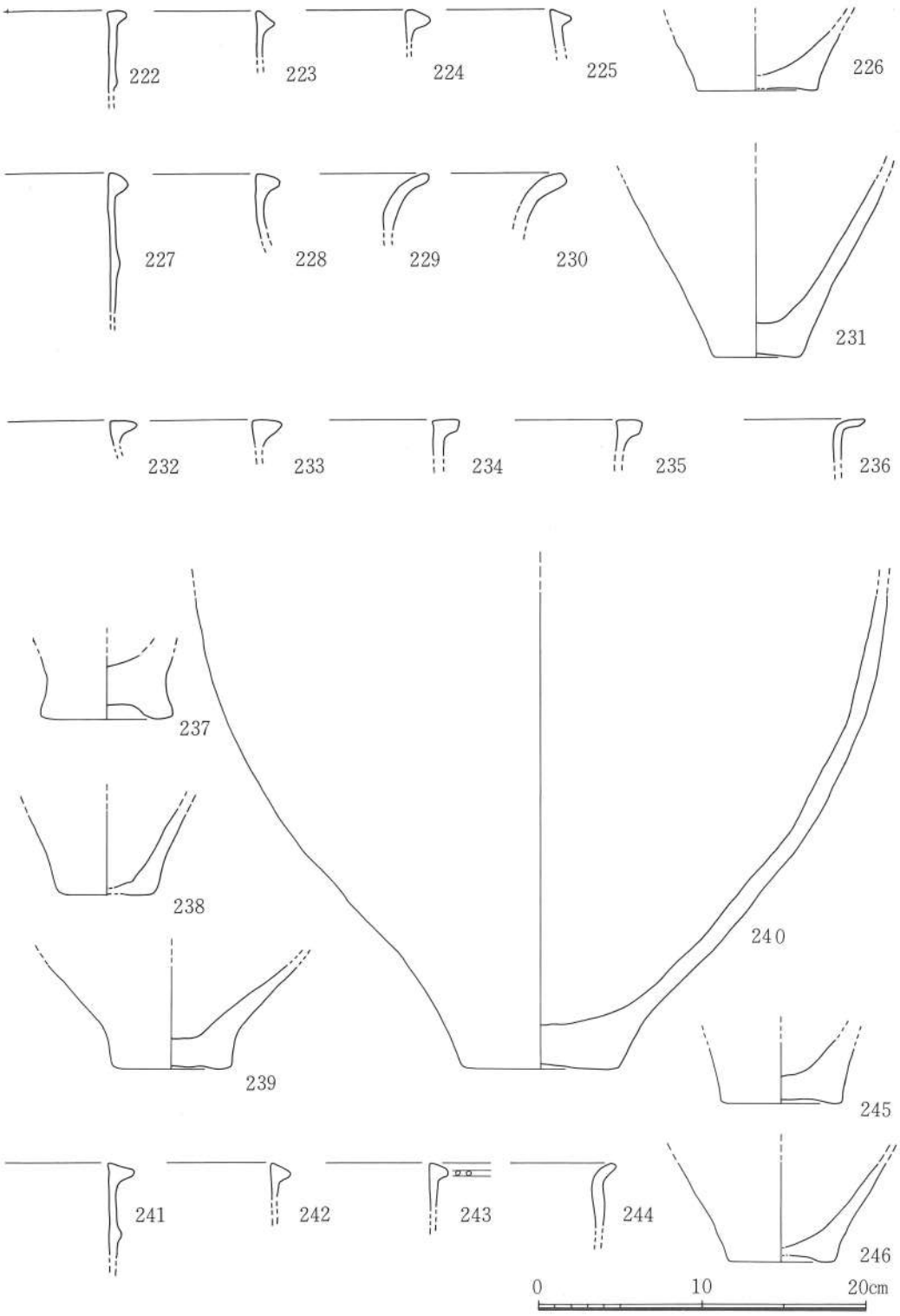


Fig. 69 住居跡出土土器・土製品実測図 (13)
(222～226 SB113, 227～231 SB114, 232～240 SB134, 241～246 SB135)

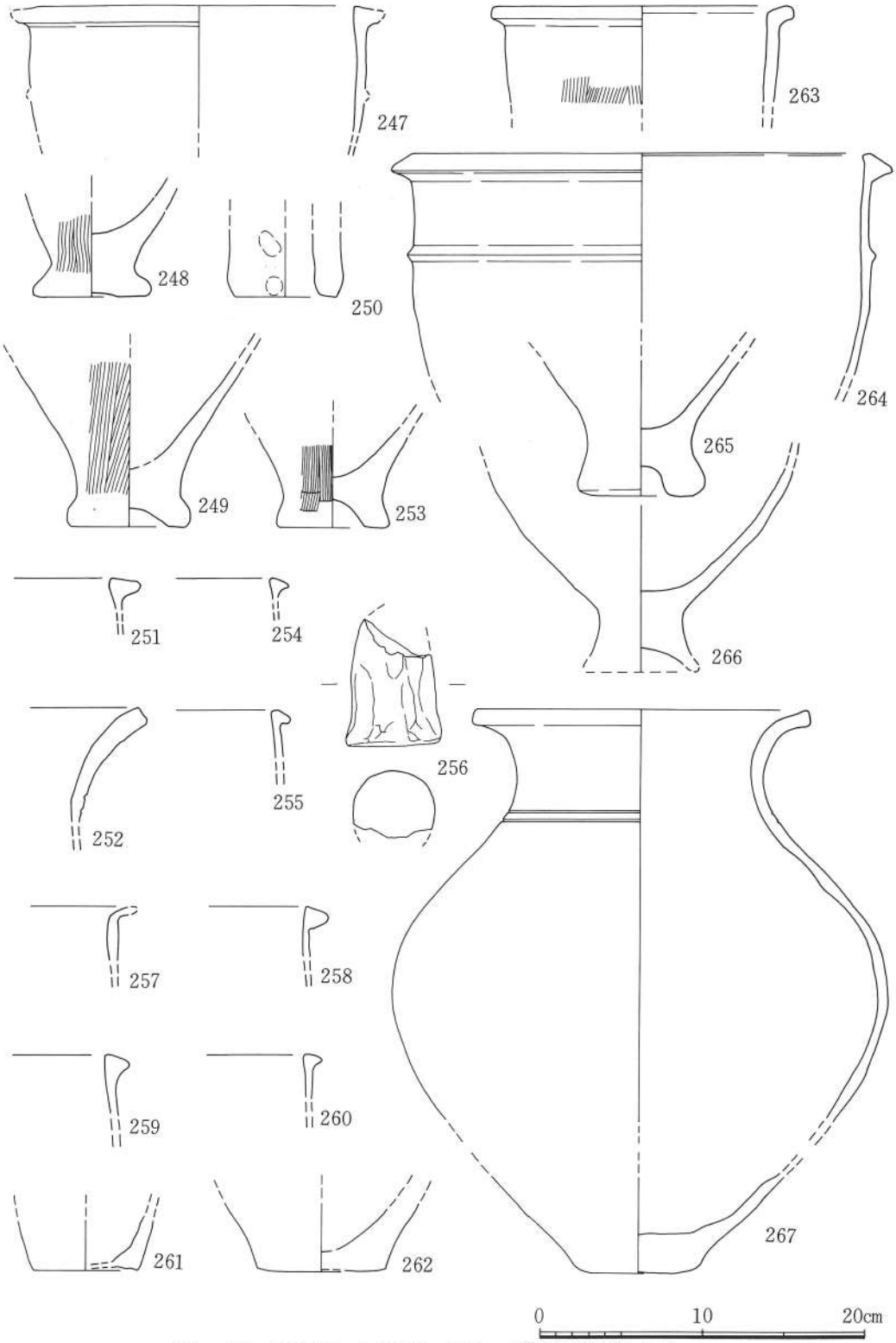


Fig. 70　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（1）
(247～253 SK 002, 254 SK 005, 225 SK 006, 256 SK 007, 257～262 SK 011, 263～267 SK 012)

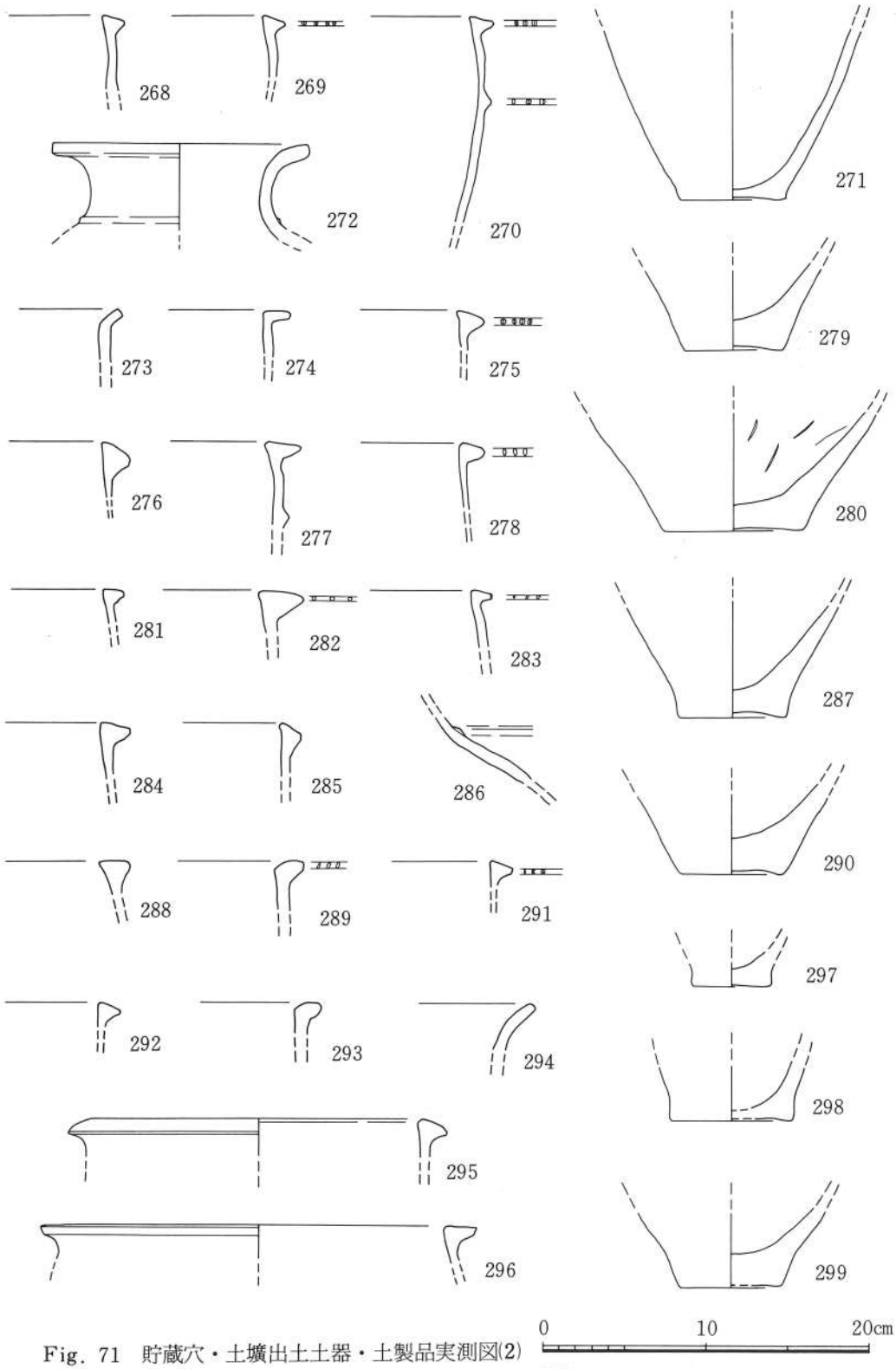


Fig. 71　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図(2)
(268～271 SK 014, 272～280 SK 016, 281～287 SK 017, 288～290 SK 018, 291～299 SK 019)

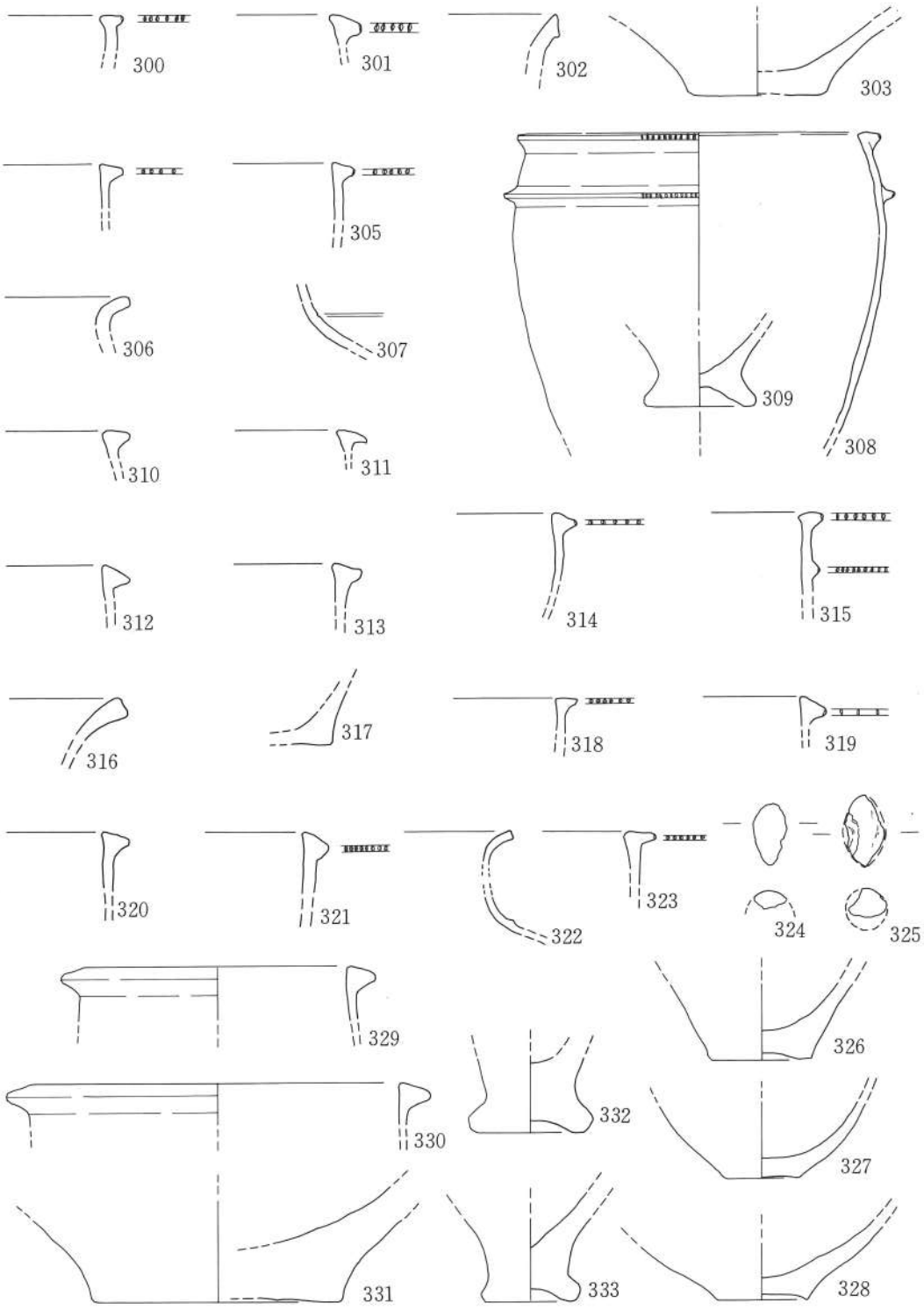


Fig. 72　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（3）　0　10　20cm

（300～303 SK 020, 304～309 SK 021, 310・311 SK 022, 312・313 SK 023, 314・315 SK 024,
316・317 SK 025, 318・319 SK 026, 320・321 SK 027, 322～328 SK 028, 329～333 SK 029）

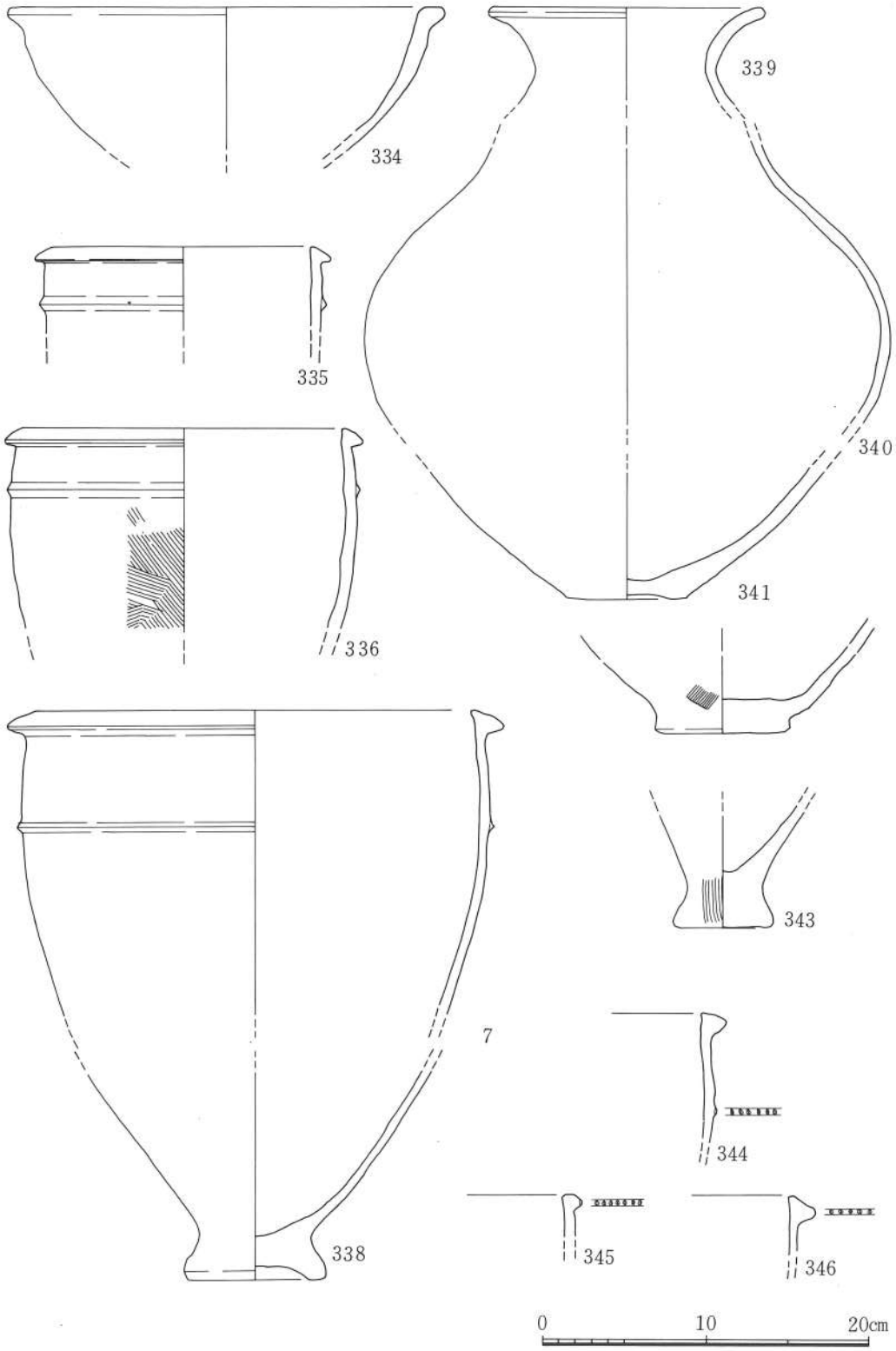


Fig. 73　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（4）
(334～343 SK 030, 344 SK 031, 345・346 SK 035)

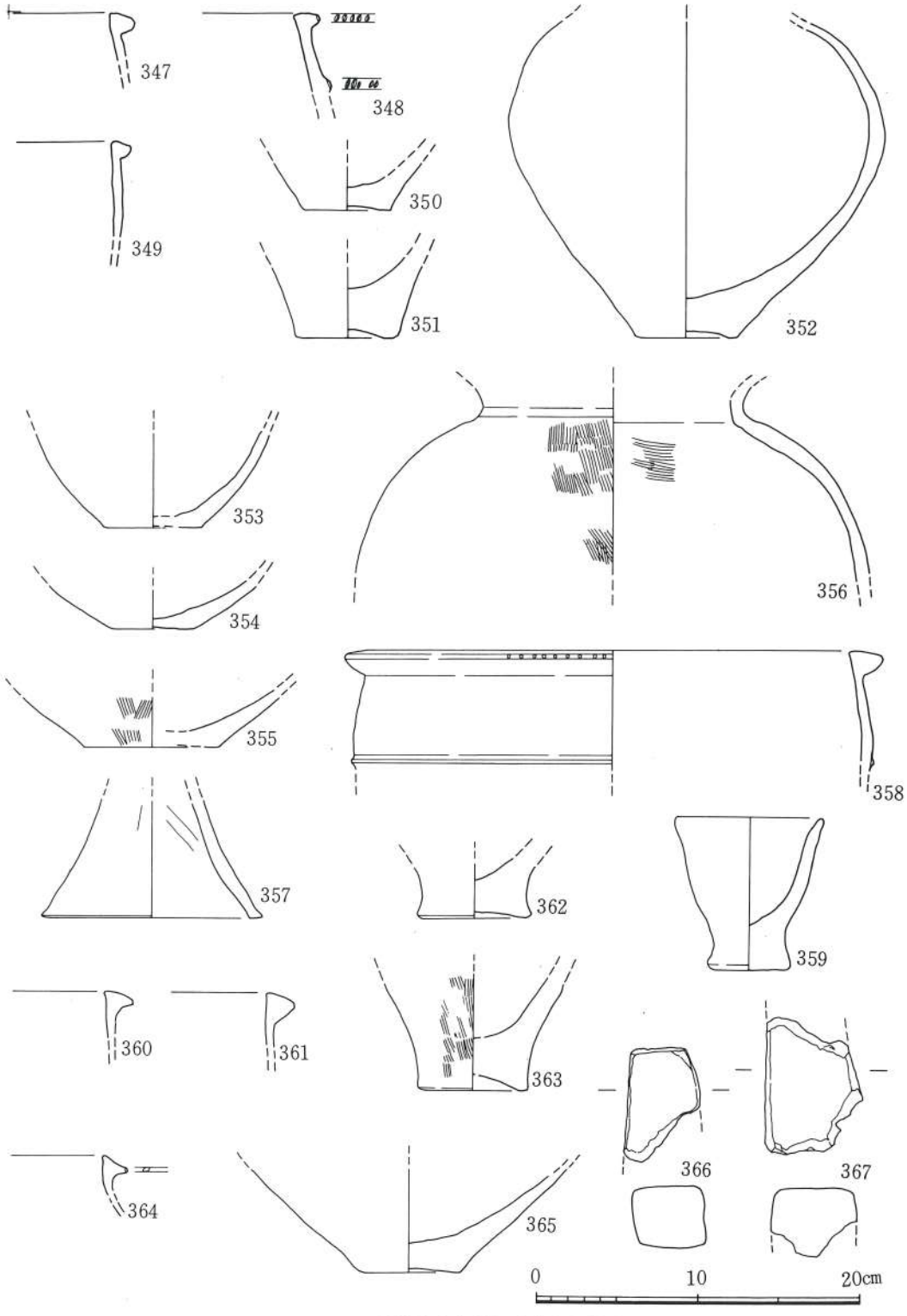


Fig. 74　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（5）
(347～352 SK 036, 353～357 SK 042, 358～363 SK 043, 364～367 SK 044)

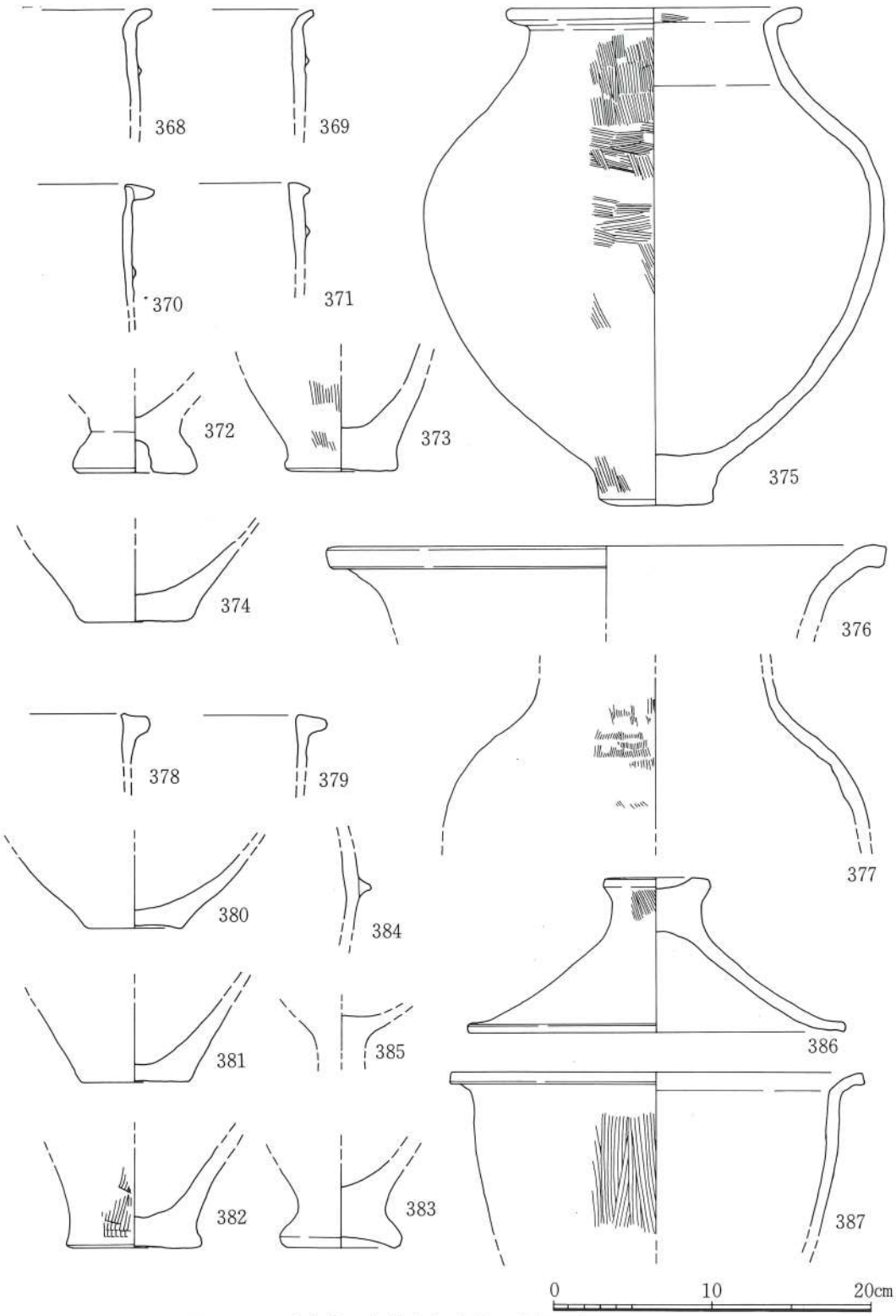


Fig. 75　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（6）
(368～375 SK 045, 376～387 SK 050)

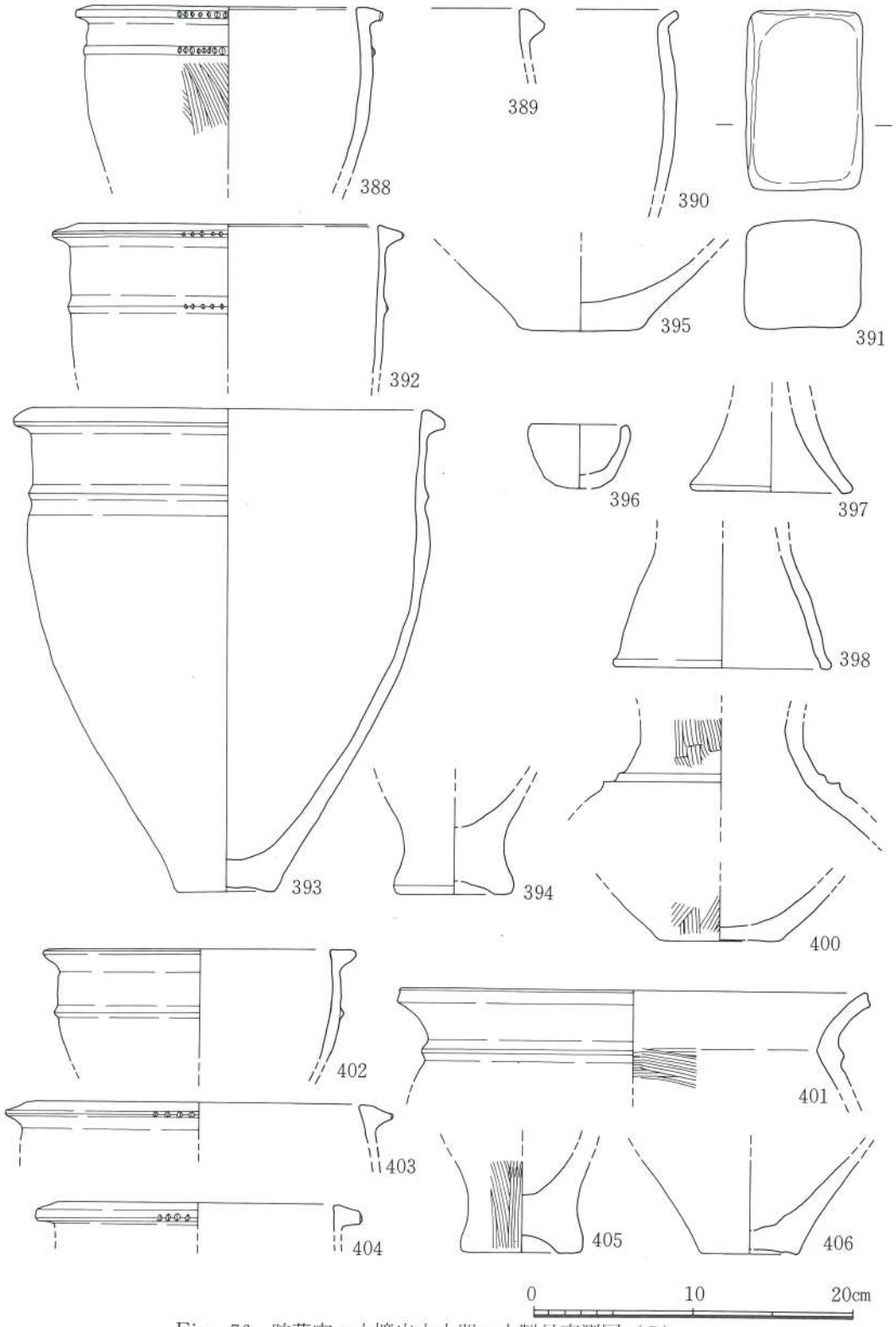


Fig. 76　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（7）

(388～391 SK 051, 392～394 SK 052, 395 SK 053, 396～401 SK 054, 402 SK 055, 403 SK 056, 404～406 SK 057)

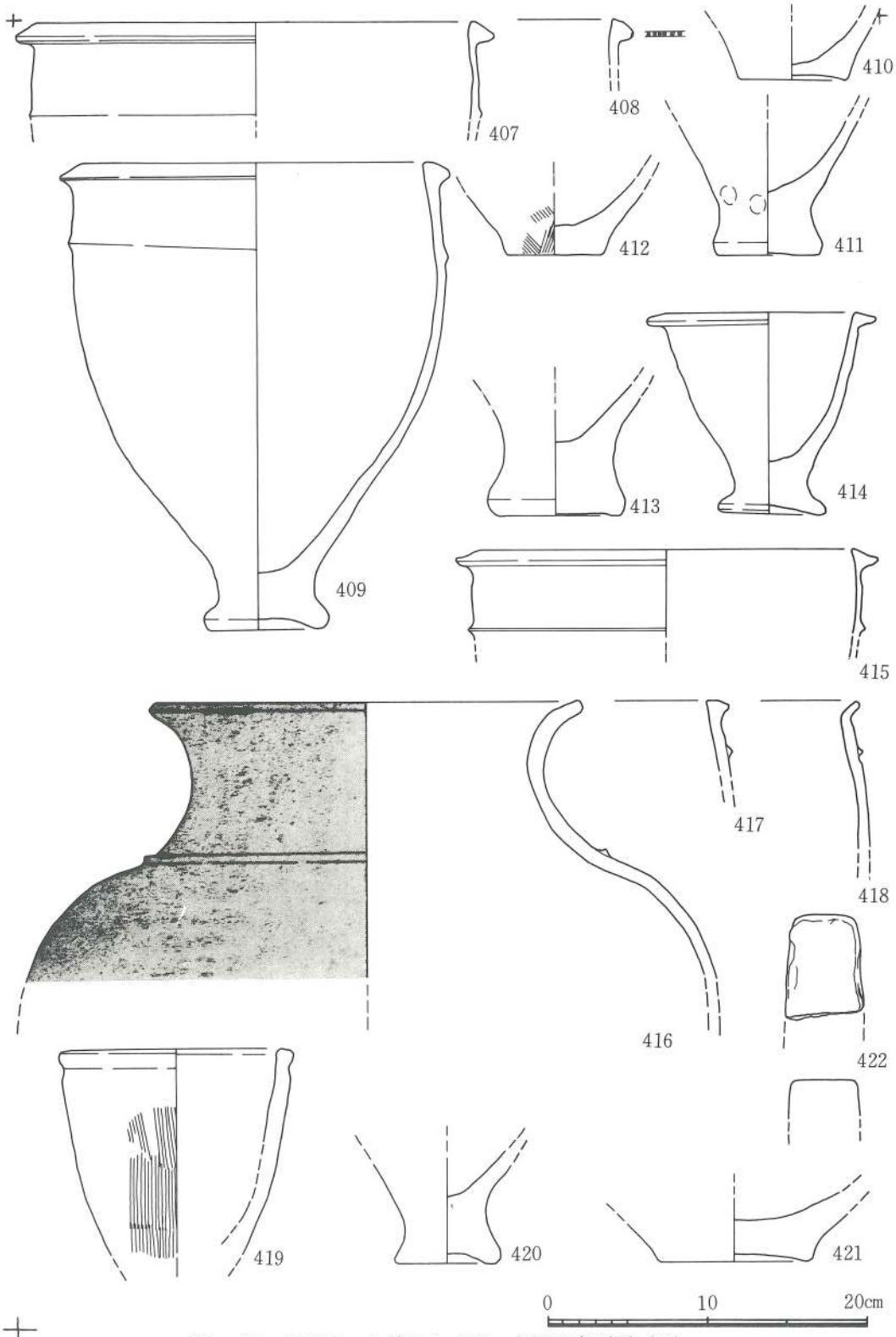


Fig. 77　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（8）
(407～411 SK 058, 412～415 SK 059, 416～422 SK 060)

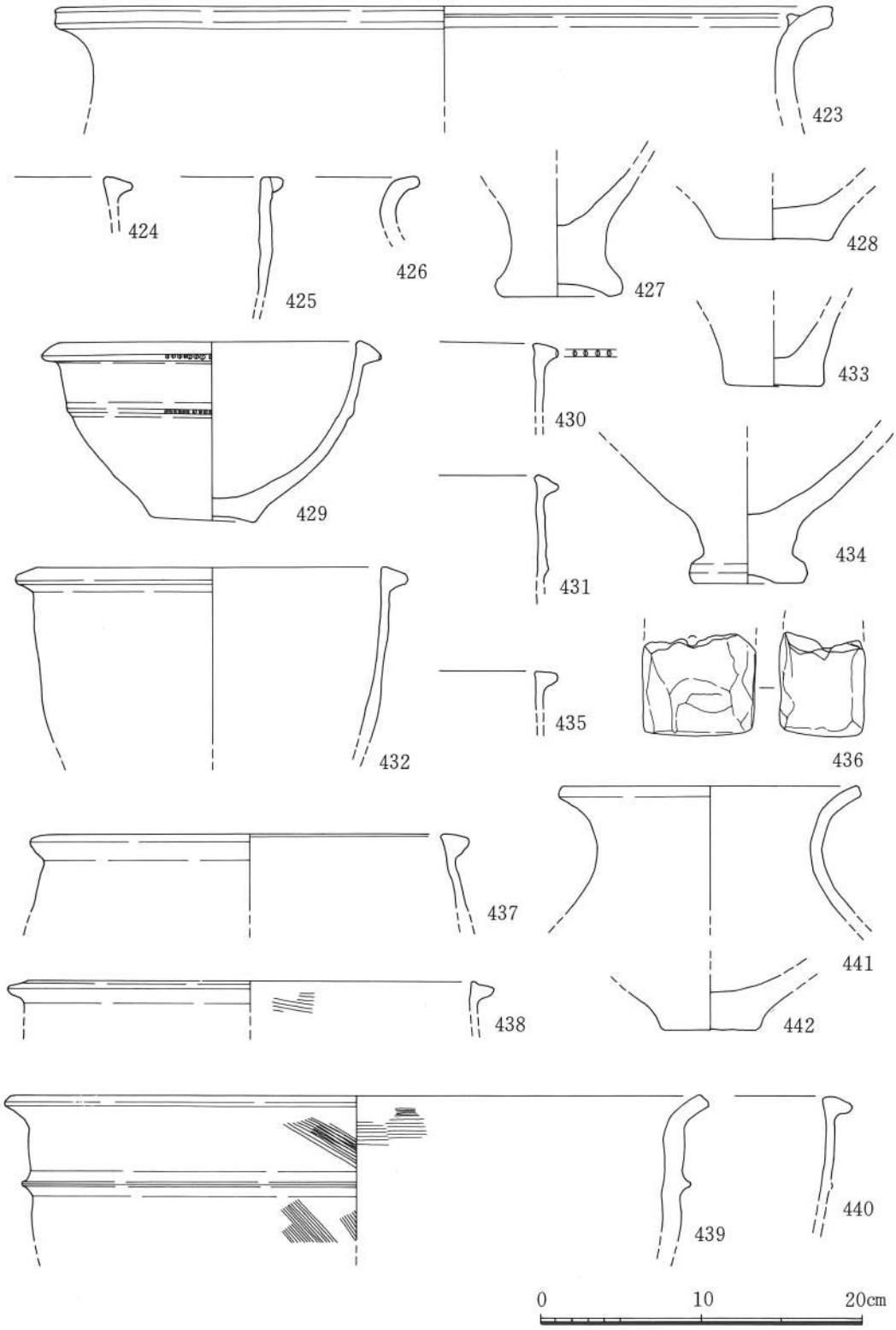


Fig. 78　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（9）
(423～428 SK 061, 429～434 SK 062, 435・436 SK 063, 437～442 SK 066)

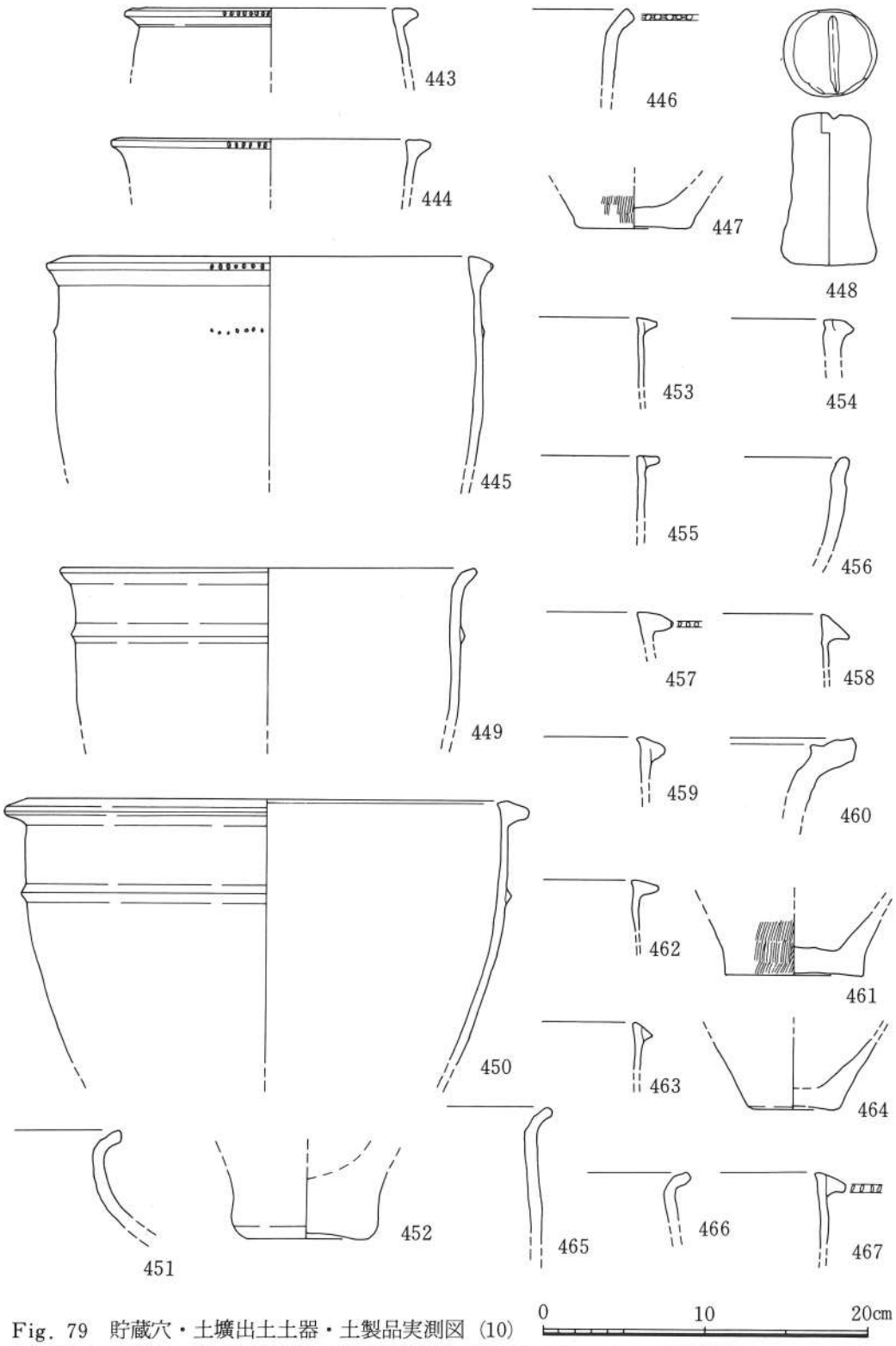


Fig. 79　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（10）

（443～448 SK 068, 449～452 SK 071, 453・454 SK 074, 455・456 SK 075, 457～460 SK 076, 461～464 SK 078, 465～467 SK 079）

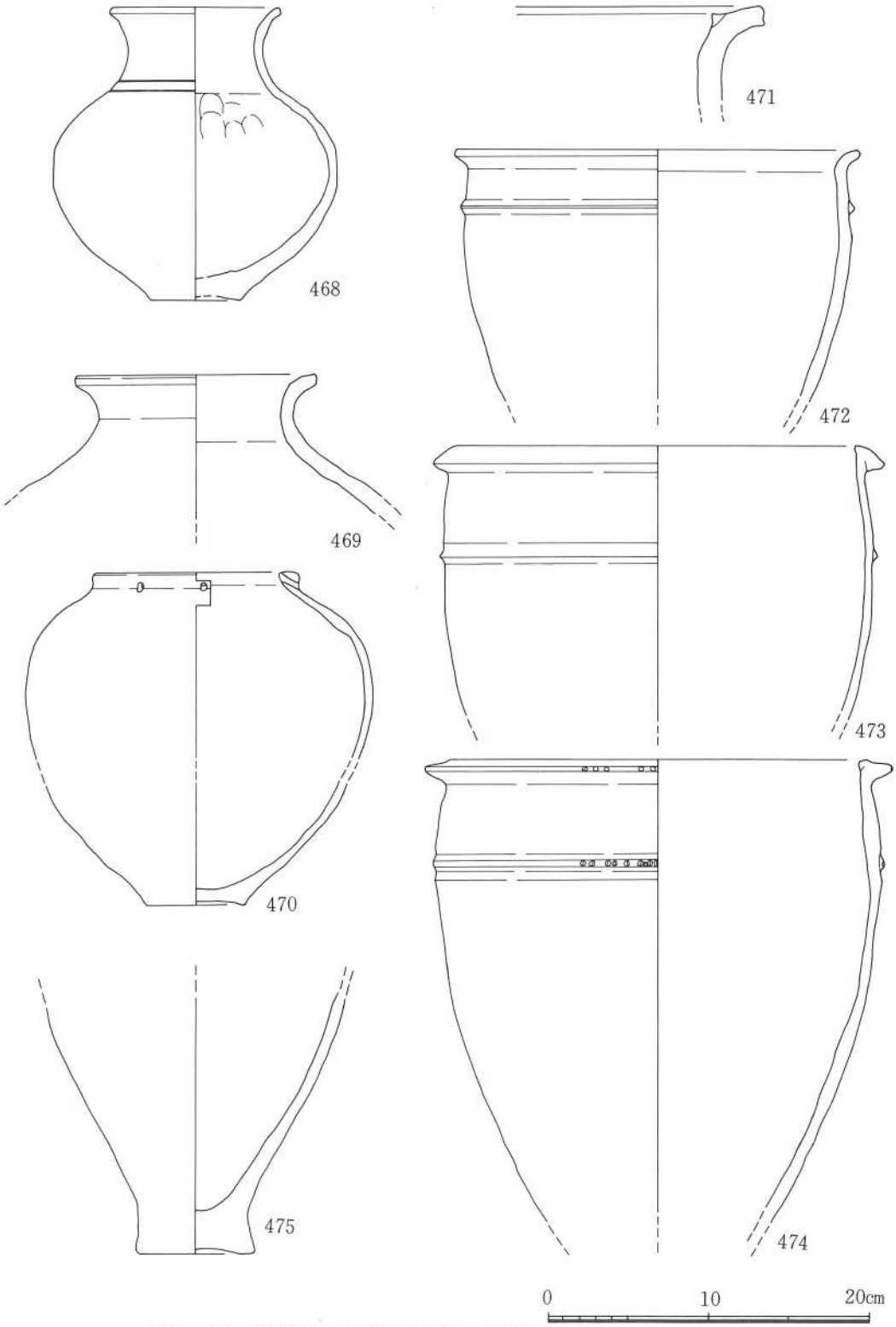


Fig. 80　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（11）
(468～474 SK 072)

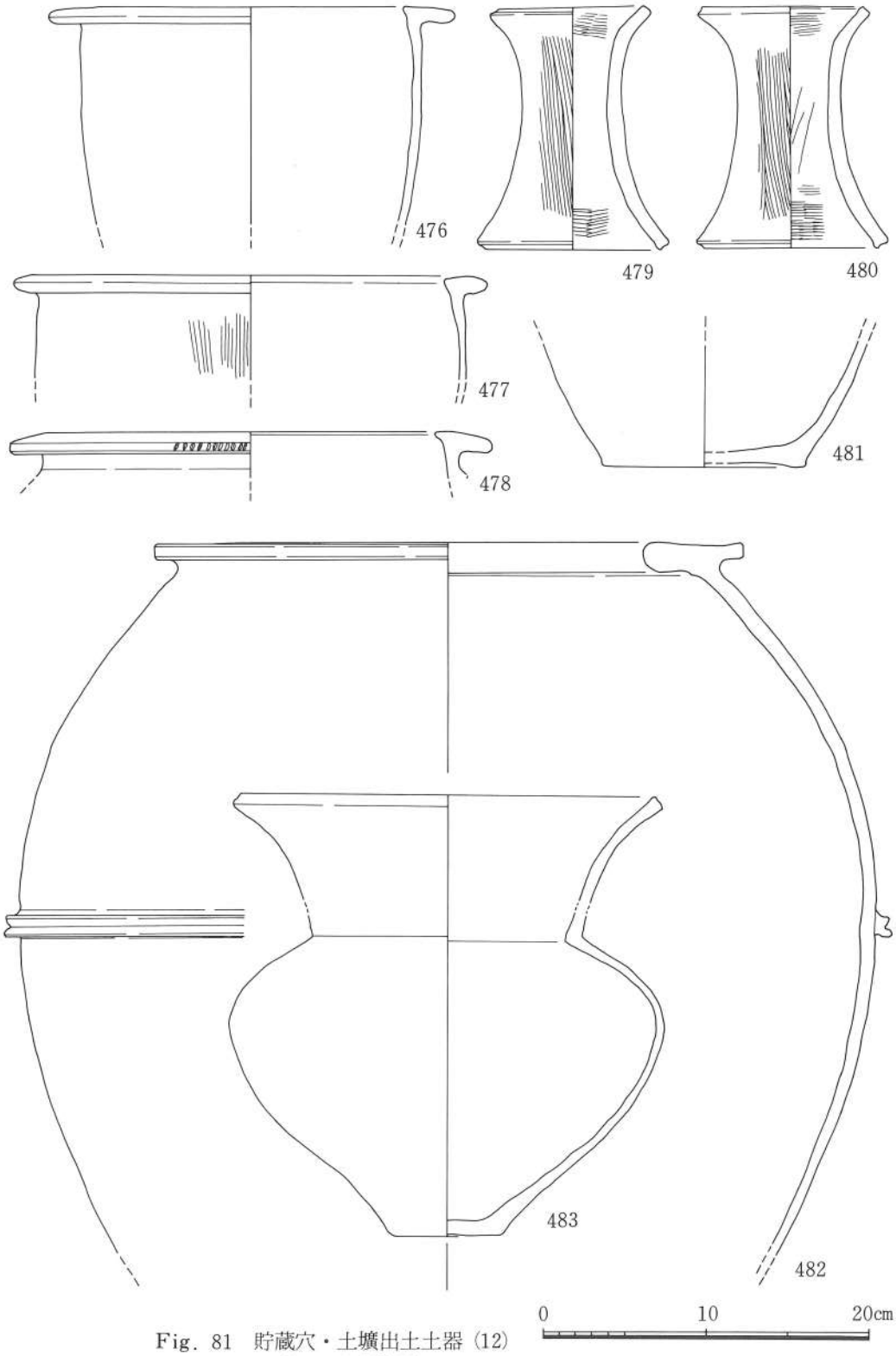


Fig. 81　貯蔵穴・土壙出土土器 (12)
(476～483 SK 086)

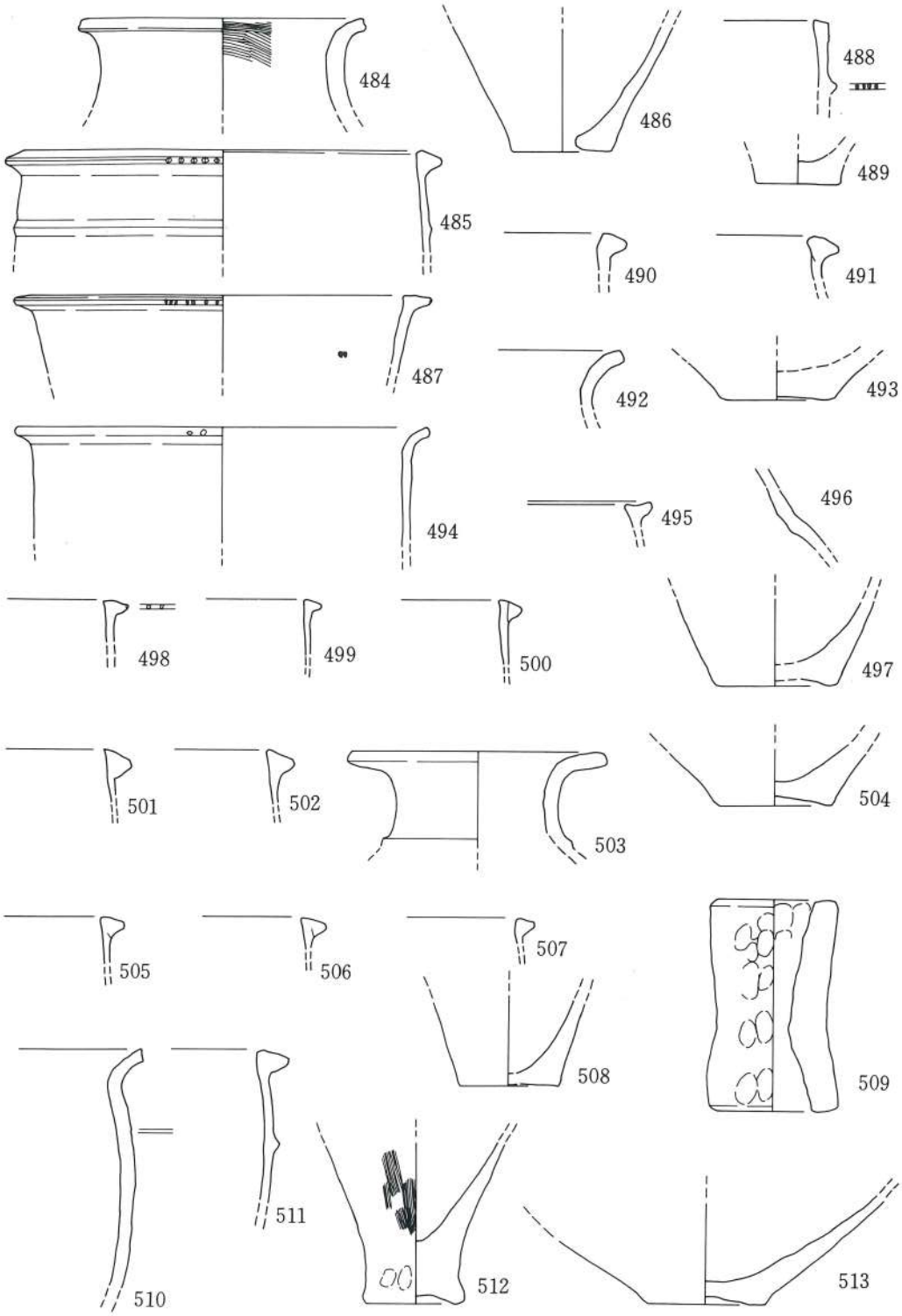


Fig. 82　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図（13）　0　10　20cm

（484～486 SK 080, 487 SK 081, 488・489 SK 083, 490～493 SK 084, 494～497 SK 092, 498～500 SK 095, 501～504 SK 096, 505 SK 097, 506 SK 098, 507・508 SK 105, 509 SK 106, 510～513 SK 111）

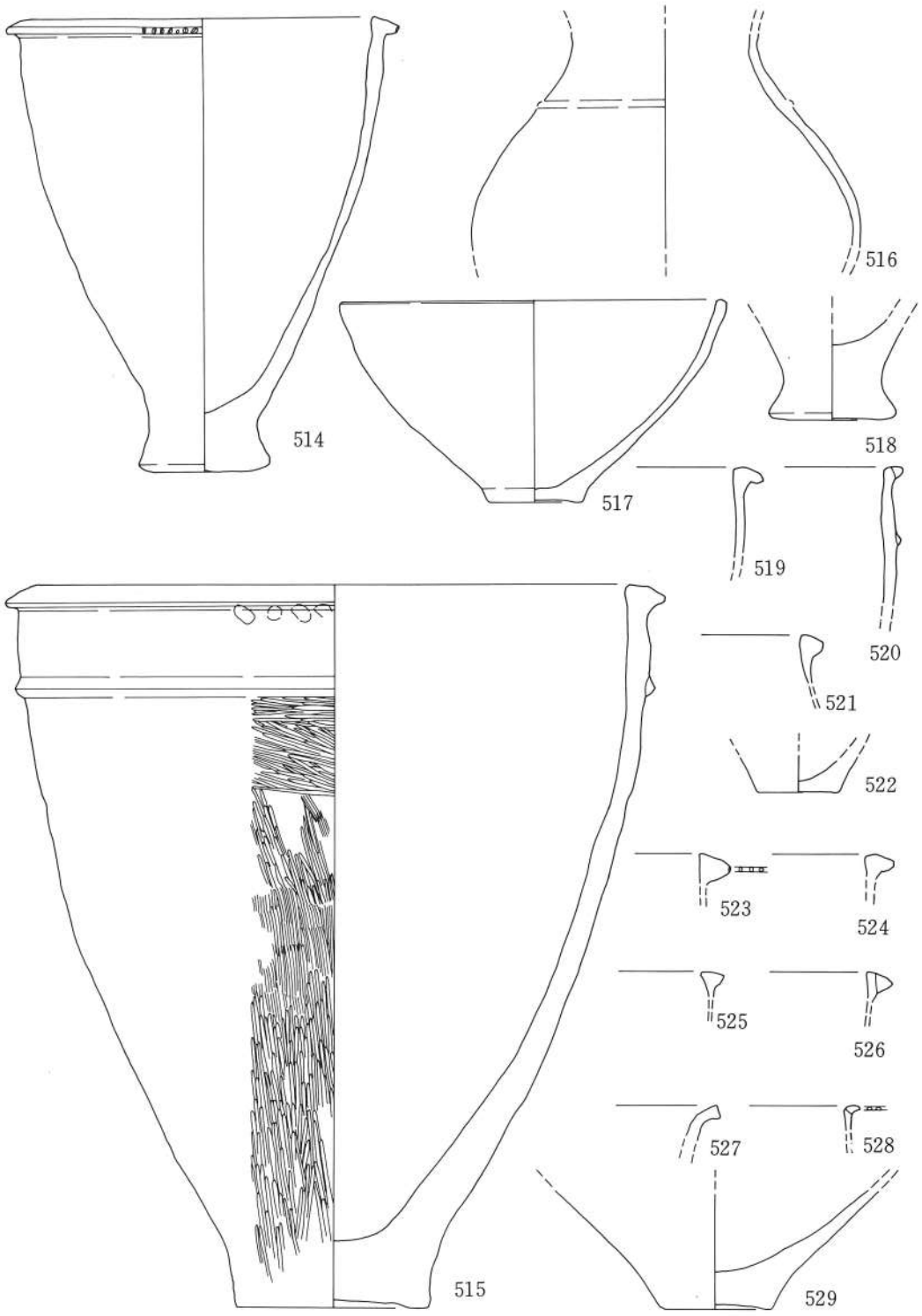


Fig. 83　貯蔵穴・土壙出土土器・土製品実測図 (14)

(514～516 SK 110, 517 SK 112, 518 SK 116, 519・520 SK 117, 521・522 SK 118, 523・524 SK 119, 525・526 SK 123, 527～529 SK 148)

石器・石製品・鉄製品

石器・石製品としては石鏃・石斧・石包丁・石刃・スクレイパー状の石器・砥石・磨石・叩き石・石皿・紡錘車・勾玉などが出土した。鉄製品としては鉄鎌状の鉄片が１つある。

石鏃

石鏃は92点出土した。うち磨製石鏃は３点で他はすべて打製のものであったが、形態は平基式、凹基式、柳葉形のものに分れる。

磨製石鏃はすべて平基式で、全長が短かい小形のもの（530）と幅の割に全長が長いもの（531）、これと同形と考えられる大形のもの（532）に分れる。石材はすべて凝灰岩質のものである。

打製石鏃は平基式、凹基式、柳葉形のものに分類されるが、個体数は凹基式のものが最も多く、次いで柳葉形のものが多く、平基式のものは極端に少ない。平基式のものは二等辺三角形をなすが、２辺が湾曲するもの（533）と直線的なもの（534）がある。双方ともサヌカイト製だが、他に黒曜石製のものも存在する。凹基式のもの（535～551）は形態が多様である。基部の抉りが大きいもの（538・539・543はわずかしか出土しておらず、側辺から脚部にかけて湾曲する。538は黒曜石、539・543はサヌカイト製である。基部の抉りが小さいものは正三角形に近い形態のものと（540～544）と二等辺三角形に近いもの（535～537・545～551）に大別されるが、それぞれ、側縁が直線的なものと湾曲するものに分れる。石材はすべての形態で、黒曜石・サヌカイト両者が用いられている。柳葉形のもの（552～565）にも形態が種々ある。側縁が緩やかに湾曲するもの（552～554、561～565）、側縁が湾曲するが最大幅部が基部に寄っているもの（557～560）、側縁が角ばり菱形に近くなるもの（555・556）などに分れる。石材はサヌカイトが圧倒的に多く、556・563など数点だけが黒曜石製である。

出土した89点の打製石鏃に用いられた石材は黒曜石24点、サヌカイト65点で、その割合は約１：３となっている。

Tab. 3　石鏃一覧表

（　　）は残存法量

番号	出土遺構	法量（cm・g）				石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ	ob.黒曜石 an.サヌカイト	
530	SB069	2.95	1.6	0.2	1.35	スレート	平基式　磨製
531	SB041	3.8	1.4	0.28	1.85	〃	〃　　〃
532	SB060	(3.7)	1.85	0.3	(3.40)	〃	〃　　〃
533	SB135	2.3	1.8	0.3	1.30	an.	〃　主剥離面を残す
534	SK068	2.6	2.35	0.6	2.90	an.	〃
535	SB113	1.5	1.25	0.4	0.45	an.	凹基式
536	SB001	1.85	1.4	0.3	0.5	ob.	〃
537	SB093	2.0	1.65	0.4	0.95	an.	〃
538	SK123	2.2	1.6	0.25	0.90	ob.	〃
539	SB090	2.5	1.6	0.45	1.20	an.	〃
540	SB089	1.6	1.7	0.4	0.70	ob.乳潮	〃
541	SB103	2.3	2.25	0.4	1.55	an.	〃

番号	出土遺構	法量（cm・g）				石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ	ob.黒曜石 an.サヌカイト	
542	SB090	2.15	(2.5)	0.35	(1.65)	an.	凹基式
543	SB103	2.8	2.3	0.4	1.95	an.	〃
544	SB090	(3.6)	3.3	1.3	(11.80)	an.	〃
545	SB113	2.9	(1.6)	0.35	(1.55)	ob.	〃
546	SK052	2.8	2.3	0.65	3.05	an.	〃
547	表採	2.8	2.0	0.6	2.50	ob.	〃
548	SB086	2.1	1.8	0.4	0.85	an.	〃
549	SB113	2.55	1.6	0.4	1.25	an.	〃
550	SB090	(2.0)	(2.1)	0.4	(1.10)	an.	〃
551	SB135	(2.7)	2.3	0.55	(2.20)	an.	〃
552	SB081	2.8	1.0	0.5	1.20	an.	柳葉形
553	SB001	3.2	1.3	0.6	2.20	an.	〃　主剝離面を残す
554	SK123	3.9	1.6	0.4	2.45	an.	〃
555	SK084	3.2	1.3	0.5	1.60	an.	〃
556	SB077	(3.9)	1.6	0.6	(2.60)	ob.	〃
557	SB087	4.0	1.7	0.58	3.80	an.	〃
558	SK016	3.2	1.1	0.5	1.50	an.	〃
559	SK117	(2.6)	1.0	0.25	(0.80)	an.	〃
560	SB135	(2.4)	1.2	0.5	(1.15)	an.	〃
561	SB135	(2.75)	1.4	0.4	(1.80)	an.	〃
562	SB135	(3.1)	1.0	0.65	(1.55)	an.	〃
563	SB135	3.1	1.25	0.75	2.45	ob.	〃
564	SB135	3.8	1.65	0.8	3.85	an.	〃
565	SB135	6.3	1.85	0.8	8.60	an.	〃

石斧

石斧には打製石斧と磨製石斧がある。

打製石斧は3点出土した。形態は長方形に近い長楕円形の石鍬状の扁平石斧である。石材は緑泥片岩でもろくなっている。

磨製石斧には小形の石ノミ状の柱状片刃石斧（566）、扁平片刃石斧（567・568・569・571）、柱状片刃石斧（抉りが入ると思われるもの、570・572・573）、刃部が丸いもの（577）、太形蛤刃石斧（578～583）などがある。これらのうち扁平片刃石斧は幅広のもの（568）と縦長のものに分類されるが、後者には大・中・小と法量的に分けられ、用途による使い分けが窺える。石材は片刃石斧類は主に石英安山岩質のもので、577は蛇紋岩、太形蛤刃石斧は玄武岩である。

石包丁（584～590）

石包丁は出土数が少なく、また完形品もない。破片から復元するとすべて外湾刃半月形の石包丁である可能性が強い。石材は凝灰岩質。全体を復元できそうな2点の法量は587が復元長16cm弱、幅6.1cm、厚さ0.4cm、590が復元長10.4cm、幅4.6cm、厚さ0.7cmである。

剝片・削器（595～602）

石鏃以外の打製石器として黒曜石やサヌカイトを用いた削器状の石器や剝片がある。595～597は黒曜石製の剝片で、595・596は横長剝片で、595は長さ3.0cm、幅3.4cm、厚さ0.85cm、596は長さ2.4cm、幅3.85cm、厚さ0.7cm、597は縦長剝片で、長さ3.3cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmである。3点とも自然面を打面としており、打角はそれぞれ138°、103°、140°である。

598～602は削器状の石器で、すべてサヌカイト製である。598・599は縦長剝片を用いており、598は片縁は両面、他は片面から深形のウロコ状調整を施す。現存長6.6cm、幅2.8cm、厚さ1.15cm。599は上半部の片面にウロコ状の極浅形調整を施す。長さ5.9cm、幅2.75cm、厚さ0.7cm。600～602は横長剝片を用いた横形削器状の石器で、いずれも両面調整を施す。600は長さ5.6cm、現存幅5.5cm、厚さ1.3cm。601は長さ5.1cm、幅5.25cm、厚さ2.0cm。602は長さ5.1cm、幅6.7cm、厚さ0.75cm。

紡錘車（591～594）

石製紡錘車は4点出土した。591は復元径4.3cm、厚さ0.4cm。592は復元径5.6cm、厚さ0.5cm。593は径5.7cm、厚さ0.65cm、孔径0.6cm。594は径5.85cm、厚さ0.5cm、孔径0.8cm。

砥石（603～614）

すべて砂岩を用いており、形態も様々である。砂岩の質の粗密により荒砥・中砥に分けられる。

Tab. 4　砥石一覧表

（　　）は残存法量

番号	出土遺構	法量（cm）			備考
		長さ	幅	厚さ	
603	ＳＢ041	(3.6)	1.6	1.4	中砥、４面使用
604	ＳＫ023	7.6	2.4	1.9	〃　〃
605	ＳＢ069	6.8	5.55	4.6	荒砥、　〃
606	ＳＢ069	(7.8)	5.2	2.1	中砥、２面使用
607	ＳＢ069	(6.1)	3.1	1.85	〃　４面使用
608	ＳＢ085	7.5	3.8	3.1	荒砥、　〃
609	ＳＢ048	(6.2)	3.7	2.4	〃
610	ＳＢ034	(6.85)	4.3	1.1	〃　２面使用
611	ＳＫ016	12.2	5.85	4.5	〃　２面剝落（４面使用？）
612	ＳＢ088	(14.0)	7.1	5.2	〃　４面使用
613	ＳＢ034	13.45	6.8	1.2	〃　〃
614	ＳＢ041	(19.05)	10.25	8.3	〃　２面剝落（４面使用？）

石皿（615・616）

石皿状の破片が２点出土した。どちらも砂岩製で、615が現存長8.9cm、現存幅9.4cm、最大厚3.1cm、616が現存長6.5cm、現存幅8.4cm、最大厚2.7cm。

叩き石（617）

叩き石は１点出土した。砂岩製で、現存長10.1cm、最大幅3.85cm、最大厚3.1cm。先端には使用痕が残る。

磨石（618～621）

619は楕円形になると考えられるが、他は正円形に近い。618は径9.8cm、厚さ6.1cm、619は厚さ4.85cm、620は径9.2cm、厚さ5.4cm、621は径12.2cm、厚さ5.5cmである。618・619は玄武岩質、620は砂岩、621は花崗岩である。

勾玉（622・623）

622はＳＢ069出土で、頭は角ばり尻は尖り気味である。頭の平坦面に土字状の刻線をつけ、片側の側面から背部にかけても刻線がつくが、文様をなしているとは考え難い。長さ3.1cm、

最大幅1.0cm、最大厚0.8cm。暗い灰緑色で、表面は比較的光沢がある。

623はＳＢ093出土で、本来完形品であったが調査時に二折したものである。頭は丸味をもつが、尻は角ばるものと考えられる。頭の前に大きな刻みをつけ、Ｊ字頭状になっている。長さ4.5cm、最大幅2.1cm、最大厚1.2cm。明るい灰緑色でうぐいす色に近く、表面の光沢は弱い。欠損部では板状に剝離している。

鉄器片（624）

ＳＢ047出土の唯一の鉄器である。錆がひどく復元が困難であるが、基部が厚くなり、折れ曲っているものと考えられる。おそらく鉄鎌の破片であろう。現存長3.7cm、幅3.6cm、厚さ0.3cm。

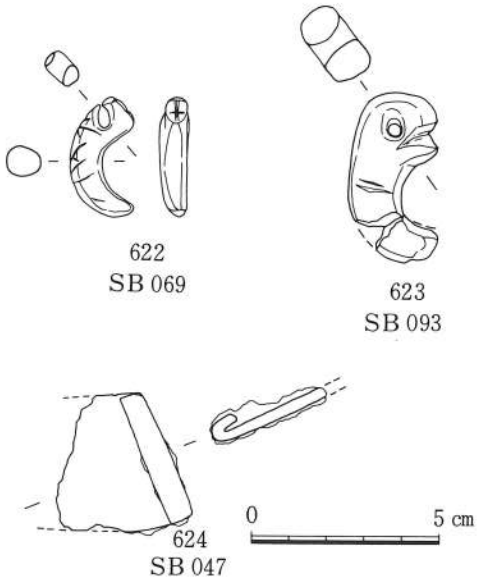


Fig 84　勾玉・鉄器実測図

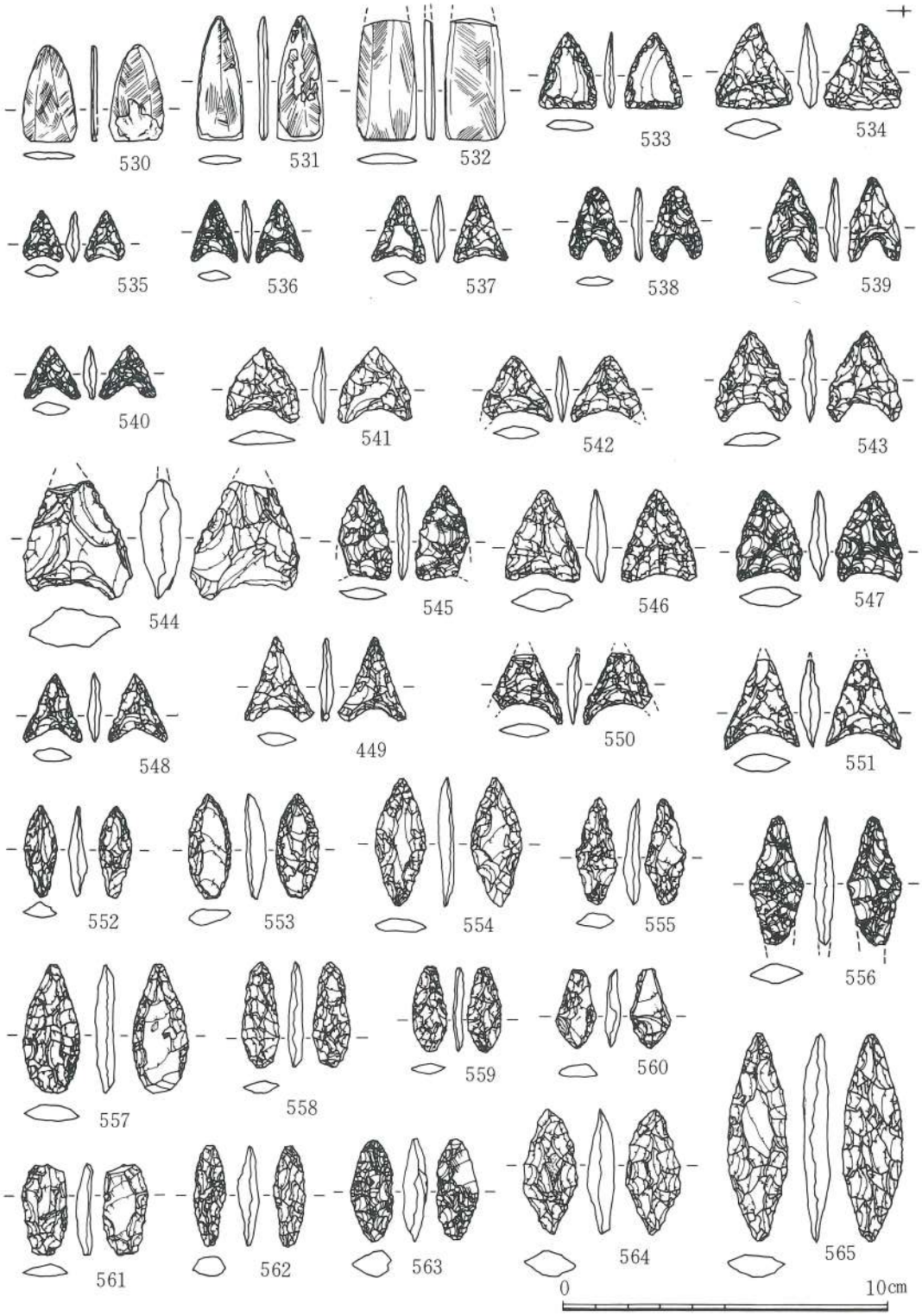

530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
449
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
0
10cm

Fig. 85　石鏃実測図

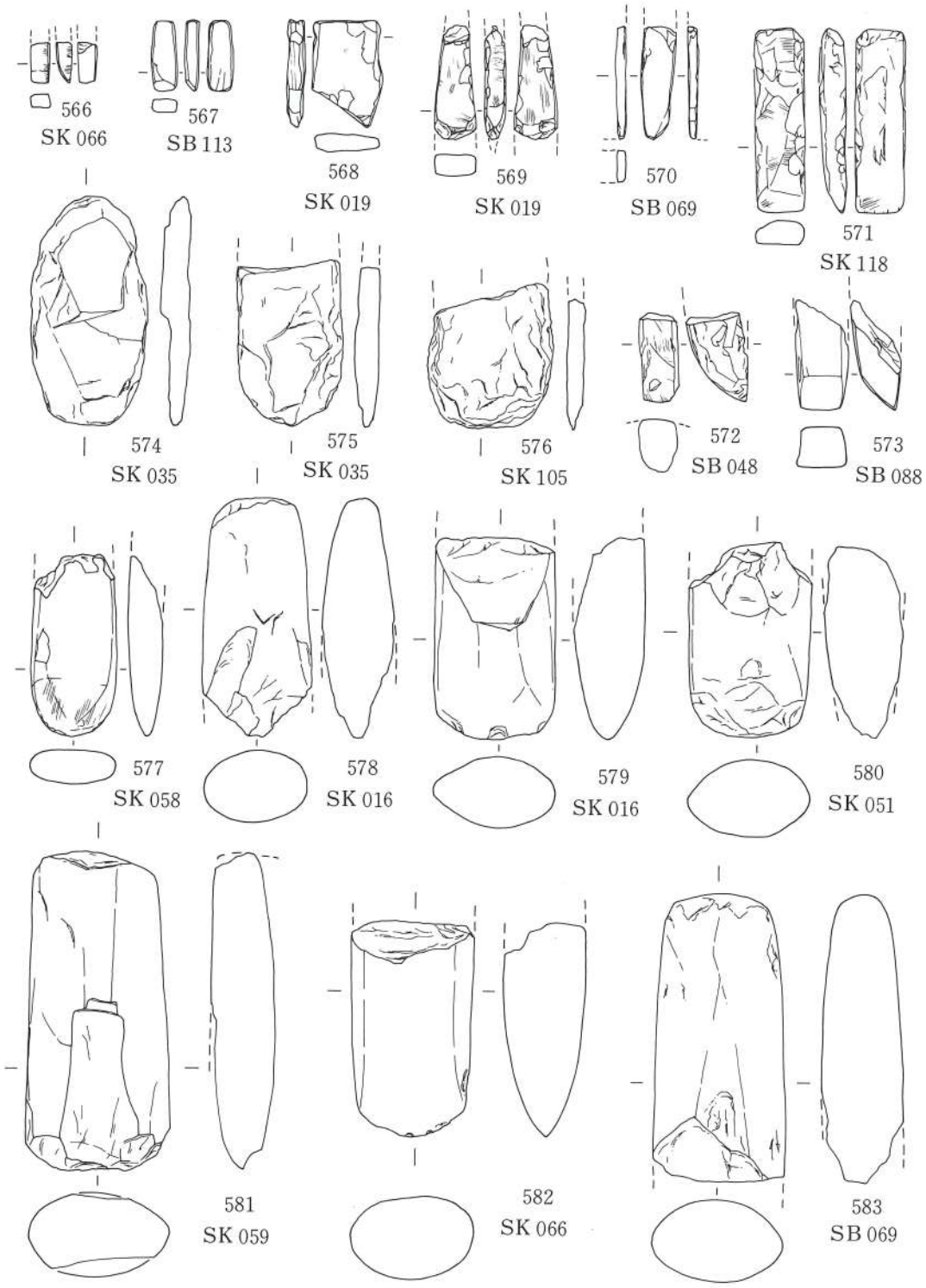

566
SK 066
567
SB 113
568
SK 019
569
SK 019
570
SB 069
571
SK 118
574
SK 035
575
SK 035
576
SK 105
572
SB 048
573
SB 088
577
SK 058
578
SK 016
579
SK 016
580
SK 051
581
SK 059
582
SK 066
583
SB 069
0
10
20cm

Fig. 86 石斧実測図

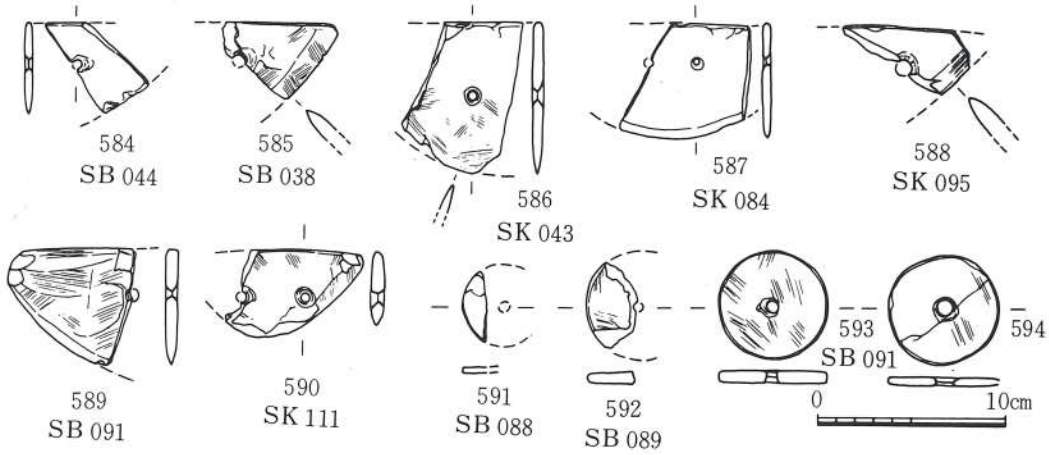


Fig. 87 砲丁・石製紡錘車実測図

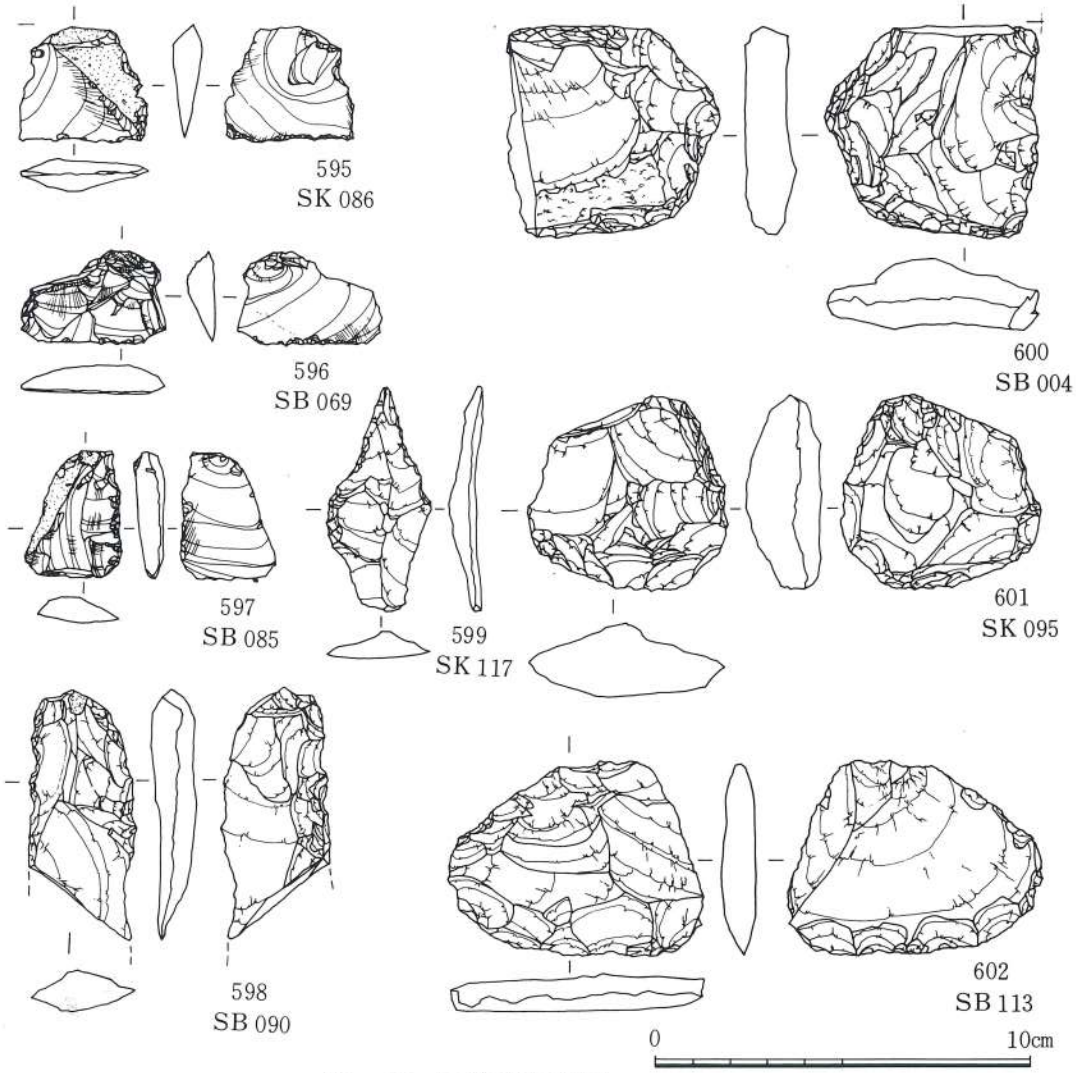


Fig. 88 打製石器実測図

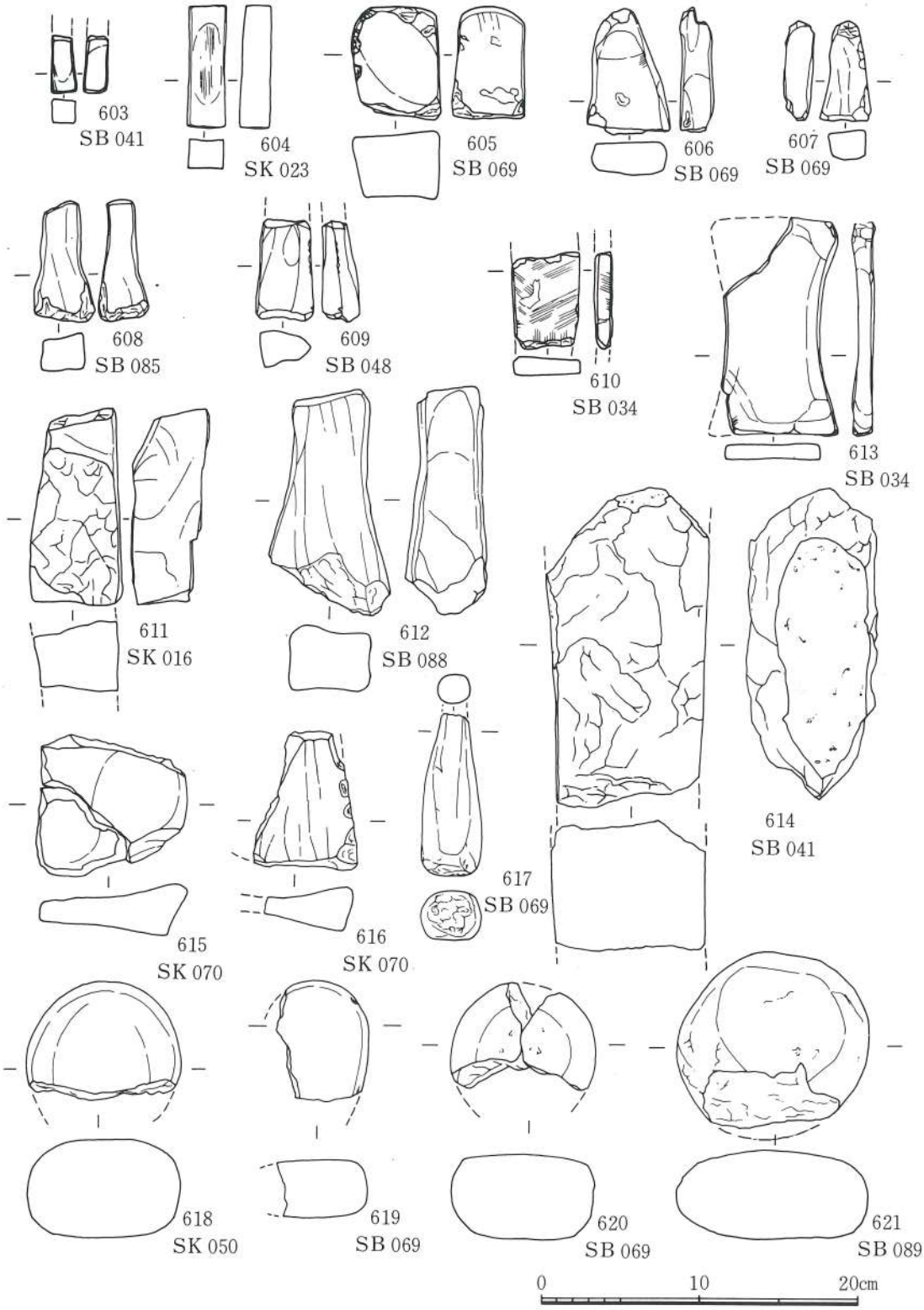


Fig. 89 砥石・石皿・叩石・磨石実測図

(2) 古墳時代の遺物

古墳時代前期の遺物としては円形周溝墓の周溝から出土した土師器の壺と甕それぞれ1個体のみである。

壺（625） いわゆる小形丸底壺と呼ばれるもので、球形の器体に直線的に開く口頸部がつく。体部外面はハケ目、内面ヘラケズリ、口頸部内外面はヨコナデ調整である。口径10.3cm、器高10.8cm、褐色で胎土には細かい砂粒を含む。外面には黒色の漆状の樹脂を塗布している。

甕（626） 口頸部・底部を欠く。体部は球形で、下位の器壁が厚くなっている。外面ハケメ、内面ヘラケズリ調整である。最大径35.0cm、残存器高27.4cm、褐色で、胎土には0.5～5mmの砂粒を含む。

(3) 平安時代の遺物

平安時代の遺物としては、火葬墓から出土した土師器皿1個体、土師器杯3個体、須恵器壺1個体の計5個体の土器があげられる。

皿（630） 平底の底部から直線的に大きく開く比較的短い体部をもつもので、成形はロクロによる水挽きでなされ底部はヘラで切り離しされている。口径18.8cm、底径10.7cm、器高2.4cm。明るい黄褐色で、胎土には砂粒をほとんど含まない。

杯 3個体とも平底の底部から直線的に上方に開く体部をもつもので、成形はロクロによる水挽きでなされ、底部はヘラ切り離しされている。3個体ともそれぞれ細部で異なる。

底部と体部の屈曲部が角ばり、口縁部がわずかに外反するもの（627）、体部が直線的に開きそのまま口縁部となるもの（628）、底部と体部の屈曲部が丸味をもち口縁部がわずかに外反するもの（629）の3種である。色調、胎土は上記の皿と同一である。

壺（631） 肩の張る平底の須恵器壺である。肩は張りが強く断面三角形になり突出する。肩部上位には高台状の突帯が1条めぐる。頸部以上は欠損しているが、おそらく口頸部を欠いて蔵骨器として用いたものである。底部は中央部が突出する不安定な平底になっているが、底部と体部の境に低い高台がついていたかも知れない。成形は粘土紐の輪積みによるものと考えられ、ロクロにより内外面を整形している。肩部径24.0cm、残存器高約20cmである。内面明黄灰色、外面黒灰色ないし明黄灰色で、胎土には細かい砂粒をわずかに含む。

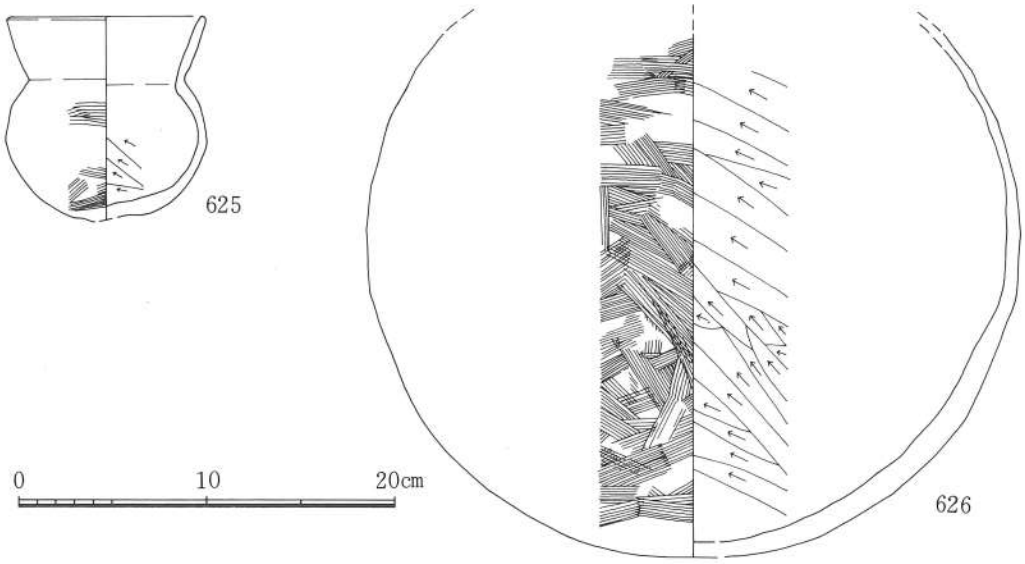


Fig. 90　円形周溝墓出土土師器実測図

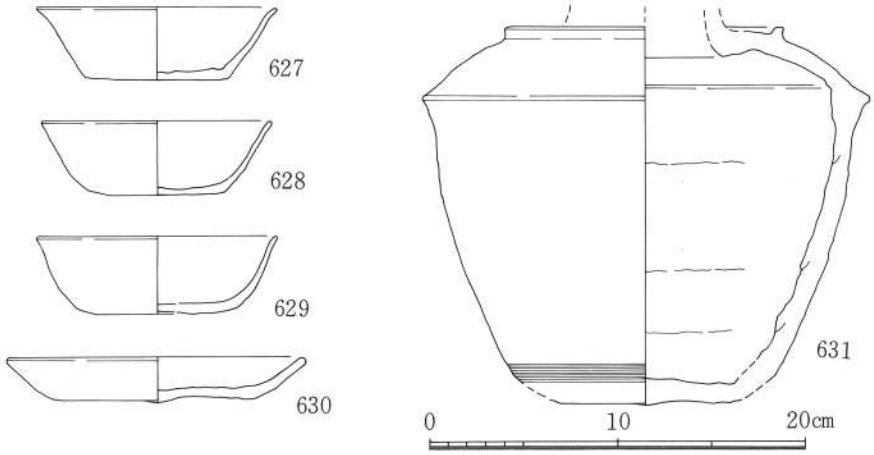


Fig. 91　火葬墓出土土師器・須恵器実測図

Ⅳ. くずれ塚古墳

1. 概　要

くずれ塚古墳は造成予定地内検出遺構のうち唯一の古墳であり、東段丘の弥生時代の集落を中心とする一本谷遺跡とは谷水田を挟んで西方約250mの位置にあたるので、別に報告する。

くずれ塚古墳が存在する西段丘は、第2次世界大戦最中の昭和17・18年に建設された目達原飛行場の東側にあたり、軍用機の掩体（えんたい）などの施設が構築されていた地域である。調査時においても、古墳の周辺にいくつかの掩体跡などが存在しており、この段丘の西側は元来の地形が破壊されている部分も少なくなかった。

くずれ塚は、西段丘西に設けられた三田川自動車学校と北側の土取跡に接する北西隅に遺存していた。標高約26.5mの位置で四方への見通しの良い位置を占めている。

この古墳は以前より知られており、簡単な計測を行なわれている。目達原古墳群の報告書(註[1])にも少し触れられている。

「無名塚の東方約二百米にくずれ塚というのがある。径六十尺高さ十尺の円墳であるが元横口式石室があったらしくその石槨の巨室は下津毛部落の石橋に使用したと言っている。墳の中央部に巾十尺位の大溝が貫通しているのでその所伝は正しいと思われる。埴輪や葺石は見られないが可なり大きい古墳であって或は只字式の石室ではなかったかと考えられているので参考のためあげておく。」

報告によれば、この古墳は飛行場建設の際破壊を免れたことや、分布地図中の大体の位置、および上記報告文の内容などから、今回調査を実施した古墳が、くずれ塚であると断定した。また古墳北側の土取はその後拡大されたことを知り得た。

発掘調査の結果、くずれ塚古墳は復元径20～24m、墳丘が約2m残存する円墳であり、石室はその掘り方から推定して、南西方向に開口する横穴式石室であると判明した。

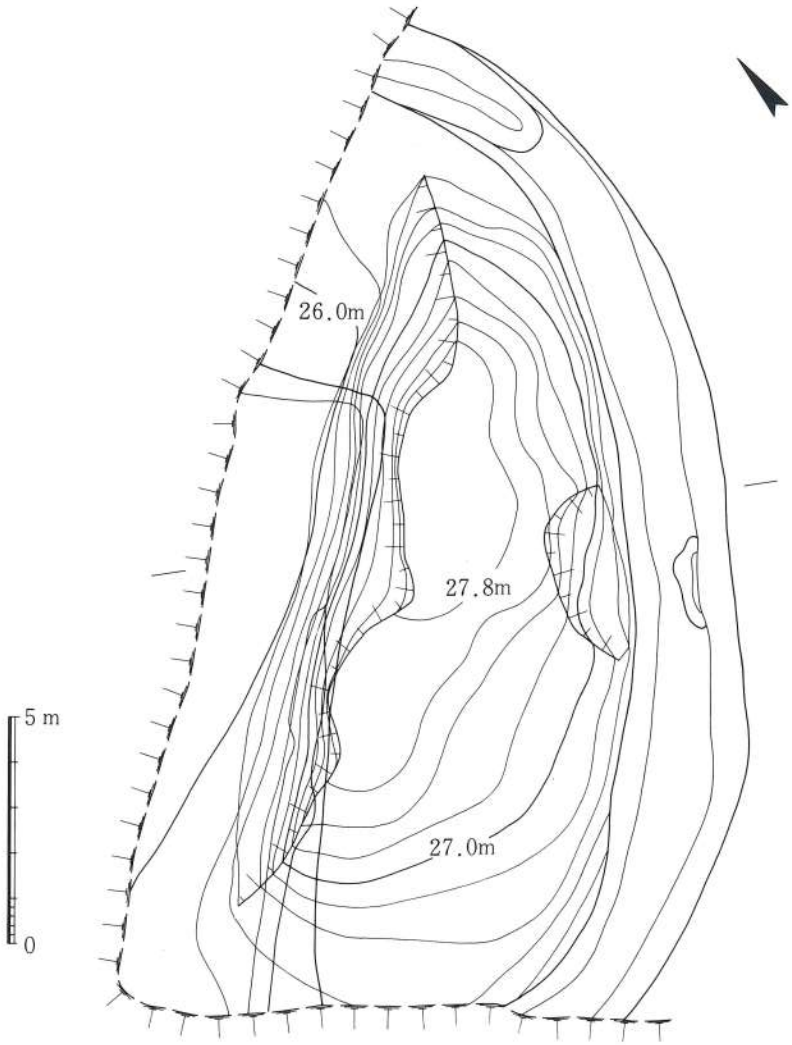
註

松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯1950

2．遺　構

(1) 墳丘・周溝

墳丘は全体の半分弱遺存しており、石室上部から北西側はすでに破壊されていた。周溝が調査区北東隅と南西隅でカーブを強めることから、墳形は正円ではなく、石室方向に長い楕円形であったことが推定される。北東―南西の長さ約24ｍ、南東―北西の長さ約20ｍであったと推定される。



Fig．92　くずれ塚古墳墳丘実測図（表土除去後）

墳丘は旧地表上に構築されており、上部に厚さ５～６㎝の黒色土が存在する。墳丘の積み上げは細かになされている。旧地表の上には30㎝の厚さで石室掘り方の土と考えられる黄褐色粘質土を置き、その上部には黒色土と褐色系統の土を交互に積み上げており、鮮やかな鎬模様となっている。土層断面からみると墳丘は大きく５段階に分けて積み上げ作業を行なっているようである。なお墳丘を覆っていた表土は80～90㎝の厚さであった。

楕円形に巡ると考えられる周溝は、幅1.7～2.9ｍ、深さ0.16～0.55ｍであるが深さは0.45ｍ前後が平均的である。周溝の断面は下面が平坦となるいわゆる梯形に近く、流れ込んだ土は褐色系統の土で、レンズ状に堆積している。

遺物としては、墳丘覆土から須恵器甕の口頸部片、円筒埴輪裾部片、土師器高杯片の他、上層からは中世の土師器杯、白磁碗などを出土し、周溝内では特に西部から須恵器杯・瓶・短頸壺・高杯・甕口頸部片などを出土した。

(2) 石　室

石室は破壊がひどく、石室を構成していた石材のほとんどが抜き取られ、搬出されてしまっていた。また石室北西側は土取りにより破壊され、石室の復元を困難にしている。石室は旧地表から掘り込まれた掘り方に設けられているが、石材の抜き跡によってしかその構造を復元することができない。

石室の掘り方は旧地表面から約1.3ｍの深さに掘り込まれており、その壁際には石室床面から深さ約0.2ｍの溝状の壙が巡るが、これが玄室の腰石等の石材を据えた跡や、石材を抜き取る際の掘り跡と考えられる。玄室と考えられる部分の床面には人頭大から拳大の河原石が集石して検出され、奥壁と考えられる部分から南西約10ｍ付近では約２ｍ周囲の範囲に人頭大から拳大の河原石が多数存在しており、閉塞石の一部であろうことが推測された。このような状況から、石室は主軸方向がＮ50°Ｅをとり南西に開口する全長約10ｍの横穴式石室であることが推定された。石室は石材の抜き跡から、玄室はそれぞれ長さ２ｍ前後の複室で構成され、約3.5ｍの羨道がつく石室構造であった可能性が強い。

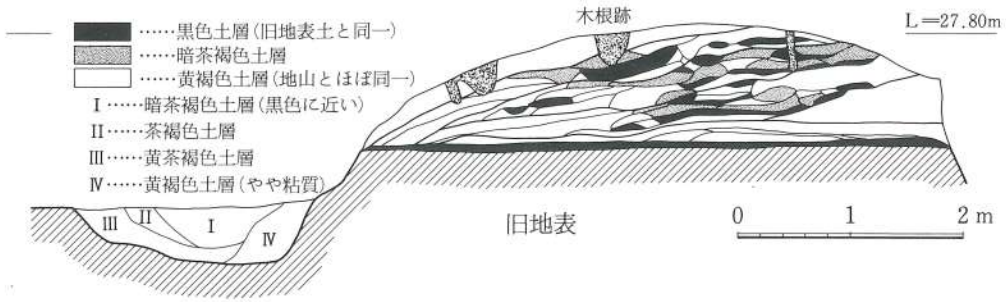


Fig. 93くずれ塚古墳墳丘・周溝断面土層図

遺物としては玄室内の後室と推定される部分から須恵器平瓶や竈の裾部、銅碗、中世の土師器杯などが、前室と推定される部分から鉄鏃・馬具などの鉄製品・耳環・ガラス小玉などの装身具などが出土したが、くずれ塚で特に多数の遺物を出土したのは羨門と推定される集石周辺及びその前面にかけてであった。須恵器杯・高杯・甕・平瓶・提瓶・甕・高台付壺・土師器杯の他円筒埴輪片など多数であるが、閉塞石と考えられる塊石に混って銅鏡1個体分の破片がかたまって発見された。

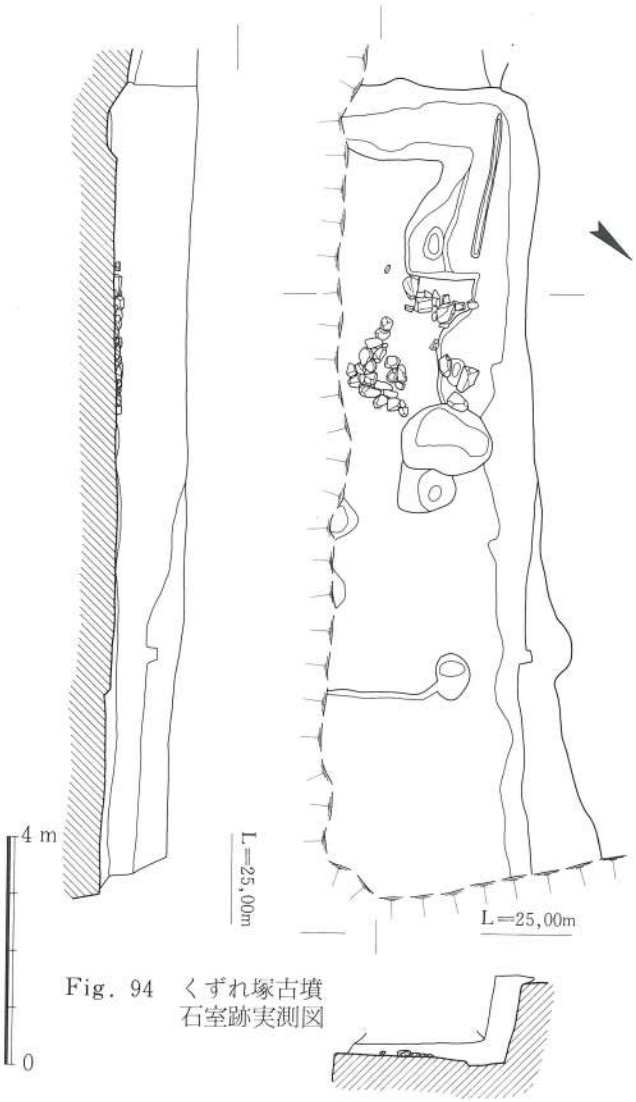


Fig. 94 くずれ塚古墳石室跡実測図

3. 遺　物

くずれ塚古墳から出土した遺物には土師器、須恵器などの土器や炻器・磁器、利器、馬具などの鉄器の他に銅鏡、銅碗、耳環、ガラス製丸玉がある。これらの遺物は時期的にはくずれ塚古墳に伴なう遺物と、古墳に伴なわないその他の遺物に分かれる。

(1) 古墳時代の遺物

くずれ塚古墳に伴なう遺物としては、主に石室跡や石室前面、周溝、墳丘内から出土した。

須恵器

須恵器には蓋・杯・高杯・壺・甕・甕・平瓶・提瓶などがある。形態や法量により**蓋A・蓋Ba・蓋Bb・蓋Bc・杯Aa・杯Ab・杯Ba・杯Bb・高杯A・高杯Bb・高杯Bb・高杯Bc・**

壺A・甕A・甕Ba・甕Bb・瓶AⅠ・瓶B・平瓶・平瓶B・提瓶Aに分類される。

蓋A（632）　わずかに丸味をもつ天井部に外へひらく口縁部がつくもので口縁部のかえりやつまみがつかない。天井部と口縁部の境外面には稜をもち、口縁端部は鋭いが丸い。天井部外面にヘラ記号がつく。ロクロ成形によるが、天井部外面はヘラケズリ。口径11.9cm、器高4.0cm。

蓋B（633～636）　なだらかに下る低い天井部につまみがつき、口縁部にかえりがつく。天井部はヘラケズリで他はロクロナデ調整。細部の違いにより次の3つに細分される。蓋Baは上面の平坦なつまみのつく天井部が直線的に下るもので、かえりは口縁端部より低い。口縁端部・かえり先端はともに鋭い。口径11.0cm、器高3.4cm・蓋Bb（634）は天井部は丸味をもち、中くぼみのある扁平なつまみがつく。口縁端部やかえりのつくりは蓋Baに似るが、先端は丸い。口径11.4cm、器高3.2cm。蓋Bc（635・636）は天井部上面は比較的平坦で、扁平坦で、扁平なつまみと、口縁端部とほぼ同じ高さのかえりがつく。天井部外面にヘラ記号がつくもの（636）もある。635は口径13.8cm、器高2.4cm。636は、口径14.2cm、器高2.6cm。

杯A（637・638）　底体部が丸く、立ちあがりと受部をもつもので、立ちあがりと受部の先端は丸い。底体部下位は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。杯A（637）は底体部が特に丸く、立ちあがりが内傾し、受部は上外方にのびるもので、底部にヘラ記号がつく口径10.0cm、器高4.0cm。杯Ａｂ（638）は底部が平坦で、立ちあがりは内傾した後直立し、受部は上外方にのびる。口径12.3cm、器高4.0cm。

杯B（639・640）　立ちあがりがつかない杯で、底部には外開きの高台がつく。口縁端部は丸い。底部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ調整。杯Ｂａ（639）は底体部はゆるやかに立ちあがり、口縁端部は外反するもので、高台内にヘラ記号がつく。口径12.8cm、器高4.7cm、高台径8.6cm。杯Ｂｂ（640）は底体部が屈曲して直線的に立ちあがるもので、端部は丸い。高台内にヘラ記号がつく。口径13.0cm、器高4.7cm、高台径8.2cm。

高杯A（641）　杯部に立ちあがりをもたないもので、脚部の大半を欠く。杯体部は屈曲して直線的に立ちあがる。ロクロ挽きの際の段がつく。口径9.2cm。

高杯B（642～644）　立ちあがりのつく杯部にラッパ状にひらく脚部がつくもので、ロクロナデ調整により成形されている。立ちあがり、受部とも端部は丸い。杯底体部は丸く、底部を回転ヘラケズリした後、脚部と接合している。主に脚部の形態により3つに細分される。高杯Ｂａ（642）は立ちあがりが内傾し、受部は小さい。脚部は短く、裾部で内傾する。口径10.6cm、器高8.3cm、脚裾部径9.4cm。高杯Ｂｂ（643）は立ちあがりがやや内傾し、受部は水平にのびる。

脚部は長く、裾部では水平に外反し、下方へ屈曲する。口径12.1cm、器高13.9cm、脚裾部径14.9cm、高杯Bc（644）は立ちあがりがつよく内傾し、受部は上外方へのびる。脚部は高杯Bbに較べさらに長くなり裾部は水平に外反し、端部ははねあがる。脚部の上位にはロクロナデによる凹線が2条めぐる。口径10.8cm、器高17.5cm、脚裾部径14.2cm。

壺A（649）　小形の壺で、丸底から内湾する体部は上位で屈曲して肩部をつくり、内傾する口頸部がつく。口縁端部は丸い。肩部に2条の沈線がめぐる。口径3.5cm、器高6.7cm、肩部径9.4cm。

甕A（653）　口頸部の破片である。口頸部は外気味にらく長いもので、口縁部は下方および外に肥厚する。2条の沈線で浮かせた突帯が口縁部下と頸部に2条めぐり、口縁部と上位突帯の間および突帯の間3ヶ所に波状文をめぐらすが、中位の波状文は2条重ねている。ロクロナデ調整。口径40.6cm、口頸部高14.5cm。

甕B（654～659）　外反気味の短い口頸部がつくもので、体部内面は同心円タタキ目、外面は格子状タタキ目の後ロクロナデ、口頸部内外面はロクロナデ調整。口縁部の形態により2つに細分される。甕Ba（654～658）は口縁部を下方、外、上方などへ肥厚させるもので、口縁や肩部に文様がつくものもある。654には口縁部外面にヘラ記号がつく。口径18.5cm～27.5cm、口頸部高5cm前後。甕Bb（659）は口縁部が外反しただけのもので、器体は上位で張る球形に近いものである。体部外面下位はロクロナデを行なっていない。口径22.6cm、器高48.2cm、口頸部高4.4cm。

瓶A（645～647）　球形に近い体部に上方にひらく長い口頸部がつくもので、上位で大きく外反する頸部から口縁部は上外方に屈曲する。屈曲部は、上に1条の沈線がめぐり突帯状になる。器体の大小により瓶AⅠ（647）、瓶AⅡ（645）に細分される。647は体部径9.4cmで最大径部に刺突文帯がつく。645は体部径6.6cm、口径10.8cm、器高12.2cmで、肩部に刺突文帯がつく。

瓶B（648）　台付の瓶である。口頸部を欠く。球形に近い体部に大きく外にひらく低い台がつくもので、体部中位やや上位にカキメがつき、その間に刺突文を施す。他はロクロナデ。体部径8.2cm、台裾部径6.6cm。

平瓶A（650）　体部の大半を欠く。口頸部は直線的に上方にひらき、口縁部は丸い。体部外面カキ目、他はロクロナデ調整で、上位に把手状のつまみを付す。口径6.2cm。

平瓶B（651）　体部の大半を欠く。口頸部がわずかに外反しながらひらくもので、口縁端

部が肥厚する。体部上位外面カキメ、他はロクロナデ調整。口径8.6cm

提瓶A（652）　口頸部を欠く。正面が正円形の器体の肩部に左右一対の先端の丸い把手を付す。外面は円心円のカキメ、内面はロクロナデ調整。体部径16.5cm、推定厚10.9cm。

土師器

土師器には碗と高杯がある。

碗（660）　丸底から体部は内湾しながらゆるやかにひらき、上端では垂直になり、丸い口縁端部となる。内外面ヘラミガキ調整で、内面はタテ方向に放射状の暗文をつける。内外面赤色顔料を塗布。口径16.4cm、器高5.8cm。

高杯（661～664）　661は杯部で、大きくひらく体部から口縁部はわずかに上方に屈曲して立ちあがる。端部は丸い。内外面とも赤色顔料を塗布する。口径13.4cm。662は脚部で、わずかに外反しながらひらく脚部から裾部は水平に外にひらき、端部は丸い。裾部径10.6cm。663・664は杯底部とラッパ状にひらく脚部上位の破片である。どちらも外面と杯部内面に赤色顔料を塗布する。

埴輪（665・666）　2個とも円筒埴輪の破片である。665は突帯部の破片で、突帯は断面コの字である。外面ヨコナデ、内面ナデ調整。器壁は厚さ1.5cm、突帯の高さ1.0cm。666は裾部片で外面ハケメ、内面ナデ調整。裾部厚1.7cm。

竈（667）　焚口の裾部片である。裾部は内外へ広がり肥厚する。ハケメ調整。器壁の厚さ2.2cm、裾部の復元厚4.8cm。

銅鏡（674）

銅鏡1面分が10片程に散乱して出土した。径7.8cm、鈕の部分の厚さ0.7cm、縁の厚さ0.47cmを計る。縁は三角縁で、内側には5圏を界し、外から鋸歯文、鋸歯文、櫛歯文、珠文帯を配するが、珠文が主文となり、他の文様帯を副圏としているものと考えられる。彷製三角縁珠文鏡と呼ぶべき小形鏡である。全面緑青に覆われており緑灰色になっているが、比較的銅質は良く、部分的に黒色に近い緑色をなす。

銅碗（677）

底部を欠損する。内湾しながら開く体部は上位で垂直に立ち上り、その上端を内側へ肥厚させ口縁部とするが、端部は丸い。口縁端部より下位1.45cmと2.0cmの位置に幅0.1cm弱の沈線が巡る。表面は緑青に覆われ、もろくなっており、緑灰色となっている。高台はつかないものと

考えられる。口径17.8cm、推定器高8.5cm内外。

耳環（675）

金箔張りである。全体の径は横3.15cm、縦2.95cmで、断面は0.7cm～0.85cmの円形に近い楕円形をなす。

小玉（676）

ガラス製のコバルトブルーの小玉である。長さ0.8cm、径0.6～0.7cm、孔径0.2cm弱である。

鉄器・鉄製品

鉄器・鉄製品には留金具・鉸具・四葉座金・縁金具などの馬具、刀子、鏃などの武器その他がある。

留金具（678～686）

完形に近いものは679～681、683・684の4点である。形態的には側縁が平行で頭が丸くなるもの（678・679・682）、長方形の片側の両角を除いたもの（681）、側辺が頭の方へ狭くなり、頭が丸いもの（680）、正方形のもの（683・684）などに分れる。682～685は鉄地金銅張りである。

鉸具（689・690）

690は長は5.5cm、幅3.6cm、底辺幅3.3cmで、径0.55cmの断面円形の鉄棒を折り曲げて作られたものである。689は径0.6cm。

四葉座金（688）

座金は正方形の4葉を十字形に配したもので、幅3.7cm、厚さ0.3cmで、1葉を欠く。鋲は頭径1.4cm、全長4.0cm。鉄地金銅張り。

縁金具（684）

湾曲する座金は幅0.55～0.6cm、厚さ0.1cm強で、頭径0.45、全長0.55cmの鋲が約1cmの間隔で付く。

刀子（693）

鋩と茎の先端を欠く。刃部は厚いつくりで、関が刃部側へ突出するつくりである。茎は断面長方形。現存長10.0cm。

鉄鏃（694～701）

694は平根方頭斧箭式で、茎を欠く。鏃身の長さ6.0cm、幅2.5cm、厚さ0.1～0.45cm。695～701はいわゆる長頸鏃で、細根式の片丸造りのものであるが、695は鏃身と箆被の境が明瞭でない。695は現存長8.2cm、幅0.9cm、厚さ0.25～0.35cm。696・697は鏃身と茎の先端を欠く破片で、箆被と茎の境に棘状突起がつく。現存長はそれぞれ8.6～10.0cm。698～701は鏃身と箆被の一部の破片である。すべて片丸造の鏃身である。鏃身の法量は698が長さ2.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、699が長さ1.8cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、700が長さ2.0cm、幅1.05cm、厚さ0.3cm、

701が現存長1.75cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。

その他の鉄製品

692は鞘金具の破片と考えられる。現存長3.5cm、幅3.05cm、厚さ0.3cm。691は全体の約3分の1の破片と考えられるもので、巴形に透しが5ヶ所程入りそうなもので、中央部は高く盛り上がる。復元径6.3cm、高さ0.6cm、鉄板の厚さ0.15cm。あるいは尾錠とも考えられるが、とにかく馬具の一種であろう。

(2) その他の遺物

くずれ塚古墳に伴なう遺物以外に、墳丘の覆土上層から土師器の小皿や杯、陶磁器の碗や皿が出土し、玄室床面から土師器杯が出土した。

土師器

小皿（668・669）　668は平底にわずかに内湾しながらひらく短かい口縁部がつく。内外面ロクロナデ調整、底部は糸切り離し、口径7.2cm器高2.0cm。669は平底に直線的にひらく短かい口縁部がつく。内外面ロクロナデ調整、底部は糸切り離しの後、板目がつく。口径8.8cm、器高1.3cm。

杯（670・671）　どちらも底部片で平底である。670は上げ底気味の平底となっており、外面は糸切り離し痕が残る。底径11.7cm。671は平底で、外面は板目痕が残る。底径9.6cm。

陶磁器

青磁皿（672）

直線的に大きくひらく体部の上位を上方へわずかに屈曲させ口縁部としている。屈曲部の内面には沈線が1条めぐり、釉だまりとなっている。内面には櫛描文を描く。内外南ロクロナデ。素地は黄味を帯びた灰白色で、釉は黄緑色に発色している。口径10～11cm程度の皿である。

白磁碗（673）

わずかに内湾しながら大きくひらく体部の先端はわずかに肥厚し外反して口縁部となる。体部中位より下はカンナで削りを施し、角が鋭い幅広の高台を削り出している。内面見込みには凹線が1条めぐる。内面と外面体部上半は施釉され、他は露胎。素地は黄味を帯びた灰白色で、釉は微量の鉄分を含んでいるらしく緑色がかった明るい灰色に発色している。口径17.6cm、復元器高6.4cm、高台径7.4cm。

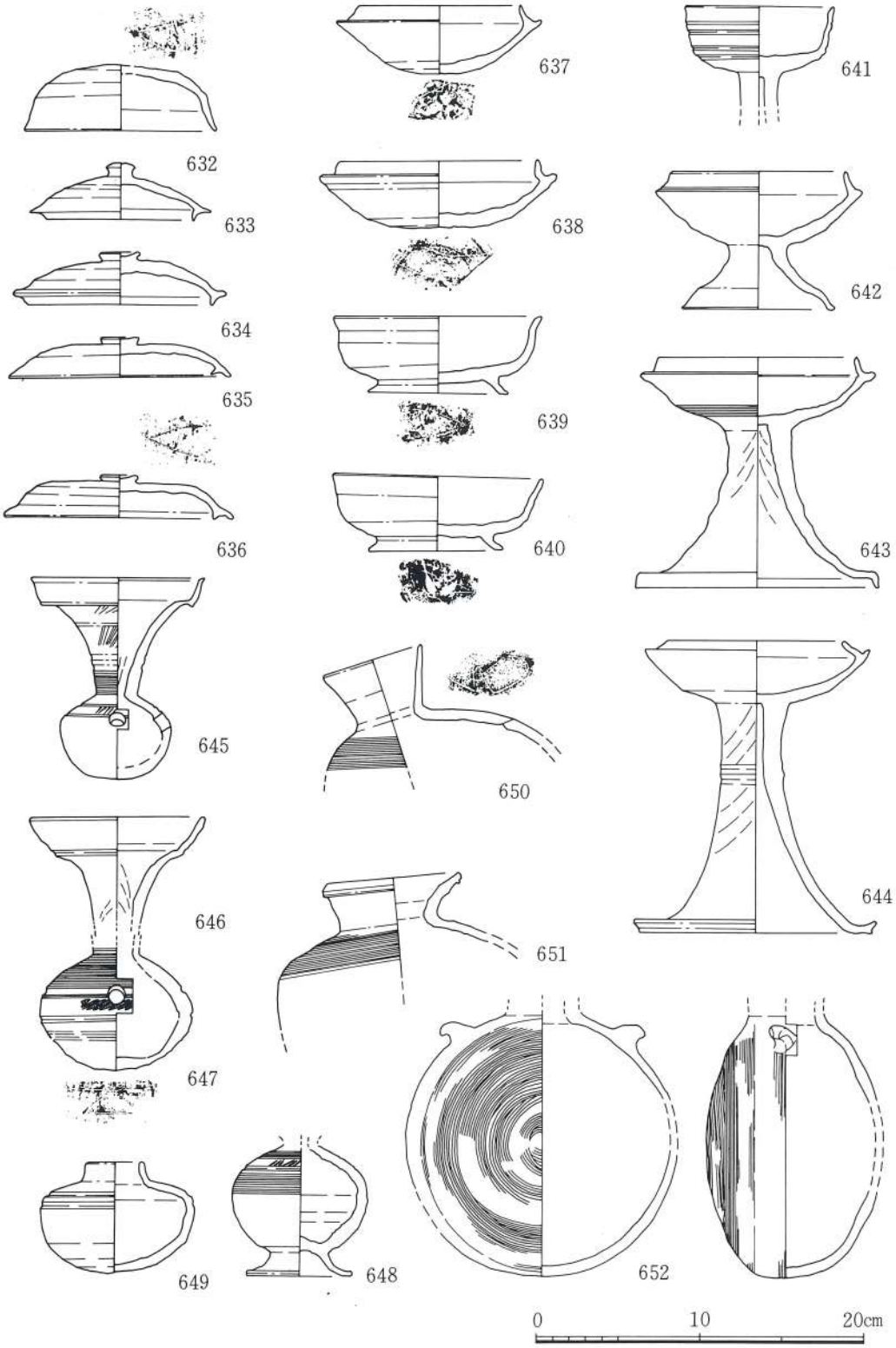


Fig. 95　くずれ塚古墳出土須恵器実測図（1）

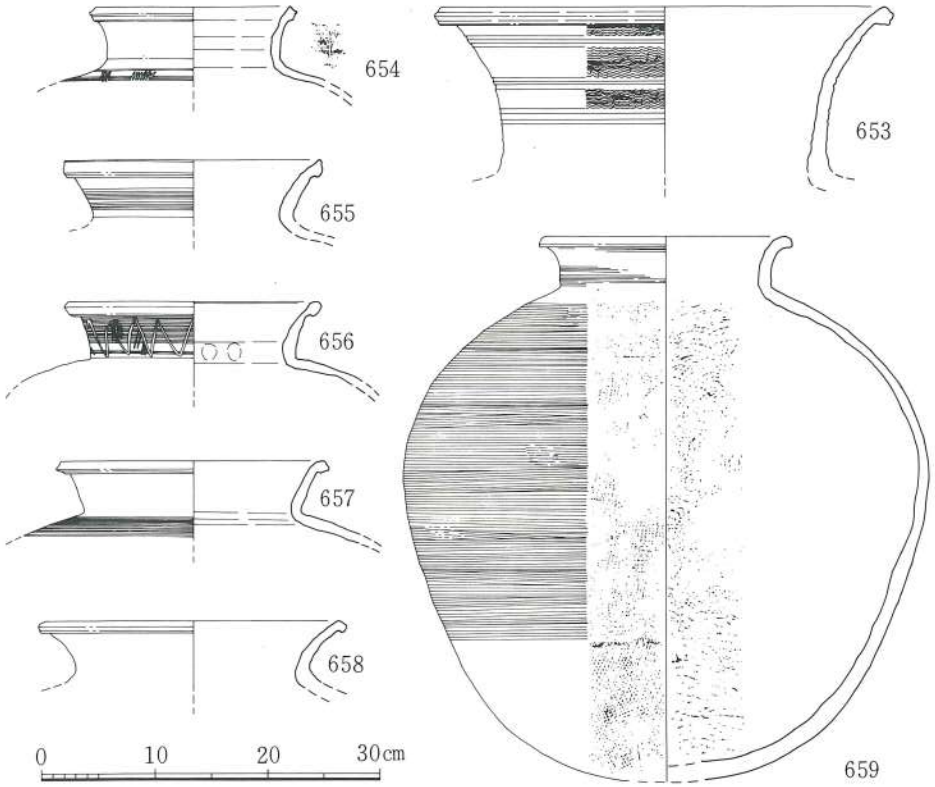


Fig. 96　くずれ塚古墳出土須恵器実測図（2）

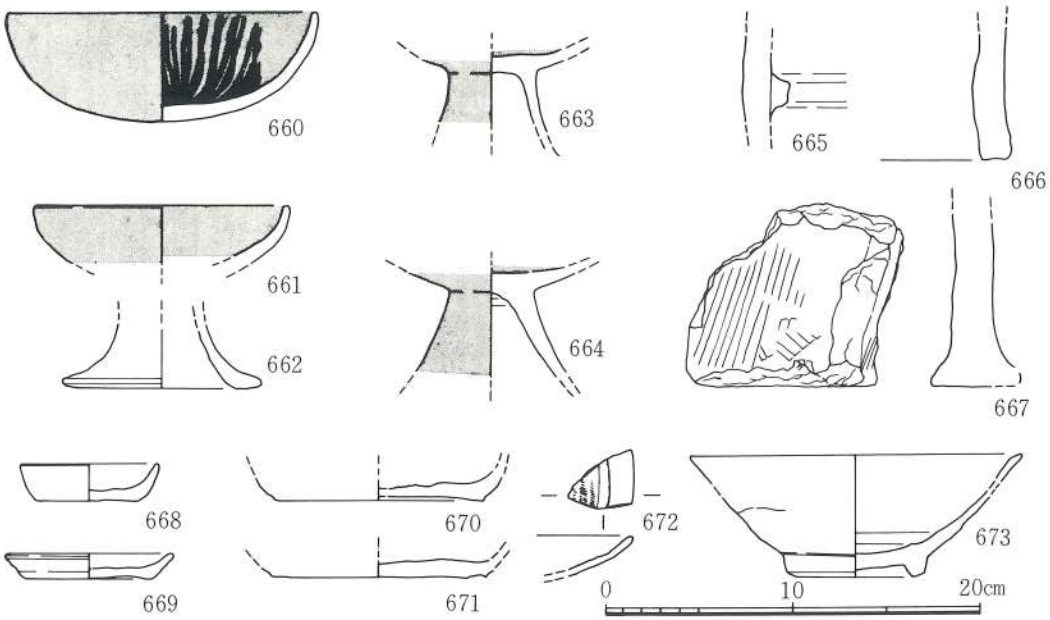


Fig. 97　くずれ塚古墳出土土師器・埴輪・竈・陶磁器実測図

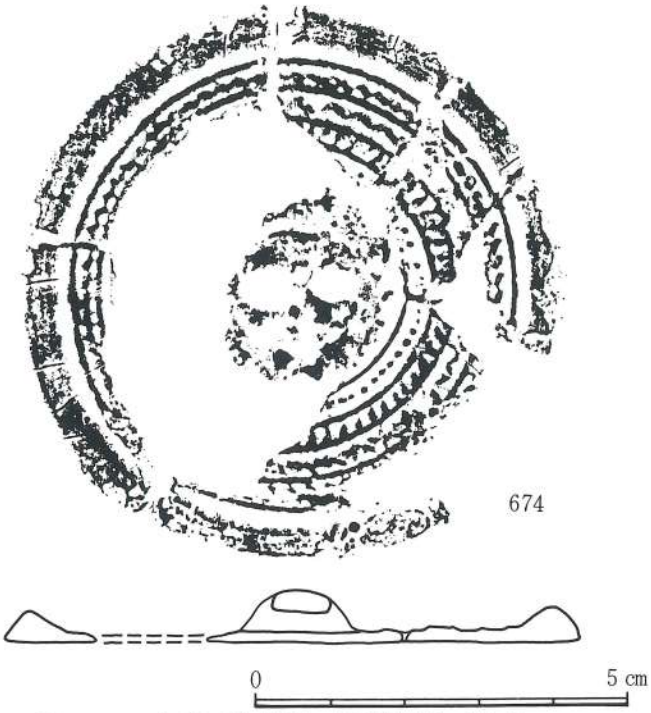


Fig. 98　くずれ塚古墳出土銅鏡拓影（原寸）

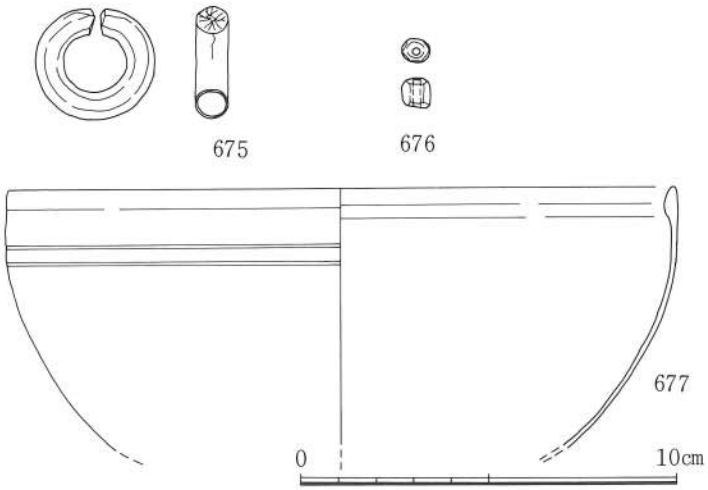


Fig. 99 くずれ塚古墳出土耳環・小玉・銅碗実測図

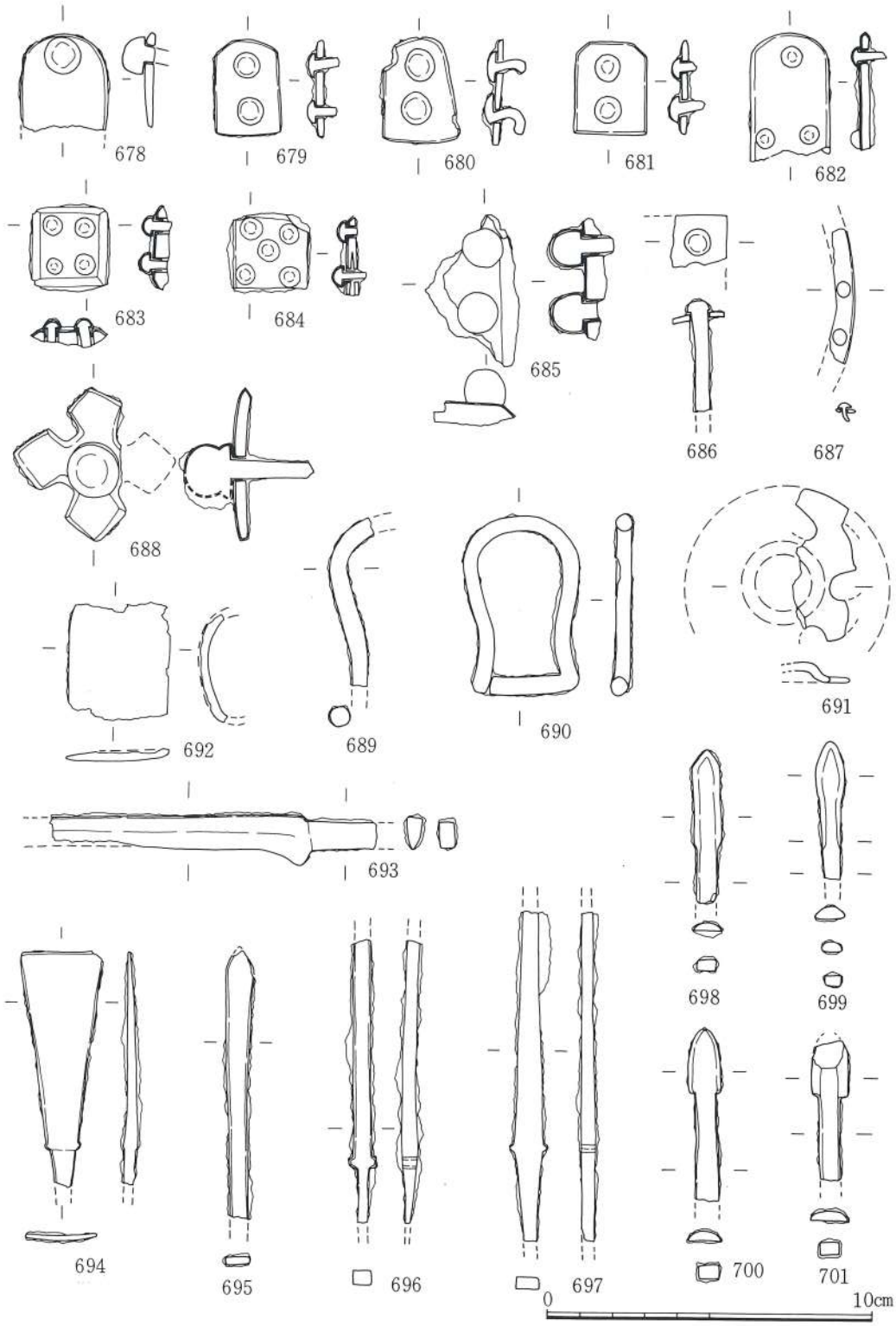


Fig. 100 くずれ塚古墳出土鉄器・鉄製品実測図

V. お わ り に

発掘調査の結果、一本谷遺跡は弥生時代の前期末から中期前葉にかけての時期と後期中頃～後半の一時期に営まれた集落、古墳時代前期の円形周溝墓、平安時代前期の火葬墓などからなる遺跡であることが明らかになった。また西段丘上に存在するくずれ塚古墳は横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳であることが判明した。以下、調査の成果と問題点について簡単に述べてみたい。

1．弥生時代の一本谷遺跡

弥生時代の集落は現在の水田面との比高７～14ｍの段丘の尾根と東西斜面に立地する。竪穴住居跡は尾根の稜線に沿い、それらを囲むように両斜面の特に東斜面には貯蔵穴や土壙が分布している。

周辺地域では弥生時代の集落は水田面との比高が小さな低段丘や微高地上に存在することが通例で、一本谷集落の在り方は特殊な例とみることができる。近年調査された中原町町南遺跡[1]も同様な立地条件であることが注目される。

集落が尾根上に立地するため、個々の竪穴住居はその位置設定にあたってはおのずから地形的な規制を受けることは想像にかたくなく、尾根上の平坦面以外には設置されていない。

弥生時代の出土遺物をみると、前期末から中期前葉にかけての一群、後期中頃から後半にかけての一群に大別することができる。

前期末から中期前葉にかけての遺物としては甕・壺・鉢などの土器、石鏃・石斧・石包丁などの石器の他に砥石・叩石・磨石・紡錘車・支脚・土弾・勾玉などが出土している。前期末の土器としては甕Ａ・甕Ｂのうちの大半、甕Ｃ、甕Ｄ、甕Ｅの一部、壺Ａ、壺Ba、壺Bb、鉢Ａなどがあげられ、中期初頭の土器としては甕Ａ・甕Ｂの一部、甕Ｃ、甕Ｄ、甕Ｅの大半、壺Ｃ、壺Ｄ、壺Ｅ、鉢Ｂ、鉢Ｃなどがあげられるが、前期様式の土器と中期の土器が共伴している例も多い。中期の土器の中で最も新しい土器群はＳＫ086土壙出土の一括遺物があり、中期前半でも中頃に近づいた時期の所産と考えられる。

また後期の遺物としては甕・壺・鉢・高杯・器台などの土器の他に支脚、砥石、鉄器片などが出土している。特に土器については出土量が多く、ＳＢ039住居跡出土土器はほとんどが床面より出土しており、良好な一括資料として注目される。これらは基山町千塔山遺跡[2]のⅠ期の土器の中に共通点の多い土器がいくつか存在する。後期の他の３軒の住居跡から出土した土器はＳＢ039住居跡のものに較べ古い要素をもっている。

上記の土器分類から集落の時期的な変遷をみると、まず前期末段階でＳＢ001・ＳＢ041・ＳＢ077・ＳＢ091住居跡などが大きな間隔をもって出現し、次いでＳＢ004・ＳＢ067・ＳＢ

099・ＳＢ113住居跡が営まれる。これら前期末から中期初頭にかけての竪穴住居跡の分布をみると、北部に集中する傾向があり、南部になるに従って数が減少する。北部では径約25ｍの円形の空間地を取り囲むように竪穴住居が設置されているが、この空間は集落共通の広場であったものと考えられる。この時期で中部南寄りに位置するＳＢ041住居跡（新）は規模・構造において群を抜いており、また焼失している点や磨製石鏃を出土している点など特異な存在である。また、中部に位置するＳＢ077住居跡は、西部を破壊されてはいたが、平面長方形の竪穴住居跡であり、東壁に沿っていわゆるベッド状遺構が造り出してあった。踏み締った床面から前期にさかのぼる甕片や石鏃、フレイク多数を出土した。ベッド状遺構出現の問題に関して大きな意味をもつものと考えられる。

中期前葉の竪穴住居跡は、上記以外の平面円形の竪穴住居跡であるが、旧段階の集落の範囲を拡大して集落を営んでいる。すなわち北部・中部では東へ、南部では南へと集落の範囲は大きくなる。旧段階での北部の空間地は新段階になっても引き続き空間地のままであるが、範囲は幾分大きくなり、径約30ｍになっている。この時期にもＳＢ069住居跡のように規模・構造の点で前のＳＢ041住居跡に類似した竪穴住居跡が存在しており、これまた焼失家屋であり、磨製石鏃・勾玉を出土するなど特異な存在である。

個々の竪穴住居跡については、先の大規模なものを除けば、一般的に旧段階のものは規模の小さな４本柱構造のものが主体であり、時期が下るに従って規模が大きくなり、５～８本柱構造のものが増加してくる。

このように個々の住居跡の規模も、集落の規模も中期になると拡大する傾向をうかがうことができる。

前期末から中期前葉にかけての貯蔵穴は確かなもので約55基が住居跡の周囲に存在するが、この期間の竪穴住居跡27軒で単純に割れば１軒の住居に２基程度の貯蔵穴がつくことになる。

中期中頃から後期にかけての遺構は全く存在せず、再び集落が営まれるのは後期中頃以後のことである。調査区内においては４軒の竪穴住居跡が南部において検出された。すべて平面長方形で、ＳＢ049住居跡は不明な点が多いが、他の３軒については２本柱構造の切妻形の家屋と考えられ、内部に２～４ヶ所のいわゆるベッド状遺構を設けている。これら４軒の竪穴住居跡は主軸方向が一定していることや、ある程度の間隔を保って営まれていることなどから、これらは近接した時期の所産と考えられる。調査区南外の畑地も平坦な地形であり、後期の竪穴住居跡群が存在している可能性が強い。

弥生時代の一本谷遺跡は前期末から中期前葉まで集落が存続し、再び後期後半の一時期に集落が形成されるといういわば断続形の集落であったことがわかる。佐賀平野の弥生時代集落は北部九州の集落と同じくこの断続形の集落であり、比較的長期に渡るものとしては弥生時代中期前半から後期さらには古墳時代まで存続する中原町姫方原遺跡[3]などが存在するに過ぎないが、

ここでも集落存続の過程で住居跡の数が減少する時期があることも指摘される。

さて一本谷遺跡の集落が営んだ墓地の問題であるが、この集落付近で現在までに知られている甕棺墓地としては北東方向約300ｍの国道34号線の北側に存在していた切通遺跡[4]がある。この墓地は約100基の甕棺墓を出土し、うち４号甕棺からはゴホウラ製貝輪10個を装着した男性人骨に伴って細形銅剣１本を出土している。甕棺の時期は報告によると中期中葉をやや遡るものが大部分であるとされるが、図版をみる限りにおいても、中期前半のものがほとんどであり、さらに古式の甕棺も出土したものと考えられる。そう考えれば、一本谷の集落との関係が深く、あるいは同一集団により営まれた集落と墓地であると考えることもできるが、今後切通遺跡の甕棺の調査や周辺遺跡の調査を行なわない限り確証は得られない。

また後期の集落が営んだ墓地についても不明であるが、付近から以前に長宜子孫連弧文鏡が箱式石棺から出土している。この鏡は一本谷遺跡出土となっているが、正確な出土位置は不明である。付近の住民の話によると、遺跡の北西約600ｍの現在の三田川金属工業の工場や松尾建設の機材倉庫敷地周辺から石棺などが多数出土したらしく、後期の墓地であった可能性が強く、一本谷の後期の集落との関係が窺える。

２．古墳時代の一本谷遺跡

一本谷遺跡では古墳時代の遺構としては前期の円形周溝墓が１基営まれたのみである。しかし遺跡の西方段丘上のくずれ塚古墳についても調査を実施し、多くの新事実を知ることができた。

一本谷遺跡の西方および西南方一帯には三田川町、一部東脊振村にかけて目達原古墳群と呼ばれる前方後円墳７基、円墳６基以上からなる古墳群が形成されていたが、戦時中の目達原飛行場建設などで簡単な調査の後ほとんどが破壊された。現在では遺跡の西南方約600ｍに位置する上のびゅう古墳（都紀女加王墓）１基のみが陵墓参考地として保存されているに過ぎない。今回調査を行なったくずれ塚古墳もこの古墳群調査の際注意されていた古墳であった。

円形周溝墓は径約9.5ｍの周溝が巡り、中央部に木棺を納めたものであった。上部の削平がひどく、墳丘をもっていたかなどについては不明であるが、中央の棺の位置からみると、低い墳丘はもっていただろうと推測される。円墳と呼ぶこともできるが、構造上また当時の社会性から一般に方形周溝墓と呼ばれる墳墓に対比して円形周溝墓と呼ぶべきであろう。方形周溝墓と考えられるものは県内では東から鳥栖市本川原[5]（２基）、中原町姫方[6]（１基）、上峰村五本谷[7]（３基）、三日月町戌[8]（１基）、同町久米[9]（３基）、同町下久米[10]（３基）などで検出されているが、いずれも確実な内部主体は不明であった。一本谷の円形周溝墓はもちろん県内初例の円形周溝墓であり、周溝墓としては内部主体を明らかにし得た唯一例である。出土した土器は２点と少ないが、壺からみるとこの円形周溝墓は５世紀前半の所産と考えられる。

古墳時代後期になると遺跡の西方にくずれ塚古墳が出現するが、後期の円墳としては径20ｍ

以上と大きなものであり、複室の横穴式石室ももっていたものと考えられる。銅鏡や銅碗、馬具などにみられる副葬品の豪華さは目達原古墳群のそれに匹敵する程である。

出土した須恵器は大きく2つの時期に大別される。蓋A・杯Aの時期と蓋B・杯Bの時期であるが、陶邑での編年などによると、前者は6世紀後半、後者は7世紀前半～中頃を中心とした時期と考えられる。

銅鏡は仿製の珠文鏡であるが、副圏には櫛目文・鋸歯文帯を配しており、縁は三角縁となる類例の少ない銅鏡である。県内での珠文鏡の出土例は佐賀市関行丸古墳[11]で2面、鳥栖市旭町ブリジストン工場敷地[12]、唐津市山本金屋[13]、唐津市惣原1号墳[14]でそれぞれ1面の計5面が知られるにすぎないが、くずれ塚出土の珠文鏡とは様相を異にしている。珠文鏡などの小形の仿製鏡が、6世紀後半で製作が一時消滅すると考えられている[15]ことなどから、旧段階の須恵器群と共伴した可能性が強い。

銅鋺については、下部を欠いてはいるものの接合できなかった破片が多数ある。しかし高台の一部と考えられる破片はなく、おそらく丸底に近い平底であったと考えられる。県内での銅鋺の出土例は唐津市島田塚古墳の1例のみであるが、これは小形の高台付鋺で、共伴遺物などから6世紀前半から中頃の時期のものと考えられている[16]。くずれ塚例は千葉県殿塚古墳や埼玉県将軍塚古墳、同県真観寺古墳出土の無台鋺[17]などと同様な形態・法量であったと考えられるが、沈線の位置や数に相違点がみられる。これらの古墳が6世紀末～7世紀前半の所産であることを考えれば、くずれ塚古墳では新段階の須恵器に伴った可能性があり、石室の奥壁付近の床面から出土したこともこのことを裏付けるであろう。

目達原古墳群は古墳の形態や出土遺物などから5世紀後半から6世紀以降の時期に営まれた古墳群と考えられ、『国造本紀』によると応神天皇曾孫都紀女加王を初代とする筑紫米多国造家累代の墳墓と考えられている。『続日本紀』文武天皇慶雲4年（704）の条には、米多君北助が天武天皇の葬儀にあたり御装司の役を勤めたことが記されており、8世紀になっても中央の役人として朝廷に出仕するほど繁栄していたものと考えられる。

先の銅鋺についても、畿内政権による地方豪族把握の手段として配布しただろうことや、このことを前提として各地域に白鳳時代寺院が成立すると推定されている[18]。目達原古墳群の域内と近接した地域には、上峰村塔の塚廃寺跡[19]と東脊振村辛上廃寺跡[20]の2つの寺院跡が存在し、このあたりの情勢を物語るのかもしれない。

註

(1)天本洋一・七田忠昭「町南遺跡」佐賀県文化財調査報告書第68集　1983
(2)中牟田賢治他「千塔山遺跡」基山町遺跡発掘調査団　1978
(3)多々良友博「姫方原遺跡・Ｆ地区」中野建設・中野ハウジング　1981
(4)金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
(5)木下巧他「本川原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第26集　1974
(6)木下之治他「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集　1974
(7)七田忠昭他「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集　1979
(8)木下巧「戍遺跡」佐賀県文化財調査報告書第36集　1976
(9)木下巧「久米遺跡」佐賀県文化財調査報告書第42集　1978
(10)註９に同じ
(11)渡辺正気「佐賀市関行丸古墳」佐賀県文化財調査報告書第７集　1958
(12)七田忠志・松尾禎作「ＢＳ旭自転車工場遺跡」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第８輯　1949
(13)松岡史「古代」『唐津市史』　1962
(14)註13に同じ
(15)樋口隆康「古鏡」　新潮社　1979
(16)小田富士雄「日本の古墳出土銅鋺について」『百済研究』６　1975
(17)毛利光俊彦「古墳出土銅鋺の系譜」考古学雑誌第64巻第１号　1978
(18)註17に同じ
(19)松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第７集　1940
(20)七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一考察」上代文化13　1935
　松尾禎作「東脊振村辛上廃寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第５輯　1936

遺物番号・遺物登録番号対照表

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 57− 1	82002058
2	82002057
3	82002055
4	82002052
5	82002051
6	82002060
7	82002059
8	82002062
9	82002761
10	82002063
11	82002067
12	82002075
13	82002074
14	82002066
15	82002072
16	82002073
17	82002068
18	82002065
19	82002064
20	82002071
21	82002076
22	82002078
23	82002077
24	82002092
25	82002094
26	82002090
27	82002096
28	82002762
29	82002097
30	82002760
31	82002759
Fig 58− 32	82001911
33	82001913
34	82001910
35	82001920
36	82001908
37	82001906
38	82001909
39	82001917
40	82001905
41	82001916
42	82001918
43	82001922
44	82001921
45	82001915
46	82001912
47	82001907
Fig 59− 48	82001490
49	82001491
50	82002427
51	82001492
52	82001489
53	82001486
54	82001487
55	82001488
56	82002417
Fig 60− 57	82002414
58	82002415
59	82002416
60	82002411
61	82002409
62	82002418
63	82002420
Fig 61− 64	82001499
65	82001500
66	82002401
67	82001495
68	82001496
69	82002408
70	82002422
71	82002424
72	82002425
73	82002423
74	82002426
75	82002413
76	82002412
77	82002410
Fig 62− 78	82002734
79	82002753
80	82002732
81	82002755
82	82002756
83	82002758
84	82002735
85	82002745
86	82002744
87	82002737
88	82002748
89	82002733

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 62− 90	82002749
91	82002736
92	82002742
93	82002752
Fig 63− 94	82002714
95	82002099
96	82002701
97	82002712
98	82002710
99	82002713
100	82002709
101	82002707
102	82002717
103	82002703
104	82002702
105	82002716
106	82002100
107	82002719
108	82002718
Fig 64−109	82002728
110	82002731
111	82002727
112	82002730
113	82002726
114	82902723
115	82002722
116	82002721
117	82002720
118	82001925
119	82001924
120	82001923
121	82001952
122	82001953
123	82001954
124	82003283
Fig 65−125	82001942
126	82001932
127	82001931
128	82001937
129	82001955
130	82001946
131	82001938
132	82001939
133	82001934
134	82001935
135	82001940
136	82001944
137	82001945
138	82001947
139	82001951
140	82001948
141	82001949
142	82001950
Fig 66−143	82001960
144	82001961
145	82001959
146	82001958
147	82001956
148	82001982
149	82001980
150	82001979
151	82001981
152	82001983
153	82001992
154	82001990
155	82001991
156	82001997
157	82001995
158	82001996
159	82001994
160	82001978
161	82001975
162	82001976
163	82001973
164	82003012
165	82003015
166	82003013
167	82003020
168	82003014
169	82003021
170	80003022
171	82003023
Fig 67 −172	82003034
173	82003030
174	82003029
175	82003036
176	82003031
177	82003028
178	82003035

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 67−179	82003032
180	82003026
181	82003037
Fig 68−182	82003042
183	82003044
184	82003039
185	82003038
186	82003041
187	82003046
188	82003047
189	82003045
190	82003048
191	82003049
192	82003050
193	82003051
194	82003052
195	82003053
196	82002436
197	82002433
198	82002435
199	82002434
200	82002428
201	82002429
202	82002430
203	82002441
204	82002440
205	82002439
206	82002444
207	82002449
208	82002448
209	82002445
210	82002447
211	82002431
212	82002455
213	82002453
214	82002457
215	82002454
216	82002456
217	82002452
218	82002458
219	82002432
220	82002450
221	82002451
Fig 69−222	82002459
223	82002460
224	82002462
225	82002464
226	82002468
227	82002479
228	82002474
229	82002476
230	82002478
231	82002469
232	82002485
233	82002484
234	82002486
235	82002483
236	82002487
237	82002480
238	82002481
239	82002482
240	82003201
241	82002493
242	82002488
243	82002490
244	82002494
245	82002499
246	82002498
Fig 70−247	82002766
248	82002763
249	82002764
250	82002765
251	82002767
252	82002768
253	82002769
254	82002770
255	82002771
256	82002775
257	82002780
258	82002779
259	82002777
260	82002778
261	82002781
262	82002782
263	82002788
264	82002790
265	82002786
266	82002784
267	口縁部 82002787

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 70−267	胴部 82002789
	底部 82002785
Fig 71−268	82002792
	82002793
270	82002794
271	82002791
272	82003209
273	82003205
274	82003203
275	82002797
276	82002796
277	82002795
278	82002798
279	82003207
280	82003210
281	82003214
282	82003218
283	82003219
284	82003212
285	82003216
286	82003219
287	82003211
288	82003221
289	82003220
290	82003222
291	82002081
292	82002082
293	82002084
294	82002085
295	82002079
296	82002083
297	82002088
298	82002087
299	82003223
Fig 72−300	82003055
301	82003054
302	82003056
303	82003057
304	82003059
305	82003058
306	82003060
307	82003062
308	82003293
309	82003063
310	82003065
311	82003064
312	82003067
313	82003066
314	82003070
315	82003069
316	82003073
317	83003074
318	82003075
319	82003077
320	82003078
321	82003076
322	82003085
323	82003083
324	82003081
325	82003080
326	82003087
327	82003088
328	82003089
329	82003090
330	82003091
331	82003095
332	82003094
333	82003093
Fig 73−334	82003301
335	82003097
336	82003096
337	82003261
338	82003316
339	82003099
340	82003302
341	82003305
342	82003306
343	82003303
344	82003307
345	82003309
346	82003308
Fig 74−347	82003312
348	82003311
349	82003310
350	82003314
351	82003313
352	82003315
353	82003227
354	82003224

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 74−355	82003226
356	82003232
357	82003228
358	82003223
359	82003238
360	82003236
361	82003235
362	82003230
363	82003231
364	82003241
365	82003239
366	82003242
367	82003243
Fig 75−368	82003249
369	82003248
370	82003246
371	82003245
372	82003250
373	82003253
374	82003252
375	82003254
376	82003322
377	82003324
378	82003319
379	82003323
380	82003325
381	82903328
382	82003327
383	82003326
384	82003320
385	82003321
386	82003317
387	82003318
Fig 76−388	82003332
389	82003329
390	82003330
391	82003331
392	82003333
393	82003731
394	82003334
395	82003335
396	82003350
397	82003347
398	82003346
399	82003348
400	82003352
401	82003351
402	82003354
403	82003355
404	82003357
405	82003362
406	82003359
Fig 77−407	82003364
408	82003367
409	82003339
410	82003370
411	82003368
412	82003374
413	82003376
414	82003372
415	82003373
416	82003390
417	82003382
418	82003380
419	82003379
320	82003384
421	82003383
422	82003387
Fig 78−423	82003391
424	82003394
425	82003395
426	82003393
427	82003398
428	82003399
429	82003709
430	82003703
431	82003702
432	82003701
433	82003708
434	82003706
435	82003711
436	82003710
437	82003720
438	82003719
439	82003718
440	82003722
441	82003717
442	82003715
Fig 79−443	82003724

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 79−444	82003723
445	82003725
446	82003726
447	82003727
448	82003728
449	82003268
450	82003272
451	82003271
452	82003267
453	82003274
454	82003275
455	82003277
456	82003276
457	82003280
458	82003281
459	82003279
460	82003282
461	82003278
462	82003285
463	82003284
464	82003286
465	82003288
466	82003289
467	82003287
Fig 80−468	82003256
469	82003259
470	82003258
471	82003273
472	82003257
473	82003260
474	82903292
475	82003255
Fig 81−476	82003756
477	82003754
478	82003753
479	82003747
480	82003746
481	82003755
482	82003759
483	口縁部 82003749
	頸 部 82003750
	胴 部 82003751
	底 部 82003752
Fig 82−484	82003733
485	82003735
486	82003734
487	82003736
488	82003739
489	82003740
490	82003742
491	82003741
492	82003743
493	82003744
494	82003806
495	82003807
496	82003808
497	82003809
498	82003296
499	82003295
500	82003294
501	82003802
502	82003801
503	82003803
504	82003804
505	82003298
506	82003299
507	82003811
508	82003810
509	82003812
510	82003821
511	82003820
512	82003826
513	82003824
Fig 83−514	82003817
515	82003818
516	82003816
517	82003828
518	82003829
519	82003830
520	82003831
521	82003845
522	82003844
523	82003833
524	82003834
525	82003835
526	82003836
527	82003838
528	82003841
529	82003843

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 85−530	82002354
531	82002341
532	82002342
533	82002394
534	82002356
535	82002386
536	82002360
537	82002383
538	82002331
539	82002374
540	82002372
541	82002329
542	82002379
543	82002328
544	82002382
545	82002388
546	82002357
547	82002336
548	82002367
549	82002387
550	82002375
551	82002391
552	82002801
553	82002399
554	82002332
555	82002348
556	82002344
557	82002803
558	82002398
559	82002352
560	82002810
561	82002811
562	82002809
563	82002814
564	82002812
565	82002813
Fig 86−566	82003105
567	82003103
568	82003101
569	82003102
570	82003104
571	82003106
572	82002843
573	82002842
574	82002846
575	82002847
576	82002848
577	82002845
578	82002891
579	82002890
580	82002852
581	82002852
582	82002849
583	82002850
Fig 87−584	82002833
585	82002831
586	82002828
587	82002829
588	82002834
589	82002832
590	81002827
591	82002840
592	82002839
593	82002837
594	82002838
Fig 88−595	82002819
596	82002816
597	82002818
598	82002825
599	82002815
600	82002823
601	82002822
602	82002821
Fig 89−603	82003116
604	82003118
605	82003110
606	82003109
607	82003111
608	82003113
609	82003117
610	82003108
611	82003114
612	82003112
613	82003107
614	82003115
615	82003121
616	82003120
617	82002841
618	82003607

挿図・遺物番号	遺物登録番号
Fig 89−619	82003609
620	82003610
621	82003606
Fig 84−622	83000608
623	83000607
624	83000609
Fig 90−625	82003762
626	82003761
Fig 91−627	82003764
628	82003765
629	82003763
630	82003766
631	82003767
Fig 95−632	82003862
633	82003864
634	82003865
635	82003866
636	82003867
537	82003871
638	82003870
639	82003869
640	82003868
641	82003850
642	82003851
643	82003854
644	82003858
645	82003852
646	82003855
647	82003853
648	82903848
649	82003847
650	82003875
651	82003876
652	82003877
Fig 96−653	82003793
654	82003799
655	82003797
656	82003798
657	82003795
658	82003796
659	82003792
Fig 97−660	82003785
661	82003780
662	82003782
663	82003770
664	82003781
665	82003777
666	82003769
667	82003786
668	82003773
669	82003774
670	82003787
671	82003771
672	82003776
673	82003775
Fig 98−674	83000606
Fig 99−675	83000610
676	83000611
677	83000612
Fig 100−678	83000614
679	83000620
680	83000619
681	83000621
682	83000616
683	83000622
684	83000623
685	83000617
686	83000624
687	83000613
688	83000615
689	83000626
690	83000625
691	83000618
692	83000636
693	83000628
694	83000627
695	83000629
696	83000630
697	83000631
698	83000632
699	83000634
700	83000633
701	83000635
702	82002407
703	82003861
704	82003874
705	82003873

一本谷遺跡遺構配置図（1/400）

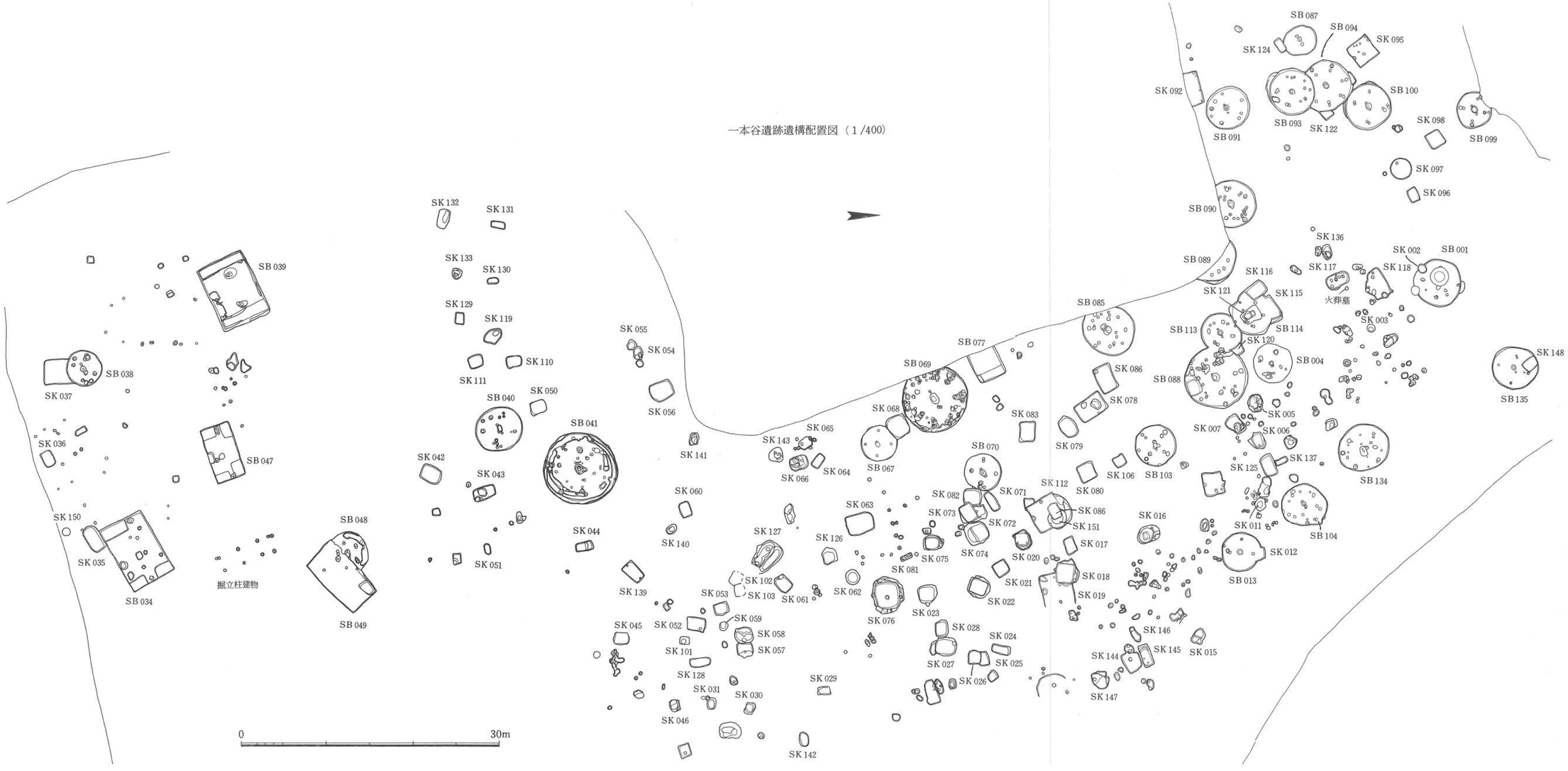


図　版
（遺　構）

一本谷遺跡全景〈西から〉

1．一本谷遺跡遠景
〈西、くずれ塚古墳から〉

2．一本谷遺跡調査の
航空写真
（上方左、
中央はくずれ塚古墳）

1．一本谷遺跡・くずれ塚古墳周辺航空写真

2．一本谷遺跡周辺航空写真

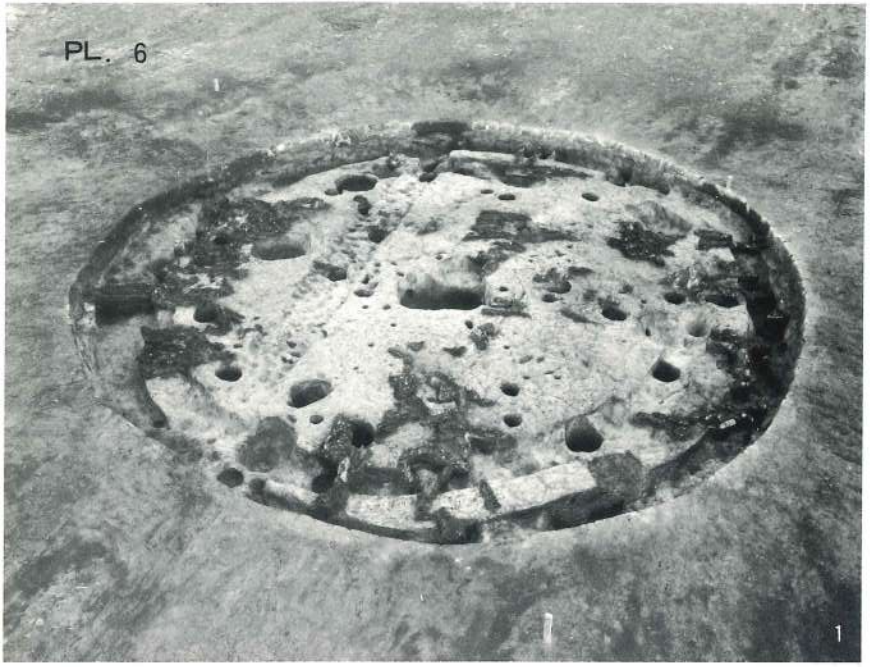
3．一本谷遺跡全景航空写真

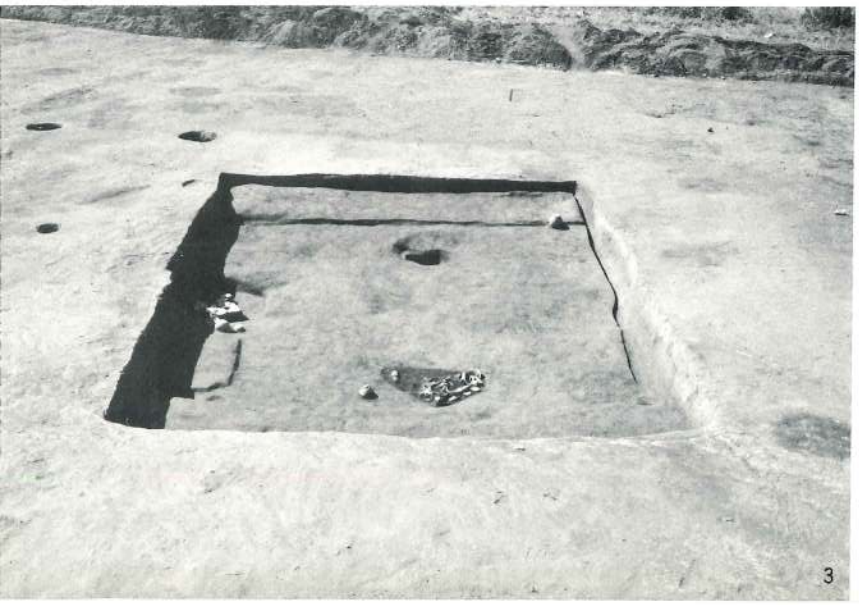
1．一本谷遺跡南部・中部
〈南上空から〉

2．一本谷遺跡中部・北部
〈南上空から〉

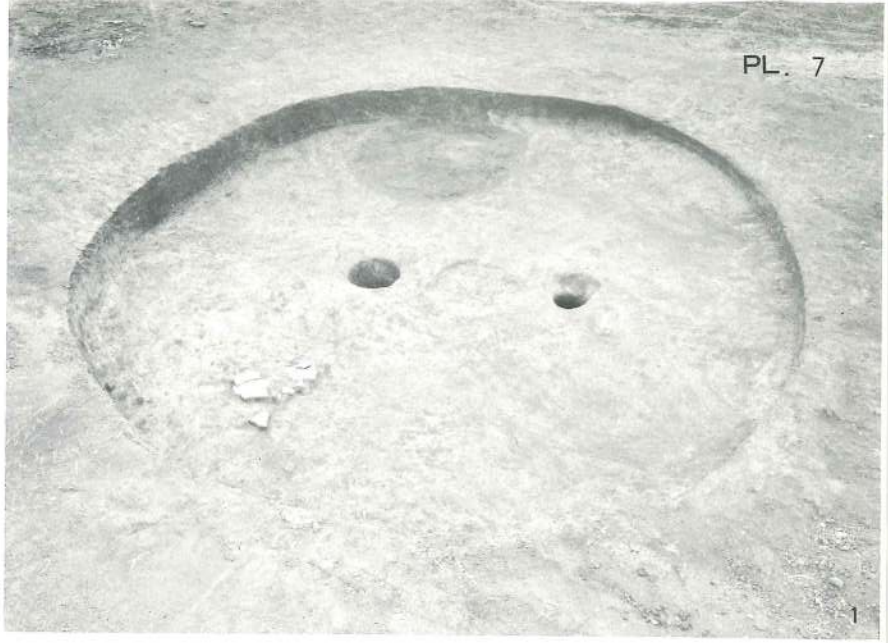
1．一本谷遺跡全景〈北から〉
2．一本谷遺跡中部・南部〈北から〉
3．一本谷遺跡北西部〈北から〉

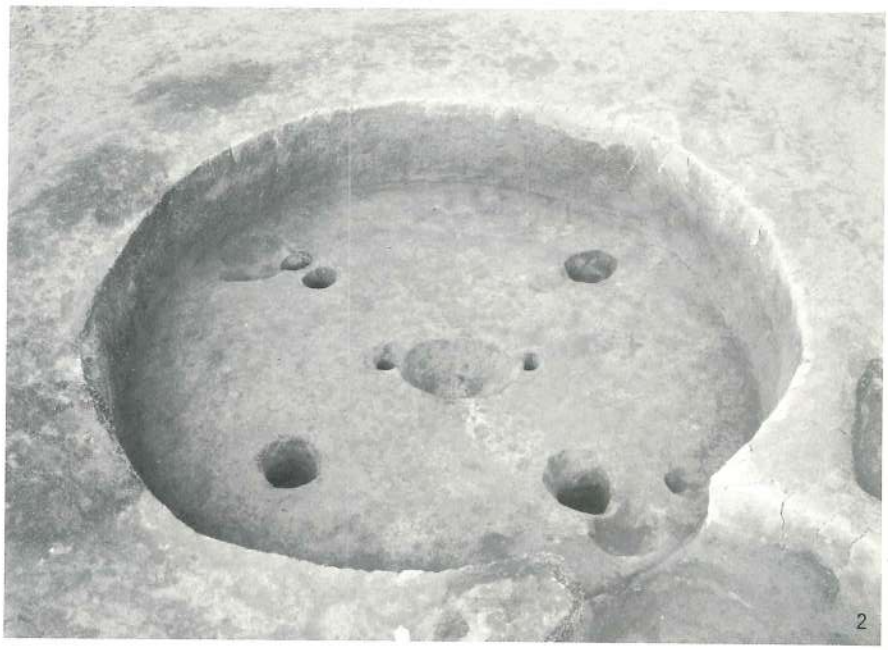
PL. 6



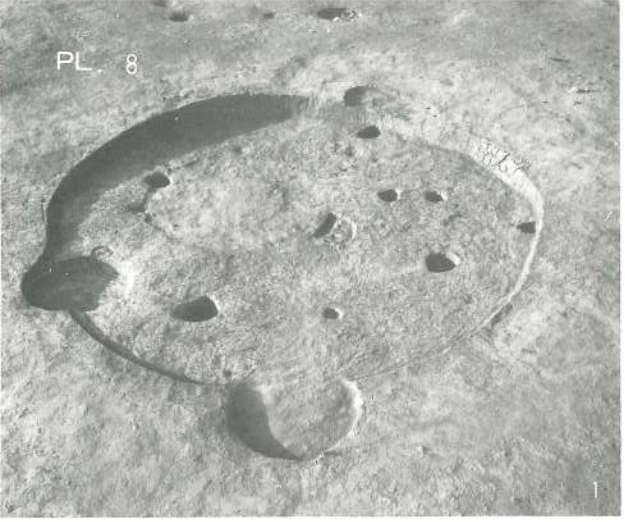


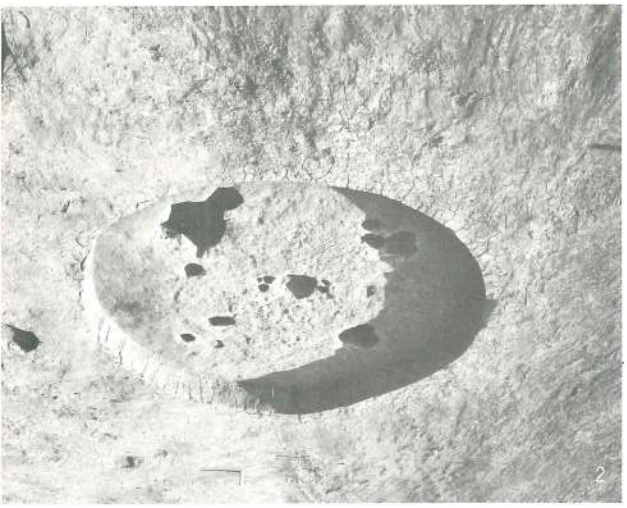
1. SB 041
2. SB 069
3. SB 039

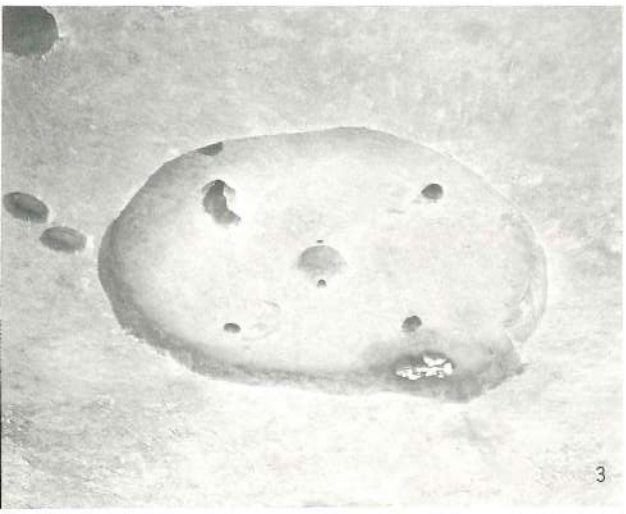


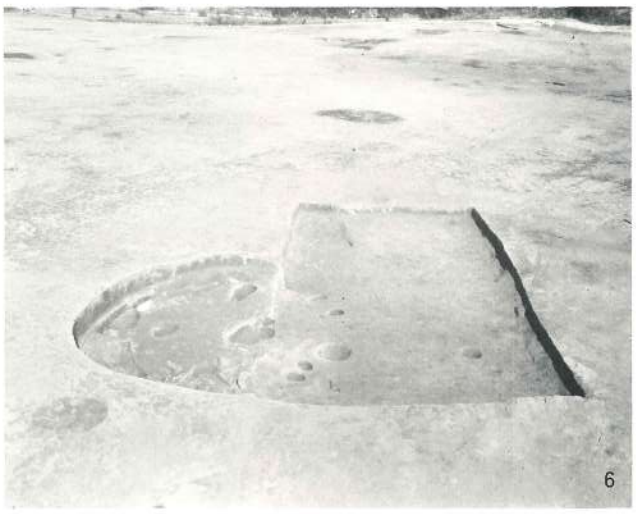


1. SB 087
2. SB 070
3. SB 134

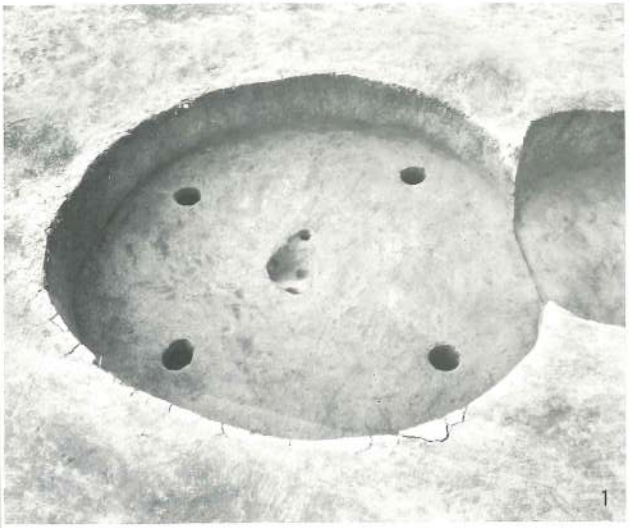


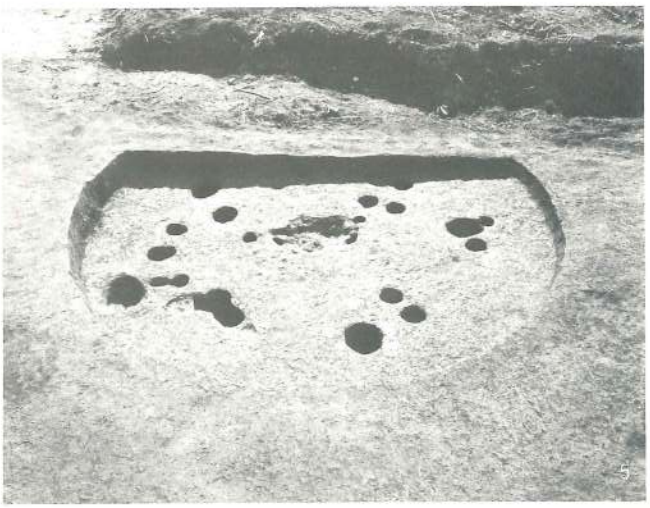


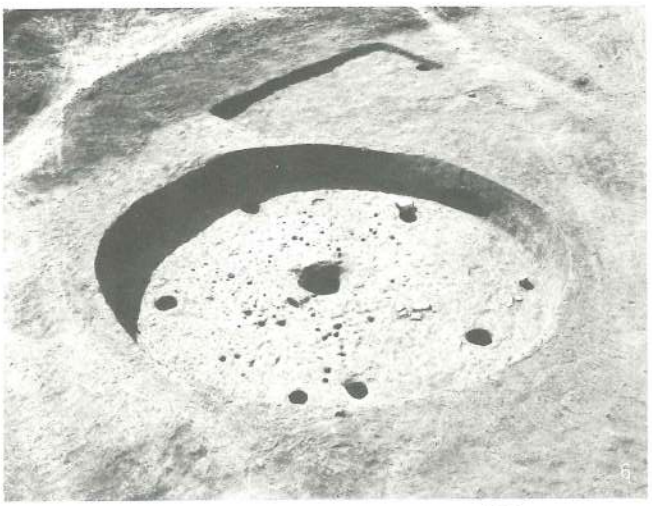




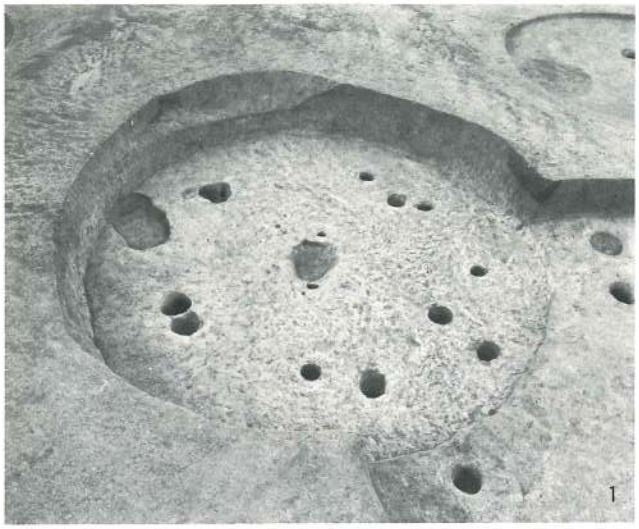
1．SB 001
2．SB 004
3．SB 013
4．SB 038
5．SB 040
6．SB 048（左）・SB 049（右）

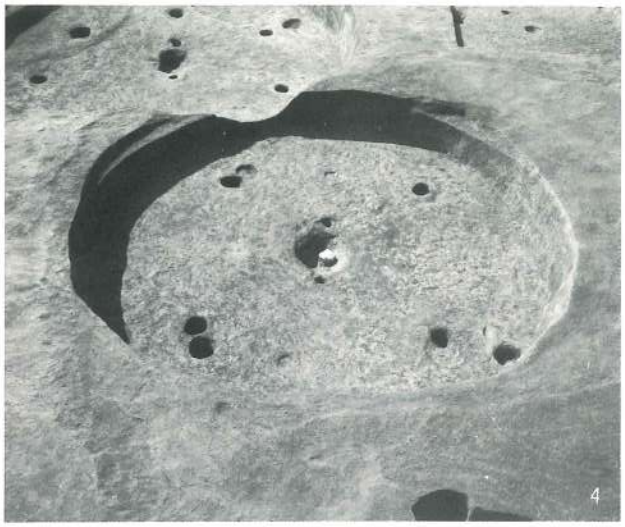


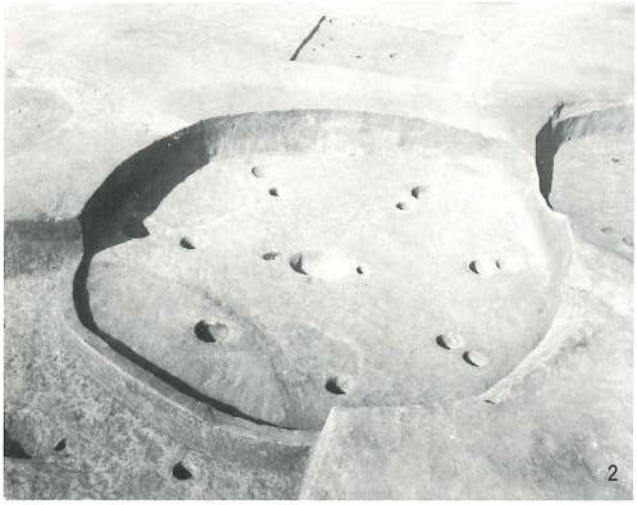


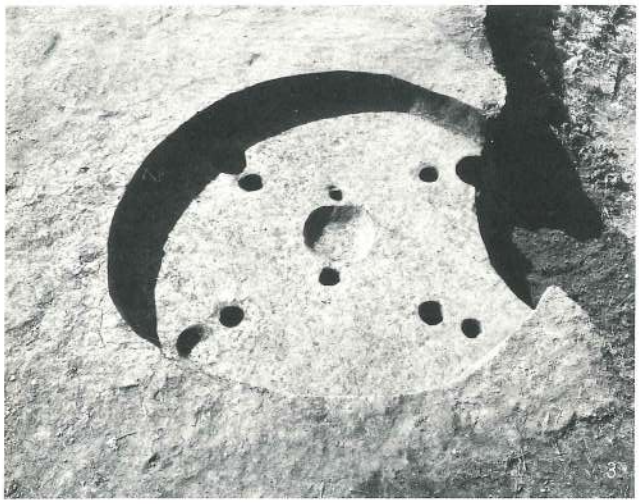


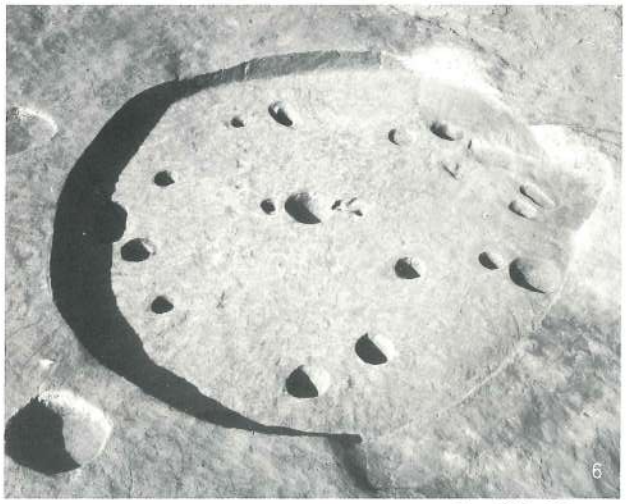
1. SB 067
2. SB 085
3. SB 088
4. SB 089
5. SB 090
6. SB 091



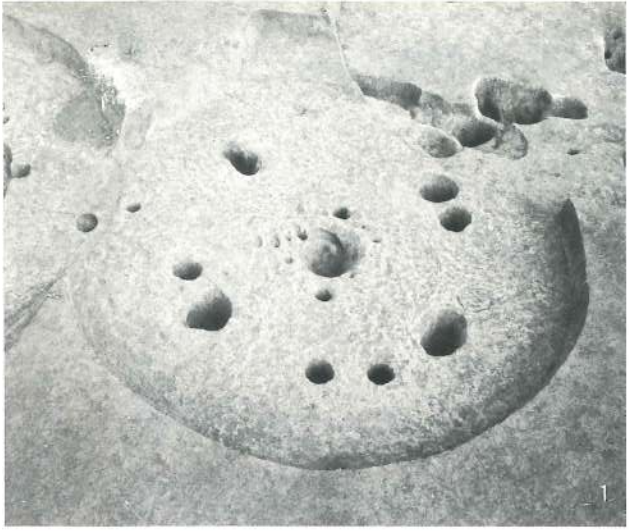


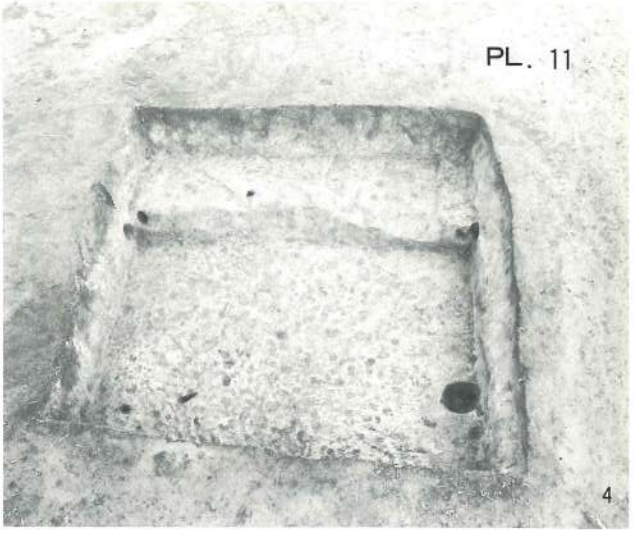


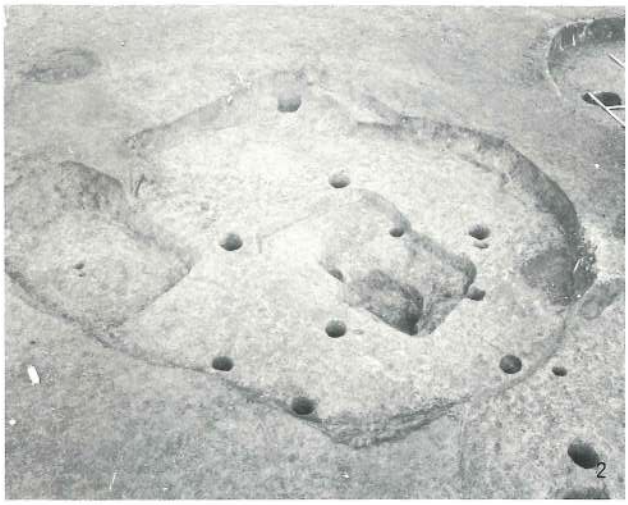


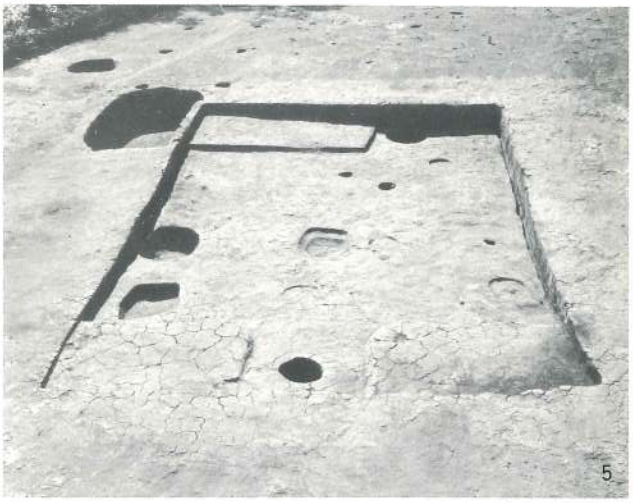


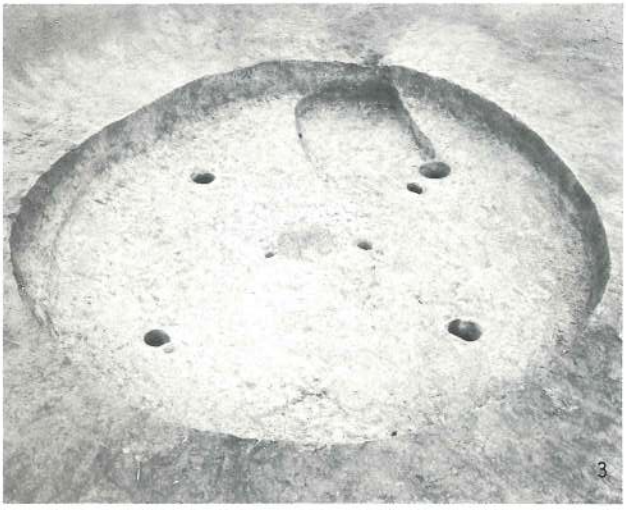
1. SB 093
2. SB 094
3. SB 099
4. SB 100
5. SB 103
6. SB 104

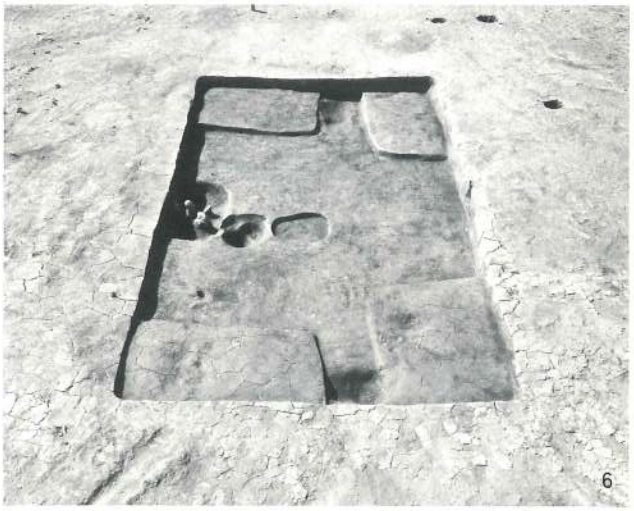




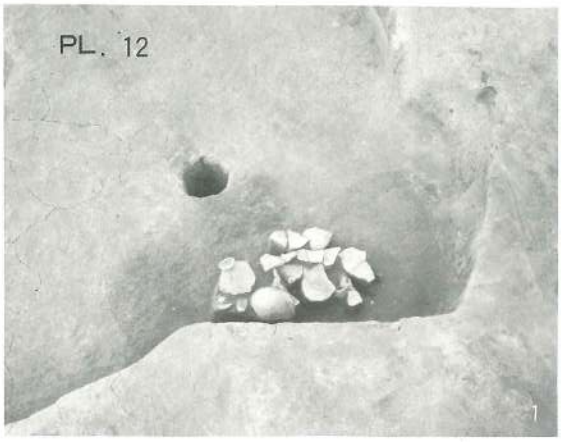


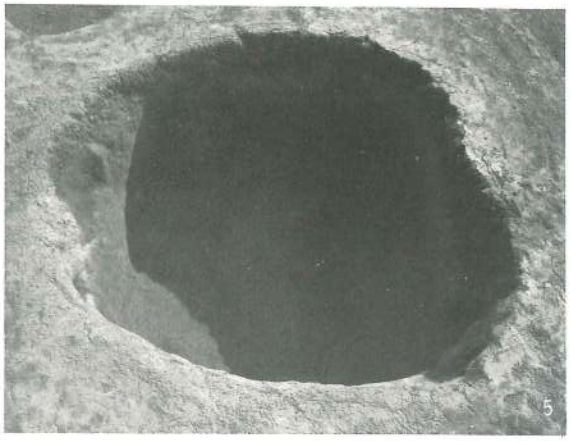


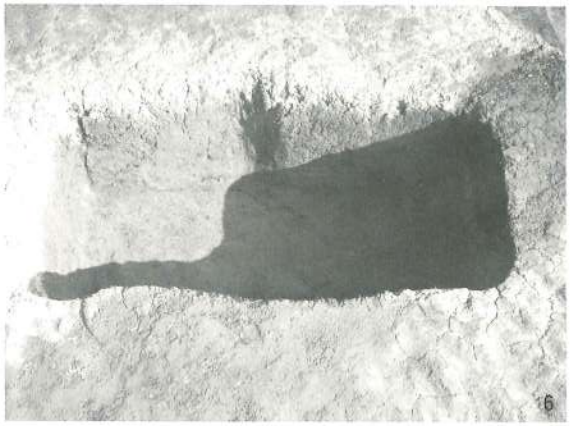


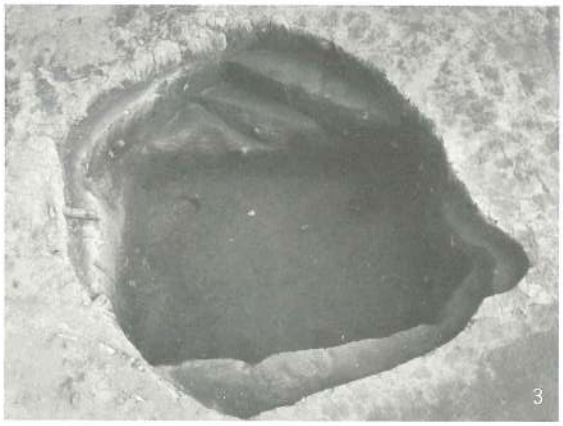


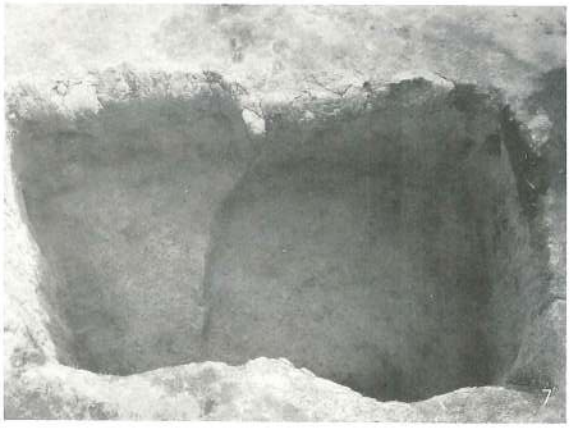
1. SB 113
2. SB 114
3. SB 135
4. SB 077
5. SB 034
6. SB 047

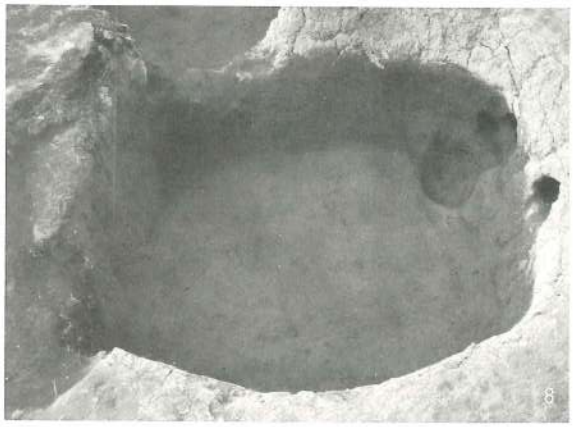




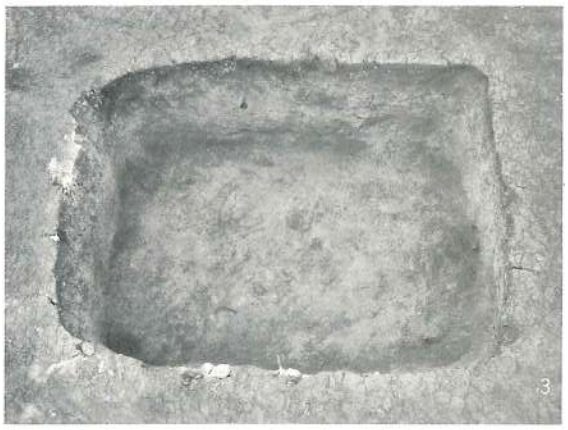


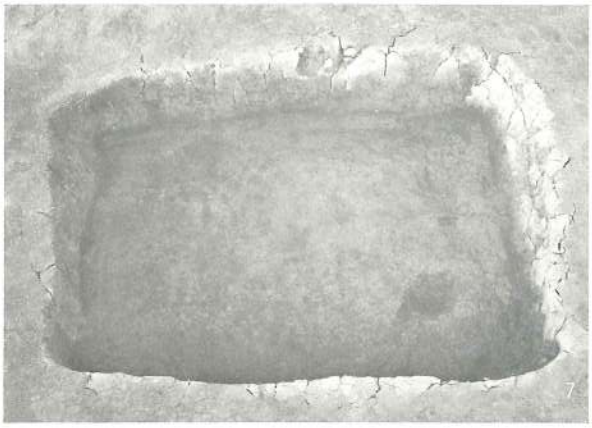


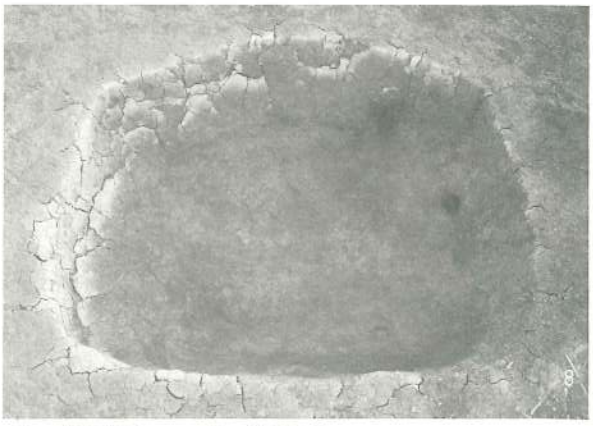




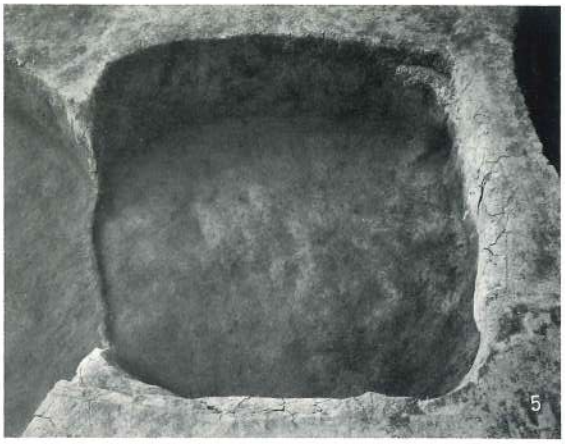
1．SK 012　　5．SK 023
2．SK 018　　6．SK 024
3．SK 020　　7．SK 025（左）・SK 026
4．SK 022　　8．SK 027

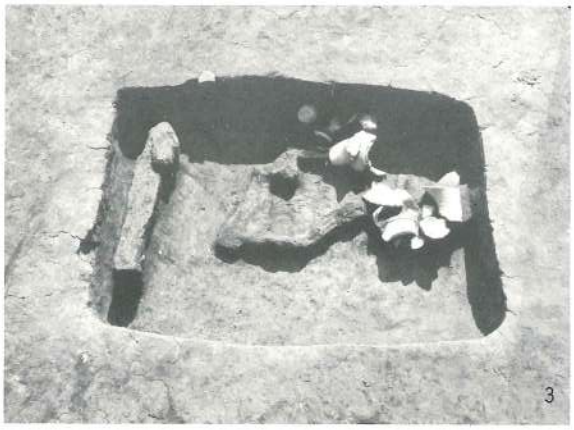




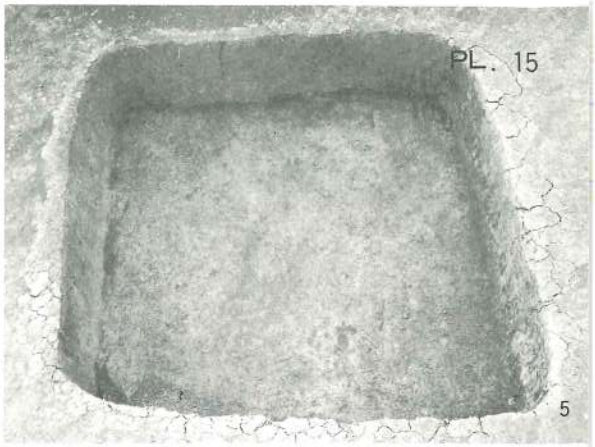


1. SK 028
2. SK 035
3. SK 036
4. SK 042
5. SK045
6. SK050
7. SK052
8. SK053

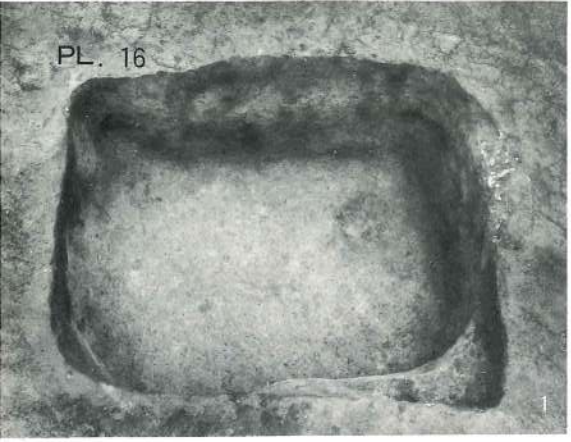


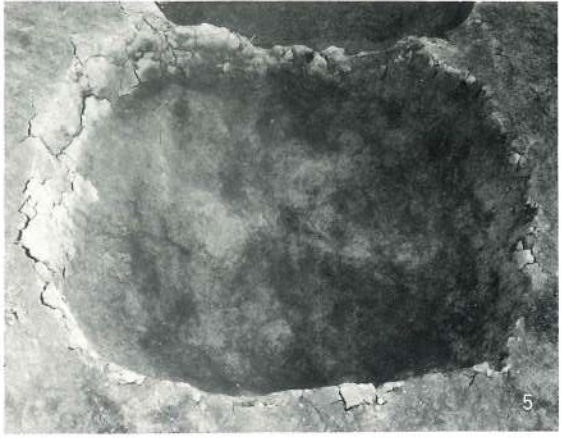


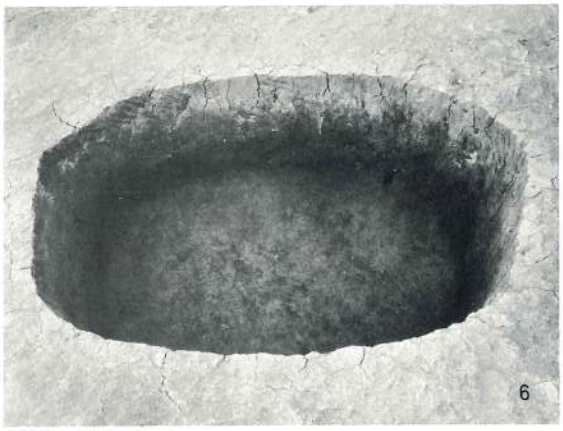
1．SK 056　　5．SK068
2．SK 057　　6．SK072（上）・SK 073
3．SK 060　　7．SK074
4．SK 061　　8．SK075

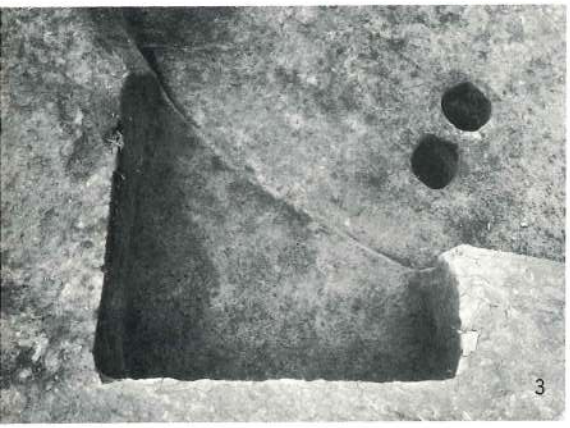


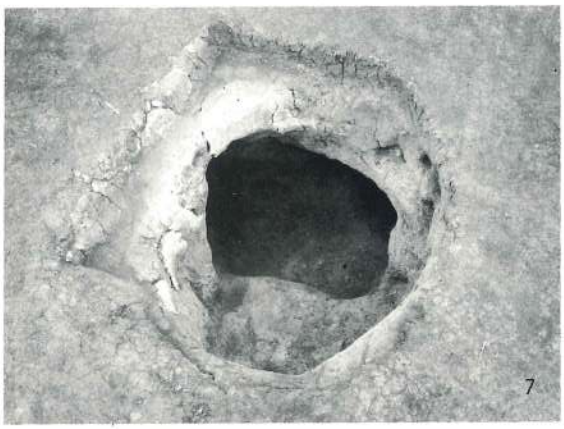
1．SK 076
2．SK 082
3．SK 084 (中)・SK 151
4．SK 096
5．SK 098
6．SK 102 (左)・SK 103
7．SK 106
8．SK 110

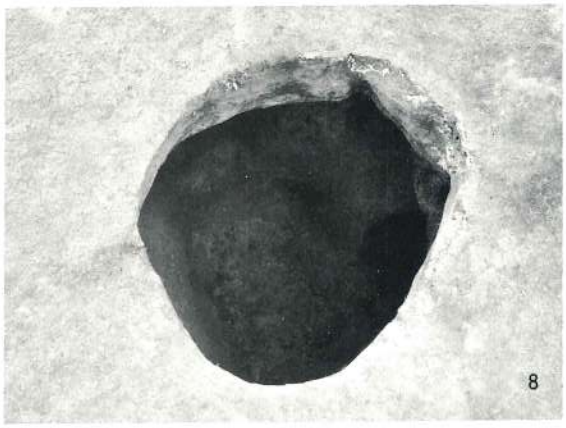




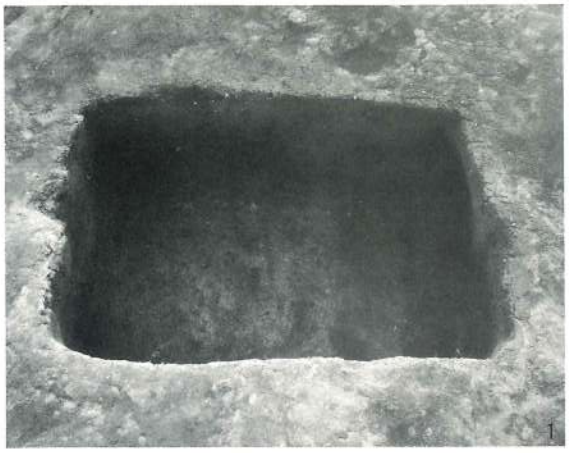


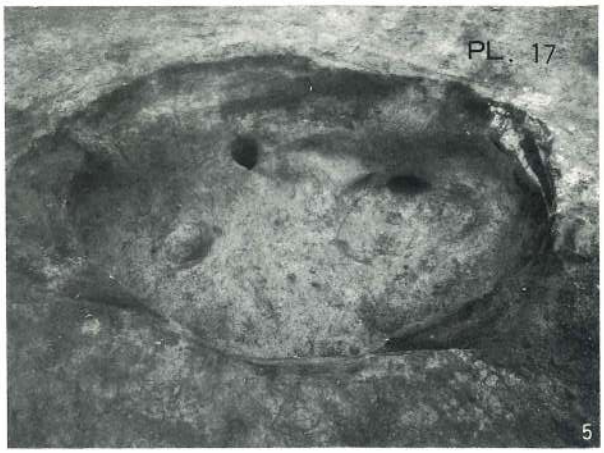


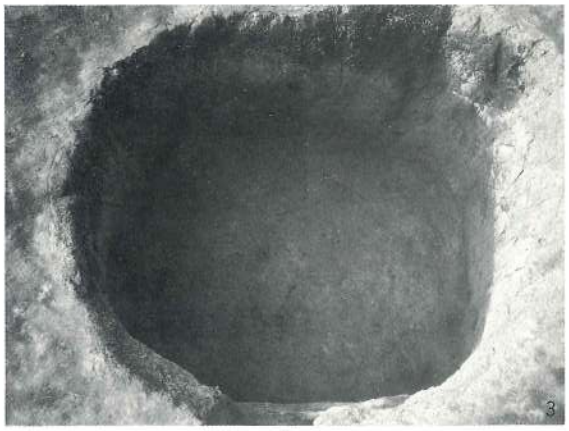




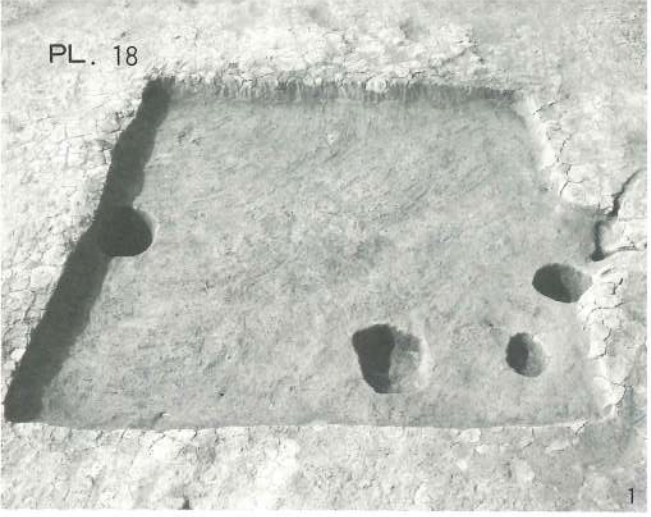
1. SK 111
2. SK 116
3. SK 122
4. SK 125
5. SK 058
6. SK 079
7. SK 046
8. SK 059

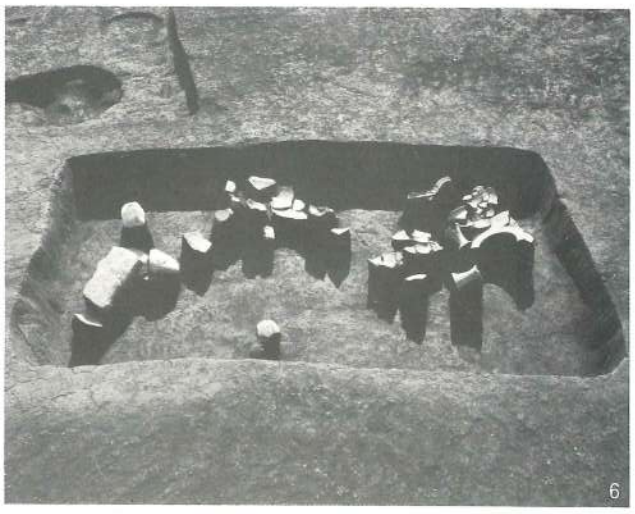




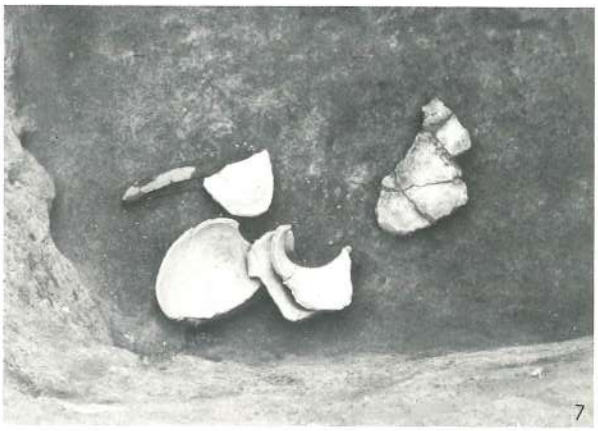


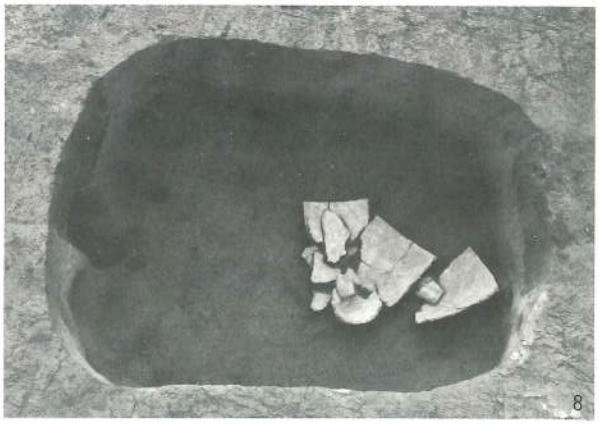
1．SK 017　　5．SK 119
2．SK 030　　6．SB 088 内貯蔵穴
3．SK 032　　7．SB 148 内貯蔵穴
4．SK 044　　8．掘立柱建物跡（南部）





1. SK014　　4. SK112
2. SK019　　5. SK078
3. SK037　　6. SK086

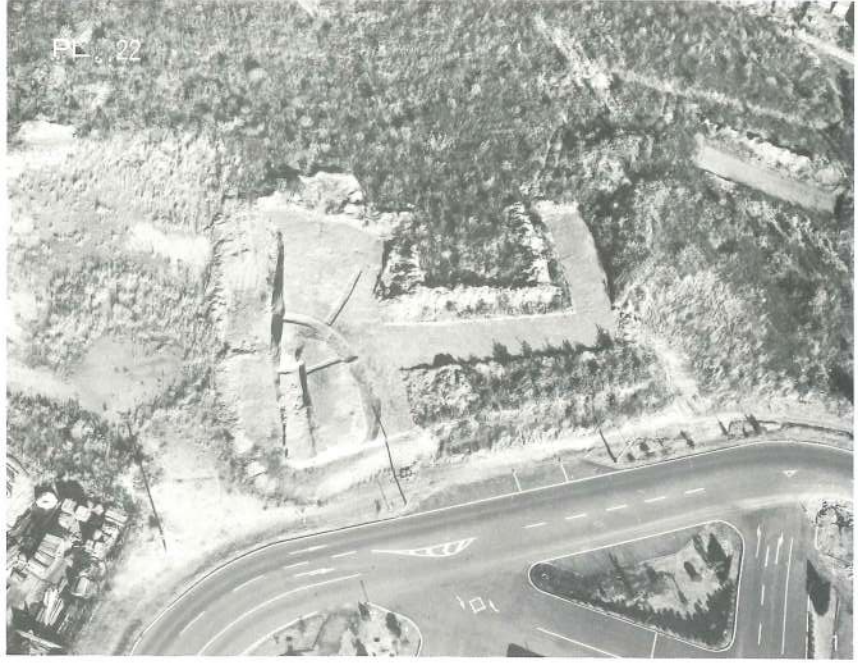


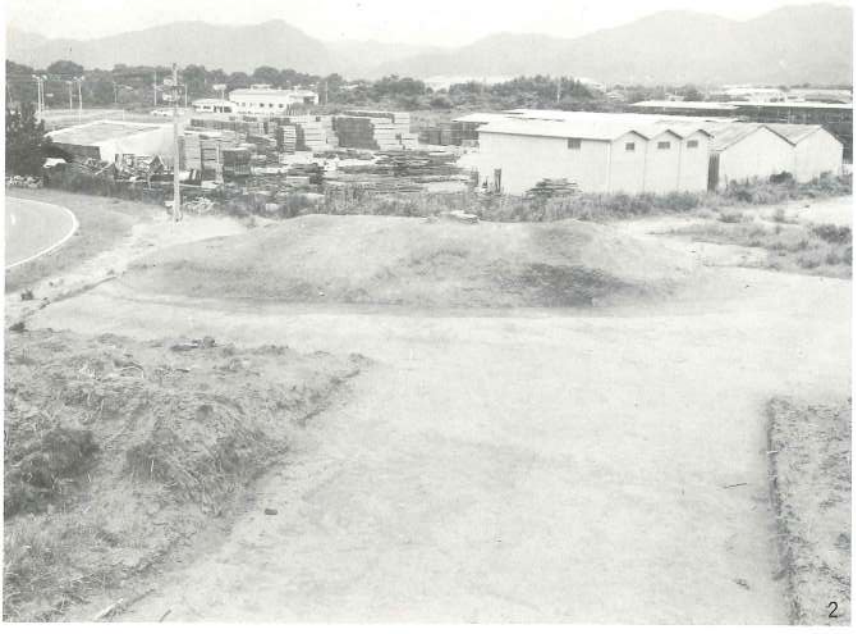


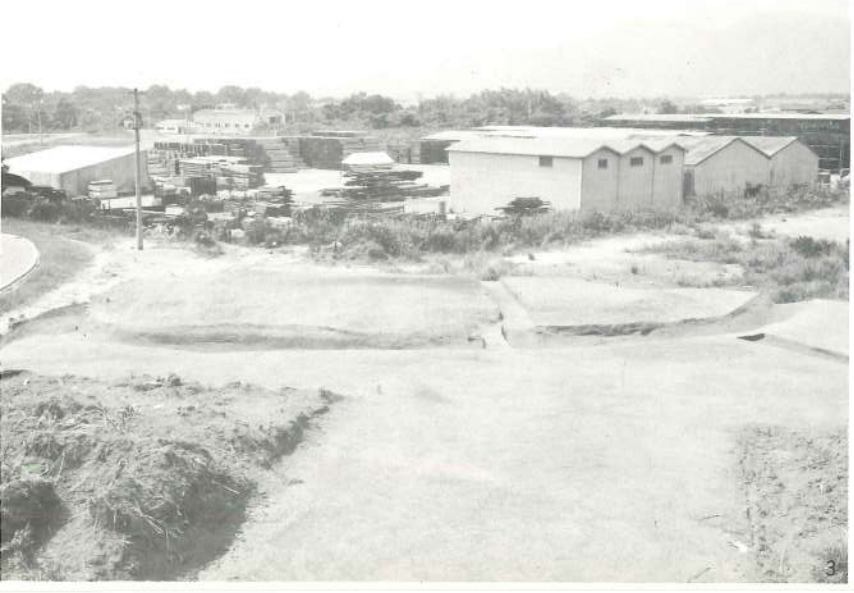
1. SB 069
2. SB 069
3. SB 069
4. SB 039
5. RB 039
6. SK 012
7. SK 045
8. SK 110

1．円形周溝墓全景〈西から〉
2．主体部（木棺墓）
3．周溝内土器出土状況

1．火葬墓（焼骨等残存状況）
2．同　上（壺内部除去後）
3．同　上（壺除去後）







1．くずれ塚古墳航空写真（調査終了後）
2．くずれ塚古墳墳丘（表土除去後）
〈南から〉
3．くずれ塚古墳全景（調査終了後）
〈南から〉

1．墳丘(調査前)〈北から〉
2．　同　　上　〈西から〉
3．　同　　上　〈東から〉
4．墳丘・石室跡〈北から〉
5．墳丘構築状況〈南から〉
6．　同　　上　〈東から〉
7．周溝(南側)　〈東から〉
8．　同　　上　〈南西から〉

1．石室跡全景〈西から〉
2．　同　上　〈東から〉
3．銅鏡出土状況

図　版

（遺　物）

308

375

129

386

174

388

393

173

409

337

414

308	SK021出土
129	SB069出土
174 . 173	SB091出土
337	SK030出土
375	SK045出土
386	SK050出土
388	SK051出土
393	SK052出土
409	SK058出土
414	SK059出土

419

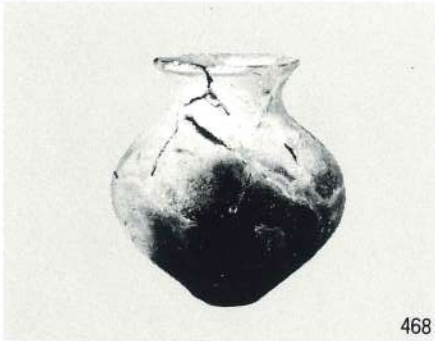
416

429

474

473

472


468

470

479

480

482

419.416.　ＳＫ060出土
429　ＳＫ062出土
474～470　ＳＫ072・073出土
479～482　ＳＫ086出土

514

515

517

38

32

37

41

67

68

65

69

702

72

74

514.515. S K110出土
517　　S K112出土
38～41　S B034出土
67～74　S B039出土

48

52

53

54

55

50

51

61

57

59

60

63

SB039出土

75

99

76

31

71

89

97

87

94

92

75～71　ＳＢ039出土
97～99　ＳＢ049出土
31　ＳＢ041出土
89～92　ＳＢ047出土

78

448

79

108

80

391

83

138

93

141

78～93	ＳＢ047出土
448	ＳＫ068出土
108	ＳＢ049出土
391	ＳＫ051出土
138.141.	ＳＢ069出土

625

627

628

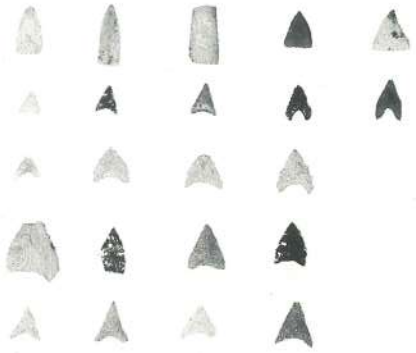
626

629

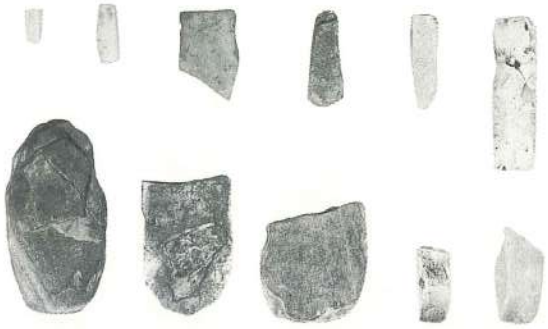
630

631

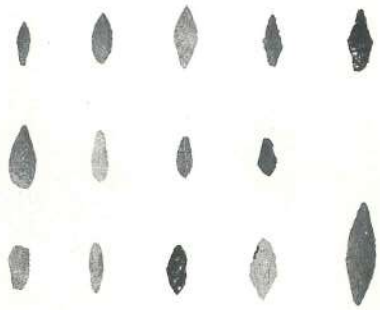
625.626.円形周溝墓出土
627.628.火葬墓出土
629.630.火葬墓出土
631　　火葬墓出土



1

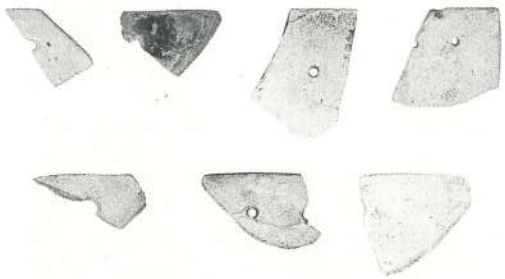


5



2

6



3

7

4

8

9

1・2．石鏃　　5．　石のみ　　9．スクレイパー
3．　石包丁　　6・7．石斧
4　　紡錘車　　8．　石刃

1

2

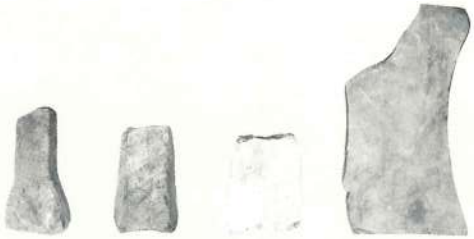
3

4

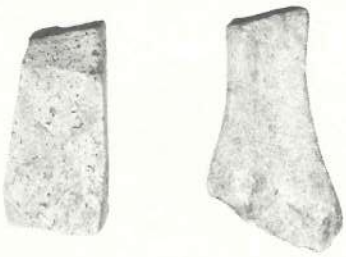
5

6

7



8



9

10

1．匂玉　　4・5．磨石
2．鉄鎌　　6．　　石皿
3．たたき石　　7～10．砥石

703

637

632

638

633

639

635

640

634

649

636

くずれ塚古墳出土

641

645

642

646

643

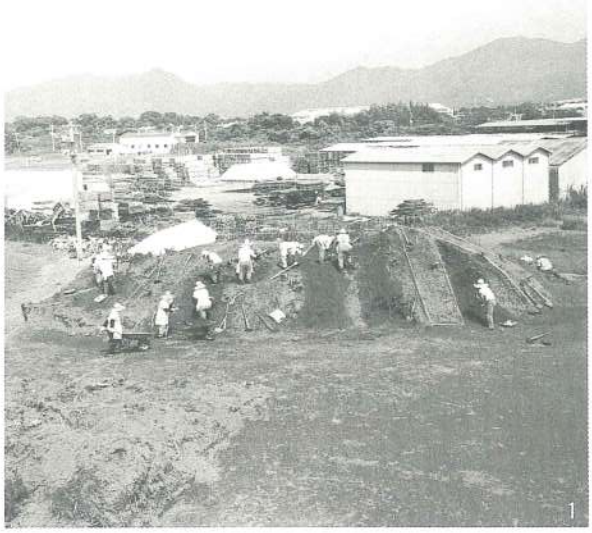
647

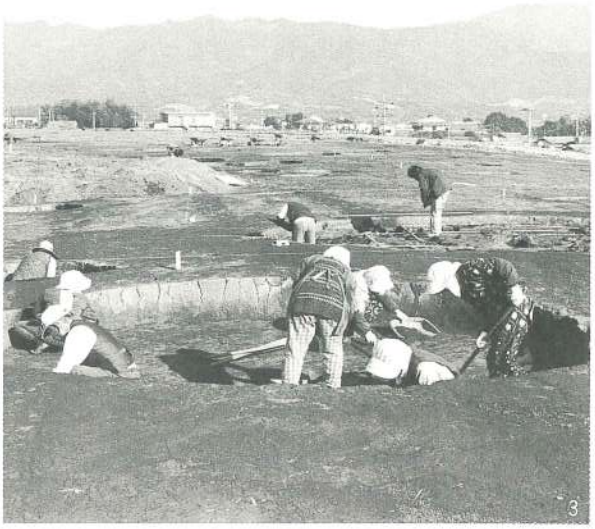
648

644

652

くずれ塚古墳出土





1．くずれ塚古墳発掘風景
2．一本谷遺跡竪穴住居跡発掘風景
3．同　上
4．竪穴住居跡実測作業

資料の保管

出土遺物・遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・遺物写真・トレース図等については佐賀県文化財資料室（現在、佐賀市水ヶ江一丁目12番９号、佐賀県庁東別館内にある。電話0952(23)4537）で保管・管理しており、その活用が望まれる。このための資料として遺物実測図（遺物登録番号とは別）・遺構写真・遺物写真の登録番号を記して検索の便としたい。なお写真についてはベタ焼きにしたものをカード化している。

(1) 遺物実測図登録番号（土器・石器・鉄器・その他を含め1008点を図化）

（土器）　003899—004033・004077・004201

（石器）　004034—004048・004078—004082

（鉄器・その他）　004284—004287

(2) 遺構写真登録番号（４×５inch・35㎜）

（４×５）　811790—811796・811977—812004・812222—812239・813014—813073・813234—813352・813406—813453・813665—813807

航空写真　814031—814048

（35）　810199—810202・810288—810297・810306—810312・810334—810352

(3) 遺物写真登録番号　（４×５inch・６×７㎝）

（４×５）　830895—830914・830949—831074・831085—831098・831225—831262

（６×７）　830825—830872・830879—830910・830928—830933